

松本市新村秋葉原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1983.3

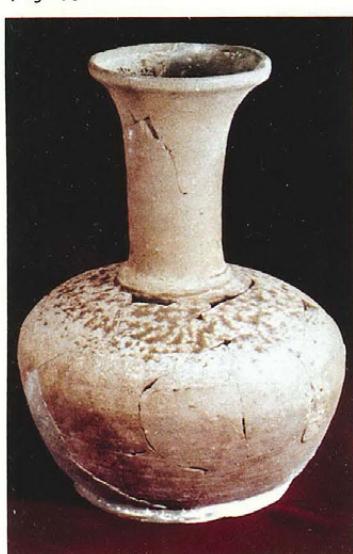
長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会

松本市新村秋葉原遺跡

—緊急発掘調査報告書—

1983.3

長野県中信土地改良事務所
松本市教育委員会





12



20



47



50



37



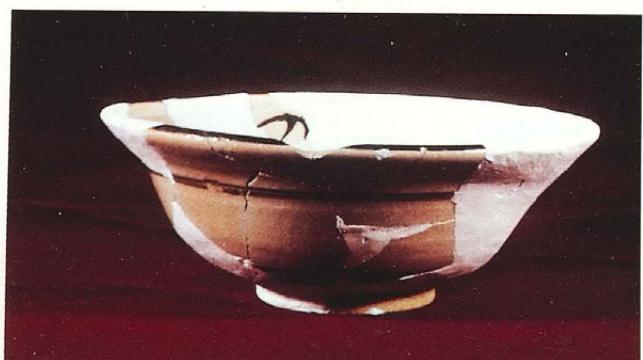
64



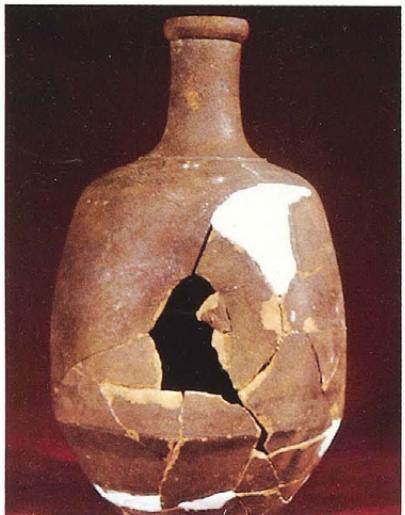
75



58



74



77



82



83



85



80



90



100



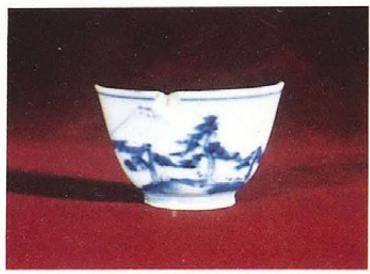
101



103



104



107



114



110



111



126



134



113



135

序

この秋葉原遺跡は昭和53年度に着工となりました県営ほ場整備事業新村地区にあり、県教育委員会の分布調査台帳にも載っている遺跡であります。

このため遺跡群範囲はおおよそ判明しておりましたので、昭和57年度の区画整理工事の着工にあたり、県・市教育委員会の皆様と事前打合せにより、調査方法、調査期間、費用負担等について検討をいただき、この結果、概況調査により地域の状況を判断するとともに引き続き本調査を実施し、記録保存するとの調査方針が決まり、市教育委員会に調査の委託を受けてもらうことになりました。

調査の実施では新村土地改良区を主体として、秋葉原遺跡調査団、地元関係者、高校生等の協力により進められ、土座敷の住居跡、石室を含めた古墳、古銭、石鏃、須恵器等数多くの貴重な発掘をみながら、当初予定の区画整理工事着手前に終了し、ほ場整備事業が計画通り年度内に完了できますことは、県・市教育委員会の適切な指導、処理と、御多忙中、発掘調査にあたられた皆様の御尽力のたまものと感謝しております。

なお、遺跡発掘にあたり、新村土地改良区の役員、地元関係各位の御協力と御理解により、支障なく調査が行なわれましたことに対して、併せて謝意を申し上げる次第であります。

昭和58年3月

長野県中信土地改良事務所長 三 村 敬 一

序

新村秋葉原遺跡は、53年発掘調査されました安塚古墳群と同じように古墳があるのではないかと思われていましたが、此の度長野県中信土地改良事務所管の県営は場整備事業を施行するにあたり、文化財保護の立場から本市教育委員会に緊急発掘調査を委託されたものであります。

本市教育委員会は、日本考古学協会員倉科明正氏を団長として秋葉原遺跡発掘調査団を編成し、調査を行ないました。

この調査にあたっては、真夏の炎天下にもかかわらず、団長倉科明正氏をはじめ調査員各位、新村土地改良区関係各位及び地元の皆さんの大なる協力をいただき、安塚古墳と同じような8世紀の古墳が4基、江戸時代の土座敷・墓址が確認され、安塚古墳とともに新村地区はもとより周辺地域の古代史の解明に多くの貴重な資料を得ることができました。

本書はその結果をまとめたもので、今回得られた資料を広く紹介すると共に文化財保護の一助になれば幸いと存じます。

終りに、今回の調査にあたりまして多大なご協力、ご理解を下さいました関係各位に対し、心からなる謝意を表して序といたします。

昭和58年3月

松本市教育委員会

教育長 中 島 俊 彦

例　　言

- 1, 本書は昭和57年7月12日から11月5日に行われた、松本市新村秋葉原遺跡緊急発掘調査の報告書である。
- 2, 本調査は松本市が長野県中信土地改良事務所より委託をうけ、松本市教育委員会が行ったものである。
- 3, 本書の執筆は各調査員が分担して行い、文責は文末に記した。
- 4, 本書の編集は事務局が行った。
- 5, 遺物の復元・実測等の整理作業及び本書作成の過程で次の方々の援助・協力を受けた。
伊那史彦・山下泰永・山田真一・三村竜一・小口妙子・倉科由加理・滝沢智恵子
- 6, 須恵器・陶磁器については愛知県陶磁資料館学芸員赤羽一郎氏に、古銭については花岡頼充氏に教示を得た。
- 7, 出土遺物及び図類は松本市教育委員会が保管している。
- 8, 発見された遺構のうち、1号墳は、新村公民館により、移転復元されている。

目 次

序

序

例 言

目 次

第1章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経過	4
第2節 調査体制	7
第3節 調査日誌	8

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境	13
第2節 歴史的環境	16
第3節 周辺遺跡	27

第3章 調査結果

第1節 古墳	30
1. 1号墳	30
2. 2号墳	43
3. 3号墳	53
4. 4号墳	54
5. 5号墳	59
第2節 土座敷址	60
第3節 推定墓址	89
第4節 出土人骨について	132

第4章 調査のまとめ

第1節 古墳	137
第2節 古墳出土の土器について	142
第3節 土座敷址	153
第4節 陶磁器	157
第5節 墓址群についての考察	162

第5章 結語

167

図 目 次

第1図 遺跡付近の地形及び周辺遺跡	14	37	"	(8)	71
2 各地区土層柱状図	15	38	"	(9)	72
3 梓川段丘平面	16	39	"	(10)	73
4 梓川流域中央部水田地帯土壤深度分布	21	40	土座敷址出土石器実測図(1)	74	
5 梓川流域火山灰土と沖積土との接触状況	22	41	"	(2)	75
6 調査区及び古墳分布図	29	42	土座敷址出土その他の遺物	76	
7 1号墳全体図	31	43	第1号・第2号推定墓址実測図	90	
8 1号墳トレンチ土層観察図	32	44	第3号推定墓址実測図(1)	91	
9 1号墳検出状況・開口部両側石積		45	"	(2)	92
崩落状況平面図	33	46	第4号・第5号推定墓址実測図	94	
10 1号墳石室平面・正面・側面図	34	47	第6~8号推定墓址実測図	95	
11 1号墳遺物出土地点平面図	35	48	第9号・第15号推定墓址実測図	97	
12 1号墳出土土器実測図(1)	36	49	第10号推定墓址実測図	98	
" (2)	37	50	第11・13・14号推定墓址実測図	99	
" (3)	38	51	第16・17号推定墓址実測図	101	
" (4)	39	52	第19・22号推定墓址実測図	102	
16 2号墳礫・土塊検出状況平面図	45	53	第26・30号推定墓址実測図	104	
17 2号墳平面・側面・断面図	46	54	第34・43号推定墓址実測図	105	
18 2号墳・土塊遺物出土地点平面図	47	55	第45・46号推定墓址実測図	107	
19 2号墳出土土器実測図(1)	48	56	第47・48号推定墓址実測図	108	
" (2)	49	57	第49・54号推定墓址実測図	110	
" (3)	50	58	第56・59号推定墓址実測図	111	
" (4)	51	59	第61・63号推定墓址実測図	112	
" (5)	52	60	第79・80号墓址実測図	113	
24 2号墳土塊出土土器実測図	53	61	第81・82号推定墓址実測図	114	
25 1・2号墳出土鉄器実測図	54	62	推定墓址出土古錢(1)	117	
26 3・5号墳平面・側面図及び 3号墳出土土器実測図	58	63	" (2)	118	
B地区グリット設定図	61	64	推定墓址出土陶器	119	
土座敷址平面図	62	65	推定墓址出土鉄器、銅製飾り金具	120	
土座敷址炉址平面・断面図	63	66	推定墓址出土鉄器、木製品	121	
土座敷址出土土器実測図(1)	64	67	B-1地区推定墓址群人骨出土状況	133	
" (2)	65	68	2次の底面を持たない・持つ無台坏	143	
" (3)	66	69	無台坏の外開度合の例	143	
" (4)	67	70	有台坏の器高・口径の相関(グラフ)	...	144	
" (5)	68	71	蓋の計測部位	145	
" (6)	69	72	口径と天井部の高さ(グラフ)	145	
" (7)	70	73	つまみの幅と高さ(グラフ)	145	
		74	須恵器蓋の釉と附着物等の模式図	151	

付図1 B-2地区、土座敷址墓址全体図

付図2 B-1地区、推定墓址全体図

表 目 次

第1表 安塚古墳群古墳一覧表	23	12	推定墓址出土古銭一覧表	128
2 古墳関係地名表 1	24	13	諏訪盆地周辺の終燒期古墳一覧	141
3 古墳関係地名表 2	26	14	無台坏IIの二次的底面と外開度合	143
4 古墳の地名による概数と 確認数との比較表	26	15	有台坏IIの底面調整	144
5 1号墳出土土器観察表	40	16	蓋の各部計測値	146
6 2号墳出土土器観察表	55	17	蓋端部の形態分類一覧表	147
7 3号墳出土土器観察表	59	18	出土須恵器の器種別・色調系統	150
8 土座敷出土遺物観察表（土器）	77	19	正徳四年明科・塔原・潮・三村家改帳	155
9 " (石器・石製品)	87	20	県内における近世近代陶磁器 出土遺跡一覧表	159
10 " (金属製品)	88	21	秋葉原遺跡陶磁器器種別一覧	161
11 推定墓址一覧表	122			

図 版 目 次

第1図版秋葉原遺跡周辺地域航空写真	171	28	第30号推定墓址	198
2 調査地区近景	172	29	第23, 34号推定墓址	199
3 "	173	30	第36, 42, 43号推定墓址	200
4 1号墳 ①	174	31	第45, 46号推定墓址	201
5 " ②	175	32	第41, 46号推定墓址	202
6 " ③	176	33	第47, 48号推定墓址	203
7 " ④	177	34	第48, 49号推定墓址	204
8 2号墳	178	35	第57, 58, 59号推定墓址	205
9 2号墳遺物出土状態	179	36	第54, 56号推定墓址	206
10 3号墳	180	37	第56, 61号推定墓址	207
11 推定4号墳石材	181	38	第60, 63号推定墓址	208
12 5号墳	182	39	第64, 79号推定墓址	209
13 土座敷	183	40	第80号墓址及び墓址全景	210
14 土座敷遺物出土状態	184	41	1号墳出土土器	211
15 第1号推定墓址	185	42	"	212
16 第2, 3号推定墓址	186	43	1・2号墳出土土器	213
17 第4, 5号推定墓址	187	44	2号墳出土土器	214
18 第6, 7号推定墓址	188	45	"	215
19 第8号推定墓址	189	46	1～3号墳出土遺物（土器・鉄器）	216
20 第9号推定墓址	190	47	古墳出土土器, 細部写真① (ヘラ記号及びタタキ目)	217
21 第10号推定墓址	191	48	古墳出土土器, 細部写真② (坏類底部整形及び瓶類頸部接合状態)	218
22 第7, 11号推定墓址	192	49	墓址出土遺物	219
23 第13, 14号推定墓址	193	50	墓址・土座敷出土遺物	220
24 第12, 16号推定墓址	194	51	調査スナップ	221
25 第15, 19号推定墓址	195	52	1号墳移転復元	222
26 第17, 22号推定墓址	196			
27 第20, 26号推定墓址	197			

第1章 調査経過

第1節 調査に至るまでの経過

- (1) 秋葉原遺跡は昭和28年4月10日、畠の中より発見されており、昭和53年11月～12月に調査された安塚古墳群（秋葉原遺跡の西方約800m）調査報告書でもとりあげてあるので、地区民には良く知られている遺跡である。
- (2) 昭和55年9月5日（金）56年度県営ほ場整備事業にともなう発掘調査について、現地協議。県教育委員会臼田指導主事、中信土地改良事務所担当係長、箱山主事、市教育委員会神沢が出席。新村小野神社北側工事箇所での調査は立合調査とする。（秋葉原遺跡の北隣箇所）
- (3) 56年8月20日（金）57年度実施予定の県営ほ場整備に係る埋蔵文化財の保護について現地協議を行う。出席者、県教育委員会郷道指導主事、中信土地改良事務所上原係長、市耕地課河野係長、横内主査、柳沢技師、市教育委員会、神沢、百瀬他。協議内容は、
- 現況水田で平坦地であるが、古墳跡とも考えられるので発掘調査を要する。
 - この地区は56年度に繰上げ施工されることとなり、発掘調査は本年9月から来春までに実施する必要がある。しかし市では調査体制が整っていないので、調査は不可能である。
 - 文化庁の補助金は前年度協議したものについて交付されることになっているので56年度に補助事業として実施するのは困難である。
- (4) 56年8月27日（金）新村土地改良区（理事長神田直躬氏）では56年度調査は行わないこととする。
- (5) 57年7月10日（土）中信土地改良事務所と松本市との間で発掘調査の委託契約を交す。

埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

昭和57年度県営ほ場整備事業新村地区における埋蔵文化財包蔵地発掘調査（以下「発掘調査」という）の実施に関する業務（以下「業務」という）について委託者長野県中信土地改良事務所長三村敬一（以下「甲」という）と、受託者松本市長和合正治（以下「乙」という）との間に、次のと

おり委託契約を締結する。

(総則)

第1条 乙は別紙の発掘調査実施計画書に従って業務を実施するものとする。

2 乙は業務の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとし、かつ法令の規定に基づく諸届等を甲に代って行うものとする。

(期間)

第2条 乙は昭和57年8月31日までに、現場における発掘調査を完了するものとする。

(費用)

第3条 甲は業務に要する費用として、乙に支払う金額は、金3,915,000円とする。

2 前項の費用の支払方法については、乙の業務に支障のないように甲乙協議して定める。

3 甲は乙からの費用請求に対し、すみやかにこれを支払うものとする。

(作業の実施)

第4条 乙は業務の実施にあたっては、甲の施行する事業の工程に支障のないように努めるものとする。

2 乙は業務の実施にあたっては、作業表示旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

(作業日誌)

第5条 乙は発掘の実施中、作業日誌を作成し、甲はその提示を求めることができるものとする。

(出土品の取扱い)

第6条 発掘出土品の処理については、甲乙協議のうえ乙が甲の名において法令の定めるところにより処理するものとする。

(中間報告)

第7条 甲は必要のある場合は、乙に対して業務の進行状況について、報告を求めることができるものとする。

(決算及び精算)

第8条 乙は業務が完了したときは、業務に要した費用について決算を行ない、決算書を甲に提出するものとする。

2 甲は前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき、第3条により約定した金額の範囲内において、乙と協議して精算を行うものとする。

(発掘調査報告書)

第9条 乙は業務が完了したときは、発掘調査報告書を添えて、発掘調査完了報告書を甲に提出するものとする。

(協議)

第10条 この契約に定めていない事項、または契約の事項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

この契約締結の証として、契約書2通を作成し、甲乙それぞれ署名捺印の上、各自1通を保有する。

昭和57年7月10日

甲 松本市城西2丁目5番20号

長野県中信土地改良事務所

所長 三村 敬一

乙 松本市長 和合正治

別紙（様式1）

発掘調査実施計画書

1 発掘調査場所（図面に位置を表示する）

2 文化財名 松本市新村

秋葉原遺跡

3 文化財の状況

(1) 状況 水田、畑

4 発掘調査の目的及び概要

開発事業県営は場整備事業に先立ち900m²以上を発掘調査し、記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和57年8月31日までに終了する。調査報告書は昭和58年3月31日までに刊行するものとする。

5 発掘調査団の構成

松本市教育委員会

6 発掘調査の作業工程

発掘作業 23日、整理作業11日、合計34日

7 発掘調査委託費

発掘調査費全額 5,400,000円

文化財農家負担
軽減額 1,485,000円

差引計 3,915,000円

(1)発掘調査委託費 3,915,000円

(2)内訳

別紙発掘調査予算書のとおり

8 報告書作成部数

300部

9 その他（作業要領等特記事項）

（文化財農家負担軽減額については、市教育委員会が肩がわりをし、1,485,000円のうち、50%が国庫補助金、15%が県補助金、残り35%が市負担金である）

（事務局）

第2節 調査体制

調査団

団長 倉科 明正（日本考古学協会会員 農業）

主任 神沢昌二郎（〃 市教委）

調査員 大久保知巳（〃 会社員）

　　山田 瑞穂（〃 三郷小教諭）

　　西沢 寿晃（〃 信州大学）

　　三村 肇（長野県考古学会員 会社員）

　　山越 正義（〃 生坂中教諭）

　　降旗 俊行（〃 松本社会保険事務所）

　　横田 作重（〃 会社員）

　　森 義直（〃 大町高校教諭）

　　直井 雅尚（〃 市教委）

調査補助員 濑川長広、吉沢酉巳、三沢元太郎、滝沢智恵子、伊那史彦、井口千佳、山下泰永、山田真一、三村竜一

協力者 新村清志（新村公民館長）、手塚克人（新村歴史研究会会长）、島田哲男、県ヶ丘高校風土研究部（上条謙治、宮沢浩文、相野田透、北村泰、斎藤淳、高沢純一、上条美保、滝沢由美、田中奈美、佃みか子、渡瀬玲子、高橋由理、上条晴美、百瀬敦、山本多佳士、村山一善、田村美代）、矢野翠、川久保徹、西村聰美次、小林寛幸、神田直躬、新村安

子，乾靖子，横山ひろ子，横山正明，勝家永江，新村信江，矢野礼子，青木三姫子，桐山保富，新村徳子，清水佳代子，山田広子，赤広美和子，糸井雅史，上条昭一，柳沢三枝子，浅輪宥子，降旗久美子，須沢知子，高橋猛，佐藤修治，井坂誠，上条郁夫，倉科由加理，三村泉，野田節子，内川昌治，千村秀彦，新村百合，上条由美，川久保公人，朝倉栄治，山田宏之，都築議実，金井達雄，山田雅士，小松英明，古畠勉，酒井誠，山田一男，木下光昭，杉岡明，新村美和，百瀬泰博，萩原正司，百瀬敏宏，萩原康次，高橋治男，横山尚登，宮島明徳，青木薰雄，宮本良恵，浅川泉，北原幸司，佐藤智子，林敏之，降旗真美，清水成子，植村浩明，百瀬敦，斎藤栄二，小松文雄，坂本秀城，中川温，降旗剛，直井スガ子，中堀雅英，小口妙子

事務局 田堂 明（社会教育課長）

神沢昌二郎（社会教育課文化係長）

百瀬 清（〃〃主事）

熊谷 康治（〃〃〃）

横山 泰基（新村公民館主事）

（事務局）

第3節 調査日誌

○82年7月12日（月）晴 午前8：00 専称寺集合。新村土地改良区柳沢氏立ち合い。犀川興産ブル入る。B地点より表土除土。

○7月13日（火）曇 ブル2台にして表土はぎ継続。北側田の東側で径30～50cmの花崗岩の平板石出る。（一部ブルで引っかけて動いている。）周辺より骨片かなり出土。

○7月14日（水）晴 ブル2台でD地区の表土はぎ、部分的に30cm～10cm大の集石あり。水田の水路跡かと思われる。ほかに、ところどころに花崗岩の大石あり。

○7月15日（木）晴 前日にひきつづき、F地区の表土はぎ。遺跡全体の西側寄りは、小礫が多い。河川氾濫による堆積物か。全般に遺構、遺物は検出されない。

テント及び発掘器材搬入。

○7月16日（金）曇 午前8：30 開始式。地元関係者、発掘参加者、市教育委員会職員が現地に集合。新村新村公民館長、降旗芝沢支所長、倉科調査団長の挨拶と神沢調査主任の発掘にあたっての諸注意の後、B地区の発掘開始。B地区北寄りに大きな石が並べたようにところどころにあらわれ、石の周囲から細かい骨片が多数出土。ほかに炭化物も出土。

○7月17日（土）雨 雨のため作業なし。

○7月18日（日）晴 B地区、移植ゴテと竹べらで検出。真中どころから天目茶碗の破片をはじめ

中世以降の陶器の破片、元豊通宝出土。径30cm内外の花崗岩の平石が多い。古墳又は墓址となると推定される。

- 7月20日（火）薄曇 B地区、推定墓址の清掃。午後、西側及び北側の拡張作業。熙寧元宝、元祐通宝、寛永通宝2枚出土。東北側集石の間よりかなりかたまって骨及び釘らしい鉄製品出土。
- 7月21日（水）午後、雨、強風 B地区、推定墓址の清掃及び西側、北側の拡張。西側の方へ墓と思われる集石が続いていることが判明。最初に掘った推定墓址の清掃中に古銭3枚と石鎧発見される。古銭のうち1枚は政和通宝。
- 7月22日（木）晴 B地区西南のやや高い水田跡を整理。ブルドーザーでの検出時に4ヶ所程炭や骨片を出土した所の他に10ヶ所ほどの落ち込みが判明し、これらも墓ではないかと思われる。寛永通宝2枚のほか、筭1杯分の茶碗やすり鉢の破片出土。明治時代に入ってのものもあると考えられる。
- 7月23日（金） 前日の継続作業。B地区内推定墓址に使用されている石は概数で花崗岩59%，砂岩34%，チャート4%，石英閃緑岩3%の割合である。
- 7月24日（土）曇 D地区北半分の上面検出の結果、古墳発見。平らな川原石が南北の方向に並んでいる。鏡石は水田造成の際に抜き取られたものと思われる。（後日調査で鏡石あり）A地区・花崗岩の大石あり。B地区・測図、C地区・発掘、D地区・排土整理、及び古墳の南側水田にトレンチを入れる。B地区寛永通宝5枚、炭化物、焼骨等検出。D地区より熙寧元宝出土。
- 7月25日（日）曇、雨 雨のため、一旦午前中で作業中止。午後、雨が止んだ後継続。C地区上面検出作業。中央部南寄りに巾3mあまりで南北に長い落込みと、それに直交する落込み検出。ここは昭和20年代に平らな大石が100個近く出たと言われているところであるので、多分古墳の跡と思われる（後に2号墳とする）。D地区的古墳（後に1号墳とする）測量。
- 7月26日（月）雨、曇 休日ではあるが午後神沢らにより第1号墳実測を完了さす。
- 7月27日（火）雨 C地区、古墳あとを測量するための準備。B地区、推定墓址の石の測量。D地区、1号墳の上を清掃、写真を撮った後、古墳内に落ち込んでいる1mちかくある石を取り除く。周囲に4本放射状にトレンチを入れ調査、土留めの石及び溝を発見。古墳の入り口に須恵器1点出土。隣の田トレンチ調査。
- 7月28日（水）午後雨 1号墳、内部の掘り下げ作業。内部の石積みがあらわれ、須恵器片、鉄鎌、人骨らしいものが出土。C地区2号墳、掘り下げ開始。B地区石の実測はかどらず、1号墳南側の田も成果あがらずトレンチ調査終了。C地区西側の田トレンチ調査。
- 7月29日（木）晴 2号墳土手を残し掘り下げ。多量の土器（蓋、壺など）出土し夕刻取り上げ。1号墳と同様な石室の石積み一部を発見し、古墳であることが確実となる。下から古銭1枚出土。1号墳、石室内の掘り下げが進み、骨片や土器が出土、玄室と羨道の仕切石らしい石もみつかる。

全長約8m、周溝にならないらしい。写真を撮る。B地区下段、推定墓址群の測量継続。

○7月30日（金） B地区上段で土座敷発見。縦90cm横120cm高さ7～8cmほどの炉の跡あり。南東のトレンチから黒曜石の石鏃出土。C地区2号墳の掘り下げ午前中で終了、午後から実測に入る。旭町中学生7名、生坂中学生8名、山越調査員の引率で見学、手伝い。午後、倉科調査団長から新村本郷地区の方々（約30名）に発掘現場の説明会。

○7月31日（土）曇 B地区実測及び土座敷検出に全力傾注。他にC地区実測。D地区トレンチ平板測量。土座敷は8×10m位になるらしい。

○8月1日（日）雨 作業休み。新村公民館で見学会の計画があったが雨のため中止。

○8月3日（火）曇、一時雨 B地区、C地区測図。B地区土座敷高地掘下げ。D地区トレンチ埋め戻し。

○8月4日（水）晴 B地区、C地区測図。B地区土座敷掘る。E地区平らに削る。市博物館学芸員実習生6人現地見学実習。

○8月5日（木）晴 測量作業員のみにて作業。全員B地区測図。B地区土座敷を中心として遣り方を組む。

○8月6日（金）晴 B地区測図。午後、次長、課長ら視察。信大西沢調査員来られ、1号墳の人骨取り上げる。火葬骨は年寄りの男性らしい。その下から生の人骨も出土。この古墳の当初の被葬者とも思われる。

○8月7日（土）晴 C地区2号墳前庭部掘る。須恵器のカメ、ツボ、蓋坏（つまみ5ヶ）等遺物多し。D地区1号墳、棺の台石を取りはずして床面まで掘り下げ。副葬品なし。B地区測図及び土座敷一部掘る。土座敷の東側も推定墓址が重なっており砥石や鉄さい等出土。推定墓址たち割り始め、南側中央部分の一つより人骨出土。B・C・D地区の間にある無縁墓地のやぶ刈り始める。

○8月8日（日）晴 1号墳入口部掘り下げ、蓋坏出土。2号墳、内部よりほぼ完形の坏2個伏せた状態で出土。奥より人骨らしいもの出土。20cm位の長さ。無縁墓地のやぶが刈りはられたあとから、石碑やそれらしい石が10個以上あらわれ、お墓と思われる。B地区（江戸時代の）推定墓址たち割り、掘り下げ。土座敷の周囲にも推定墓址、小礫をしいたタタキ面が広がっている。

○8月9日（月）晴 午後B地区推定墓址たち割り作業。

○8月10日（火）晴 B地区推定墓址たち割り作業。C地区2号墳床より土師坏（内黒の高坏）ふせられて出土。鉄鏃3本出土。

○8月11日（水）晴、夕立あり 2号墳、前日の蓋坏の下にも土器片あり。B地区第3号墓址人骨多し、炭あり。刀子1本出土。

○8月12日（木）晴 2号墳掘り下げ実測、1号墳整理。推定墓址実測たち割り作業。第1号墓址は北まくらで手に六道鏡を持つ。第8号墓址より人骨、第9号墓址も人骨が出土し、北まくらであ

る。周辺整理の後、午後5時、全員で1号墳にて記念写真を撮る。

○8月13日（金） B地区推定墓址たち割り実測。お経をあげてから始める。2号墳及び土座敷実測。

○8月14日、15日、16日 盆休み。

○8月17日（火）曇、のち雨 B地区第6号墓址より四肢骨、寛永通宝1枚出土。土座敷実測、全体測量始める。午後1：30すぎ、雨のため作業中止。

○8月18日（水）曇、午後一時雨 第6号墓址よりさらに元豊通宝1枚、寛永通宝3枚出土。六道銭は布でくるみ木の皮で包んである。人骨は北まくらで西向きに横になっている。第45号墓址より焼骨一括して出土。

○8月19日（木）晴、午後一時小雨 第26号墓址、焼骨少し出る。第46号焼骨一括して出土。1号墳及び土座敷実測。

○8月20日（金）晴 1号墳断面実測、土座敷実測。第10号墓址、深いところより焼かれていない人骨出土。

○8月21日（土）第10号墓址、歯の下（糸レベルより-162cm）より数珠玉3個及び寛永通宝5枚出土。青緑のものの下に何かで包んであつたらしく黒くなっている。第75号墓址より人骨及び径7～8cmの木の炭出土。人骨は細くて小さく、火葬にしながら途中で火が消えたのか木が燃え残っている。この木は松以外の針葉樹である。

○8月22日（日）第79号墓址より六道銭6枚（寛永通宝）出土。第10号墓址の数珠玉は最終的に7個となり、これは落葉樹で作られたものである。

○8月23日（月）晴 2号墳、墳内に出ていた石15個を入れる。既にあるものは8個。午後2時30分からB地区にて魂抜きの仏事。

○8月24日（火）晴 1号墳の地層確認調査。周溝より高坏（土師、須恵の対あり）出土し、坏の下は砂利層になっている。黒色の落ち込みは上縁より-65cmで底面に達する。B地区、記録をとった推定墓址の掘り上げ図確認及び不足部分の測図。全体の写真撮影、遣り方の杭、貫などを取りはずし、片付ける。

○9月7日（火）晴 第1号墳移転復元作業。移転先は約100m北西の線路脇とする。石にナンバーをつけ細部の写真をとる。移転場所では約1.5×8mの穴を重機で掘る。午後積石をはずして運ぶ。

○9月8日（水）晴 前日に続き作業を行う。古墳前部に土留めの石が左右に積まれ、その周辺より須恵器坏片などが出土。

○9月9日（木）晴 復元作業完了する。

○11月2日（火）晴 ほ場整備作業中に古墳積石にあたる。長さ150cmをこす大石が2ヶと、110cm大の石1ヶおよび40cm大の石7ヶが出ているところがあり、他に小型の古墳石積が現われている箇

所など3箇所に古墳があるらしい。4日より再調査をすることとする。

○11月4日(木)晴 ほ場整備施工範囲の南端近くに検出された小型古墳(第5号古墳とする)の調査を行う。巾1mで長さ2mあまりの古墳石積みが二段に残る。遺物はない。

○11月5日(金)曇、小雨 第3号古墳を調査。新しい道の下にあたり巾1m、長さ2.5m余りあり、これも小型の古墳で石積みは2段が残っていた。伴出遺物は工事中に出土した須恵器の壺2ヶと長頸壺破片がある。なお4号古墳については推定箇所をおさえたにとどまる。

〔作業日程表〕

ほ場整備面積	6 ha
調査予定面積	900m ² 以上
実質調査面積	15,000m ²
現場作業	7月12日～8月24日、11月2日～11月5日
復元作業	9月7日～9月9日
整理作業及報告書作成	9月1日～58年3月31日

(事務局)

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の立地と地理的環境

1. 遺跡付近の地形・地質

本遺跡は松本市新村秋葉原地籍にあり、松本盆地の西側に位置し、槍ヶ岳に源を発する梓川によって形成された扇状地の上にある。梓川が松本盆地に流入して形成した扇状地は、その後の回春で段丘を生じ、左岸に三段、右岸に四段あり、右岸の四段は、古い方からロームに覆われている洪積世末期の波田面と終末期の森口面、そして、ロームに覆われず、沖積世に入ってから形成された上海渡面と本遺跡のある押出面の四段である。このうち波田面と森口面は広く分布しているが、上海渡面は規模も小さく、梓川沿いに狭く分布しているに過ぎない。一番新しい押出面は現在の梓川のはんらん原の一部とも考えられ、左岸の岩岡面と共に、歴史時代に入ってからも、洪水のはんらんを受けており、礫層と砂層が互層になり、レンズ状に堆積している。地表付近には、ふるい分けの悪い黒色の砂礫土、または、礫土が塊状に入っている、腐植土形成後も、しばしば洪水に見舞われたことを物語っている。

本遺跡付近は森口面の末端と押出面との境界にあり、この境界も整然としたものではなく、複雑に入り組んでおり、断面でみると、森口面の先端付近はローム層が流出し段差も極めて少なくなり、次第に押出面の中に消えている。およその境界を水平面で追ってみると、新村地区の三溝から根石を通り東に伸び、やがて街道を横切り、上高地線の新村駅北から本遺跡および小野神社付近を通って東新の西で南に曲がり芝沢川付近で消えている。

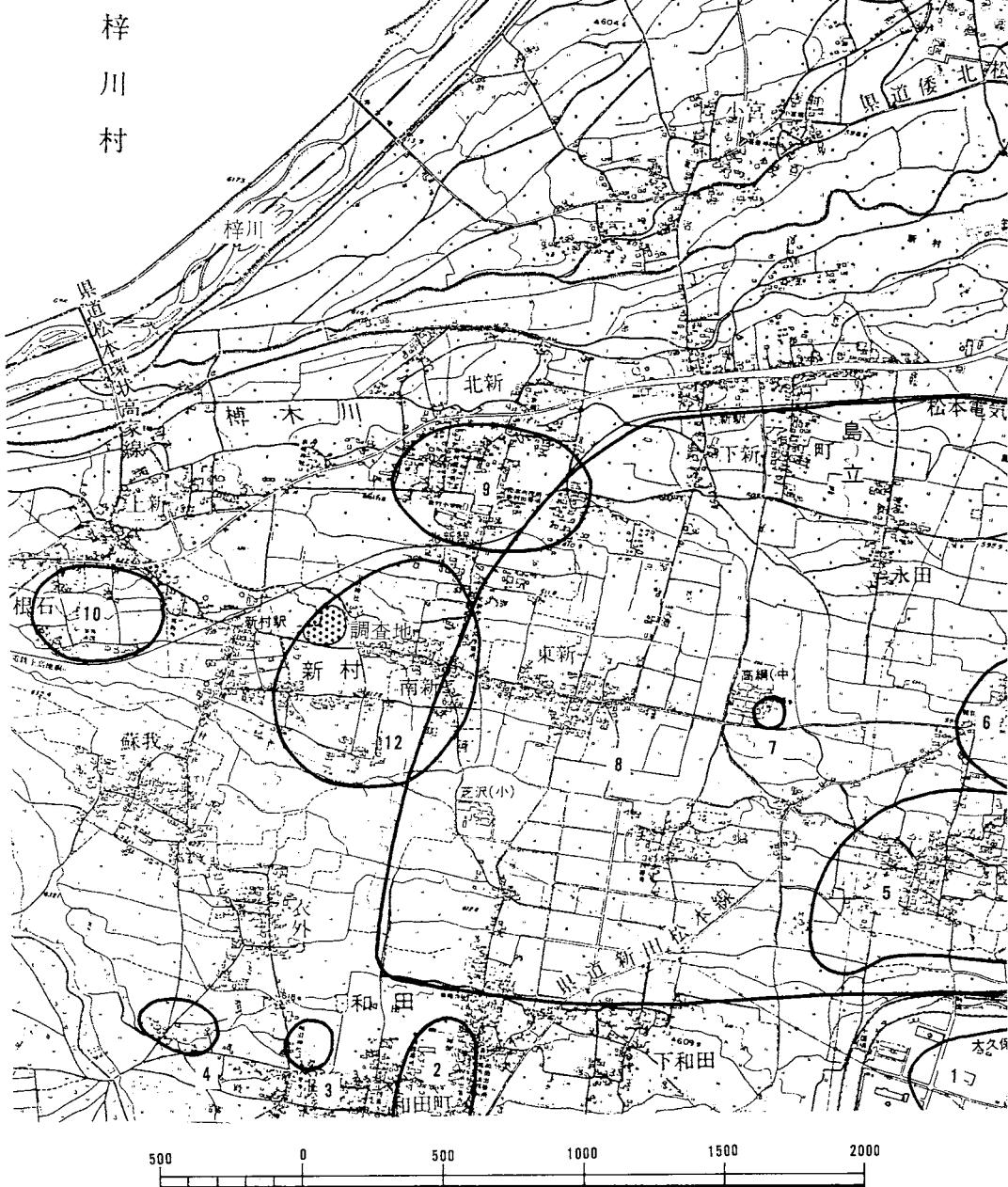
本遺跡付近は一見、東にゆるい傾斜をした平坦な地形に見えるが、地層は複雑で十数メートルの違いでも柱状図に示す如く堆積物は異なり、ふるい分けの悪い塊状の洪水性堆積物もあれば、ふるい分けのよい、自然堆積土層もあり、また、人工的な客土も開田時とそれ以後にもみられるなど、複雑で同時代の層面を決めるのは、困難である。

2. 地表付近の一般的な堆積状況

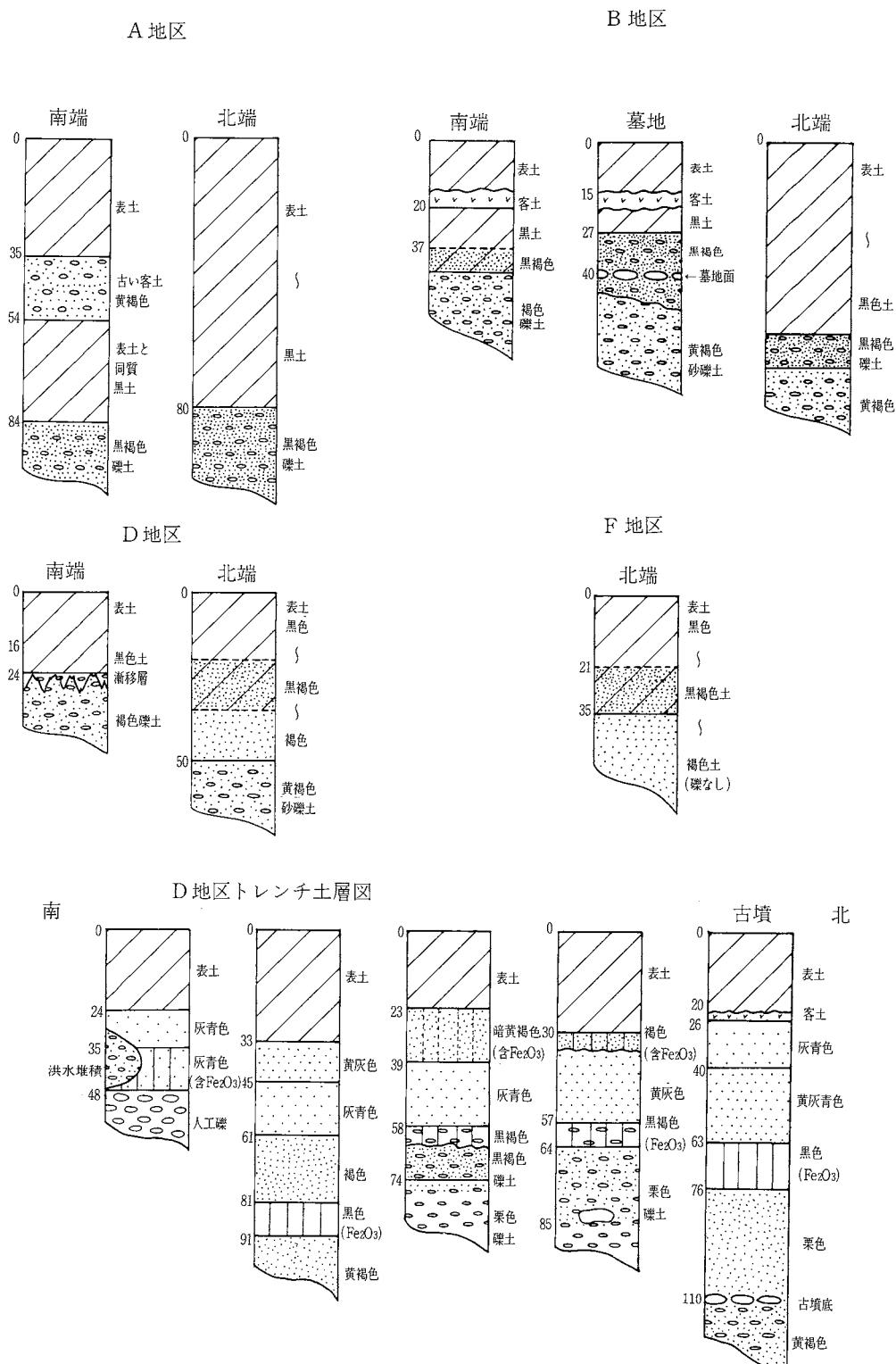
本遺跡付近の深さ120cmまでの堆積物の状況を見ると、南側は、ふるい分けのよい自然堆積物中に、ふるい分けの悪い洪水性の黒色砂礫土層や、褐色の砂礫層が入っており厚さも一定していない。北側は一般に、ふるい分けのよい自然堆積物となっており、細砂～シルト質粘土層が多い。

これ等の地表付近の40～120cmの堆積物は押出面形成後、歴史時代に入ってからのものが多く、土色も黒や黒褐色が基本であるが、溶脱により灰青色となっているところもある。灰青色の土層の下には溶脱物沈澱層が鬼板（褐鉄鉱）状に存在する。特に1号墳付近には深さ70cm前後の所に帶状

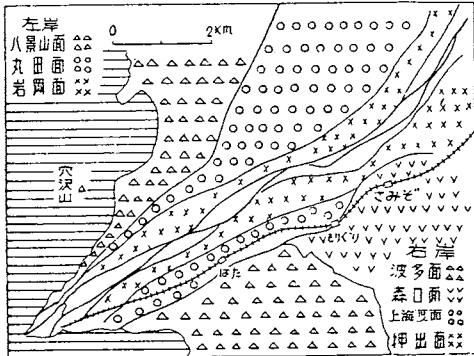
- | | |
|--------------|---------------|
| 1 大久保原工場団地遺跡 | 7 高綱中学校々庭遺跡 |
| 2 和田遺跡 | 8 島立・新村条里的遺構 |
| 3 西和田遺跡 | 9 新村遺跡 |
| 4 山ノ神遺跡 | 10 安塚古墳群 |
| 5 南栗遺跡 | 11 島内遺跡群 |
| 6 北栗遺跡 | 12 秋葉原遺跡(調査地) |



第1図 遺跡付近の地形及び周辺遺跡



第2図 各地区土層柱状図



第3図 梓川段丘平面

あるいは接近した二層となって存在し、古くから開田していたことを物語っている。一方南側は殆ど見られず、明治以前は畠地であったと推定される。

3. 堆積速度について

堆積の平均速度をこのD地区2号墳の付近で算出してみると、この古墳は8Cと推定されるので、前庭部から地表までの厚さ約1100ミリを年数で割るとおよそ1mm/年ということになる。条件の悪い1号墳についても似た値が出る。この値は松本盆地周辺部の0.1~0.2mm/年に比して、いちじるしく大きな値であり、本遺跡付近の歴史的遺構を推定する上で基礎的な尺度と考えられる。

(森 義直)

第2節 歴史的環境

秋葉原古墳群（5基）と江戸時代初期と推定する土座敷（民家）址1軒と同時代の墓壙90余基とがあった松本市大字新村の地区は、昭和29年8月1日町村合併令により隣接する松本市に合併するまでは、上新・北新・下新・南新・東新という5つの集落があつまって、明治22年4月1日以来東筑摩郡新村と称する地方自治体を形成していたのである。

これらの5集落は、江戸時代から明治7年までは、それぞれ独立した村落であった。前記遺跡群のあった秋葉原遺跡は、このうち南新（みなみにい）の地籍に入っていた。

以下は秋葉原古墳群及び江戸時代の民家址と墳墓群を形成した歴史的な背景と、その環境について述べる。

秋葉原古墳群の形成を語るには、秋葉原古墳群とほぼ同時期に築造されたと推定される安塚古墳群の形成を含めて広い範囲から、適確に新村の歴史をとらえなければならない。周辺の範囲は、現在梓川右岸に展開し、梓川水系の流水をもって灌漑耕作する水田地帯と、その間に交雑する畠地・屋敷・道路・堰などを含む地域、即ち東筑摩郡波田町と松本市大字新村・和田・島立・神林の一部の4地区をもって、その範囲とする。

このうち松本市和田地区の歴史については、昭和28年頃東筑摩郡郷土資料編纂会の顧問であつた一志茂樹氏によって、推古天皇3年（595）難波の荒陵寺（現在の大坂四天王寺）へ聖德太子の命により納入された封戸として、全国6箇所の中に見えている「信濃国筑摩郡荒田郷五十石」をもつて、これに宛てているが、この史料の信憑性については、既に去る昭和54年刊になる「松本市新村

「安塚古墳群緊急発掘調査報告書」によって史料批判が加えられているので、今回は重複をさけるためこれを除外しておく。大井郷が、この新村・和田・島立などの地域と推定する前に、筑摩郡全体における古代の郷の推定所在地を示す。

この地方の郷里について、全般的に知れるものとしては、今のところ平安時代承平年間(931~937)に成立した「倭名類聚鈔」によれば、信濃国筑摩郡内にあった崇賀・良田・山家・辛犬・錦服・大井の6郷（古代律令時代における地方の末端である郷里組織）の一つとされる大井郷をあてている。それは古墳分布とその総数・古社寺（式内社・定額寺・その他古記録に見える社寺）、位を贈られた河川（梓川・薄川）などから、次の如く想定する。

良田郷は、現在塩尻市広丘吉田（吉田の向井遺跡から昨年の緊急発掘調査により平安時代の住居址や高床式穀倉址など約80軒が発掘されている）付近から塩尻市の東半分の田川水系流域と推定する。この地域には、古社として延喜式内の阿礼神社が仲町（古へは柿沢の奥山）に鎮座している。古寺としては、天正10年（1582）8月7日小笠原貞慶の西福寺領の宛行状に見える「禪興寺」は、現在は廃寺となっているが、塩尻市大門の地名はこの禪興（広）寺の大門から起こうしたものと言われており、既に寛永年代から、その村名が顯れている。

この大門地籍からは先年平安時代初めの瓦塔が出土していて古寺が古代からあり来ったことを物語っている。禪興寺とは奈良時代の古記録に見える朝鮮半島からの帰化人百濟王の禪興（広）を祀る禪興寺と見たく、奈良時代末の延暦8年（789）5月29日に田河造の姓を朝廷から賜った筑摩郡の人、外少初位下後部牛養、無位宗守豊人等の祖廟と推定され、良田郷の郷寺であったかとも考えられる。また古代の郷の所在をきめる重要な文化遺産である古墳がこの地域に少なくとも20基以上認められることなどによる。

山家郷は薄川水系の地域と考えられ、江戸時代を通じ松本藩の政治行政上の組分けで山家組17箇村を構成する里山辺（家）・入山辺（家）及び江戸時代初め元和3年（1617）に松本領から分地させられ諏訪藩領となった神田・和泉・埴原の地域をも含むものと考えられている。

この地域には、古社として平安時代初め貞觀9年（867）3月11日に朝廷から正六位上梓水神・須々岐水神が位を一つ進め從五位下（律令時代信濃守の階位に相当する）を授けられた須々岐水の神を祀る薄宮が松本市里山辺薄町に鎮座している（古へは入山辺の奥明神平にあった）。

古寺としては、同市里山辺兎川寺（とせんじ）に真言宗兎川寺（現在は兎川靈瑞寺と改称）がある。この寺名兎川がこの山辺の地に関係する古記録や地名に1箇所もないこと、（但し同地区林には地名として兎田があり、当地出身と伝えられる林氏と將軍徳川家との伝説を伝えている。）などから、むしろ延暦18年（799）12月5日朝廷から帰化人外從六位下卦妻真老等に須々岐の姓を賜った記録がある。これは地名須々岐（薄）を以て姓としたこと、それから68年後の貞觀9年に位を授かった須々岐水（すすきがわ）は、現在も松本市入山辺、里山辺地域を貫流する薄川であるところから、この

兎川寺はもと薄川寺（はせんじ）ではなかったかと推考する。即ち「薄川」が「兎川」へと変化したものと考えられる。薄川寺ならば近くの南を流れる薄川の名をとって寺名としたものであって、この地に定着した帰化人須々岐（薄）氏の祖先を祀る氏寺であったとも考えられ、また山家郷の郷寺であった可能性も強いのである。

須々岐氏を葬った積石様式の古墳は、薄川をはさんだ両岸薄町と荒町地域に数基と、その他の古墳を合わせると、山辺谷（両山辺）には、凡そ30基がある（中山地区は除く）。

錦服（織）郷は、女鳥羽川流域の松本市本郷、岡田両地域と推定される。この地域は江戸時代には岡田組を形成している。岡田組は13箇村から組織され、このうち本郷地区の浅間など6箇村をもって古くから本郷6箇村と称えられ、また大村・横田・惣社の3箇村をもって下郷（昭和年代になって南郷と改称）3箇村と呼ばれており、岡田地区の岡田町など4箇村を西郷又は西岡田郷4箇村と称していることによって、本郷を中心として西に西郷を、下流域（南）に下郷を配している。

この地域には、延喜式内の古社岡田神社が松本市岡田下岡田地籍に鎮座する。この神社はもと大口堰（岡田地籍を灌漑する）を女鳥羽川から揚水する松本市稻倉の水口地籍にあったもので、その後現在地に移転させたもので、この社の別称芝宮の名称がこれを証している。このほか帰化人と関係の深い京都の上京区平野本町に鎮座する旧官幣大社平野神社（平野韓神ともいう）の庄園であったことが吾妻鑑文治2年（1186）3月12日の条に平野社領・浅間社（現御射神社春秋宮）岡田郷と見えており、平野神社の庄園であった頃社領の鎮護のため勧請した平野神社の分社が松本市原字宮の上に鎮座していることも帰化人と関係の深かった郷村であったことが証明されよう。

古寺としては、松本市大村字堂田には平安時代の大村廃寺がある。この廃寺は昭和5年の発見より数回の発掘が行われている。寺名が明らかではないが、国学院大学の教授であった故大場磐雄博士は、三代実録の貞觀8年（866）2月2日に定額寺となつた錦織寺と推定している。この廃寺の傍を流れる小川は古く、めどうだ（御堂田）川と呼ばれ、又錦織川とも呼ばれた事が、寛文12年（1672）年の岡田組惣社新切検地帳の地名に見られ、更に古代東山道の宿駅錦織駅が松本市原地籍であったことなどが、当地方の古記録に見えており、錦服郷がこの地であったことが推定される。古墳も5世紀初めと推定される松本市惣社の前方後方墳（長さ35m）を始め、県宝の金銅製天冠を出した浅間温泉の桜ヶ丘古墳など40数基があって、一つの郷を形成するに充分以上の古墳数がある。

辛犬（辛犬甘）郷は、北から女鳥羽川、東から薄川、南から田川、奈良井川等の河川が流入し、合流する旧松本市内の地域と考えられる。この地域は江戸時代には庄内組に属し、旧松本城下町を除いた周辺にある15箇村をもって構成している。

この地域の古寺では、昭和10年5月松本市蟻ヶ崎木沢南の建築工事現場で発見された青銅製鰐口及雲板があり、そのうちの鰐口の銘文には「極樂寺長保三年辛丑、願主判官代高向朝臣弘信」とある。長保3年（1001）は平安時代中頃のものであり、伴出した雲板（国の重要文化財指定 東京国

立博物館所蔵）は共に寺院の仏具であって、学術発掘を経ていないので判らないが、古寺があった可能性が強いのである。蟻ヶ崎の丘陵上にある放光寺は、延暦20年頃（801）に創建されたとの伝承をもつ真言宗放光寺との関係があったかどうかである。放光寺が史料上に確実に見えるのは、南北朝時代の觀応2年（1351）1月10日守護代小笠原弥次郎以下が放光寺に立籠った史料が見られる。（市川文書）

古社としては、埋橋地籍のうちに松本地方最古の社である県神社がある。この社は5世紀から6世紀にかけてこの地域にあったと推定される某（東間→筑摩）県の県主（古代の地方首長）を祀った社か、あるいは県主が祖先を祀った社といわれる。享保9年（1724）の神社縁記書上帳には県大明神と見えている。

このほか注目すべきは市内宮渕の勢高神社であろう。宮渕郷の名は既に鎌倉時代末期嘉暦4年（1329）の諏訪上社の頭役記に見えており、古く奈良井川（明治5年までは木曾川）が勢高神社の下まで打ち寄せていたと地質学上からも、また伝承からもこれを伝えているところから、この勢（瀬）高神社は少なくとも鎌倉時代からあり来った古社である。

古墳は蟻ヶ崎の二段小札の兜をだしたまんじゅう塚を始め、旧市の北部に約10基、東部あがたの森付近に数基、東南部の中林・筑摩・三才に数基と弘法山古墳（前方後方墳、63m）を含め、中山の北側丘陵上の古墳を併せると実に30基を超えている。この地域には既述したように古代の県をはじめ、律令時代信濃国10郡のうち筑摩郡の郡家（郡衙）の地が筑摩にあったと推定されることは集落名筑摩が郡名の発祥地であること、享保9年の信府統記及び同年の庄内組寺社并縁記古跡改帳などによても、これをある程度裏付けられる。この地域が辛犬（甘）郷であったと推定されること、嘉暦4年諏訪上宮頭役結番之事に、流鏑阿礼崎犬甘十郎とある。

またこれよりさき仁和1年（885）4月5日に筑摩郡の人辛犬甘秋子の家族8人が坂名井子繩麻呂等に焼き殺されるという事件が起き、信濃守橋良基もからむ大事件に発展している。

崇賀郷は奈良井川水系流域と推定される。即ち塩尻市の西半部・松本市芳川・笛賀・神林及び東筑摩郡山形村の一部と考えられる。

この地域の古社としては、塩尻市洗馬のうち本洗馬の西側山麓に鎮座する槐井水神社がある。この社は本洗馬の南北町割より参道が真っ直ぐに西へ200m以上と長く続いており、古社の面影をしのばせている。この槐井水神社は、平安時代元慶5年（881）12月28日に朝廷から従五位下と言う、梓水神や須々岐水神と同格な位を授けられた奈良井川（古くは木曾川）を祀る社ではないかと推定される。

この地域には、現在のところ、郷寺としての古寺が認められてはいないが、上神林の寺家には福應寺がある。この周辺に留意すべきか。

次に古墳については、左岸では松本市笛賀の今村の柏木古墳をはじめ小俣古墳群5～6基、同神戸の塚原地籍に1～2基、同神戸新田に塚田、塩尻市洗馬の岩垂に塚田の地名があり、古墳のほ

とんどないこの地に 1 基位はあったものと推考する。奈良井川とみま沢川及び和田堰末流などの流域末にある松本市神林地区にあっては上神林に塚田、同水代に塚田・塚畠、同梶海渡に塚田、同下神林に塚田・塚畠の地名があって、各集落には、それぞれ 1 基以上の古墳があったことを暗示している。

また右岸の塩尻市広丘の川岸段丘上にある郷原から堅石へかけて古墳が 3 基位認められ、その 1 基から直刀が出土している（塩尻市広丘郷原 竹下吉英氏談）。

その他松本市芳川の野溝・平田地籍にも鎧塚をはじめ数基の古墳分布がある。

以上両岸地域を合わせると約20基以上の古墳があったものと推定される。

この地域には、古代の氏族に関する史料は見当たらないが、奈良県の多武峰にあり、藤原鎌足を祀る談山神社文書によれば「信濃国筑摩郡蘇我郷、草茂庄一處、田数等、在施入状、右 大納言藤原冬緒郷」（貞觀年中—859～876）と見えており、蘇我（崇賀）郷の一部草茂庄が藤原氏の荘園であったこともある。

以上倭名類聚抄記載の信濃国筑摩郡に所属する 6 郷のうち大井郷を除く 5 郷の位置について推定し來ったのであるが、あとに残る大井郷の位置については、既述した 5 郷推定地を除外した松本市新村・和田・島立と東筑摩郡波田町の地域より外にあてはまる地域がほかになく、郷名を大井という如く大きな井堰によって開発されたと推定する土地は、ここ以外の地域に求めることはできないのである。

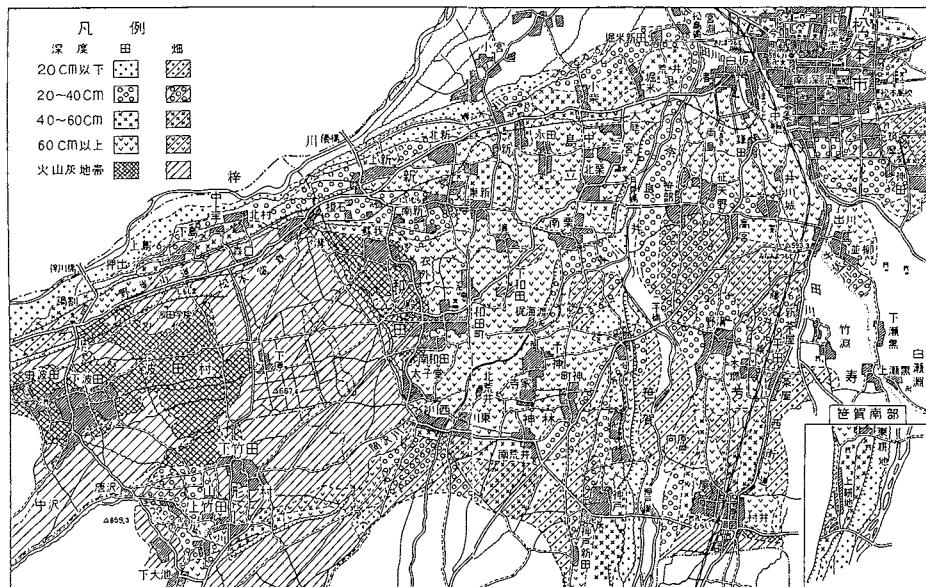
然し、このうち東筑摩郡波田町の地域については、平安時代初期弘仁14年（823）9月24日に信濃国諸牧16牧より貢馬を武徳殿に牽進めた中に、筑摩郡内として埴原牧（松本市中山）と大野牧があり、更に42年後の貞觀 7 年（865）12月19日には、信濃勅旨牧11牧の中に筑摩郡内に埴原、大野牧等がある。また京都市「仁和寺文書」によれば、その 2 年後の貞觀 9 年（867）2 月 19 日に右大臣藤原朝臣良相は筑摩郡大野庄102町 2 段（内熟田10町 3 反150歩）を貞觀寺に施入している。この大野牧・大野庄の位置については、諸説があるが、波田町より梓川を遡る山峡の集落に、中世末以来大野田・大野川の地名が見られ、また波田町上波田の慶安 5 年（1652）の検地帳によれば、「牧之内・馬はなしば」などがあって、牧場的色彩の強い地名が見られ、その位置については、寛政10年（1798）7 月の「和田堰取水口の改修」に関する争論文書の中に、和田堰の取水口の辺りを赤松の牧之内と言っている。「梓川南へり字牧之内と申処惣名和田堰と申唱、先々より用水引取来候」と見えている。この和田堰の取水口は、上波田の最上流地籍であり、この牧之内は牧場の馬を冬期間飼育するところであって、夏の放牧地は波田町の唐沢及び中下原・下原の一部と梓川の上流にある番所原（南安曇郡安曇村）の 2 箇所と推定されており、この古代牧場の名称については、前記の大野川（大野の川）、大野田（大野の田）の意と解せられ、これによって大野牧と推定されている。

倭名類聚抄（935）には、それ以前に成立している大野庄の記載がなく、また 6 郷のうち山家郷については、これよりさき、奈良の正倉院宝物の布袴の銘文によれば、既に天平勝宝 4 年（752）10 月、

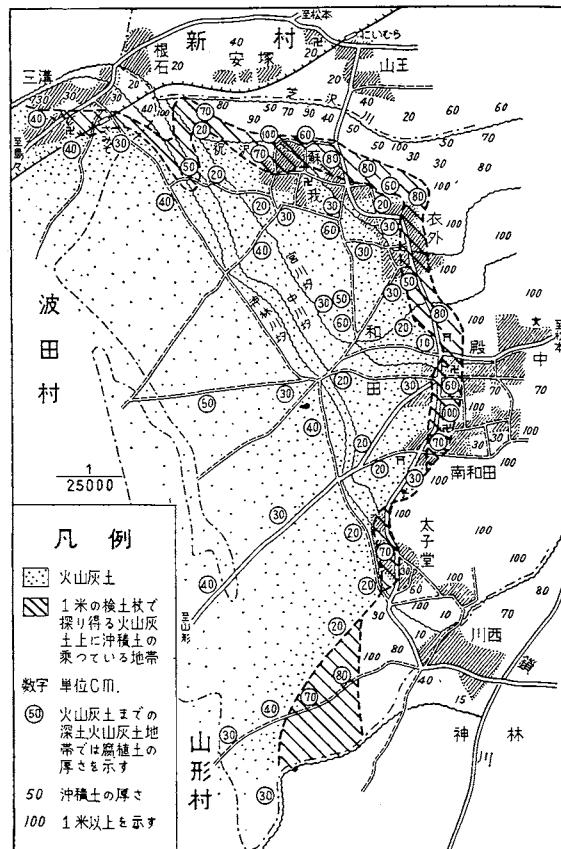
「信濃国筑摩郡山家郷」の郷名が顯れ、更に隣郡安曇郡の場合は4郷のうち前科（さきしな）郷についても天平宝字8年（764）10月、「信濃国安曇郡前科郷」の郷名が見られるところから、全国的視野又は全県的視野に立たないきらいはあるが、筆者は古代郷村の研究から、これら倭名類聚抄記載の郷名は、既に大宝2年（702）に制定された大宝律令によって登録された郷と推定する。大野庄の成立は、大井郷の成立以後山麓の開田の進まない地帯が牧場（大野牧）として成立し、その後養老7年（723）墾田の開発が初められ、墾田私有（三世一身法）の公布によって、牧場の一部が開田化され大野庄として成立したものではないか、それは102町歩の内10町余が開田され、なお80町余は未墾地として残っていることによつても考えられるものであろう。

和田堰の取入口については、前記寛政10年の同堰の取入口を井口と称えており、また大口（おおくち）ともいっている。大口と大井口（おおいくち）の略称であるとされるところから、大井郷は大きな堰によって開発された郷里という意に外ならないのである。

和田堰は、その名称の示すように、始めは和田地区の開発に主眼が置かれていたらしく、第4・5図に示す如く始めは梓川右岸第2段丘の肩の近くに旧堰が通っていたことが知られ、現在でも波田町三溝の葦原遺跡付近（旧安養寺跡）では、その巾数m、深さ1m以上の旧堰筋が確認し得るのである。葦原遺跡からさき和田地区に至る旧流路はわからないが、第4・5図によつて見るに、1mの検土杖で探り得る火山灰土の上に沖積土の乗っている地帯が即ち旧和田堰の流路と推定される。その先端は蘇我（旧荒井）、衣外、殿、南和田、太子堂に到達している。この旧流路をもって境し、西側は



第4図 梓川流域中央部水田地帯土壤深度分布



第5図 梓川流域火山灰土と沖積土との接触状況

波田ローム層であり、東側（低い）は梓川の沖積地となっている。

この沖積地帯がこの旧和田堰によって開発されて行く段階で、梓川の大満水によって旧和田堰の揚げ口（大井口）が欠落ち、その結果従来の揚げ口からの取水が困難になり、旧大井堰口から少し下げる揚水するようになったものか、あるいは旧和田堰より西方に拡がる原野開発のためか、その事情は判らないが、旧和田堰をすて、それより一段と低い河岸第二段丘下に新堰を開き和田地区西部一帯及び南新の開発に着手している。

この第二河岸段丘下に流路を変えた新しい和田堰は三溝地籍で和田地域外の神林地区に送水するため、自堰の上流に神林堰を設け分水している。これは遠く神林地区までの送水を考慮したものであろう。

この新設された和田堰は波田町三溝の下で神林堰と共に流路を45度右にかえ、波田町と松本市との境界付近で和田方面へ行く中川堰と南新、東新へ下る芝沢川とに分かれる。芝沢川から更に和田の殿、中村方面へ行く宮川堰が分かれ、この宮川堰から祝沢が分かれて蘇我（旧荒井）及び衣外へ

第 1 表 安塚古墳群（1978年度発掘）古墳一覧表

	石室規模	出土遺物	備考
安塚 1号古墳	縦 1.2 楕円形 横 1.0 深 (4段)	須恵器(坏・長頸壺)	墳丘不明
安塚 2号古墳	縦 3.0 楕円形 横 1.0 深 (4段)	須恵器 (坏, 墨書きあり) 人骨 (焼骨)	"
安塚 3号古墳	縦 3.0 楕円形 横 2.5 深	人骨 (焼骨)	"
安塚 4号古墳	縦 (5.0) 横 (0.9) 深	須恵器 (蓋・坏・甕) 土師器 (甕) 人骨 (焼骨)	"
安塚 5号古墳	縦 8.35 間詰め、裏詰めなし。 横 1.15~1.45 前・中・後の3室に 深 (0.45) 分かれるか?	須恵器 (蓋・坏・高坏・長 頸壺・短頸壺・甕) 土師器 (高坏) 金環・鉄鍔・刀装具・直刀	"
安塚 6号古墳	縦 8.1 側壁の立石により, 横 1.2~1.8 前・中・後の3室に 深 (0.7) 分かれる。	須恵器 (蓋・長頸壺・甕) 土師器 (高坏)	"
安塚 7号古墳	縦 3.5 横 1.12 深 (0.45)	須恵器 (蓋・坏・長頸壺)	"
安塚 8号古墳	縦 9.7 側壁の立石により, 横 1.2~1.25 前・後2室に分かれ る。 深 (約1m)	須恵器(蓋・坏・高坏・壺) 土師器 (坏・高坏) 金環・鉄鍔・直刀 鎍帶金具・勾玉	墳丘南側に裾 石 推定径11m
安塚 9号古墳	縦 横 深	須恵器 (甕)	墳丘不明

(『松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書』1979.3 松本市教育委員会 より作成)

第2表 古墳関係地名表 1

(和田堰水系地籍)

市町村名	地区名	検地帳(1651~1865)	土地台帳(1888~1978)
波田町	上波田	0	0
	下波田	0	0
	三溝	塚田(2~3)	0
松本市	新村南新	塚田(2), (鉢塚)	塚田, 安塚口
	(安塚)	塚田(2), 安塚(夜巣塚)	安塚(八十塚, 夜巣塚)
	東新	0	塚田
	和田蘇我(荒井)	塚田	塚田
	衣外	—	0
	境	—	0
	中村	—	塚田
	殿	—	0
	和田町	—	塚畠
	下和田	—	0
	南和田	—	0
	神林樅海渡	塚田	0
	水代(川西)	—	塚田, 塚畠

(注) 松本市和田地区 8
集落のうち蘇我(荒井
村)を除く7集落の検
地帳は未調査につき不
明であり、松本市神林
地区のうち上神林の検
地帳は未調査であるた
め確実な結果は得られ
なかった。中世の行人
塚、藤塚など古墳と関
係ないものは除外した
ので諒解されたい。

向けて灌漑流下する。

このほか根石で分かれて南新の本郷及び東新集落を貫流して南栗林方面へ流下する堰がある。このほか波田町三溝地籍で梓川から揚水し新村の上新・北新・下新一帯の水田を灌漑し、島立方面へ流下する新村川(堰)がある。この堰は第三河岸段丘下に流路をもち上記地籍の主脈の堰である。波田町の三溝は和田・神林・新村三つの堰(溝)のあるところから起こった集落名であり、三つの堰が扇状に開く要の位置にある。

旧和田堰の開発によって、生活の安定と富の蓄積を併せ持つに至った地域族長達は和田地域より北にある微高地南新の安塚原及び、秋葉原方面に石櫛(室)の長さ7~10mの大きな古墳を数基つくっている。

このことに就き大正大学教授斎藤忠博士が去る昭和55年安塚古墳群発掘調査後に視察に来られた折これら大型の石櫛をもつ古墳埋葬者は和田方面にいた族長のものであり、その周辺に点在する小古墳をふくめて一族のものであろう。またこの一族集団古墳群が点在しているところから、数族を合

わせた古墳群であろうとの教示を得ている。

安塚古墳群の場合は第1・2・3・6・7・10号墳と川久保家墓地の古墳（支石墓型）の7基をもって1群とし、その主墳は石槨の長さ10mをもつ6号墳（現在保存）であろう。次に第4・5号古墳及びその北の西原家墓地下にある古墳を合わせ、3基をもって1群とし、そのうち石槨の長さ8.35mをもつ第5号墳が主墳であろう。

3群は第8・9号の2基をもって1群とし、そのうち石槨の長さ9.7m、入口巾1.25mの大きさをもつ第8号墳が主墳である。秋葉原の場合は古墳群といっても、正確にいえば今度発掘された古墳5基は、安塚古墳群のように群集することなく、第1号墳と第2号墳は約120m位離れ、第2号墳と第3号墳と100m、第3号墳と第4号墳とも同じくらい離れ、第4号墳と第5号墳とは135m離れている。

然し第1号墳から第5号墳までのうち第3号墳を除く4基はほぼ南北の一直線上であって、距離は390mである。これは群と言うより列と言った方が適當かも知れない。

古墳はその他松本市新村・和田・島立3地区のうち和田の一部と島立の堀米・荒井を除く各集落内に1~2づつ宛古墳址と関係ある塚田・塚畠・塚添の地名が見られるなどから、各所に古墳が散在していたものと推定する。

これら散在する小型古墳（石槨の長さ3m位）は、旧和田堰を廃止し、新和田堰（現在の和田堰）が各支堰を出して開発が進むなかで各所に小集落が出来て行き、この小集落の長が小古墳を築造したものと推定する。

今度発掘された秋葉原古墳のうち第3・4・5号墳がこれにあたる。勿論小型なので追葬は出来なかったとおもわれる。（第1~4表）

大井郷と推定される地域内松本市新村・和田・島立の範囲内に於いて地名などによる古墳概数と、新村地区内にて、発掘及び偶然発見などによる確認数は第4表の通りである。

この地域における古社としては、延喜式内の沙田神社が島立の三の宮に鎮座している。

この社は波田町の鶴沢山に鎮座（現在も重箱形の磐座がある）していたものを長禄元年（1457）に現在地へ勧請したことが古絵図（松本市島立南栗の浜英麿氏所蔵）に見られている。然し、この年代はともかく新村南新から三の宮へかけて三の宮様の腰掛石と言われる大石が点々とあるところから、上流から開拓が下流へと進むなかで漸次沙田神社が移動して行ったものと考えられる。

貞觀9年に須々岐水神と共に從5位下を授けられた梓水神がある。この神を祀った大きな社はなく、わずかに鳴立町の地籍に梓大明神という小祠があるに過ぎないのである。

古寺としては、沙田神社の神宮寺が島立の三の宮に鎮座してはいるが、これも大井郷の成立に關係した古寺院ではない。30基以上の古墳をもち、式内社や授位された水神を祀るこの地域に奈良から平安にかけての寺院が今のところ見あたらないのは不思議なことである。

（倉科明正）

第 3 表 古墳関係地名表 2

(新村堰水系地域)

市町村名	地区名	検地帳(1651~1865)	現在の土地台帳(1888~1978)
松本市	新村上新	塚田(2) 塚畠	塚田
	北新	塚田(2~3) 塚畠, 塚添	塚田, 塚畠
	下新	塚田(2~3) 塚畠, 塚添	塚田, 塚添
	島立町	塚田, 塚畠	0
	永田	塚田	0
	中村	塚田(2)	0
	三ノ宮	0	0
	大庭	塚田, 塚畠	塚田
	小柴	塚田	0
	堀米	0	0
	荒井	0	0
	北栗林	塚田(2)	0
	南栗林	元塚上	元塚上

第 4 表 古墳の地名による概数と確認数との比較表

市町村名	地区名	古墳概数	現在確認数	備考
松本市	新村	12~15	25	今次の発掘並びに今まで発見されたものを含む。
	和田	3	0	和田地区においてもは場整備事業により古墳の存在が確認されている
	島立	10~11	1	将来の耕地整理事業の際は特に注意を要する
	計	24~29	26	

第3節 周辺遺跡

秋葉原遺跡の西方800mには安塚古墳群があり、昭和53年の発掘調査報告書に周辺遺跡について故小松虔氏が記しているので、本稿ではそれをもととして記述する。

松本市西南部の奈良井川左岸での主な遺跡は、 笹賀地区では南より柏木古墳、牛の川遺跡（縄文中期集落址および古墳時代、平安時代遺構検出）神戸遺跡（平安時代住居址および墓塚検出）くま川遺跡（縄文中期、古墳・奈良・平安時代住居址）と続き、神林地区に入っても町神周辺では中世陶器の表面採集をみ、さらに下神遺跡では平安時代の遺物が採集され遺構の存在をうかがわせている。奈良井川と鎖川の合流点の南側には大久保原工場団地遺跡（縄文中期・平安時代）鎖川を北に渡ると島立から新村にかけての水田が広がり、この一帯が島立新村条里的遺構とされているが、実際には水田下約1mの深さに平安時代の遺構遺物の検出をみているので、それ以降の開発であることは確かである。

鎖川左岸には神林梶海渡で平安時代の遺物の出土をみており、和田地区に入ると和田・西和田・山ノ神遺跡と平安時代の遺物が採集されている。目を奈良井川左岸段丘にむけると南栗・北栗・三ノ宮と遺跡が南北に続き、縄文中期・平安時代の遺物の出土をみている。特に南栗神社南の開田の際には、上部欠損の須恵器の大甕が3個並んで発見され、水田地帯中央の高綱中学校のプール建設の折、1m位の地下より土台石とみられる石や、須恵器が出土している。同様に平安期の遺物が新村遺跡より出土している。

安塚古墳群は前述のように昭和53年に調査されたが9基の古墳が検出され、勾玉、金環、直刀、帶金具、須恵器の壺、壺蓋、高壺、壺、土師器の壺、高壺、灰釉陶器の碗などが出土している。古墳の年代は8世紀と考えられている。島内地区でも水田の下から平安時代の遺物が検出されており、その範囲は広い。

これら秋葉原遺跡の周辺地域は梓川、奈良井川による堆積が厚く、今後の調査により新しい遺跡が発見されることと思われる。

(神沢昌二郎)

引用・参考文献

「松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書」 1973.3. 松本市教育委員会

第3章 調査結果

概要 (第6図)

秋葉原遺跡の調査地域を便宜上A～F地区とわけ、他に単発的に検出された第3号～第5号墳とを合せると、調査面積はおよそ、15,000m²となる。

地区別にみてみると

A地区 古墳の積み石に使われている石と同じ平板の花崗岩の河原石があつたが、遺構として捉えられなかった。

B地区 地形的にやや段があるが、西南の一段と高い水田の下より江戸時代の土座敷（東西5.9m×南北11.3m）があり、他に墓址が3基検出された。全面に陶磁器片が散乱していたが、特に土座敷外東側には多量の陶磁器片が検出され、一括廃棄されたものと推定できる。

B地区内の低位の水田下には、南北に巾2.5mの空白地帯をはさんで、東西に計78基の墓址が検出された。墓址には掘り上げ結果による分類は勿論であるが、上面においてもいくつかのパターンがあるようにも判断された。例示すると、①平板の大石を中心とする円形礫群、②中礫のみの円形礫群、③大石が囲む円形又は方形の礫群、④礫がなく円形を示すもの等々である。周辺には骨片、炭化物等が散乱しており、過去にかなりの攪乱があったことを伺わせる。

C地区 第2号墳が検出された。これは昭和28年に開田の際掘りあげられた残存部であるが、石室内に多少の遺物が残っており、その前庭部からは多量の壺、壺蓋等の出土をみている。

D地区 第1号墳が検出された。これも過去の水田開発により上部が破壊されていたが、長さ7.4m、巾1.2mの2～7段の石室部の石積みが残り、その内部より人骨、須恵器壺破片が検出され、その外部からは多量の須恵器壺、蓋壺のほか、耳付短頸壺、長頸壺等が検出された。

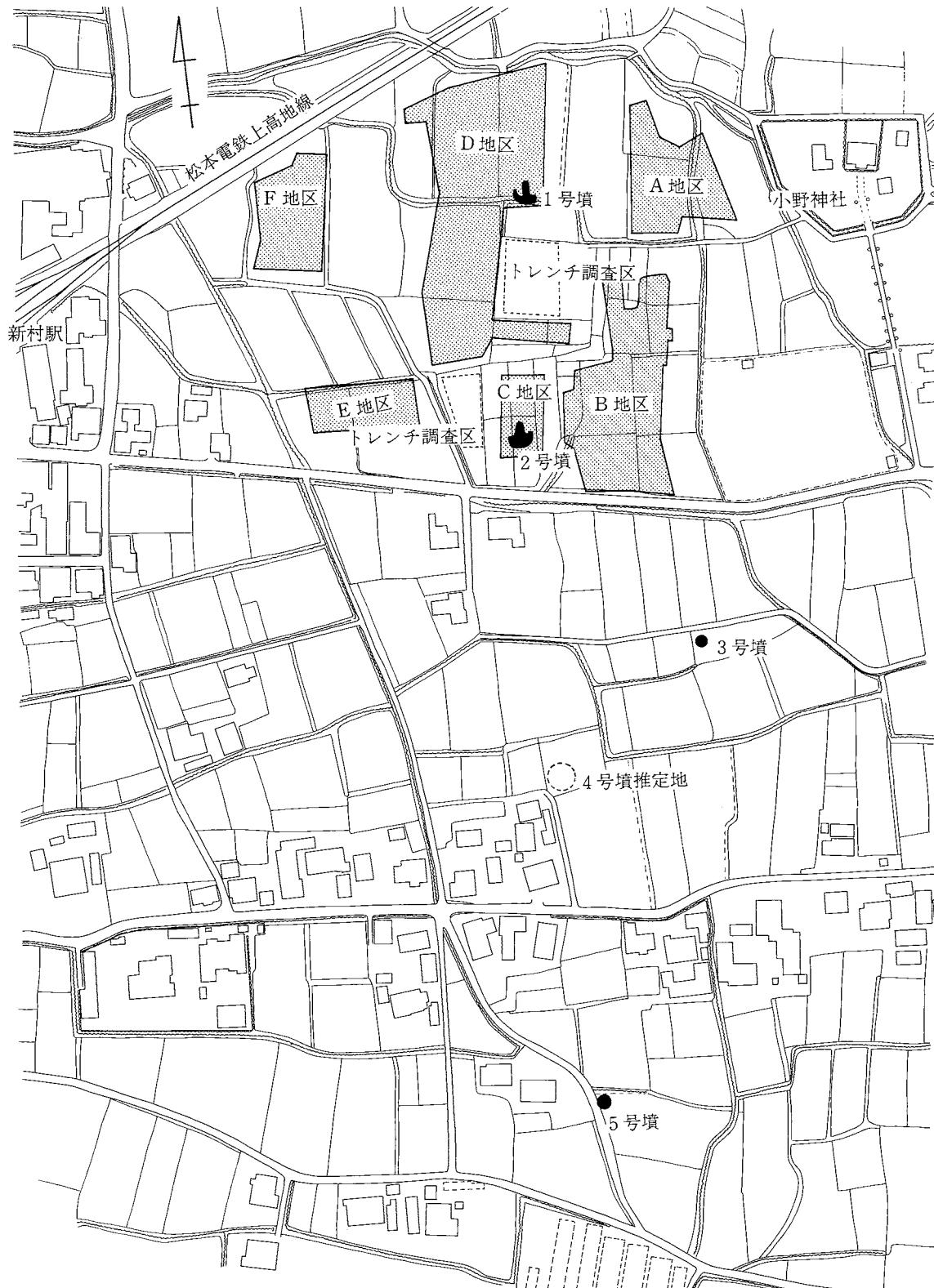
D地区の南側2ヶ所に合計21本のトレンチを入れたが遺構の検出はなかった。

E地区 遺構の検出なし

F地区 遺構の検出なし

第3号～第5号墳 個々に詳述してあるので重複を避けるが、第4号墳については蓋石および積み石とみられる石の出土した地点をもって、推定したものである。

(神沢昌二郎)



第6図 調査区及び古墳分布図（地形はほ場整備事業以前のもの）

0 100m

第1節 古 墳

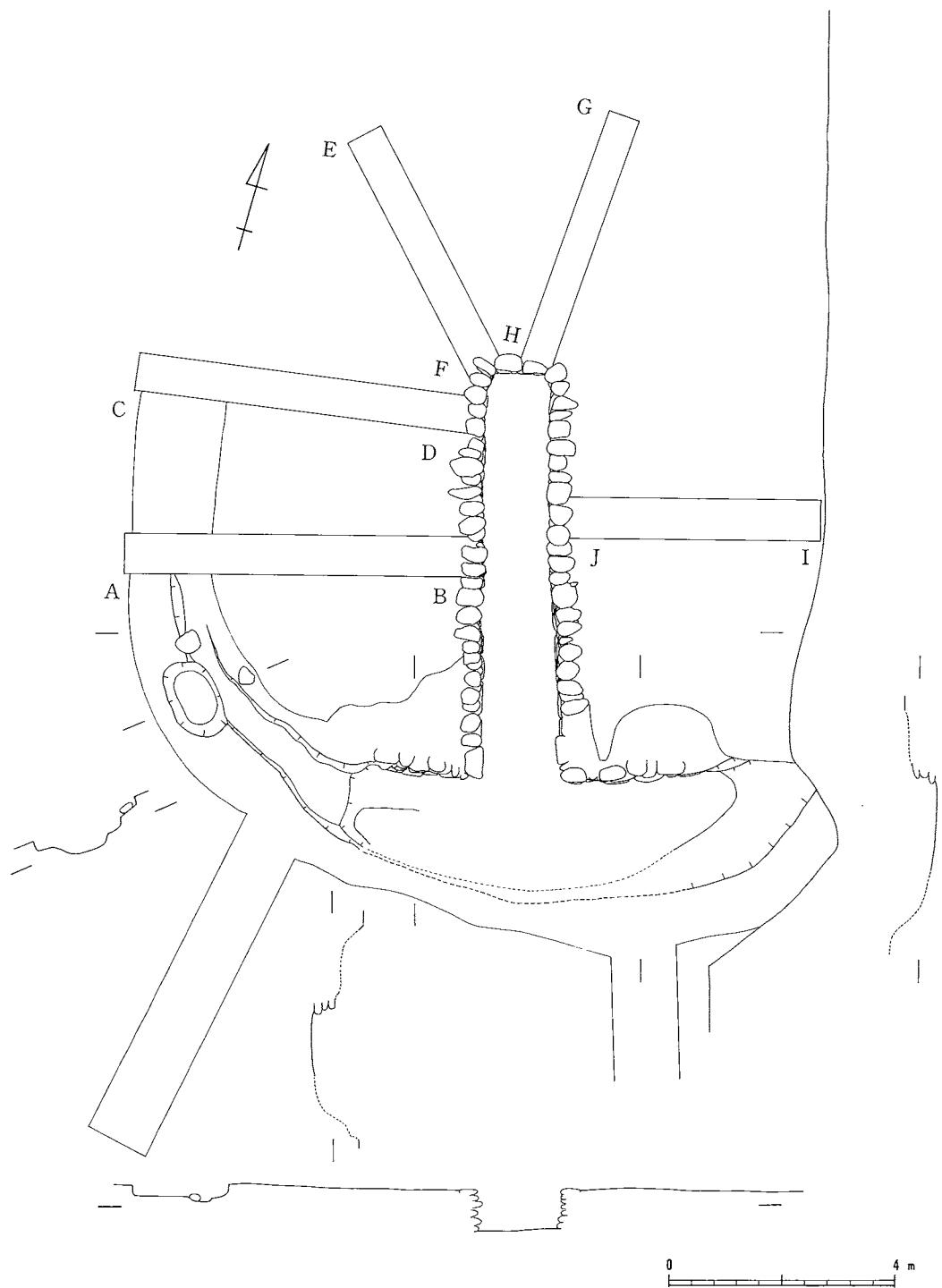
1. 1号墳

発掘経過 本古墳は、D地区中央部東寄りに位置する。その存在は、重機による表土剥ぎの段階で、後に天井石の1つと判明した長さ1mあまりの大石が顔を出し、予見されていた。やがて遺構検出により、既出大石の周囲に、削平された横穴式石室の残存最上段石列が、一方の短辺を欠く7.4m×1.6mの長方形で確認され、その内区には側壁材らしい径30~40cmの扁平椿円の河原石及び天井石だったと思われる長さ1m内外の細長い大石が、削平時の崩落によると推定される形で多数存していた。石室内の掘り下げは、これら内区の石を取り除くことから始めたところ、予想以上の石の数で密につまっており、具体的な土層観察図の作成は不可能な状態であった。この崩落した石群は最終的には石室床面上5~10cmの高さまで達していた。石室の掘り下げに並行して、周溝・裾石等の存在確認のため、石室部から放射状にトレンチを入れる作業を進めた。この結果、全周する周溝・裾石等をもたない、石室と開口部を中心とする弧状の溝を残す古墳跡であることが判明した。

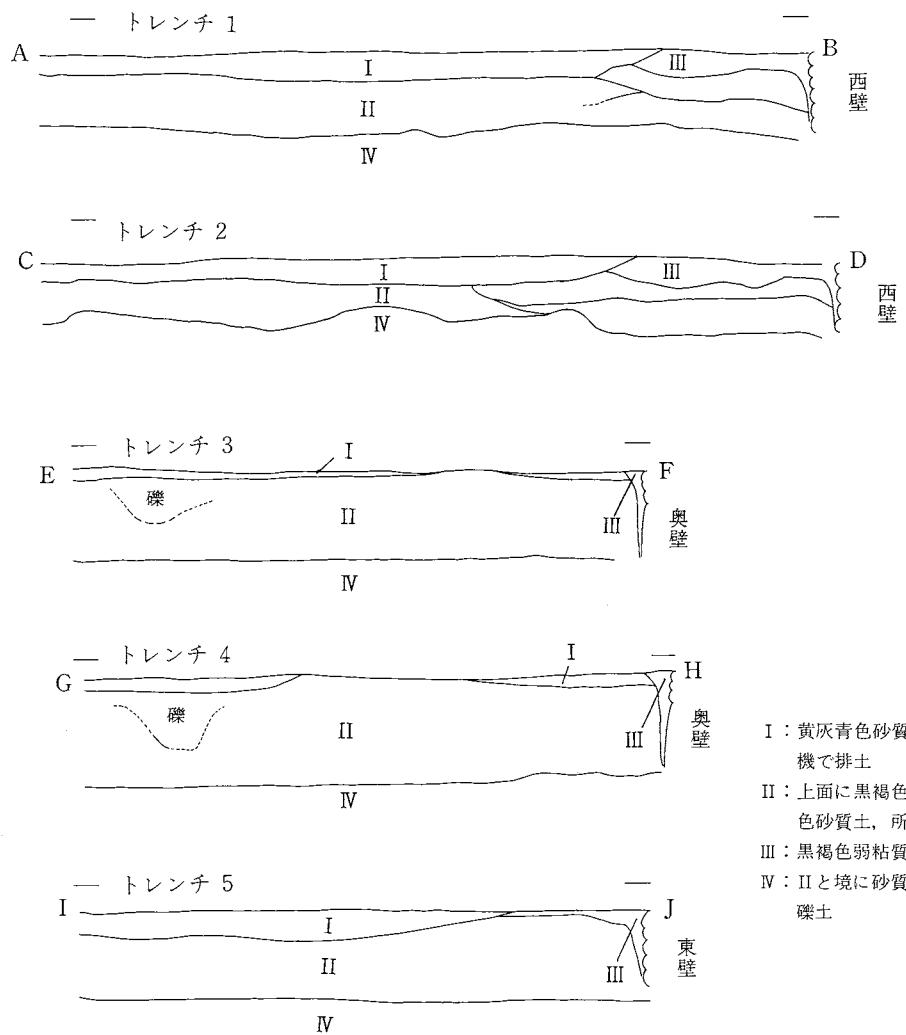
遺構 (第7~11図) 上段及び天井部を欠き南方へ開く横穴式石室、石室開口部両側の石積み、開口部を中心とした弧状の溝よりなる古墳跡である。墳丘とそれに係る施設は調査時以前より全く存在していない。横穴式石室の平面形は、内法で長さ7.4m、巾1.05m(奥壁部)・1.3m(開口部)の、ほぼ長方形を呈し、中心線はN-16°-Wをさす。側壁は、最大残存高0.8mのところで、扁平椿円の河原石を小口積み様に平らに6~7段積み重ねてつくられており、全般的に持送状になっていない。この側壁石積みの最下段のみは、表に出る面が平らで真直にそろう様に石を選び、縦方向にならべられ、それ以上の段と異なる。また、最下段のほぼ中央部に、左右対応する様に一対の立てた石を埋め込んでいる点は注目に値する。奥壁は残存高約0.8mで、扁平長椿円の河原石3枚を高さをそろえて縦に立て、その上にやはり扁平な河原石を2段積んでいる。側壁、奥壁ともいづれも裏積み等は全くない。石室床面は、地山を堅めただけで何らの敷物もなかったが、奥半分の床上には、第10図に示す扁平な石及び4ヶの小礫が置かれていた。扁平な石の間からは骨片、小礫付近からは火葬骨がまとまって検出されており、石・小礫は配置等からみても遺骸の納置に関連するものとみることが可能である。

開口部両側の石積みは、向かって左側が4段高さ約0.7m、右側が3段高さ約0.5m残存しており、長さはどちらも2m程である。やはり扁平な河原石を用いているが、積み方は石の長径方向にあわせている。

開口部を中心とした弧状の溝は、所謂周溝の一種とも考えられるが、トレンチによる断面観察の

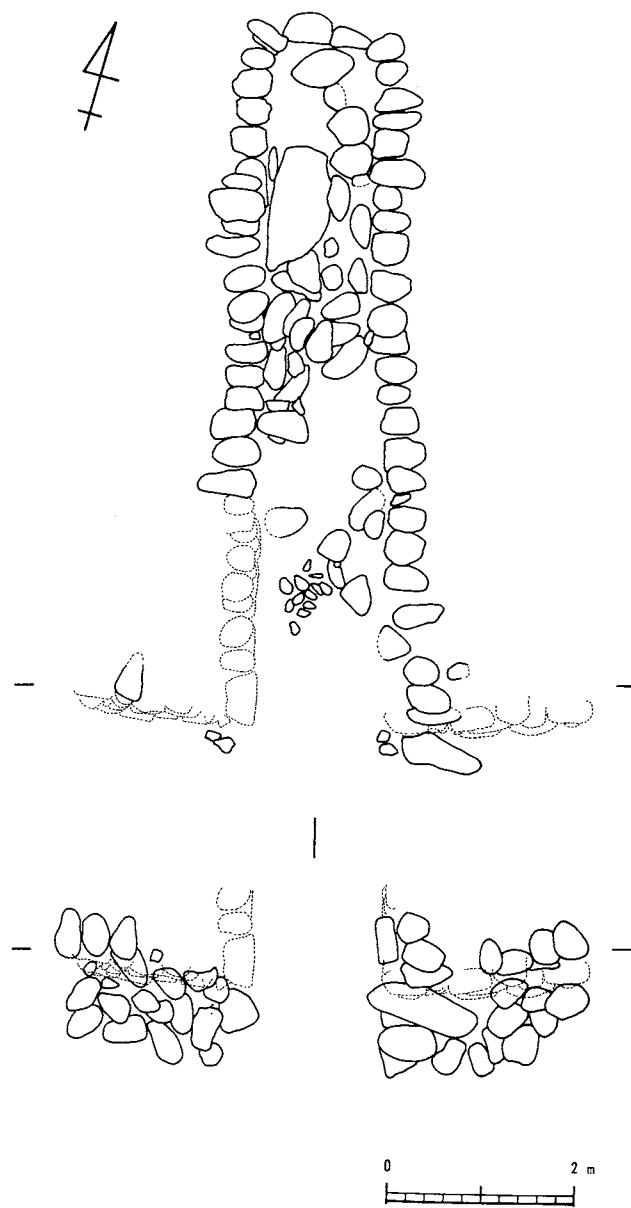


第7図 1号墳全体図 (1:120) 水平の基準線は海拔619m

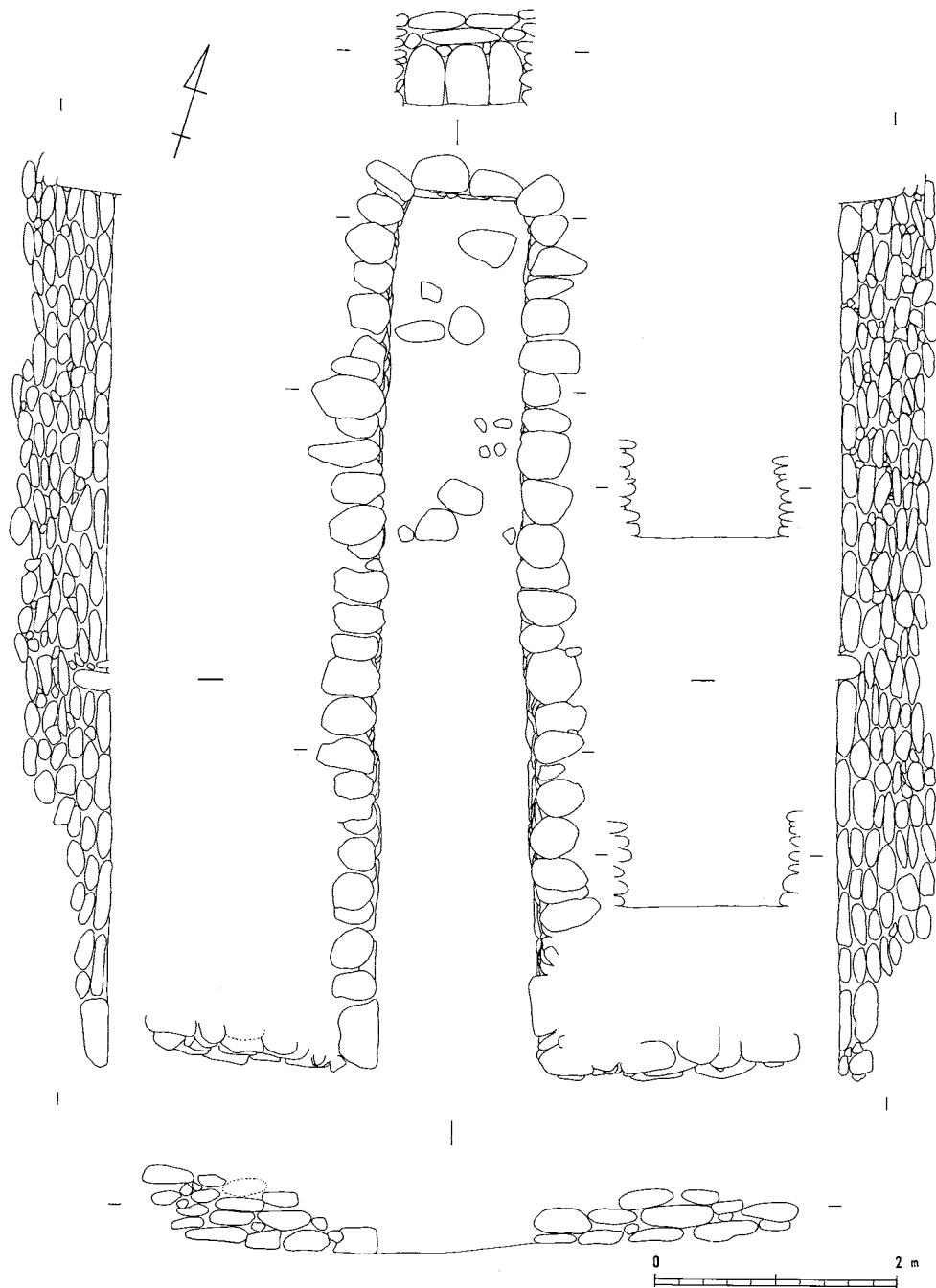


I : 黄灰青色砂質土、本層上面は重機で排土
 II : 上面に黒褐色の沈澱層をもつ栗色砂質土、所によって礫をもつ
 III : 黒褐色弱粘質土
 IV : II と境に砂質土をもつ黄褐色砂礫土

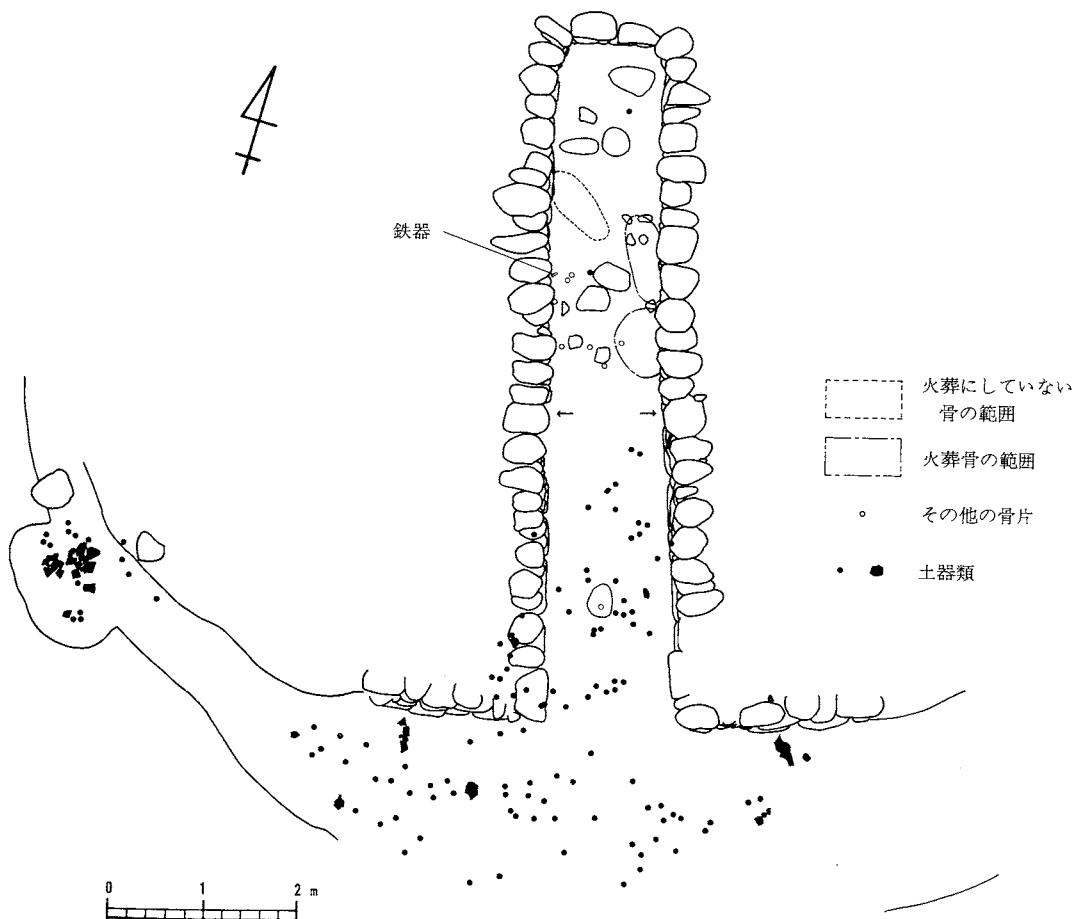
第8図 1号墳トレンチ土層観察図(1:60) 基準線は海拔619.70m



第9図 1号墳検出状況・開口部両側石積崩落状況平面図



第10図 1号墳石室平面・正面・側面図(1:60) 高さの基準線は海拔619m

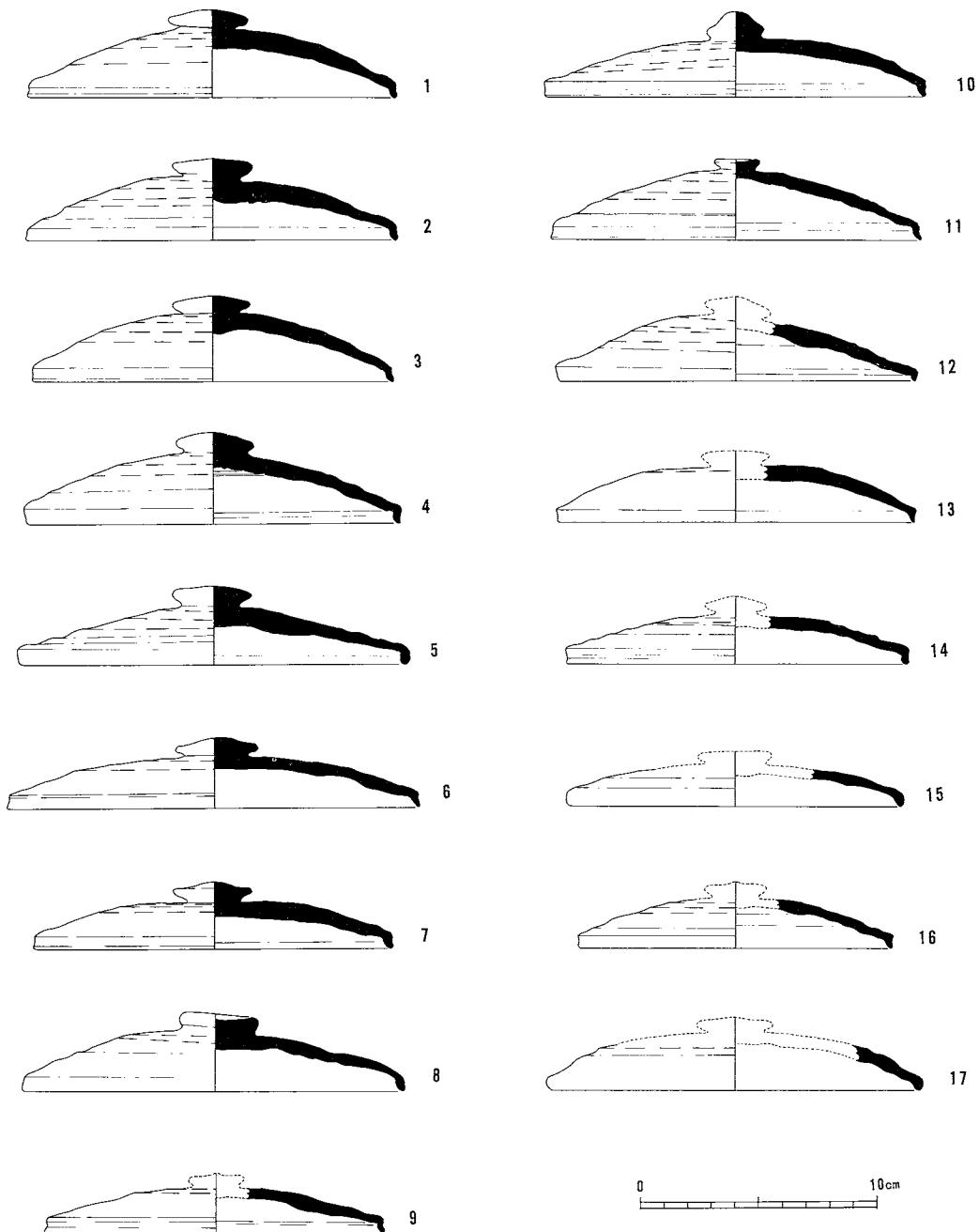


第11図 1号墳遺物出土地点平面図 (1 : 80)

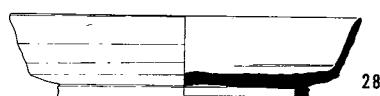
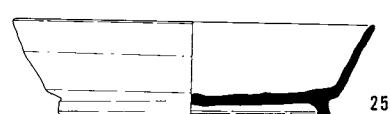
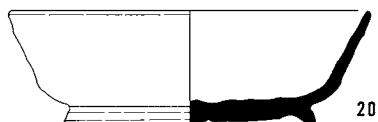
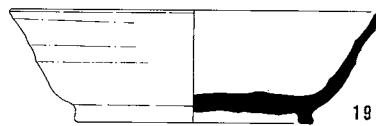
結果、全周している確証は得られなかった。開口部前面で最深（ほぼ石室床と同じ）、最大巾（南側が攪乱をうけているが推定約2m）となり、西に行くに従い急に細く浅くなつて、なくなつてしまふ。東側は調査区外にかかつたため不明であるが、西側と同様になると推定している。西端の付近に、溝に付随する様に、 1.5×1 m程の浅い土塹があり、内部に多量の土器とともに角礫1ヶが落ち込んでいた。

遺物 (第12~15・25図、第5表) 本古墳からの出土遺物は、土器・鉄器・骨片・炭化物がある。出土地点の概略は、骨片・炭化物・鉄器が石室の奥半分床面付近から、土器が石室の手前半分から少量、開口部前及び西端土塹内から大量に出土している。

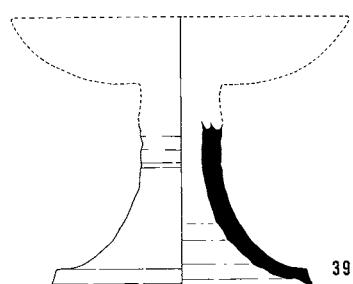
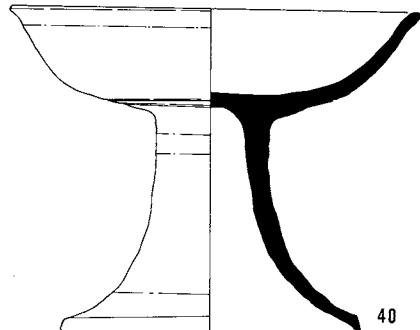
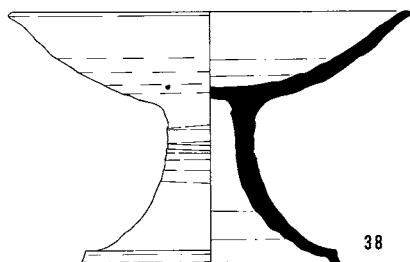
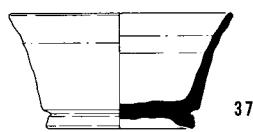
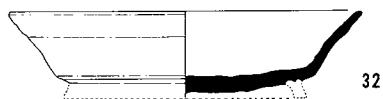
土器については、個々の詳細は観察表に譲るが、種別として土師器・須恵器、器種では有台・無



第12図 1号墳出土土器実測図(1) (縮尺1/3)

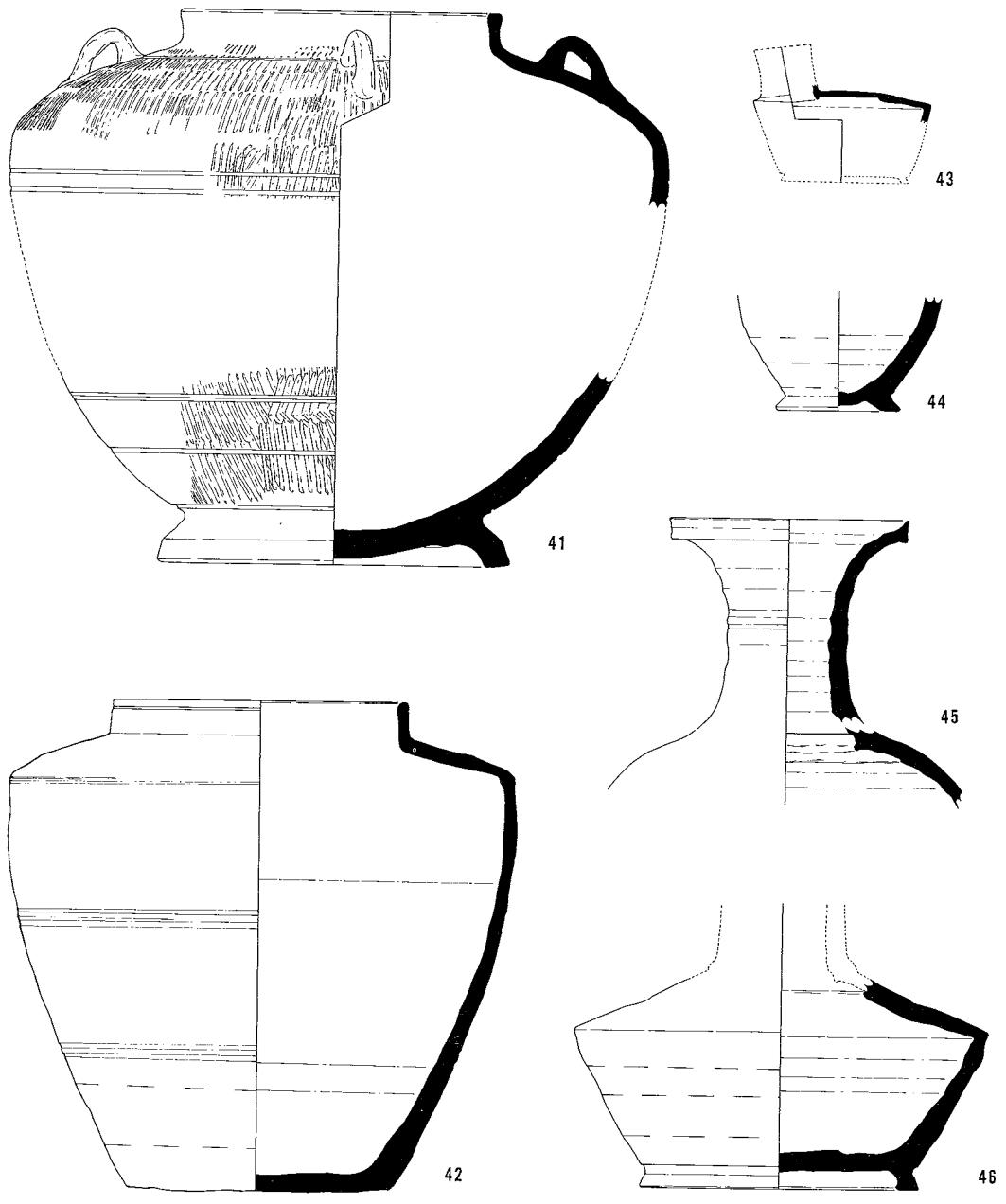


第13図 1号墳出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



0 10cm

第14図 1号墳出土土器実測図(3) (縮尺1/3)



0 10cm

第15図 1号墳出土土器実測図(4) (縮尺1/3)

第5表 1号墳出土土器観察表

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
12 1 41	須恵器 蓋	— 15.5 3.8	灰 灰～薄灰 灰～灰白	完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面全てに灰白～緑黄の自然釉 内面にヘラ記号
12 2	須恵器 蓋	— 15.6 3.5	灰 〃 灰～灰白	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面半分に緑～灰白の自然釉、内面に1同様のヘラ記号
12 3 41	須恵器 蓋	— 15.2 3.7	灰 〃 灰～灰白	口 $\frac{1}{6}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面全てに濃緑～灰白の自然釉、内面に1.2同様のヘラ記号
12 4 41	須恵器 蓋	— 15.7 3.9	灰白 灰 灰～灰白	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面に黄緑～灰白の自然釉がかかり凸凹が激しい
12 5 41	須恵器 蓋	— 16.2 3.4	灰 〃 〃	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ 内面ナデ	外面半分に黄緑の自然釉
12 6 41	須恵器 蓋	— 17.4 3.0	灰 暗灰 灰	口 $\frac{1}{4}$ 他 $\frac{1}{4}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 7 41	須恵器 蓋	— 15.0 2.9	薄青灰 〃 灰	口 $\frac{1}{3}$ 他 $\frac{1}{5}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 8 41	須恵器 蓋	— 16.1 3.3	薄青灰 〃 暗灰～灰	口 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	歪みあり 焼成あまり良くない
12 9	須恵器 蓋	— 14.4	青灰 〃 〃	つまみ欠 他 $\frac{2}{3}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	胎土中央部僅かに赤味がかかる
12 10 41	須恵器 蓋	— 15.9 3.6	赤灰～暗赤灰 〃 赤灰	口 $\frac{5}{6}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ のちロクロナデか	
12 11 41	須恵器 蓋	— 15.5 3.4	薄青灰 〃 青灰～灰白	口 $\frac{1}{2}$ 他 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 12 41	須恵器 蓋	— 14.9 〃	灰～灰白 〃 〃	つまみ欠 他完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	歪みあり
12 13	須恵器 蓋	— 14.9	灰白 灰 灰赤褐	つまみ欠 他 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 14	須恵器 蓋	— 14.4	暗灰褐 灰～暗灰 灰	つまみ欠 他 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口 径 底 径	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備 考
12 15	須恵器 蓋	— 14.0	暗青灰 青 青灰~赤灰	口 $\frac{1}{6}$ 他 $\frac{1}{6}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 16	須恵器 蓋	— 13.2	青 〃 〃	口 $\frac{1}{6}$ 他 $\frac{1}{6}$	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
12 17	須恵器 蓋	— 15.7	灰 〃 〃	口 $\frac{1}{6}$ のみ	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
13 18 41	須恵器 坏	14.2 10.0 4.2	灰~灰白 〃 〃	口 $\frac{2}{3}$ 底 $\frac{2}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
13 19 41	須恵器 坏	14.5 9.3 4.5	灰~暗灰 〃 灰	口 $\frac{1}{4}$ 底完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ・土器切り離し回転ヘ ラ切りか?	
13 20 41	須恵器 坏	14.2 9.2 4.6	灰~灰白 〃 〃	口 $\frac{1}{2}$ 底 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ・ナデ・ツケ高台・底 面回転ヘラケズリ	底面にヘラ記号
13 21 41	須恵器 坏	15.0 9.4 4.2	灰~灰白 〃 灰褐	口 $\frac{1}{2}$ 底 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリのちナデ	外面一部に灰白の自然 釉
13 22	須恵器 坏	14.4 9.4 4.7	暗青灰~暗灰 〃 灰黒~暗灰	口 $\frac{3}{4}$ 底 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	焼成あまり良くない
13 23	須恵器 坏	14.4 9.9 4.0	黄灰~灰褐 〃 赤 灰	口 $\frac{1}{3}$ 底 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ・土器切り離しの回転 糸切り痕中央部に残る	
13 24 42	須恵器 坏	13.8 10.1 4.0	赤 灰 〃 暗赤灰	ほぼ完	ロクロナデ・ナデ・ツケ高台・底 面回転ヘラケズリ・土器切り離し の回転糸切り痕中央部に残る	
13 25 42	須恵器 坏	14.3 10.6 3.8	赤灰~赤褐 〃 赤 灰	ほぼ完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
13 26	須恵器 坏	13.0 10.6 3.4	暗青灰 〃 〃	口 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	焼成あまり良くない 胎土中央部赤灰を呈す
13 27 42	須恵器 坏	13.9 9.9 3.6	薄青灰 〃 暗青灰	口 $\frac{3}{4}$ 底完	ロクロナデ・ツケ台・底面回転ヘ ラケズリ	
13 28 42	須恵器 坏	14.0 9.8 3.4	暗灰~青灰 〃 赤 灰	口 $\frac{3}{4}$ 底完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	底面にヘラ記号

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
13 29 42	須恵器 坏	13.0 9.5 3.2	青 灰 薄 青 灰 青 灰	口 $\frac{3}{4}$ 底 $\frac{5}{6}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ回転糸切り痕を底面中央に残す	
14 30 42	須恵器 坏	13.2 9.3 3.1	青灰~暗青灰 灰~暗灰 灰 白	口 $\frac{1}{4}$ 底完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
14 31 42	須恵器 坏	12.6 8.5 3.3	黒灰光沢 薄 青 灰 薄 赤 灰	口 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ・回転糸切り痕を底面中央に残す	
14 32	須恵器 坏	13.8 (2.6)	青灰~暗青灰 " " 暗灰~青灰	口 $\frac{1}{3}$ 高台欠	ロクロナデ・底面回転ヘラケズリ ツケ高台痕	
14 33 42	須恵器 坏	14.4 6.7 4.1	灰~灰白 " " 灰~灰褐	口 $\frac{2}{3}$	ロクロナデ・ナデ 土器切り離しは回転ヘラ切りか?	
14 34	須恵器 坏	13.9 5.4 3.7	灰~灰白 " " 灰 白	口 $\frac{5}{6}$	ロクロナデ・ナデ 底部切り離し不明、底部調整にハケ目状のものもみられる	
14 35 42	須恵器 坏	13.9 6.2 3.5	灰 白 " " " "	口 $\frac{3}{5}$	ロクロナデ・ナデ 底部切り離し不明	
14 36 43	土師器 坏	14.6 (6.0) 5.0	橙灰~暗橙 " " " "	口 $\frac{1}{2}$ 底 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ・ナデ・ヘラミガキ? 底面調整は一部にハケ目状のもの も見えるが荒れていて不明	
14 37 42	須恵器 坏	8.8 5.8 4.6	暗 青 灰 " " 灰 褐	口 $\frac{5}{6}$ 底完	ロクロナデ・ツケ高台? ナデ・オサエ	
14 38 42	須恵器 高坏	15.6 10.0 10.1	暗青灰~灰褐 赤灰~灰褐 橙灰~暗灰	ほぼ完	ロクロナデ・回転ヘラケズリ	
14 39 43	須恵器 高坏	10.2	青灰~暗灰 " " 灰~暗灰	坏部欠 脚部完	ロクロナデ・ナデ・オサエ	
14 40 42	土師器 高坏	16.1 11.8 12.9	灰褐~橙褐 坏部・黑 橙	ほぼ完	ロクロナデ・坏部内面雜なヘラミ ガキ	坏部内黑
15 41 43	須恵器 耳付短頸壺	13.2 12.8 " "	暗灰~暗黄灰 " " " "	口 $\frac{1}{3}$ 胴欠	ロクロナデ・ヨコナデ・平行タタ キ目・底面にもタタキ目	
15 42 43	須恵器 短頸壺	12.2 11.0 20.6	灰~暗灰 " " " "	完	ロクロナデ・胴下部外外面回転ヘラ ケズリ、底部調整不明だが何らか の圧痕あり	胎土が非常に砂っぽい

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
15 43 46	須恵器 平瓶		灰～暗灰 〃 〃	天井のみ $\frac{1}{3}$	ロクロナデ	上面に灰白の自然釉
15 44 43	須恵器 壺	5.0	灰～暗灰 〃 暗灰～黒灰	胴下半のみ	ロクロナデ・ツケ高台・回転ヘラケズリ・マキアゲ成形？	
15 45 43	須恵器 長頸壺	9.9	自然釉 黒灰～暗灰 暗灰	頸 $\frac{2}{3}$ 胴 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ	頸部外面の釉は銅色光沢、胴部外面は暗緑斑状で厚い
15 46 43	須恵器 長頸壺	11.6	灰白 〃 〃	胴 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ナデ・ツケ高台・胴部外面回転ヘラケズリ	外上向き面は濃緑の厚い釉、内面底部にも焼津とともに濃緑の釉

台の坏身、蓋、高坏、長頸壺、耳付短頸壺、長胴短頸壺、平瓶、甕等があり、須恵器が圧倒的に多い。出土状態は、ほとんどが破片で、しかも2m以上離れた地点のものが接合するなど、小単位で一括品として捉え得る状態ではなかった。ただし、開口部周辺と西端土塙内出土の大別は可能で、図示した土器のうち西端土塙内から出土したものは、第12～15図9～12・14・15・23～25・28～31・36・38～40・42である。

これらの本古墳から出土した土器は、大枠として8世紀代のものと捉えられると考えている。鉄器は石室内より床から約5cm程浮いて1点出土しており、形態から尖根の鉄鎌又は刀子と思われるが腐蝕が激しく中空になっている部分もある。

骨片は人骨で、生骨（遺骸を火葬にせず葬ったもの）と焼骨（火葬にしたもの）の2種類が、それぞれまとまって検出された（第11図）。詳しくは第3章第4節を参照されたい。

炭化物は焼骨の周辺から少量検出されたが、いづれも小片で何であるかは不明である。

（直井雅尚）

2. 2号墳

調査経過 本古墳はC地区中央に位置する。発見の端緒は、重機による表土剥ぎを行った際、須恵器片の散布があったことによる。遺構検出の結果、東西方向に長く、巾3m程のベルトで小礫と土器が多く出土し、そのベルトに「T」字状に直交する約3m巾の黒褐色土が北へ延びているのが確認され、古墳跡の可能性が俄然高まった。そもそも、このC地区付近では昭和28年4月10日、開田中に100ヶあまりの円形扁平石が階段上に敷き詰められたものが発見され、その間から須恵器等の出土があって、遺物は松本博物館に保管したという記録があり、本遺跡1号墳や昭和53年に調査が行われた安塚古墳群等の例から、昭和28年発見例も、埋もれていた古墳跡だろうと推定されてい

た。そのため、今回検出した黒褐色土の落ち込みがこの石室部に該当することも考えられた。この段階で2号墳と命名した。

黒褐色土の掘り下げを開始してみると、果たして側壁・奥壁にあたる石材は無く、グラグラとした傾斜の壁を三方に持つ、 7×2 m程の長方形の掘り込みになっていったが、最後に東壁の手前寄り部分に開田の際除去し残したと思われる扁平な河原石が1～3段積みで現れ、平坦な底面に達した。ただし、石室部の奥半には石室としては不自然な円礫の集積があり、そこから人骨、古銭（寛永通宝）の出土があった。この礫の集積はB地区で多数確認された近世の墓址と同じ遺構が、本古墳石室の埋土中に存在していたと推定されるものである（第3章第3節参照）。

開口部南の東西に広がる小礫のベルトは、最終的には浅い溝状となり、石室乃至開口部両側の石積みの石材だったと思われる扁平楕円の河原石が10ヶ程散乱して一帯から多量の遺物出土をみた。さらにこの部分の東端には約 2×1 mの楕円形を呈す浅い土塹があり、その内部からも遺物の出土があった。

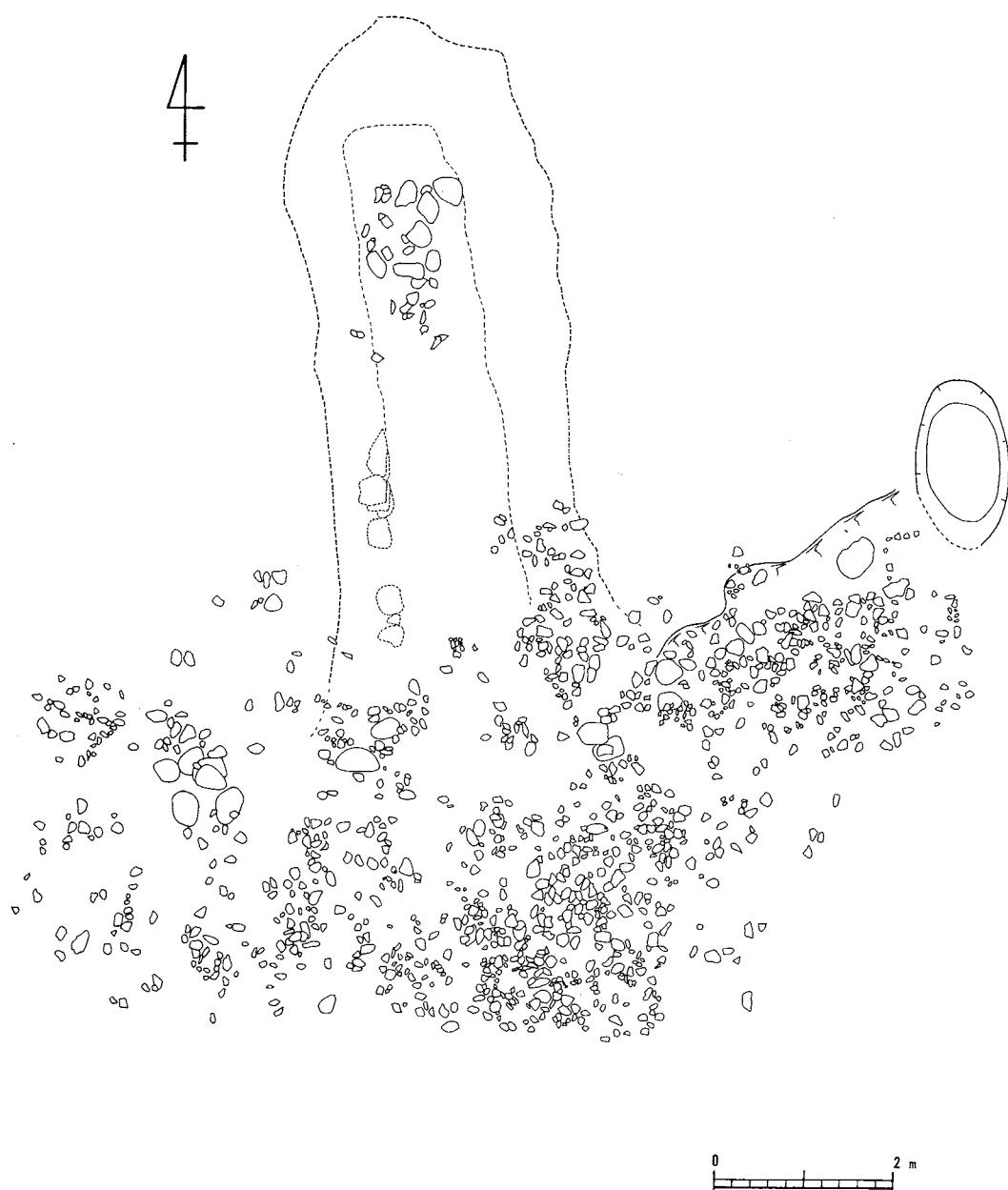
遺構（第16～18図） 本址は、破壊された石室跡（たぶん横穴式石室）と開口部南に東西に広がる浅い溝状部分及びその東端に存する浅い土塹よりなる古墳跡である。

石室部は前述の様に8ヶの扁平な石を残すのみであったが、1号墳同様、扁平楕円の河原石を平らに積み上げて構築されていたものと考えられ、推定による内法は短辺 $1.2 \sim 1.4$ m、長辺 6.5 m内外で無袖長方形の平面形をもつものだったと思われる。中心線はN—8°—Wくらいをさす。石室床面は地山を堅めただけのものだが、開口部付近にはその外側から続いて小礫が多量にあった。

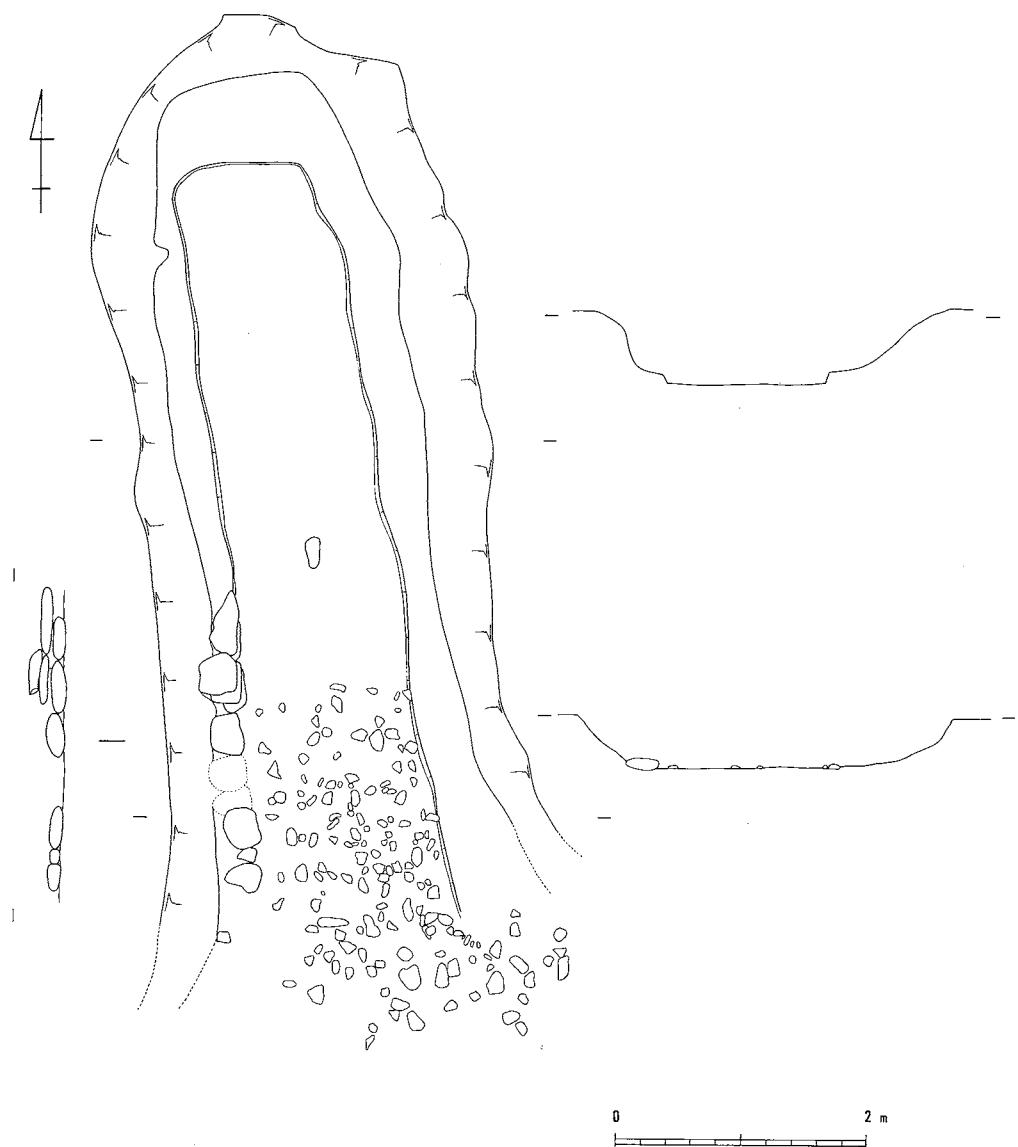
石室開口部南の東西に広がる浅い溝状部分は、若干弧状に石室を取りまく様にも見え、1号墳で検出されたものと同様、周溝の一種と考えることができる。しかし形態はより不明瞭で浅く、大量の小礫が一面に散布していた。この小礫は古墳本来のものか、後世の攪乱乃至は礫の多い土層なのか判然としなかった。

溝状部分の東端に検出された土塹は、南限が明確ではないが、ほぼ南北方向 2 m、東西 1 mの長楕円の平面形をもち、最深部で 10 cm程である。昭和28年の開田の際にできた攪乱との見方もあったが、内部から出土した土器にそれら自体のみのまとまりがあり、本古墳になんらかの形で付随する遺構であったと考えている。

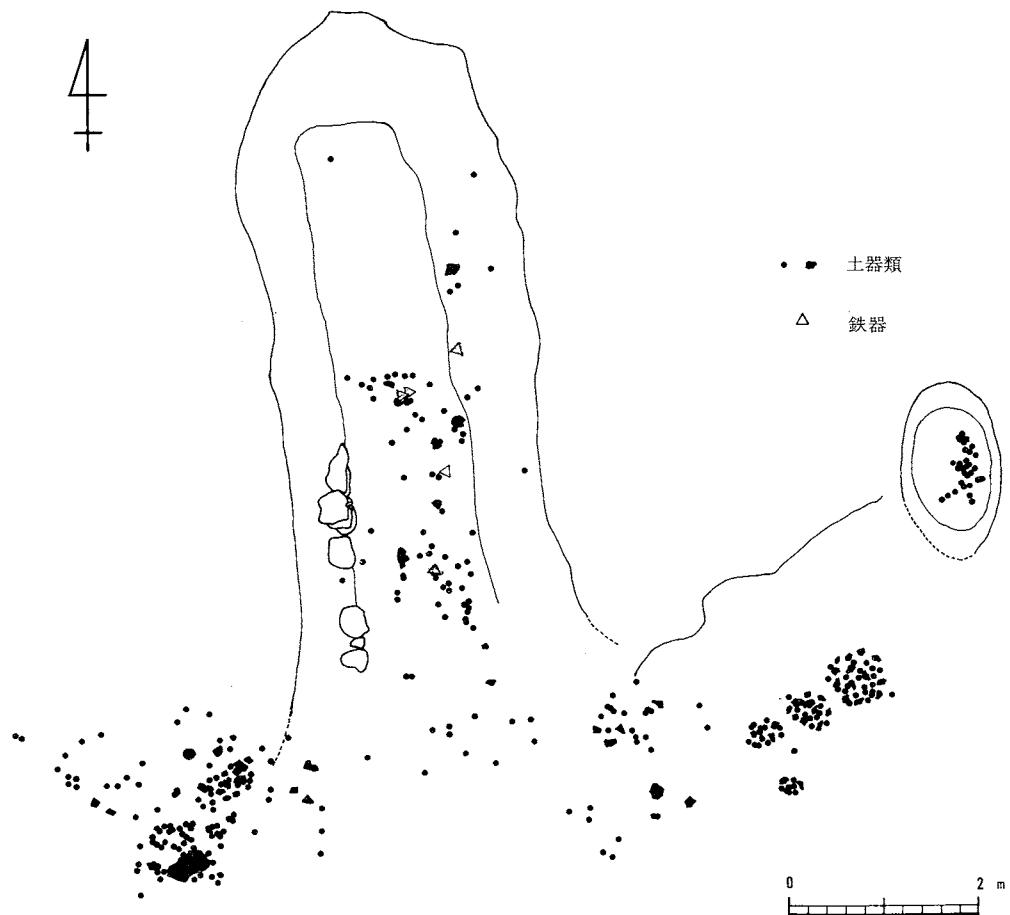
遺物（第19～25図、第6表） 本古墳跡及び東端土塹より出土した遺物は、土器・鉄器がある。土器は、詳細は観察表に譲るが、須恵器と土師器に大別され、須恵器が殆どである。器種として、有台・無台の壺身、蓋、高壺、長頸壺、耳付短頸壺、甕等があり、組成は1号墳に類似するが、量自体は多い。ただし出土状態は破片が多く、開田やその後の耕作の影響をうけて、同一個体がかなり離れて存しており、出土状態によるセットの把握を通じた分析は全く不可能だった。ところで、土器に関して特記すべきこととして、昭和28年開田の際出土した土器片の大半が、今回出土した土



第16図 2号墳礫・土塚検出状況平面図(1:80)



第17図 2号墳平面・側面・断面図 (1:60)

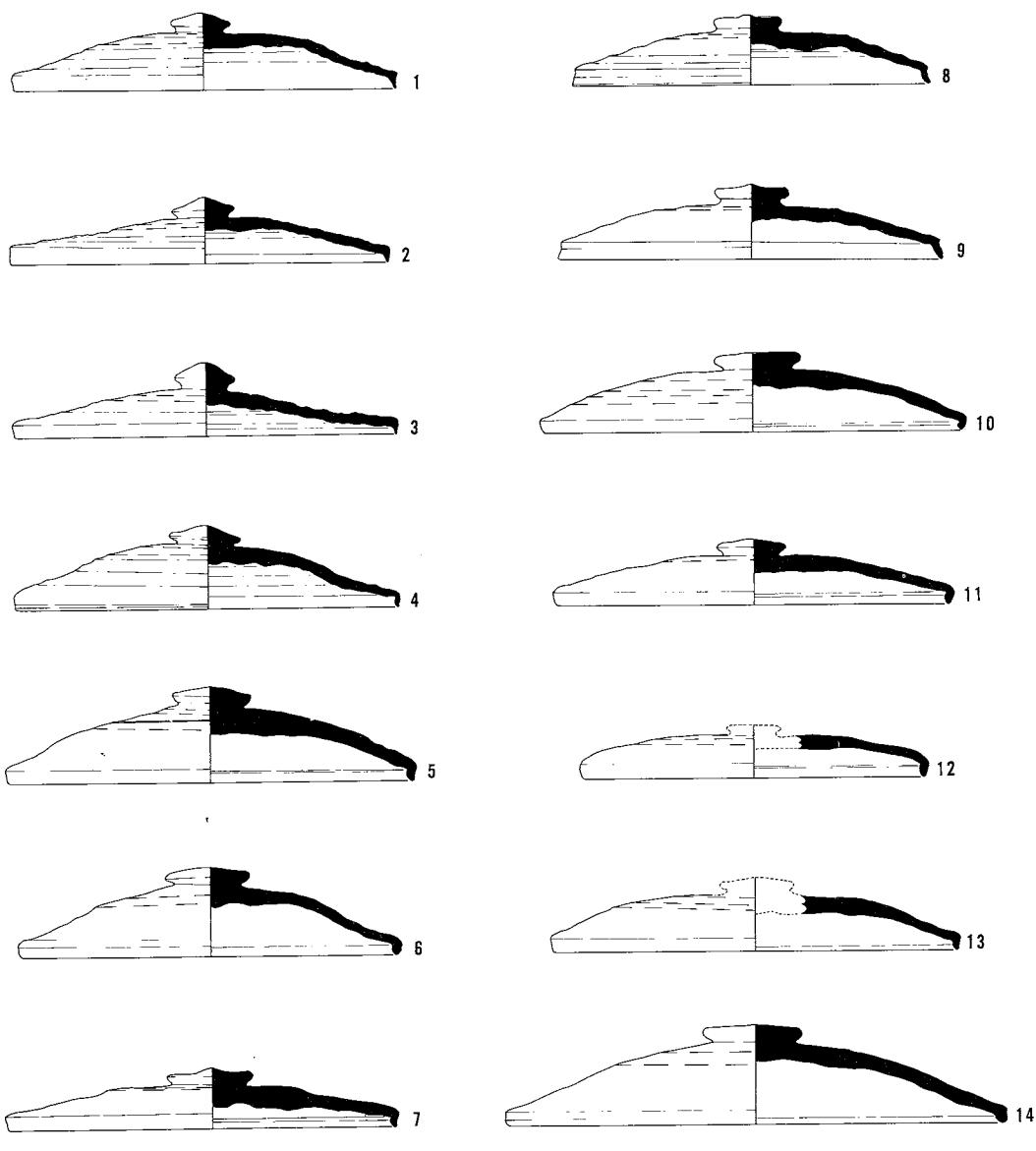


第18図 2号墳・土塙遺物出土地点平面図

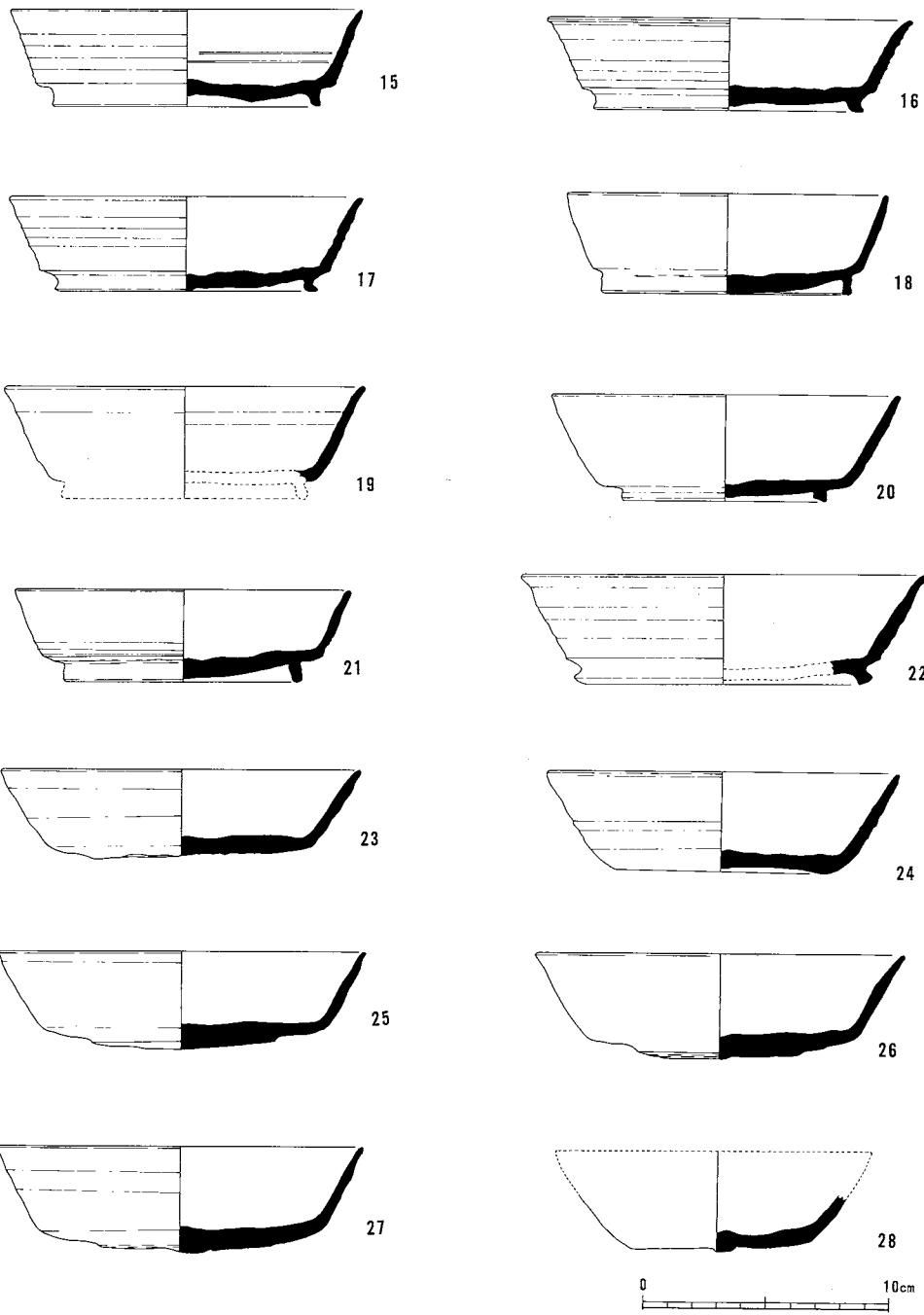
器と接合したことがあげられる。開田時出土の土器は、「新村秋葉原積石塚」出土品として松本市立博物館に保管されていたのだが、30年ぶりの接合は、本古墳と開田時に発見された遺構が同一のものであることを実証した。今回及び以前に出土した土器群は、その所産年代が8世紀代に求められるものと考えている。

鉄器では、鉄鎌5、扁平環状の鉄器1が出土している。鉄鎌はいづれも石室内の床上或いはそれに近いレベルで発見され、特に2と3は1ヶ所に重なりあって遺存していた。形態は、みな平根で、4は腸繩である。7の扁平環状の鉄器は何であるか不明であり、開口部南の小礫のかなり上層から出土したもので、攪乱による近代のものの混入かもしれない。

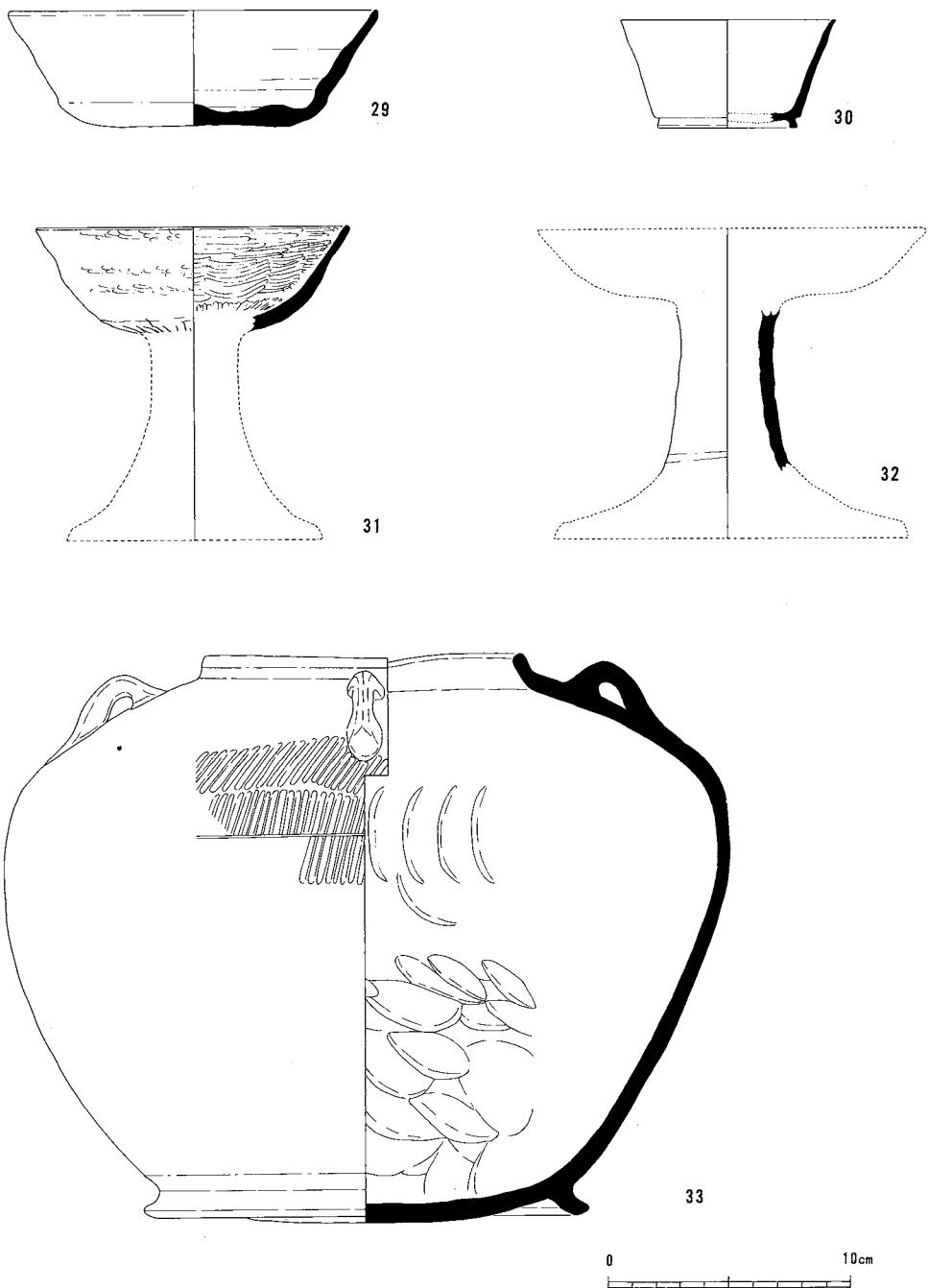
(直井雅尚)



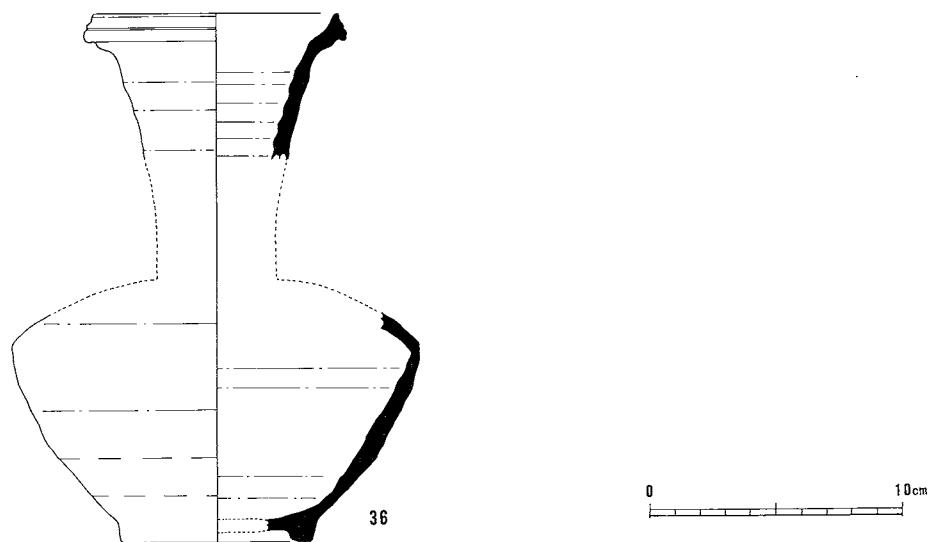
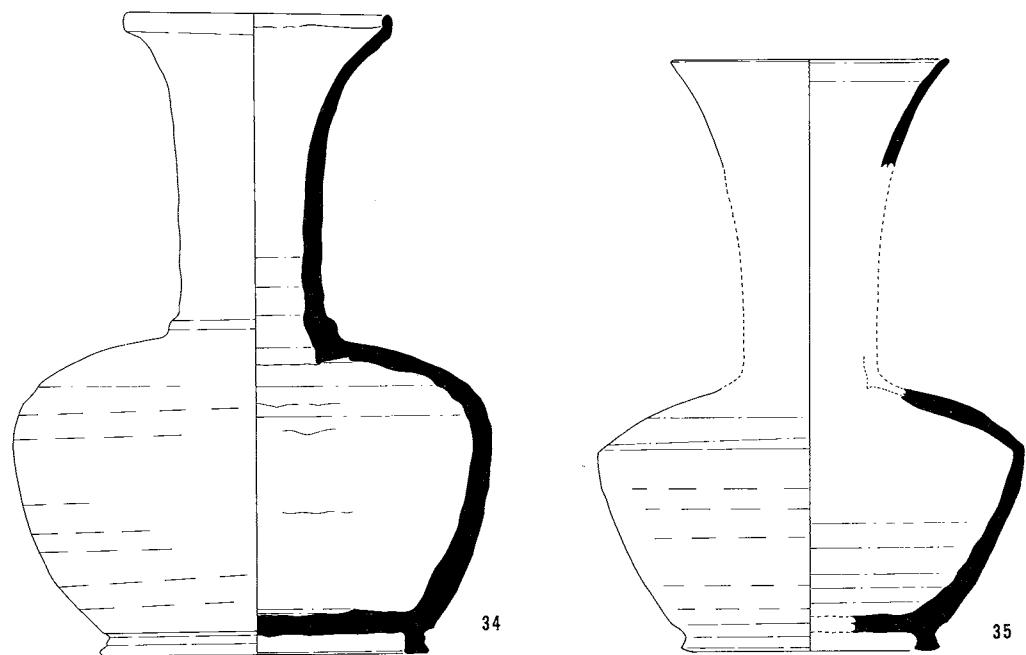
第19図 2号墳出土土器実測図(1) (縮尺1/3)



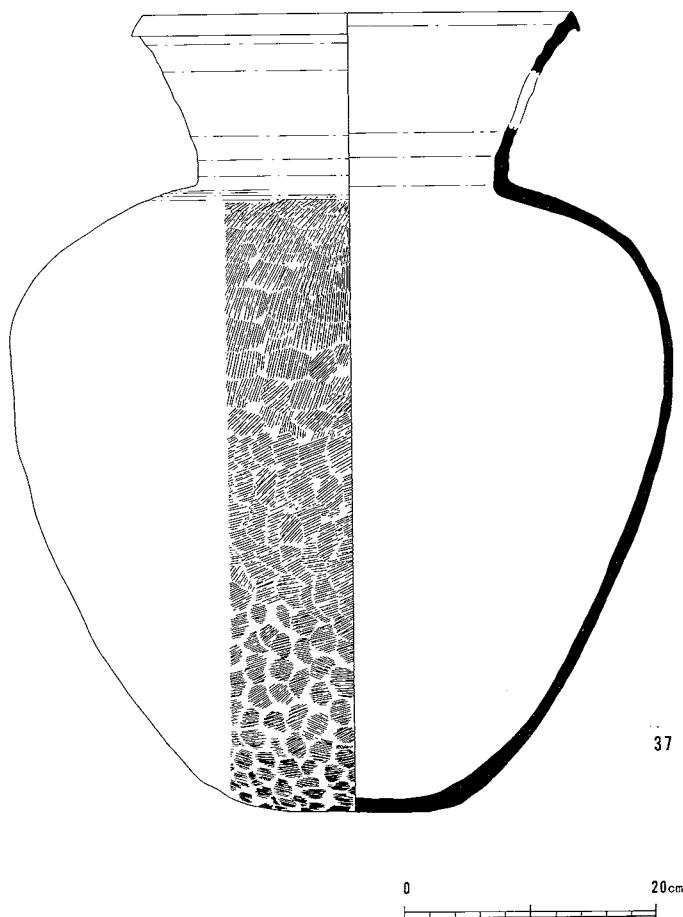
第20図 2号墳出土土器実測図(2) (縮尺1/3)



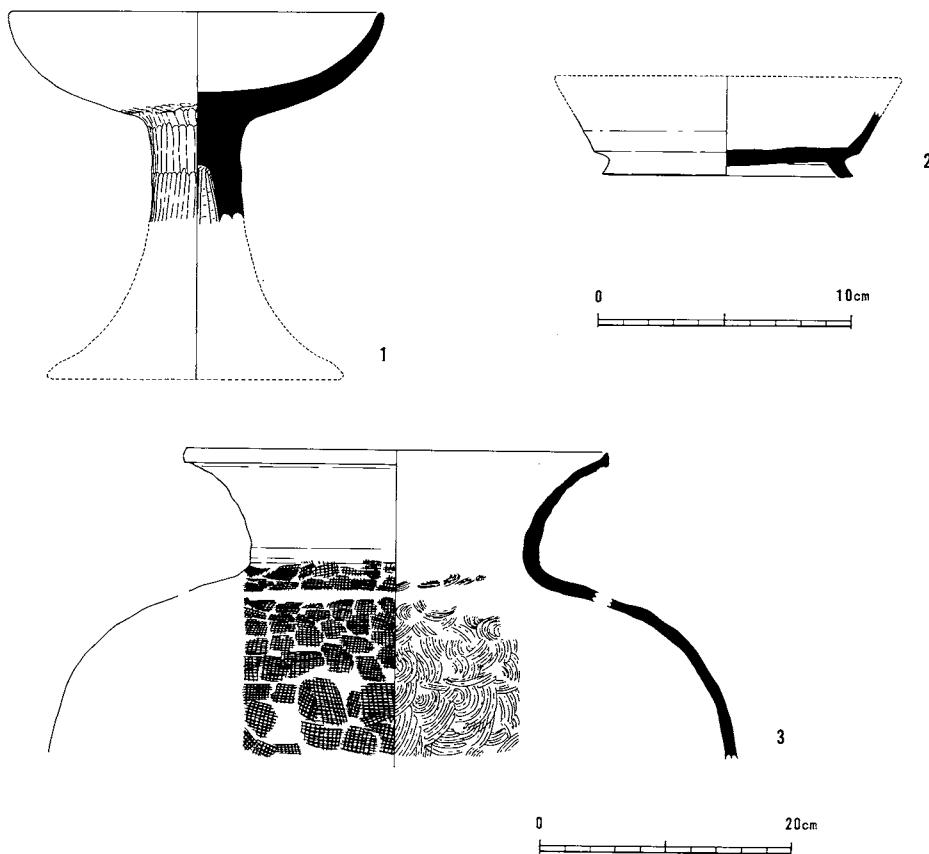
第21図 2号墳出土土器実測図(3) (縮尺1/3)



第22図 2号墳出土土器実測図(4)



第23図 2号墳出土土器実測図(5)

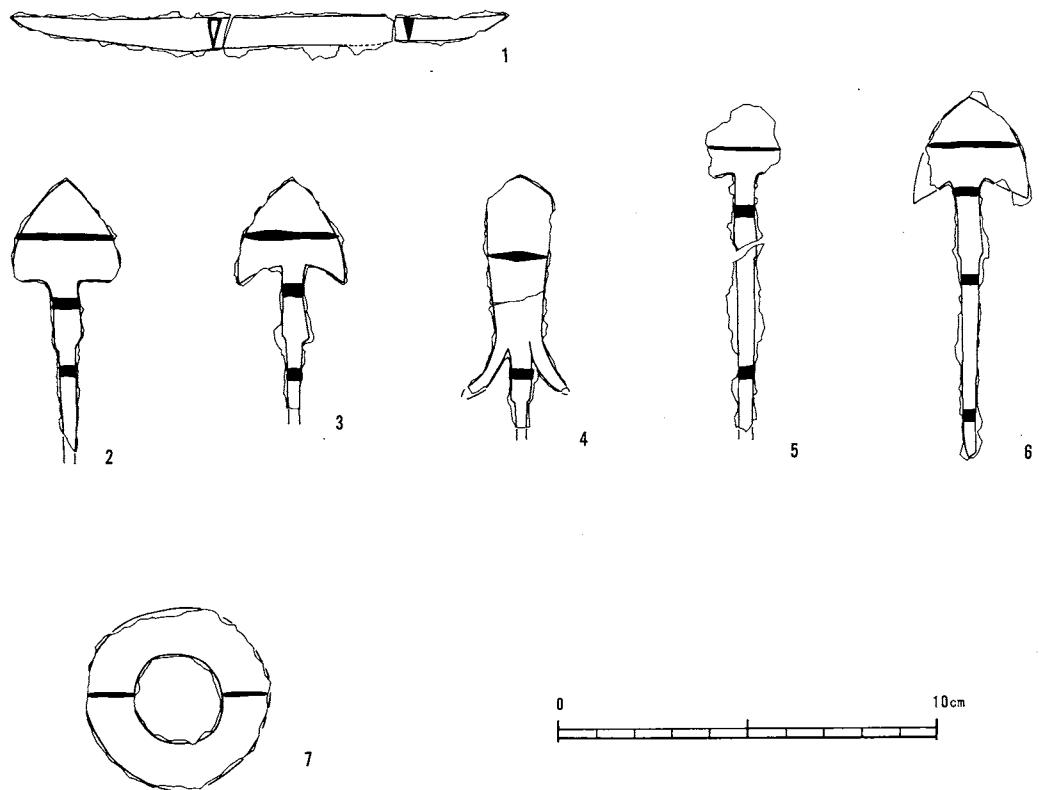


第24図 2号墳出土土器実測図

3. 3号墳

調査経過 本址は、道を狭んでB地区より50m南方の畠中から、工事中に発見された。このため墳丘、天井石の有無は確認されていない。2.2m×0.7mという小型の上、奥壁の石の大きさからみて、高さもさほどなかったものと思われ、はたして横穴式石室として、ひいては古墳として捉えてよいものかどうか問題がある。ここでは一応、記述の都合上、3号墳と呼び、その名称については第4章第1節で検討する。

構造 (第26図) 本址は、扁平な河原石を1列2段に積んだ側壁及び同様な石一枚を立てた奥壁よりなる、天井石を欠いた横穴式石室状の石組み構造である。長辺2.2m、短辺0.5~0.7mの長方形を呈し、中心線はほぼN-10°-Wをさす。両側壁は、工事等の影響により少々動いている。また2段以上の石積みがあったという推定は必ずしも不可能ではないが、周辺から類似する石材は発見されなかった。内部底面は平坦、地山そのもので、遺物等は全く検出されなかった。



第25図 1・2号墳出土鉄器実測図(1:1号墳, 2~7:2号墳)(1:2)

遺物 (第26図, 第7表) 本址からの出土遺物は、本址発見の際開口部東側から出土した須恵器の壊2点と、長頸壺の肩部破片のみである。また、遺物として扱ってよいか判断しかねるが、河原石を割りはがした平らで10cm位の大きさの剝片が数枚、石室状の内部に存していた。

4. 4号墳

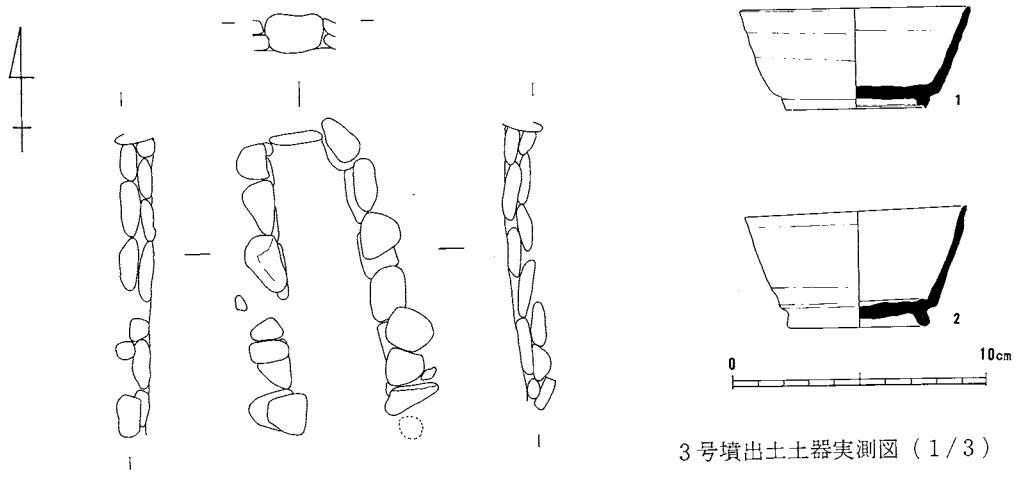
2号墳の150m程南、第6図で破線で囲った付近に存在したと推定している古墳跡で、発掘乃至は工事立ち合いで、市教委が確認したものではない。推定の根拠は、推定地あたりから1、2号墳同様の石材が出ていたのを見た地元の方が居たこと、市教委が現場を歩いたところ、工事の都合で周辺にまとめられてはいたが、石室の側壁材らしい扁平楕円の河原石や長さ1.5mを超える天井石らしい石材を確認したこと、の2点である。さらにいうなら後者の前提として、遺跡の周辺は礫の多い土層ではあるが径30~40cmもある扁平河原石や巨石が自然の営力により、そう各所々に残る堆積はしていない。従ってその様な石は人間の行為の結果と考えられ、本遺跡1、2号墳や安塚の8基の古墳の例から古墳である可能性が非常に高いことが挙げられるのである。とにかく、本址のかつて古墳

第6表 2号墳出土土器観察表

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
19 1 43	須恵器 蓋	— 15.4 3.2	灰 灰～灰白 〃	口5%	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面半面に濃緑の自然釉
19 2 43	須恵器 蓋	— 15.2 2.7	灰 白 灰～暗灰 灰～灰白	口5%	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	焼成時の歪みが大きい 外面半面に濃緑の自然釉
19 3 43	須恵器 蓋	— 15.5 3.0	灰～灰白 灰～暗灰 灰～灰白	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面半分に濃緑光沢の 自然釉
19 4 43	須恵器 蓋	— 15.4 3.4	灰白～暗灰 灰～暗灰 灰～灰白	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面半分に灰白から濃 緑の自然釉
19 5 43	須恵器 蓋	— 16.2 3.9	灰白～暗灰 灰～暗灰 暗 灰	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面、黄緑灰の斑状自 然釉でザラつく
19 6 43	須恵器 蓋	— 15.1 3.6	灰～灰白 灰～暗灰 灰 白	ほぼ完	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面殆どに綠灰～灰白 の自然釉
19 7 44	須恵器 蓋	— 15.7 2.5	灰～暗灰 薄 青 灰 〃	口2/3	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
19 8 44	須恵器 蓋	— 14.4 2.8	青灰～暗青灰 〃 青灰～灰褐	口5%	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
19 9 44	須恵器 蓋	— 15.4 3.0	青 灰 青灰～暗青灰 赤 灰	体5%	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面に灰白の自然釉う すぐとぶ
19 10 44	須恵器 蓋	— 16.8 3.2	暗 灰 〃 灰～灰白	口1/3	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	
19 11 44	須恵器 蓋	— 15.8 2.7	灰 灰～暗灰 暗 灰	口1/3	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	内外外周部に黄緑の自 然釉
19 12 44	須恵器 蓋	— 13.7 暗青灰～灰褐	暗 青 灰 〃 つまみ欠	口1/2 体1/2 つまみ欠	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	外面が斑状に黄褐色の 自然釉でザラつく
19 13 44	須恵器 蓋	— 16.3 〃	灰～灰白 〃 〃	口9/10 つまみ欠	ロクロナデ・ナデ・外面回転ヘラ ケズリ	
19 14 44	須恵器 蓋	— 20.0 4.1	灰 〃 灰～灰白	口1/2	ロクロナデ・外面回転ヘラケズリ	刻印状の記号

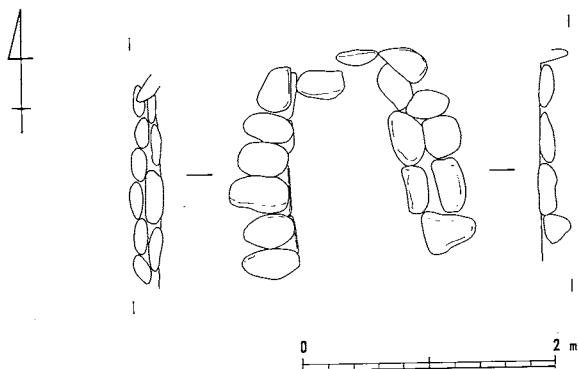
図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
20 15 44	須恵器 坏	14.2 10.8 4.0	灰~暗灰 " " " 灰~灰白	口 $\frac{1}{4}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
20 16 44	須恵器 坏	14.6 10.8 3.8	灰 灰 灰~灰白	口 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
20 17 44	須恵器 坏	14.2 10.2 3.9	灰 灰 灰~灰白	口 $\frac{1}{6}$ 底完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ, 切り離しは回転ヘラ 切り?	
20 18 44	須恵器 坏	12.8 10.1 4.1	灰~暗灰 " " " 灰~灰白	口 $\frac{1}{6}$ $\frac{1}{4}$ 底 $\frac{1}{4}$ $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面静止 ヘラケズリ	
20 19	須恵器 坏	14.5	薄青 灰 灰 白 "	口 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ	内面に、淡緑斑状の自 然釉
20 20 44	須恵器 坏	14.0 8.3 4.4	青 灰 " " " 灰 褐	口 $\frac{1}{2}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
20 21 44	須恵器 坏	13.6 9.5 3.8	青灰~暗青灰 " " " 赤 灰	ほぼ完	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ, 回転糸切り痕底面中 央に残る	
20 22 45	須恵器 坏	16.3 11.2 4.5	茶~暗茶褐 " " " 灰白~暗灰白	口 $\frac{1}{4}$ 底欠	ロクロナデ・ツケ高台	外面光沢
20 23 45	須恵器 坏	14.5 (7.4) 3.6	灰~暗灰 " " " " "	口 $\frac{1}{3}$	ロクロナデ・底面回転ヘラ切りの ちナデ	
20 24 45	須恵器 坏	14.3 8.6 4.1	薄暗青灰 " " " 黒灰~暗灰	ほぼ完	ロクロナデ・底部調整不明・切り はなしは回転ヘラ切りか?	
20 25 45	須恵器 坏	14.9 7.6 4.0	灰~暗灰 " " " 黒灰~暗灰	口 $\frac{1}{6}$ 底完	ロクロナデ・底面回転ヘラ切りの ちナデ	
20 26 45	須恵器 坏	15.0 6.6 4.3	灰~暗灰 " " " 灰~灰白	口 $\frac{1}{8}$ 底完	ロクロナデ・底面回転ヘラ切り	底面にワラのようなも のでこすられた跡あり
20 27 45	須恵器 坏	15.0 7.6 4.4	暗 灰 " " "	ほぼ完	ロクロナデ・底面回転ヘラ切りの ちナデ	
20 28	須恵器 坏	7.4	灰~暗灰 " " "	底完	ロクロナデ・底面回転ヘラ切り	

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口 径 底 径 器 高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備 考
21 29 45	土師器 坏	15.1 (8.6) 4.8	橙灰~黄灰 〃 〃	口 $\frac{3}{4}$	ロクロナデ	器面荒れて、各調整不明
21 30 45	須恵器 坏	8.7 5.6 4.5	薄青灰 〃 〃	口 $\frac{1}{2}$ 底 $\frac{1}{4}$	ロクロナデ・ツケ高台・底面回転 ヘラケズリ	
21 31 45	土師器 高坏	12.8	橙 褐 黒 赤 橙	坏部完 脚欠	ロクロナデ・内面横位ヘラミガキ 外面部分的に横位ヘラミガキ 脚との接合部外面に縦位のヘラのきざみ痕	坏部内面黑色処理
21 32	須恵器 高坏		黒 灰 〃 赤 灰	脚部中 央のみ	ロクロナデ	
21 33 45	須恵器 短頸壺	13.0 17.5 23.6	灰 白 〃 〃	胴部中 央 $\frac{1}{2}$ 欠	ロクロナデ・平行タタキ目・ツケ 高台、底面回転ヘラケズリ	外面全、内面下半灰白 ~緑の釉
22 34 45	須恵器 長頸壺	10.2 12.8 25.5	灰 灰~暗灰 暗灰~灰褐	ほぼ完	ロクロナデ・ナデ・回転ヘラケズ リ・オサエ・ツケ高台	上方を向いた部分に自然 釉、釉は厚い所は濃緑、 他は灰白内部底面にも濃 緑の自然釉
22 35 46	須恵器 長頸壺	10.8 9.2 〃	灰 白 〃 〃	頸部中 央欠	ロクロナデ・ツケ高台・回転ヘラ ケズリ	外面上向き部分に濃緑 光沢の釉、所々にコバ ルトブルーの発色
22 36 46	須恵器 長頸壺	9.7 7.4 暗 灰	灰 〃 接合部 欠	頸部・ 接合部 欠	ロクロナデ・ツケ高台・回転ヘラ ケズリ	上向き部分に淡緑の自 然釉
23 37 46	須恵器 甕	30.1 (12.3) (63.8)	灰~青灰 〃 灰~灰褐	頸部一 部欠	ロクロナデ・平行タタキ目	一部に灰白で斑状の自 然釉あり
24 1 45	土師器 高坏	14.7	黄 橙 褐 黒 暗 黄 褐	坏部・ 脚部上 半のみ	ヘラミガキ・脚部内ヘラケズリ・ ナデ	坏部内面黑色処理
24 2	須恵器 坏	10.0	青灰~暗黄灰 〃 暗 灰	底部完	ロクロナデ・底部回転ヘラケズリ	
24 3	須恵器 甕	33.5	灰白~灰 〃 灰 白	口 $\frac{1}{4}$ 胴 $\frac{1}{6}$	ロクロナデ・タタキ目・内面青海 波文	胎土は厚い所で中央部 黒色



3号墳出土土器実測図（1/3）

3号墳実測図（1:60）



5号墳実測図（1:60）

第26図 3・5号墳平面・側面図及び3号墳出土土器実測図

第7表 3号墳出土土器観察表

図番号 土器番号 図版番号	種別 器種	口径 底径 器高	外面色調 内面色調 胎土色調	残存度	成形・調整の特徴	備考
26 1 46	須恵器 壺	9.0 5.5 4.0	淡青灰 黒灰 赤~赤灰	完形	ロクロナデ・底面回転ヘラケズリ ツケ高台、底面中央は回転糸切り 痕をのこす	内面に灰白から橙灰、 斑点状の自然釉が多量 にある
26 2 46	須恵器 壺	8.7 5.4 4.7	青灰 〃 青灰~灰褐	2/3	ロクロナデ・ツケ高台	

が存在していたという推定後の扱いについては、調査団内の討議により、空番とはなるが4号墳と命名した。各古墳個々の次元とは別に、秋葉原及び、安塚の古墳群を面的に把握する場合、その位置とともに名称も必要になるとえたからである。

以上の理由により、本古墳は遺構、遺物ともに不明であり、すべては推定の域を出ない。

5. 5号墳 (第26図)

調査経過 本址は2号墳の南290m、4号墳推定地の南140mあたりの水田下から工事中に発見された。小型の横穴式石室状を呈していて、3号墳と同様の理由により、一応5号墳と呼称する。発見時の状態は3号墳と同じである。内部掘り下げの後、開口部前をかなり広く遺構検出を試みたが、周溝その他の施設は全く確認できなかった。

遺構 本址は扁平な河原石を1列2段積みにした東西の側壁と、同様な石を2枚立てて並べた奥壁よりなる、天井石を欠く小型の横穴式石室状の石組みである。平面形は、長辺1.3m、短辺0.6m~1.0mの僅かに南へ向かって開く長方形を呈し、中心線はほぼN-7°-Wをさす。東側壁の2段目の石はズレており、奥壁も向かって左側のものが前方へ倒れかかっている。いずれも工事の影響によるもので本来の姿ではないと考えている。内部底面は平坦で、何らの施設、遺物も発見できなかった。

遺物 石室状部分の内部及びその周辺からも全く発見されなかった。

(直井雅尚)

第2節 土座敷址

つい最近まで農家の入口から入ると広い土間があった。この土間はたたき床と呼ばれる工法により下からの湿気を防ぎ、上面は平滑にして、穀すりなどの農作業もすれば、納屋の代用として穀物などを積み込むなど農家にとって重要な空間であった。この土間を堅くつき固めるには粘土1・砂1・石灰1の割合で混ぜ合せ水を加えて適当な固さの板状として地面に貼り付け、そのあとを木榼でつき固めて平滑の床面とする。これを三和土（たたき）という。この様なたたき床が家中に広がっていて、その上に掘立萱葺の上屋が建っている家を、板のはってない土間の座敷であるところから「土座敷」という。土座敷の呼称については、考察の項で述べる史料らによるものとする。

遺構（第28・29図、付図1）

土座敷址は南北11.3m、東西5.9mの長方形である。西側の大部分は近接して個人墓地（専称寺所所有地）があって、発掘することは困難であった。この土座敷の床面は、まず地面を平らにした上で、その上に粘土質の土を練り板状として貼りつけ、その上から木榼でつき固めたもので、たたきの床面といつても前記した粘土・砂・石灰の3分の1量づつの配合によるものでなく、附近にあった粘り気の強い土壌をもって代用している。この周辺には粘土の产出が沖積地帯なのでなく、近くにある手頃の土をもって利用したものであろう。

床面の厚さは5～8cmで、下の地盤が西側が少し高いので東側は比較的厚く、地盤より10cm位高くなっている。柱穴列より外側（軒の部分）は内側（床面）より3cm位低く、軒先に落ちた雨水が家中へ入らない様に留意している。

柱穴は、東側にあっては軒先の貼り土の端から50～60cm内側に入った所に直径30cmから40cm、深さ20cm位であるが砂利のため柱穴が埋まっていて、建築当時の深さは判定しない。

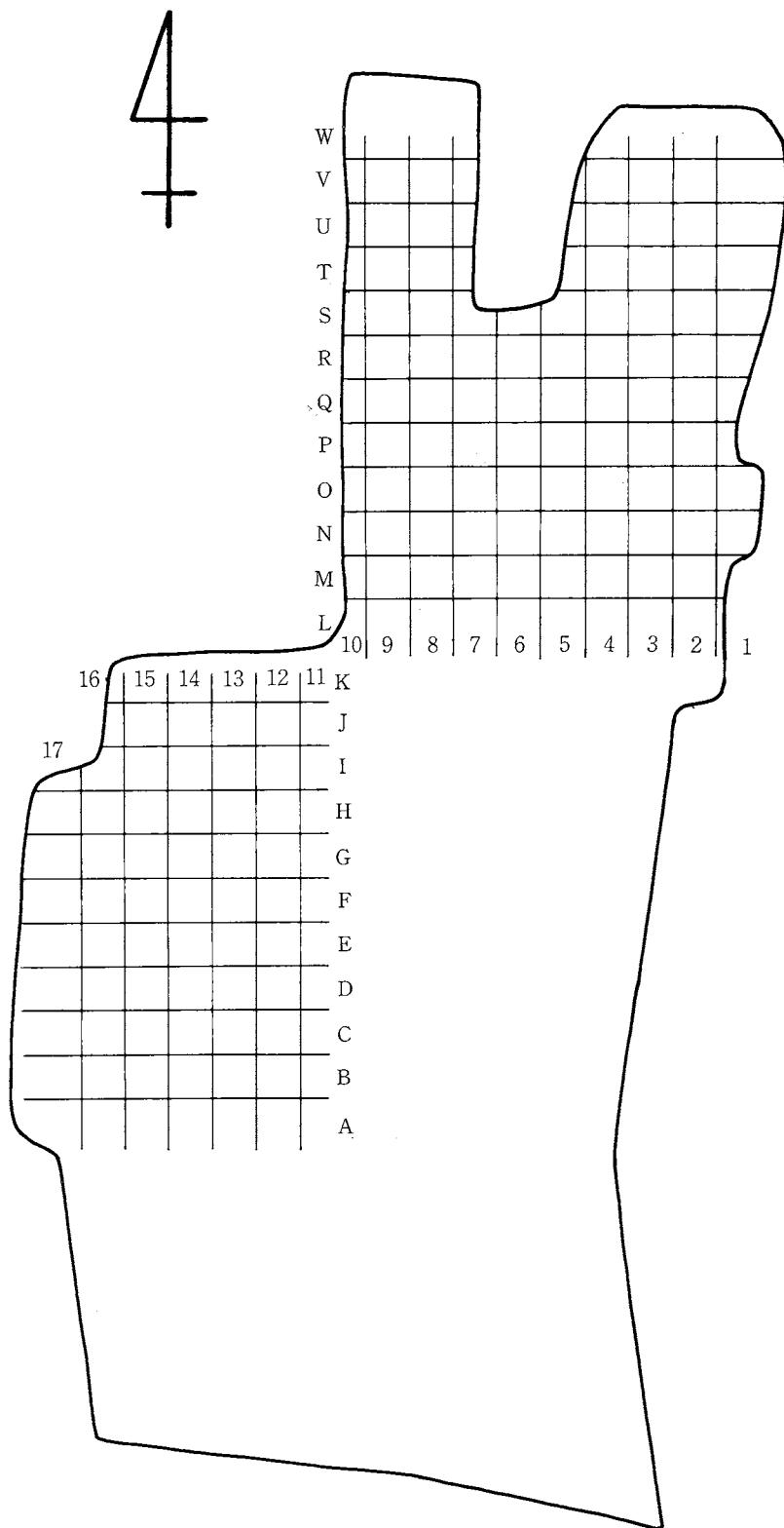
柱穴と柱穴との間隔は均一的でなく165～210cm位で、その数は5箇で南側から2つ目の柱穴は極めて浅い。南側の柱穴は南東隅と合せて3箇で間隔は180cmである。

炉址は南から440cm、東から230cm入ったところにあって、東西90cm、南北90cmの石囲いのもので、床面より7～8cm位高く、中には灰や炭の細片がいっぱいいつまつて発見されている。炉より70cm離れた南側に50cm×40cm上面平らな石が置かれていて、何か作業台か、あるいは勝手用具などを置いた台と推定する。

床面には、特に中央より西寄には木炭片が散乱していて火災によって焼失した家屋と考えられる。

（倉科明正）

遺物（第30～42図、第8・9・10表）　土座敷およびその周辺よりの出土遺物は数片の須恵器破



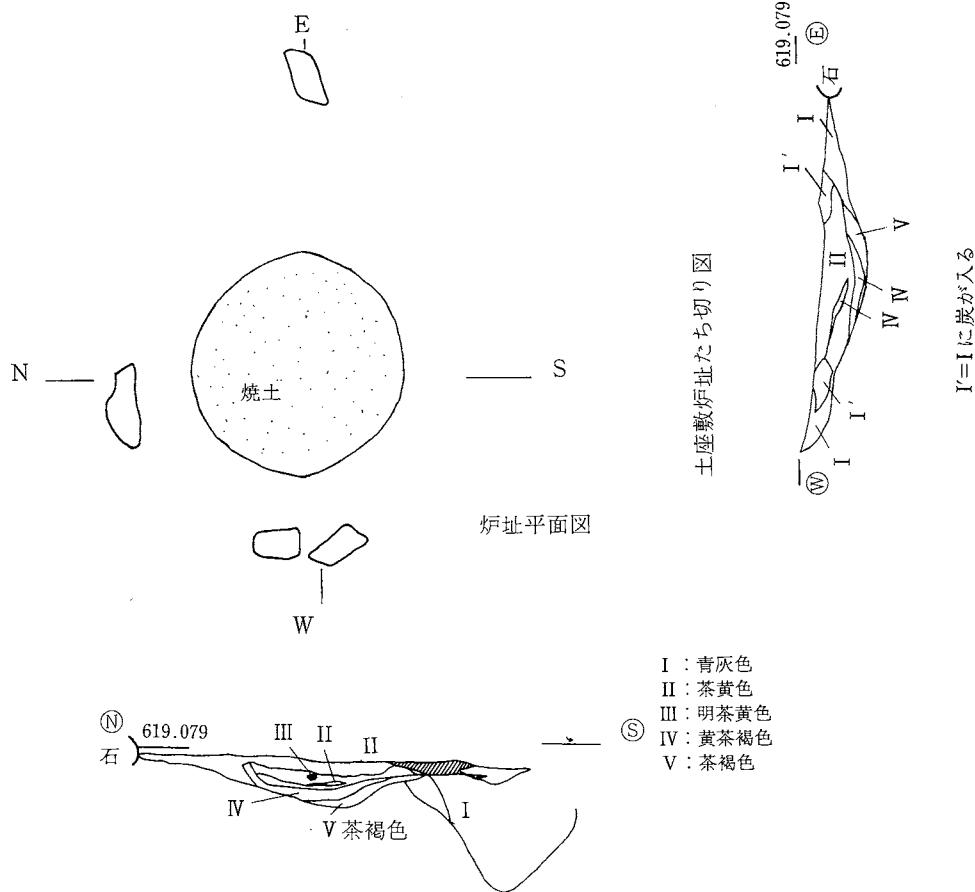
第27図 B 地区グリット設定図(1:500)

— 61 —





第28図 土座敷址平面図

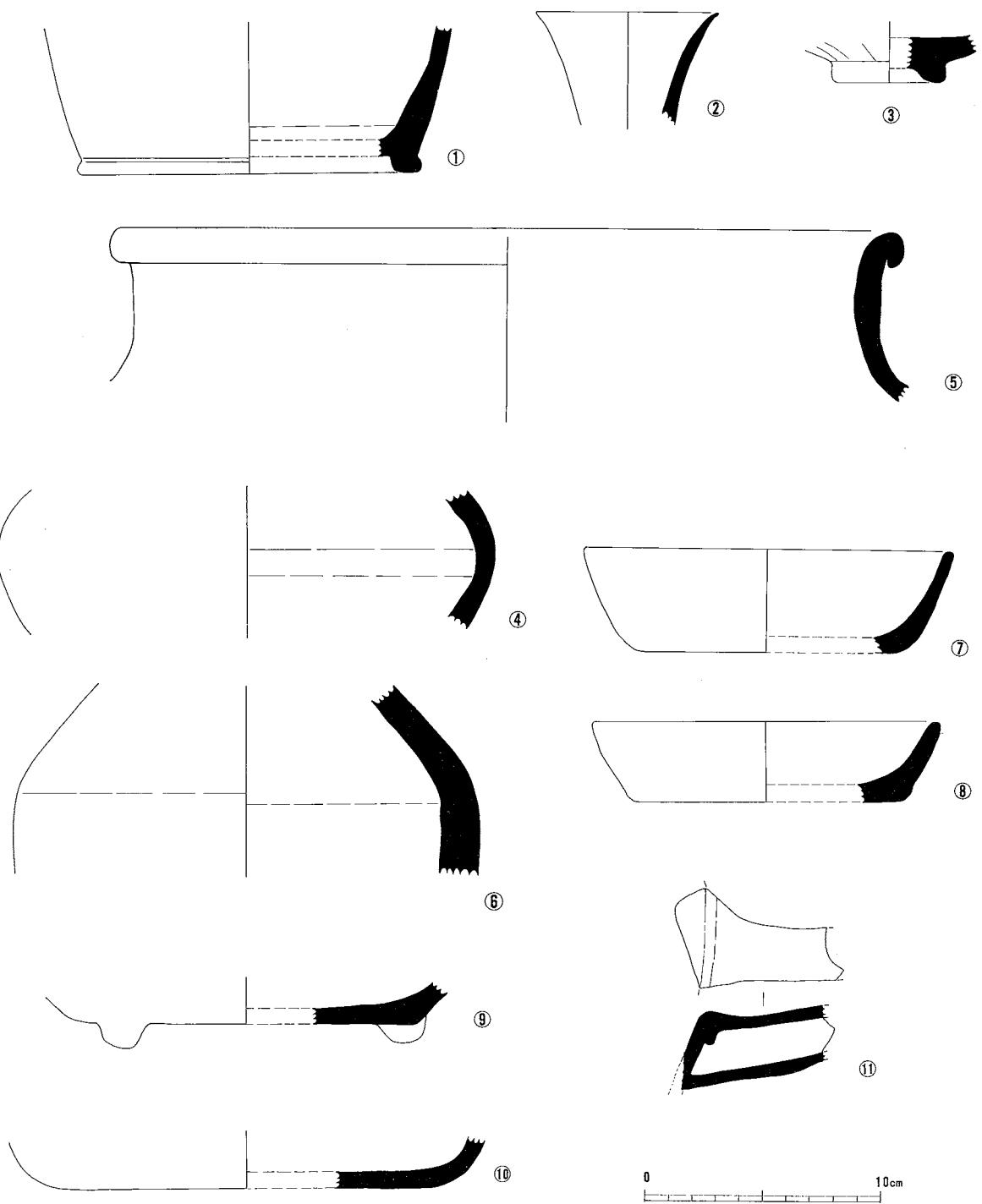


第29図 土座敷炉址平面・断面図

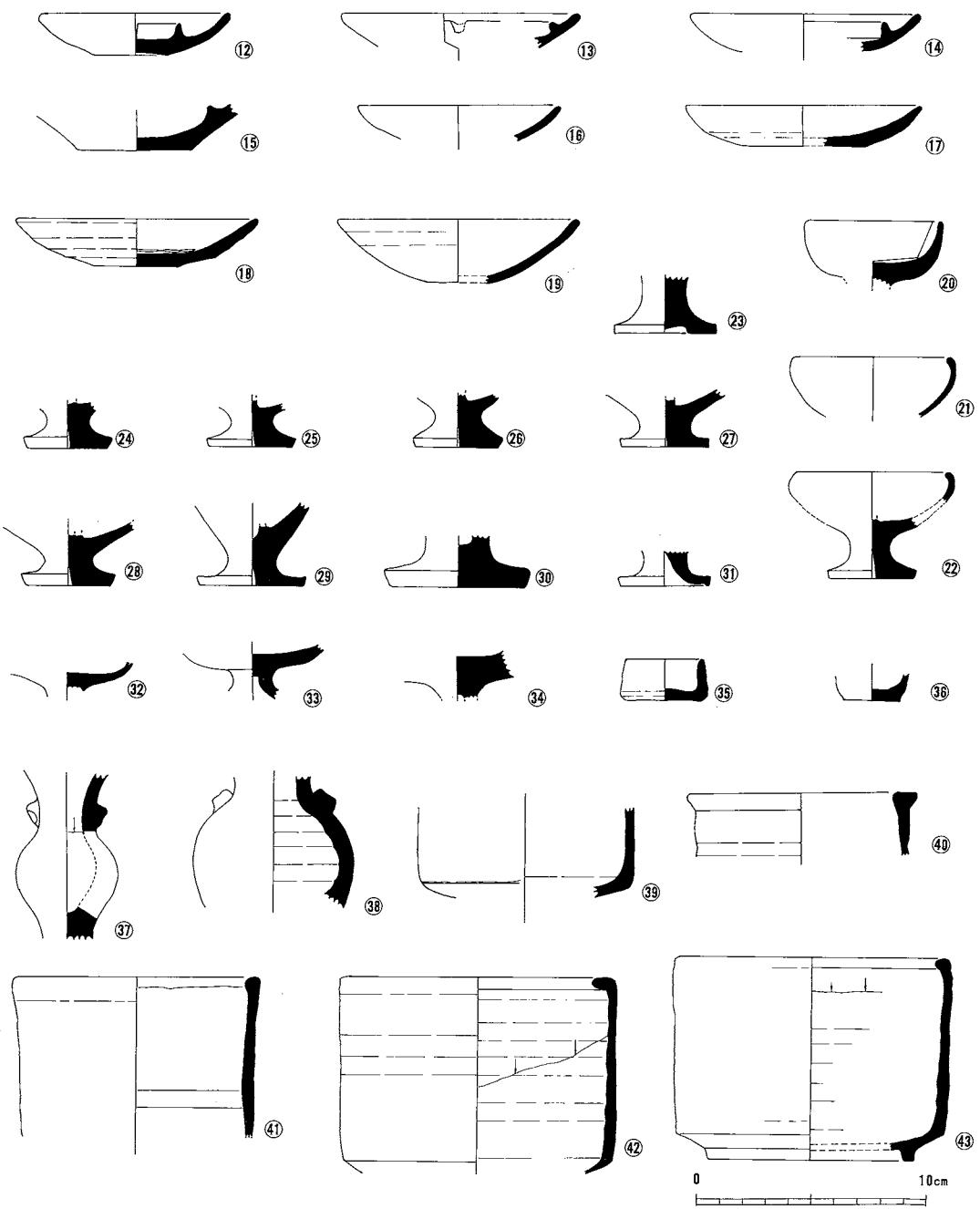
片と、10片あまりの中世陶磁器破片の他は近世、近代の陶磁器ばかりである。全体をみると小破片が多く、接合できたものは概ね2割内外で完形のものは僅かに1点である。図示したものは、中世までのものはつとめて取り上げたが、近世以降の遺物については、主なものを取りあげ、他は割愛した。他に石器については出土したもの全てを図示し、金属器についても細片以外は図示した。

遺物の出土範囲をみると、全体に広がって散乱しているが、特に土座敷の東7mあまりの位置に、南北に数ヶ所、ごみ捨て場的に陶磁器片が散らばっていた。

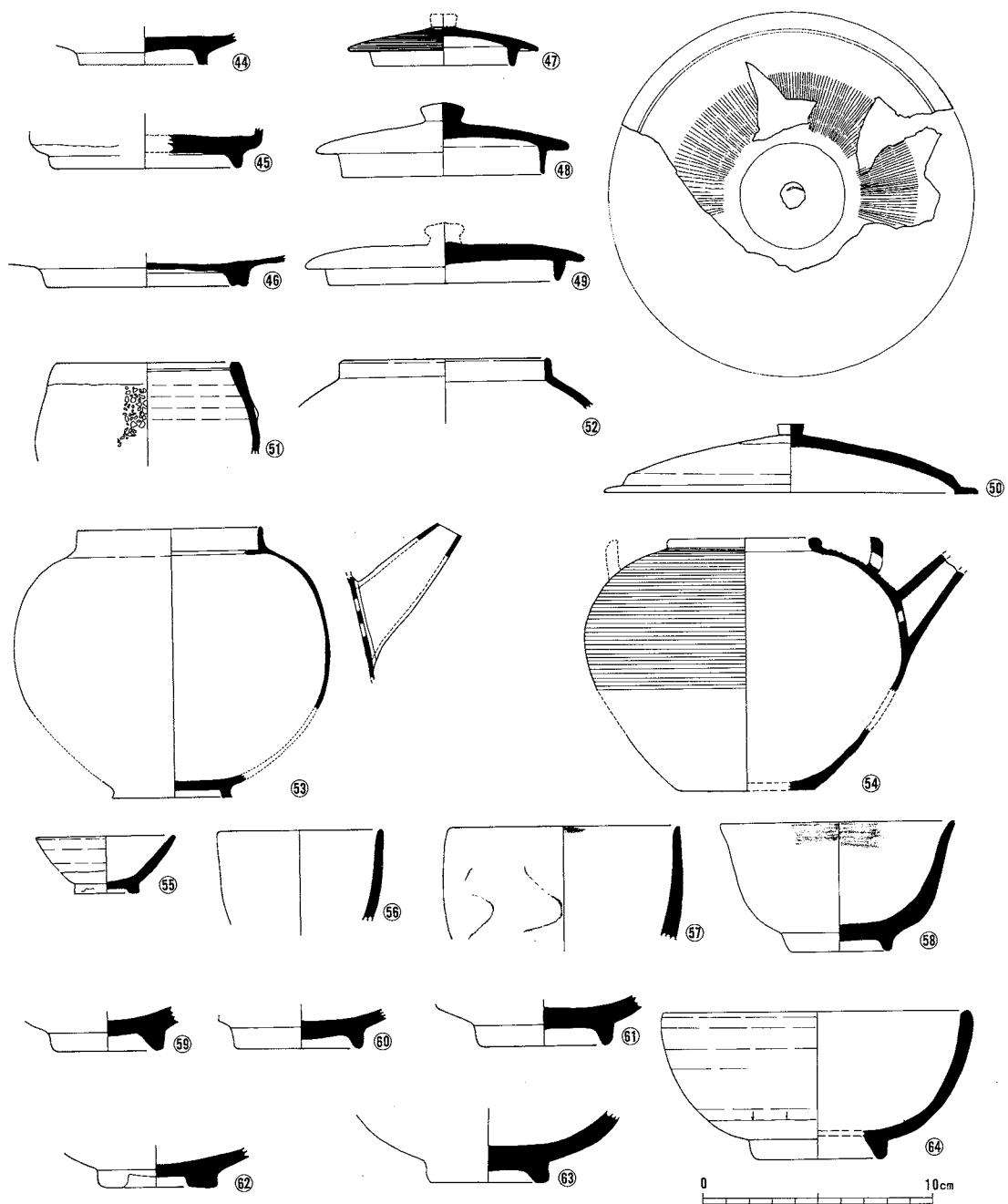
土座敷の床面密着の陶磁器片等は50片で、御深井釉、鉄釉の灯明皿（第31図. 12, 14）薄緑釉の香炉（第31図. 39）鉄釉の蓋（第32図. 47）緑釉の土瓶（第32図. 53）、黄茶釉の茶碗（第32図. 64）鉄釉の徳利（第34図. 83）染付茶碗（第37・38図. 97, 104, 112）、砥石（第40図・第9表）古銭、刀



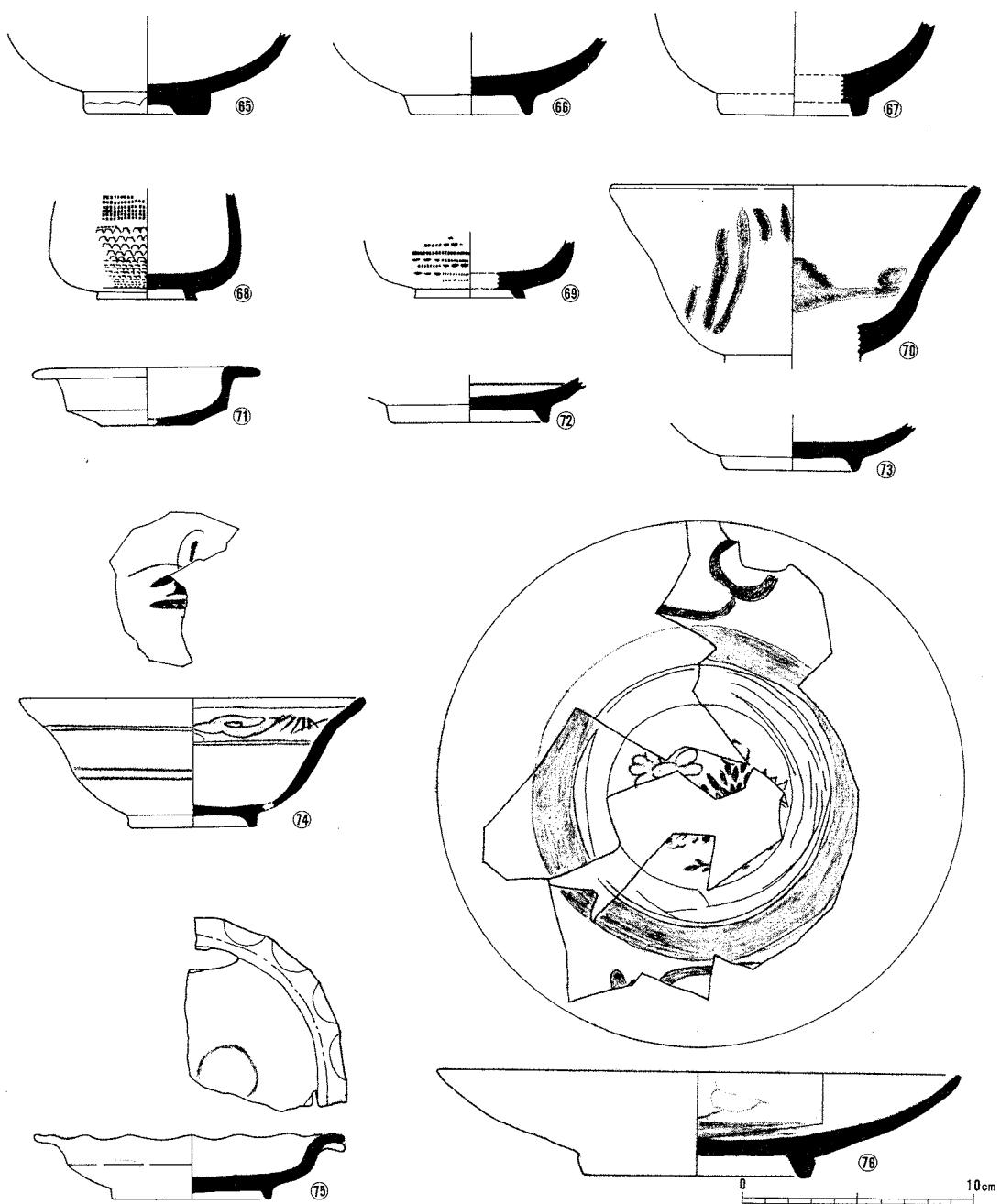
第30図 土座敷址出土土器実測図(1)



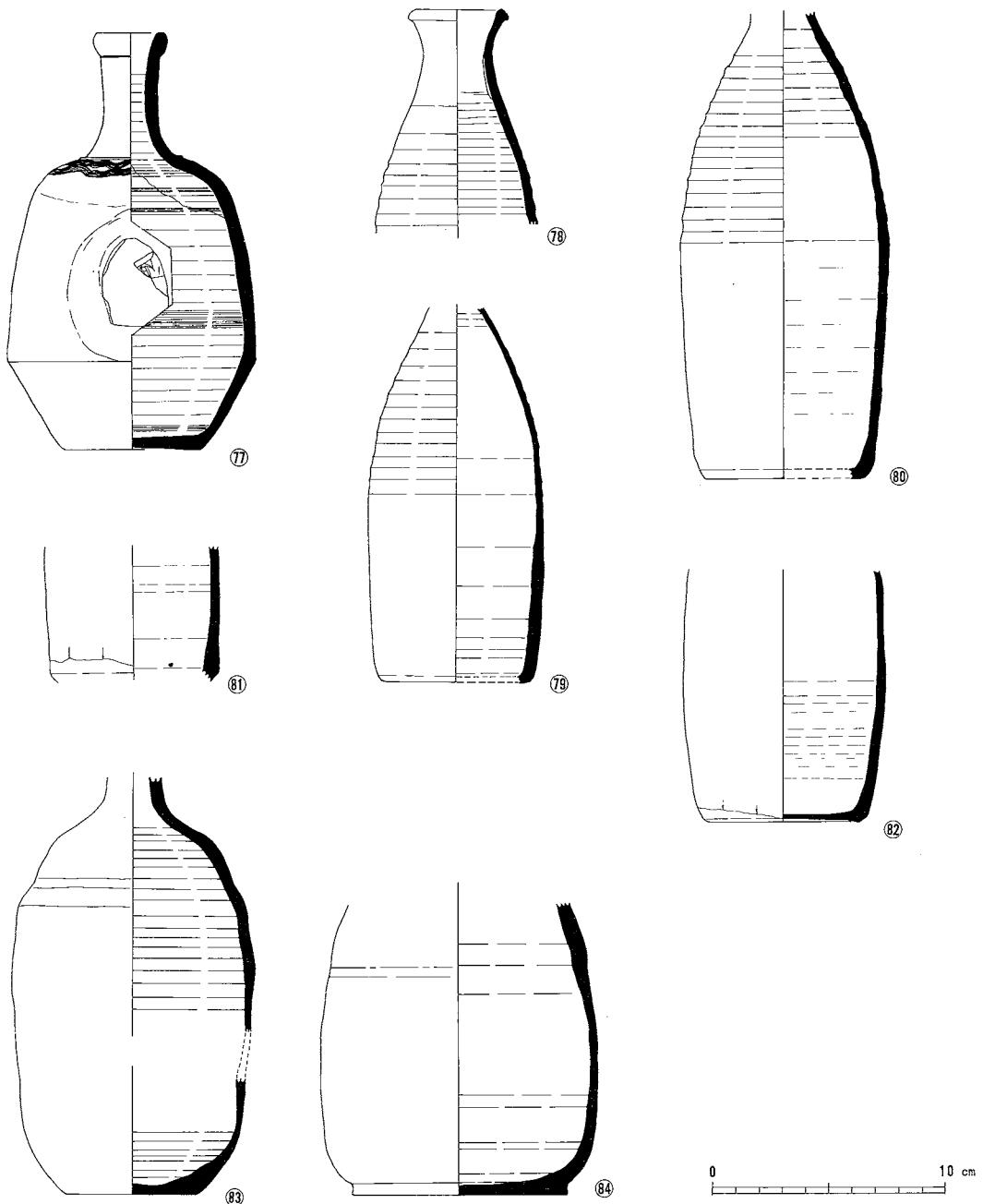
第31図 土座敷址出土土器実測図(2)



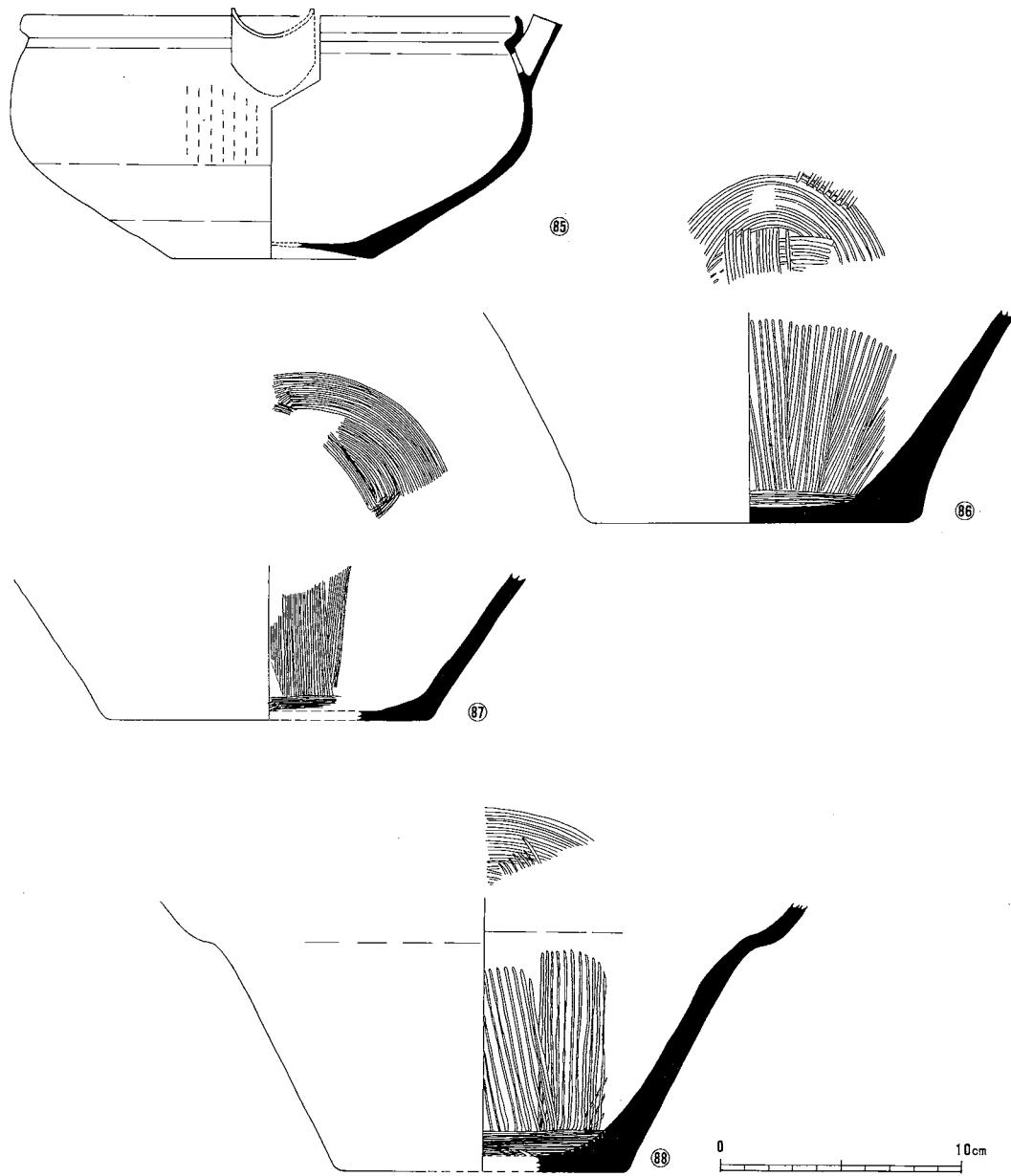
第32図 土座敷址出土土器実測図(3)



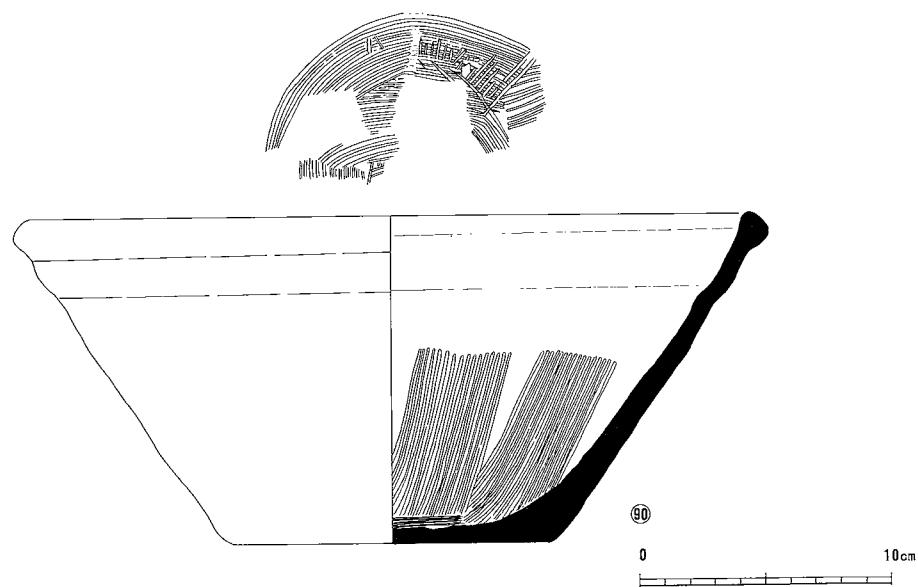
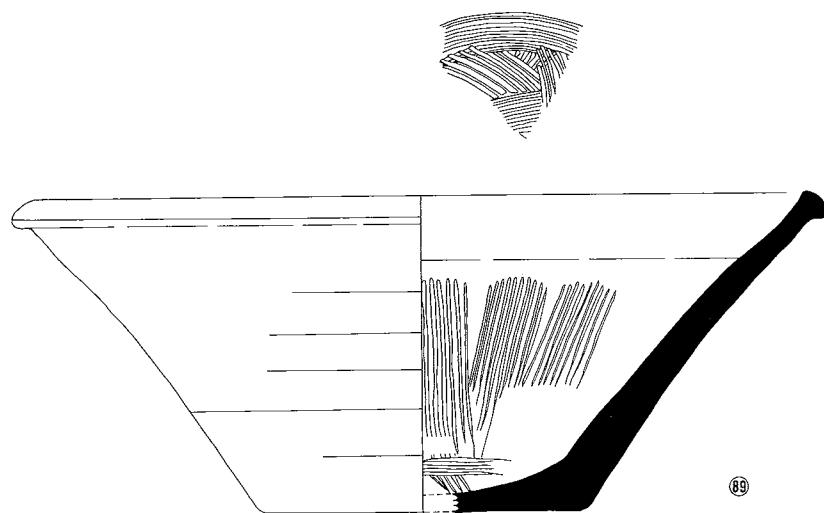
第33図 土座敷址出土土器実測図(4)



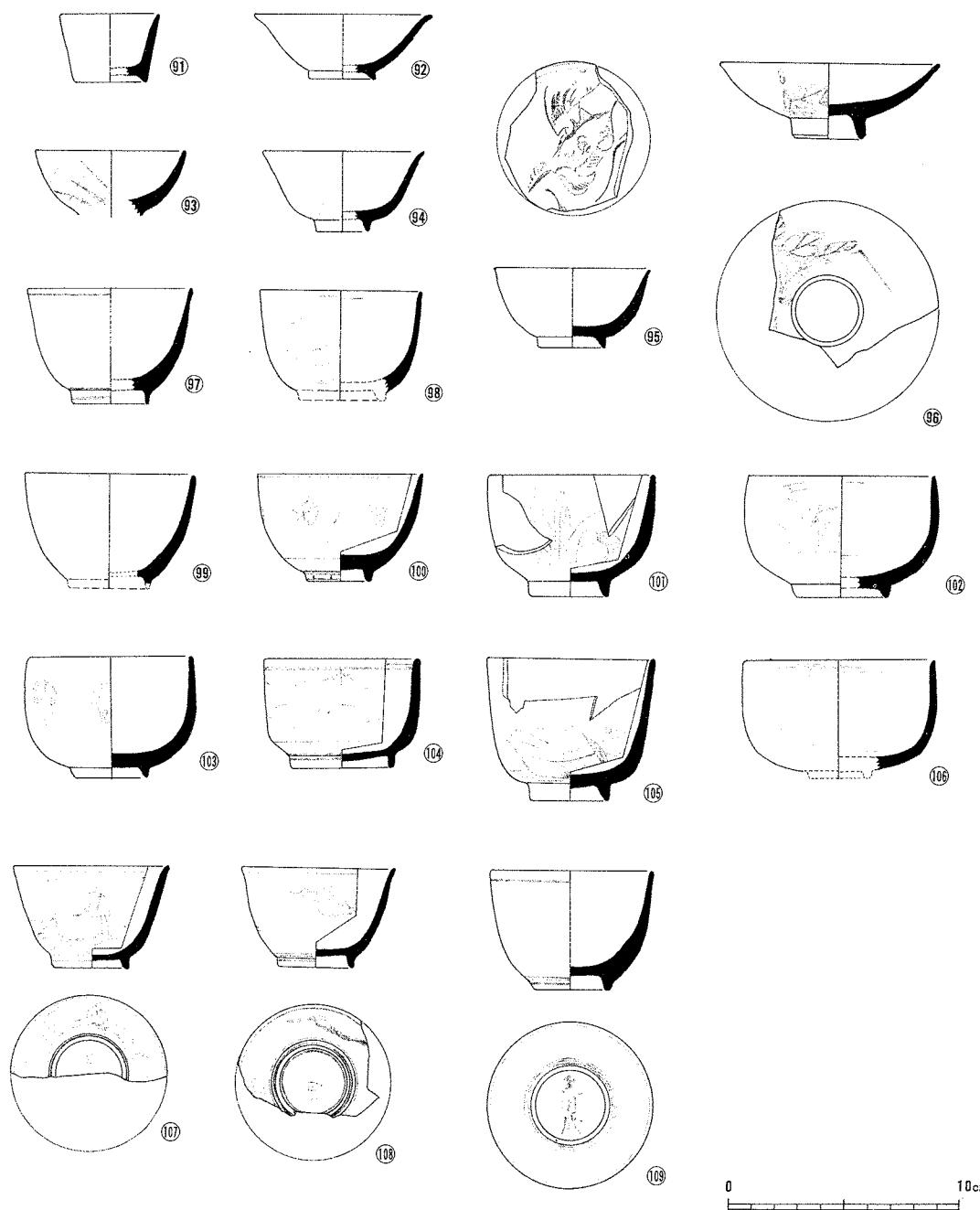
第34図 土座敷址出土土器実測図(5)



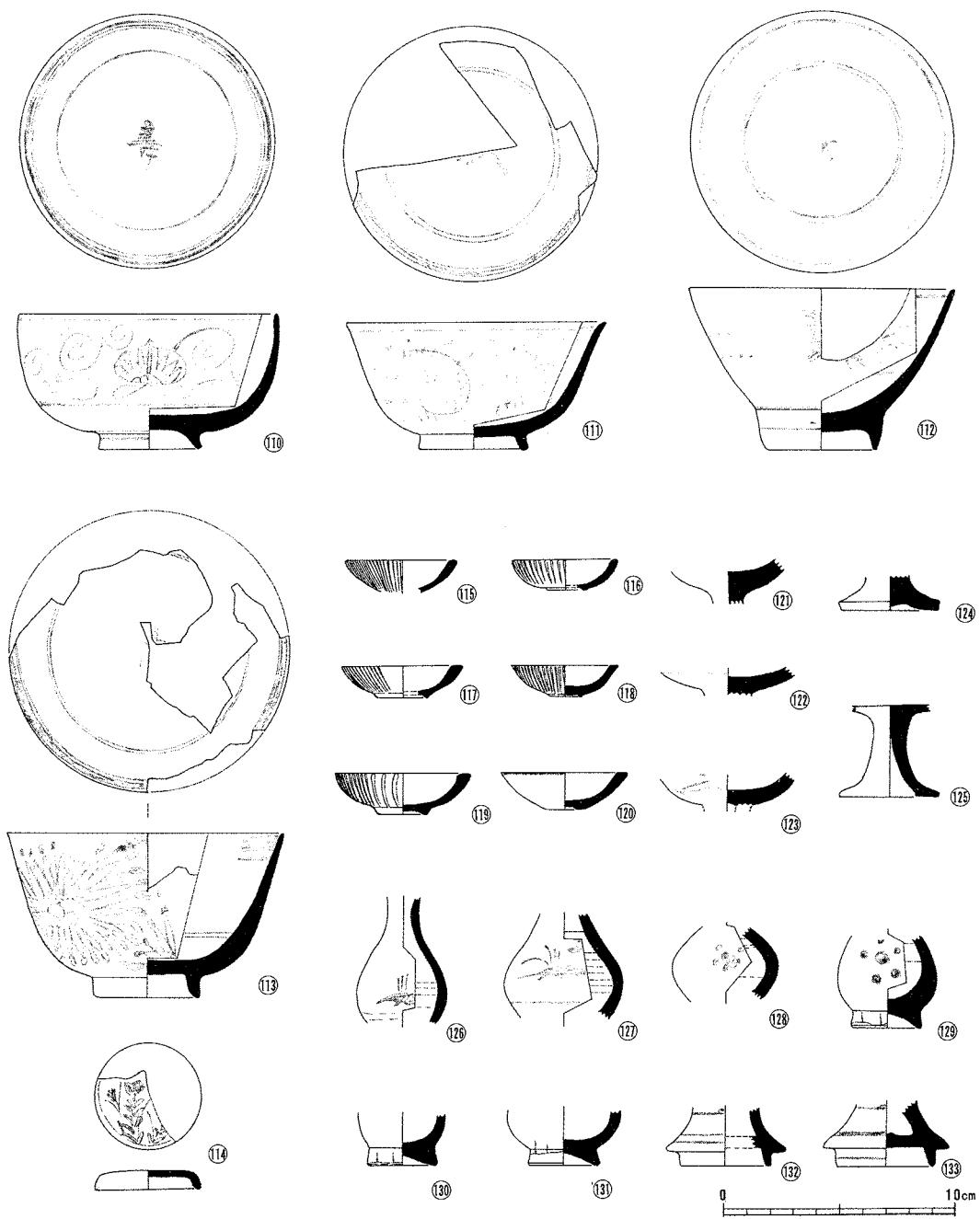
第35図 土座敷址出土土器実測図(6)



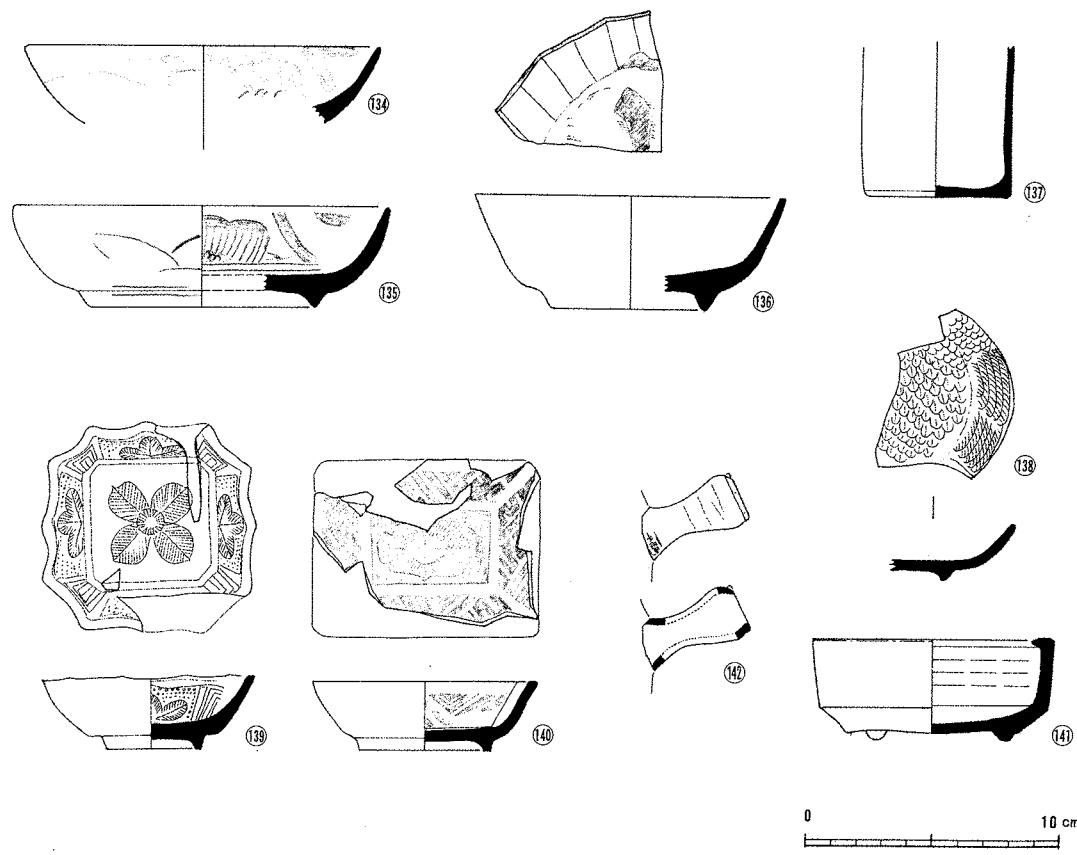
第36図 土座敷址出土土器実測図(7)



第37図 土座敷址出土土器実測図(8)



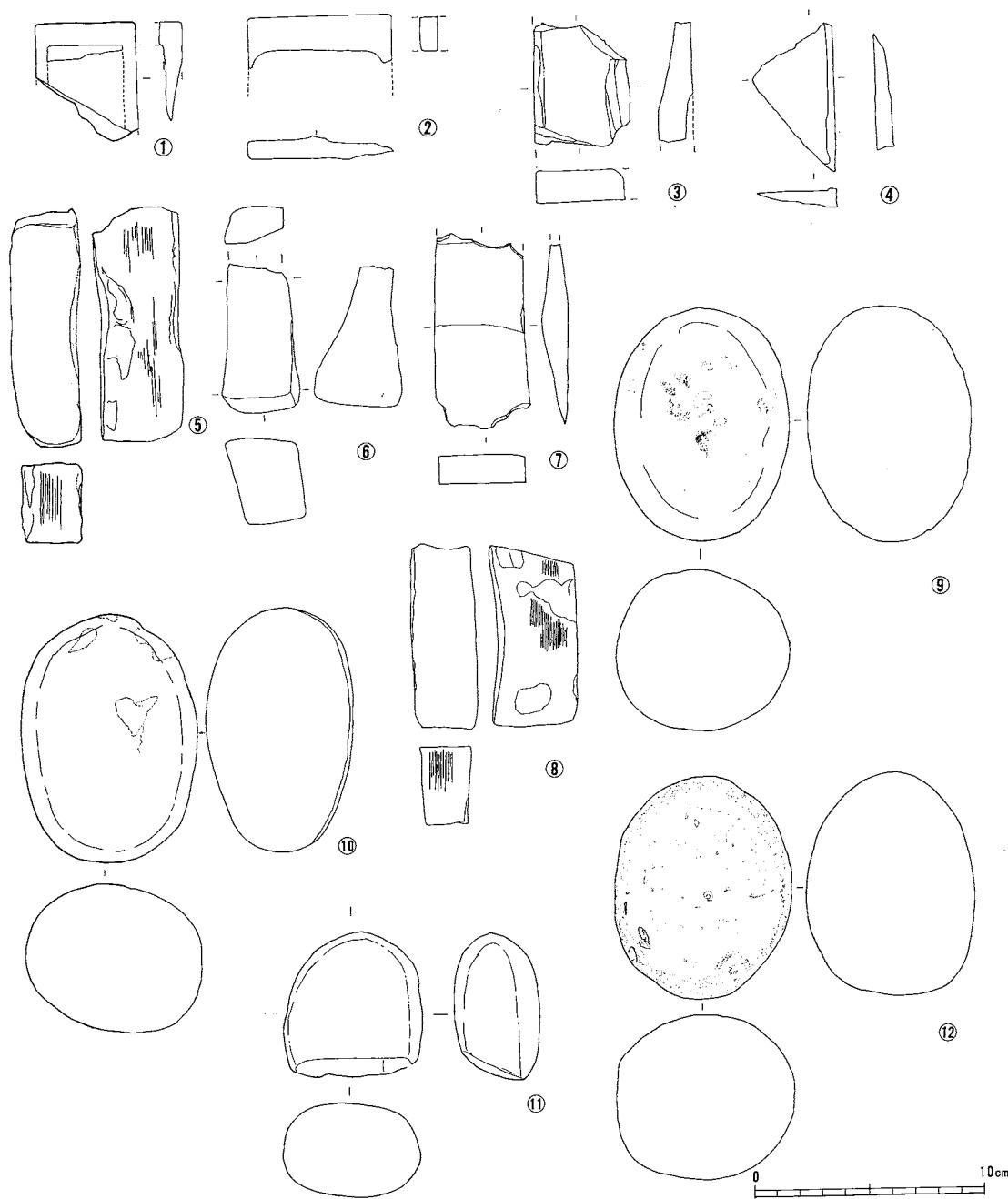
第38図 土座敷址出土土器実測図(9)



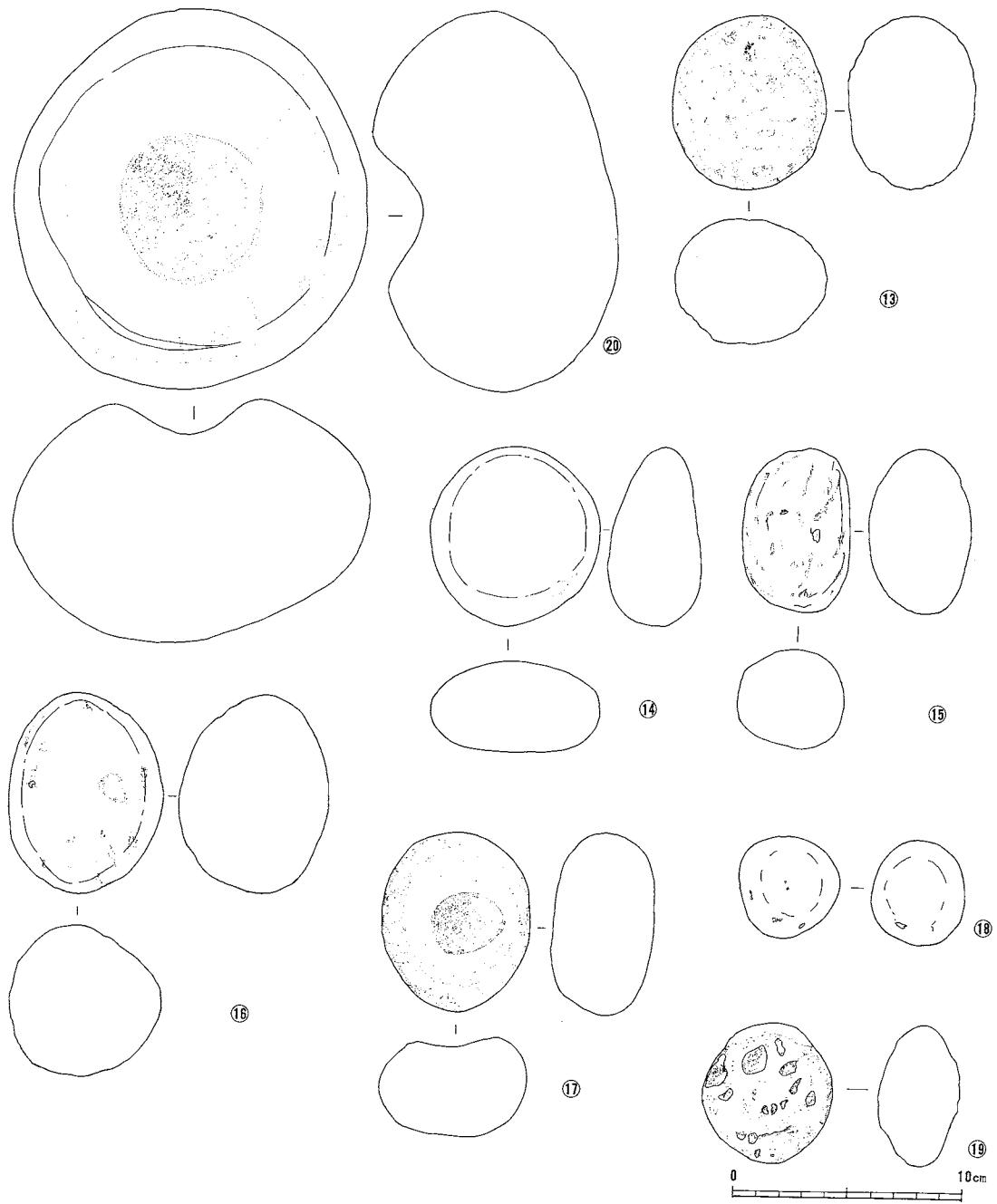
第39図 土座敷址出土土器実測図(10)

子（第42図、第10表）である。石器類は硯、砥石、丸石の他に縄文時代の黒曜石の石鏃2点があつた。丸石については果して石器といえるか疑問も残るが、意図的に集めたとも思われる所以図に加えた。金属器類は寛永通宝、鉄釘、刀子、煙管などで、古錢については、同レベルに墓址があったためか散らばっていた。煙管は陶磁器片と共に検出されている。

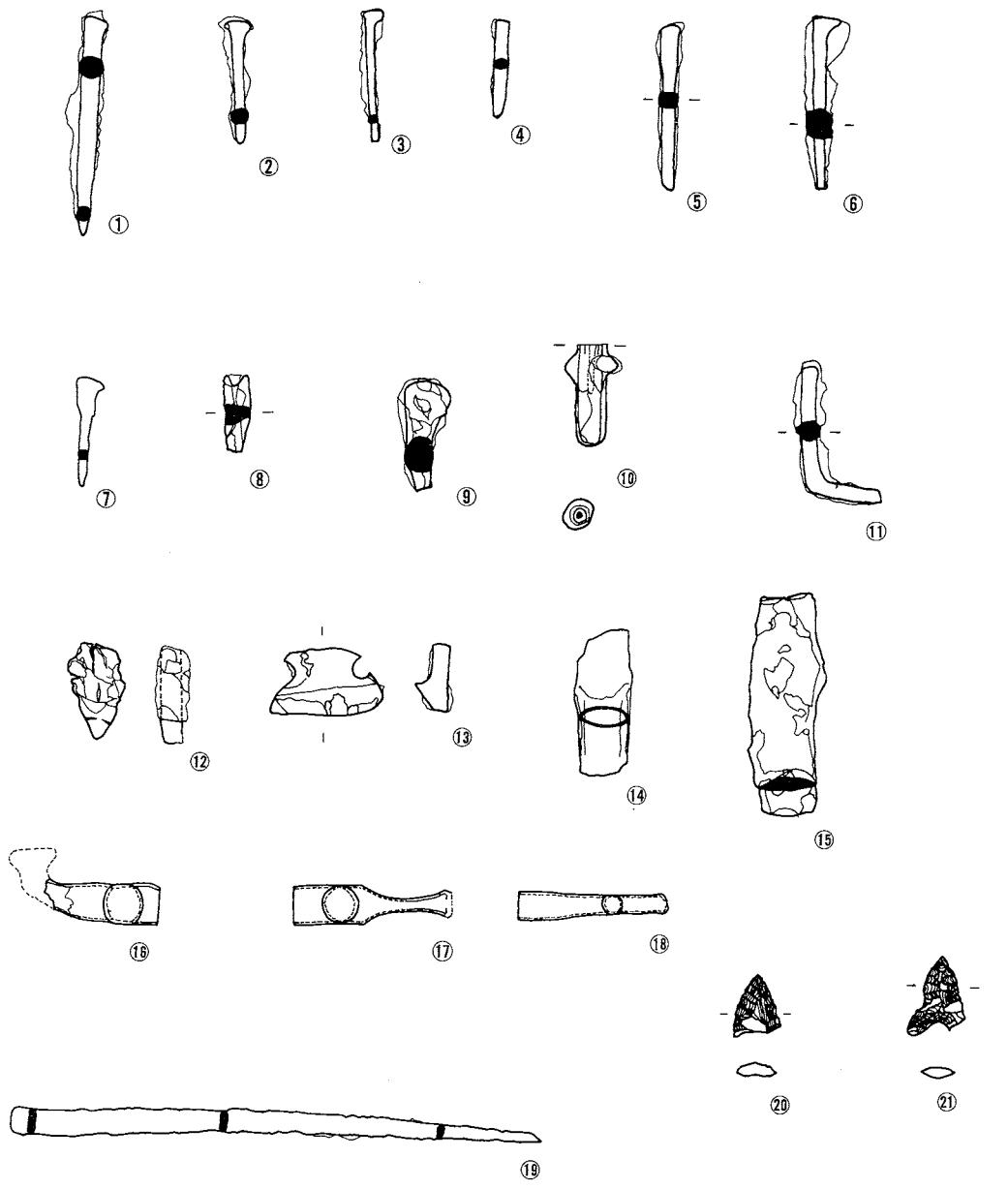
(神沢昌二郎)



第40図 土座敷址出土石器実測図(1)



第41図 土座敷址出土石器実測図 (2)



第42図 土座敷址出土 その他の遺物



第 8 表 土座敷出土遺物觀察表（土器）

No. 1

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 器高	口径 底径 器高	残存度	文様・施釉：色調・素地等	備考
30 1	須恵器 瓶	(14.5)	底	$\frac{1}{10}$	内外ロクロ目 右回転ロクロ 素地ねずみ色 高台付	
30 2	須恵器 長頸瓶	(7.5)	口縁	$\frac{1}{8}$	内面自然釉（灰緑色） 素地灰白色 口縁外反 外面灰褐色	
30 3	磁器 茶碗	(4.5)	底	$\frac{1}{6}$	蓮弁陰刻 青磁 素地灰白色 織密	輸入陶磁器 (中国) 13C後半
30 4	陶器 壺		肩	$\frac{1}{10}$	四耳壺肩部 灰釉（灰白色） 素地灰白色	瀬戸13C 表採
30 5	陶器 瓶	(33.0)	口縁		自然釉（綠灰） 素地明褐灰色で小粒石含む	瀬戸13C
30 6	陶器 瓶	—	肩	—	長石吹き出し 自然釉茶褐色 内外面つなぎ部分が出る 素地灰白色	常滑？
30 7	土師質土器 皿	(16.0)	口縁		手づくね状 うす茶色 素地暗橙色で小石・スガが入っている	
30 8	土師質土器 皿	(15.0)	口縁	$\frac{1}{10}$	糸切底 外面稜あり 長石粒含む	
30 9	土師質土器 三足盤	(15.0)	底	$\frac{1}{2}$	底糸切り後外縁をすり消して塊状の脚をつける 内面茶黒色 外面暗褐色 素地茶褐色	
30 10	土師質土器 皿	(17.0)	底	$\frac{1}{10}$	内面布目 底の部分 内面黒色 素地赤褐色	
30 11	土師質土器 把手	—	—		柄（中空）下側黒色化 巻きつけて作ってある 内面布目痕あり 焰烙の柄か？ 素地茶色	
31 12 カラー②	陶器 灯明皿	7.8 3.2 1.8	完		内面芯立て部をV字状に切る おふけ釉貫入り ドブづけ（釉）薄黄 灰色 素地灰白色	美濃系
31 13	陶器 灯明皿	(10.5)	口縁	$\frac{1}{6}$	中心より外側に芯立て部がありこれをV字状に切りこんである 鉄釉 暗赤褐色 素地灰色 軟らか	美濃系
31 14	陶器 灯明皿	(10.0)	口縁	$\frac{1}{8}$	13と同様 暗赤褐色 素地灰色 硬い	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 2

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 器高	口径 底径 器高	残存度	文様・施釉：色調・素地等	備考
31 15	陶器 灯明皿		5	全体の $\frac{1}{4}$	外面中間重ね焼きのあとあり 13と同様 おふけ釉 底釉あり 内面黄灰色、外面 鉛色にくすんでいる 素地白灰色	美濃系
31 16	陶器 灯明皿	(8.9)		口縁 $\frac{1}{6}$	薄手 外面に重ね焼きのあと おふけ 黄白色 素地白灰色 硬い	美濃系
31 17	陶器 灯明皿	(10.3) (5.3) (1.8)		全体の $\frac{1}{11}$	重ね焼きのあとあり ねずみ色釉(灰釉?) 外面半分に釉 灰白色 素地灰色	美濃系
31 18	陶器 灯明皿	10.6 (3.7) 2.1		全体の $\frac{2}{3}$	外面に稜二段 炭化物付着が見られ重ね 焼きのあとあり 外面 $\frac{3}{5}$ に鉄釉 茶褐色 素地灰白色	美濃系
31 19	陶器 灯明皿	(10.6) (2.7) (2.8)		全体の $\frac{1}{10}$	外面にも少し鉄釉がかかる 黒茶色 素地灰白色	美濃系
31 20 カラー②	陶器 仏飯器	6.0		上部 $\frac{3}{4}$	染付菊花文下半分づつのもの4対 脚を つけたところにヒビが入っている 白釉 素地白灰色	美濃系
31 21	陶器 灯芯立	(7.0)		上部 $\frac{1}{6}$	灯芯立の上部強く内湾している 鉄釉 薄手 素地灰色	美濃系
31 22	陶器 灯芯立	(6.7) 3.7 (4.7)		上部欠損	有穴 糸切底 艶やかな鉄釉脚上部まで あめ色 素地灰白色	美濃系
31 23	陶器 仏飯器	(4.5)		上部欠損 底部 $\frac{1}{2}$	仏飯器の頸部及び底部で上部僅かに染付 の線が見える 白釉 底部内側にまで釉 がありゆず肌になっている 素地灰色で やわらかい 20と同一器体か	美濃系
31 24	陶器 灯芯立	3.5		上部欠損	有穴 糸切底 底部側面は斜めに丸みを もつ 脚部が短い 鉄釉 素地灰白色	美濃系
31 25	陶器 灯芯立	3.7		上部欠損	有穴 糸切底 脚上部つけ残し 脚部は 短く 炭化物が厚く付着 鉄釉 素地灰色	美濃系
31 26	陶器 灯芯立	3.7		上部欠損 下部もや や欠損	鉄釉 釉に黒い斑点あり 21と同一器体か 素地灰色	美濃系
31 27	陶器 灯芯立	3.8		上部欠損	糸切底 径4mmの穴あり 灯芯立の部分 C字形やや立って上部にむかう。鉄釉 素地灰白色	美濃系
31 28	陶器 灯芯立	3.7		上部欠損	有穴 糸切底 底部側面26と同じ 鉄釉 釉色やや黒味を帯びる	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 3

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 器高	口径 底径 器高	残存度	文様・施釉：色調・素地等	備考
31 29	陶器 灯芯立		4.1	上縁のみ	有穴 糸切底 脚部はやや反りぎみ 皿部は強く外反する 灯芯立部分はつけ足したように見える 鉄釉脚上部まで 素地茶灰色	美濃系
31 30	陶器 仏器		(6.0)	底部 $\frac{1}{3}$	平らな糸切底 鉄釉 上部内側にも釉あり 色はあめ色 器種不明であるが仏具らしい 素地白灰色	美濃系
31 31	陶器 仏飯器		3.9	底部 $\frac{2}{3}$	仏飯器の脚 脚は水平でなく張るように反って下る 穴は絞ったような縦のシワが残る 素地白色	美濃系
31 32	陶器 仏飯器				梨地状 黄茶釉 仏飯器皿部 素地白灰色	美濃系
31 33	陶器 仏飯器				おふけ 薄緑 仏飯器皿部 素地白灰色	美濃系
31 34	陶器 仏飯器				厚めのおふけ 白緑 仏飯器皿部中央部分 素地白灰色	美濃系
31 35	陶器 小鉢	(3.5) 3.3 1.8			おふけ釉 糸切底 素地灰白色	美濃系
31 36	陶器 神酒器		2.0	底部	糸切底 楽焼風 内面渦文状で中央上る 薄茶白色の薄い釉 素地灰白色でやわらかい	美濃系
31 37 カラ一②	陶器 花瓶			全体の $\frac{1}{2}$	一対の耳状の把手がつく 鉄釉 内側上部に釉 素地灰白色	美濃系
31 38	陶器 花瓶			肩部 $\frac{1}{3}$	一対の耳状把手がつくらしい 内面ろくろの段つき肉厚 鉄釉（外面黒、内面茶色）球状にふくらむ 素地灰白色	美濃系か
31 39	陶器 香炉			腰部 $\frac{1}{6}$	貫入あり 薄緑の釉 素地白灰色でやわらかい。	美濃系
31 40	陶器 香炉	(10.0)	口縁	$\frac{1}{6}$	口唇広く下には段があるらしい 鉄釉 素地灰白色	美濃系
31 41	陶器 香炉	(10.9)	底なし	$\frac{1}{10}$	内面ロクロ目強し 鉄釉（黒褐色梨地風） 内側口縁に少し釉あり 素地ねずみ色と赤褐色	美濃系
31 42	陶器 香炉	(12.1)	全体の $\frac{1}{2}$		鉄釉 梨地 内面上部まで同釉 茶黒 素地ねずみ色	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 4

図 番 号 遺物番号 図版番号	種 類 器 種	寸 法 器 高	口 径 底 径 器 高	残 存 度	文様・施釉：色調・素地等	備 考
31 43	陶 器 香 炉	(12.0) (9.0) 8.9		1/10	内面口クロ整形による段強い 鉄釉(釉だまりは黒色) 内側1cm位まで 釉あり 高台疊付一部に釉つく 上面中 央に薄い釉 色茶色と灰色のまだら	美濃系
32 44	陶 器 香 炉		5.6	底部全部	おふけ 付高台 やや外に反る ガラス状の薄緑の釉 素地灰ねずみ色	美濃系
32 45	陶 器 香 炉		8.2	底部 1/6	内面口クロ段あり 高台付 丸味あり 鉄釉 色ねずみ茶	美濃系
32 46	陶 器 香 炉		(8.7)	底部 1/10	二重高台 緑の濃い釉厚く滴れている 赤茶色	美濃系
32 47 カラ-②	陶 器 蓋	小 6.2 大 8.3 (2.2)		ほぼ完形	糸目 茶碗の蓋 細い渦文 鉄釉 内面釉なし 色薄茶色	美濃系
32 48	陶 器 蓋	(8.9) (11.1) 3.3		1/4	おふけ 土瓶の蓋 外面に一本の線あり 内面釉なし 緑茶 素地薄茶色	美濃系
32 49	陶 器 蓋	(10.2) (12.2) (2.8)		1/3	鉄釉 艶なし 内面釉なし 黒化 素地灰白色	美濃系
32 50 カラ-②	陶 器 蓋	(16.4) (下が最大径) 3.0		1/3	小さなつまみ付 放射状に細く押した文 様 鉄釉 内面にも艶のある茶色の釉 色茶色	美濃系
32 51	陶 器	(8.0)	腰部 1/6		急須の底か 万古風 サメ肌のねずみ色 釉 素地黒ねずみ色で固い	瀬戸系
32 52	陶 器 土 瓶	(9.3)		1/3	つよく立つ口縁 緑色のつよい緑青色の 釉 内面にも口縁より下に釉かかる 薄手 素地灰白色	瀬戸系
32 53	陶 器 土 瓶	8.1 (5.2) (11.7)		1/6	口唇より肩の張る球形のもの 蓋受け部分は直 角に曲がり内面がふくらんで付く 細い貫入あ り 5穴 緑色釉 内面褐色に茶の斑点 注口 緑釉 素地ねずみ色で固い	瀬戸系
32 54	陶 器 土 瓶	(6.8) (6.1) (11.0)			糸目土瓶 全体に球形 蓋底部なし 釣り手菊花状 注口穴3個 外面糸目ま で鉄釉 内面底の方に緑茶の釉 色は外 面黒茶 内面赤茶 素地赤茶で薄い	美濃系
32 55	陶 器 坏	(6.1) 2.8 2.5		1/3	おふけ 鉢形 糸切底 付け高台 貫入 あり 素地灰白色	美濃系
32 56	陶 器 茶 碗	(7.3)			還元焰 ゆず肌 釉が均一でなくブツブツしている 素地ねずみ色	瀬戸系

土座敷出土遺物観察表

No. 5

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 器高	口径 残存度	文様・施釉：色調・素地等	備考
32 57	陶器 茶碗	(10.1)	上部 $\frac{1}{6}$	おふけ 外面S字状の染付 内面口唇に 薄い線 貫入あり 素地灰白色でやわらかい	美濃系
32 58 カラー②	陶器 茶碗	(10.3) 4.4 5.7	$\frac{1}{3}$	おふけ 内外口唇巾広く薄い染付 黄茶色 素地灰白色	美濃系
32 59	陶器 茶碗	4.9		おふけ 貫入あり 薄緑黄色 素地灰白色	美濃系
32 60	陶器 茶碗	5.6		おふけ 貫入あり 薄緑色 素地灰白色	美濃系
32 61	陶器 茶碗	(6.0)	底部 $\frac{2}{3}$	おふけ 貫入あり 薄茶 素地灰白色	美濃系 表採
32 62	陶器 茶碗	5.2		さめ肌 釉は灰白色 素地ねず茶色	瀬戸系
32 63	陶器 茶碗	5.2	底部 $\frac{1}{6}$	やや低い兜巾高台 鉄釉(梨地状) 素地灰白色でヅツヅツあり	美濃系
32 64 カラー②	陶器 茶碗	(13.4) (5.6) 6.4	$\frac{1}{4}$	黄瀬戸風 黄茶釉 外面腰まで釉 素地茶の混じった灰白色	美濃系
33 65	陶器 茶碗	5.1	底部 $\frac{2}{3}$	高めの輪高台 鉄釉 艶やかな茶色 素地薄ねずみ色で小石混じり	美濃系
33 66	陶器 茶碗	(5.0)		おふけ 貫入あり 素地灰白色でやわらかく砂っぽい	美濃系
33 67	陶器 茶碗	(6. 1)		おふけ 内面にトチンあとあり 素地灰白色でやわらかく砂っぽい	美濃系
33 68	陶器 茶碗	4.4	下部 $\frac{1}{6}$	よろい茶碗 上部は三条単位の細い四角 腰には小札風押し型文 釉は内外とも薄 緑青 素地薄ねずみ色	美濃系
33 69	陶器 茶碗	(4.8)		よろい茶碗 内面鉄釉 外面茶色の釉 素地灰白色	美濃系
33 70	陶器 碗	(16.0) (5.9) (7.7)	$\frac{1}{6}$	大型茶碗 外面茶緑に白 内面薄茶に茶黒の釉が横 にはしる 素地灰白色に白の化粧がけ (内面のみ)	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 6

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 口径 器高	残存度	文様・施釉：色調・素地等	備考
33 71	陶器 皿	(9.9) (3.9) 2.5	1/6	縁に反りがある浅めの皿（折縁） 鉄釉 裏面釉なし 素地茶褐色で小砂粒を含む	美濃系
33 72	陶器 皿	7.0		おふけ 染付梅花らしい 貫入荒し 素地灰白色でやわらかい	美濃系
33 73	陶器 皿	5.7		おふけ 貫入 内面染付あり 高台内輪 になっている 釉は疊付以外全てにあり 素地灰白色で軽い	美濃系
33 74 カラー②	陶器 碗	15.0 5.6 5.6	1/4	笹と雲の染付（茶黒と黄） 外面一本と二本一対の線 素地灰白色で軽い	美濃系か
33 75 カラー②	陶器 皿	(13.5) 6.9 3.1	1/4	菊皿 おふけ 内面に薄い円形の染付 貫入 素地灰白色	美濃系
33 76 カラー②	陶器 大皿	(22.7) 9.9 4.5		おふけ 染付 太い黒線 その外には草 状 内側には菊花文 重ねあと巾広く残 る 付け高台 高台疊付 内側釉なし 色は薄緑と黄色 素地灰白色	美濃系 19C初
34 77 カラー③	陶器 徳利	3.0 5.9 8.0	ほぼ完形 (人形を欠く)	人形徳利 薄い赤紫に近い釉 腰に棱あり 底部やや中央が 上る 肩上部に一群の波状文 額部付け根に細い隆線一本 口縁はふくらませた作り 内部ロクロ引きあとあり 中央に 凹ませて人形がつく 左肩から腕の部分が残る 素地薄茶色 軽い素焼き風	美濃系
34 78 カラー③	陶器 徳利	(3.7)	口部	79と同一か 鉄釉の上に青白色のワラ灰 釉 内面茶色の釉 素地ねずみ色	美濃系か
34 79 カラー③	陶器 徳利	(6.3)	胴	鉄釉 黒色 ロクロの段部分のみ茶褐色 釉 0.2 mm 内面薄茶の釉薄い 素地灰白色で固い	美濃系
34 80 カラー③	陶器 徳利	(6.8)	上部欠損 胴部以下	79と全く同じ やや黒色が強い 内面薄茶の釉 貫入 素地白にやや茶が混った色	美濃系
34 81 カラー③	陶器 徳利		下部	79、80と同じ 真黒 底近く釉だまり 内面にも薄く釉 素地白色	美濃系
34 82 カラー③	陶器 徳利	6.5	胴下部	79と同じ 底部中央やや上るロクロ徳利 鉄釉 内面も鉄釉で黒い 素地灰色薄手で固い	美濃系
34 83 カラー③	陶器 徳利	5.6	2/3	口唇を欠く 肩に有段のあるどっしりと した徳利 底部がやや上るロクロ整形 鉄釉 素地灰色	美濃系
34 84 カラー③	陶器 徳利	9.3	1/3	腰が太くどっしりしている 底部平底ロ クロ整形 内面ロクロ痕 内面底部渦文 状 赤褐色 素地白灰色	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 7

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 底径 器高	口径 底径 器高	残存度	文様・施釉・色調・素地等	備考
35 カラ-③	陶 器 片 口	(20.3) 8.4 10.1		2/3	外面最大径部周辺細かい縦の文様あり 片口部分は短く持ち手が片口部と90度の位置に付くと思われる 注口と外面一部が鉄釉 内面かえしより下に釉 素地ねずみ色で固い	美濃系
35 86 カラ-③	陶 器 擂 鉢	(13.2)			鉄釉 9本のくし目 全面につく 底面取り ハケぬりか底と腰はまだらに 釉がつく 底は左回転 素地白色軽い	美濃系
35 87 カラ-③	陶 器 擂 鉢	(13.3)			無釉 27本の細かいくし目 平底 素地赤褐色	美濃系
35 88 カラ-③	陶 器 擂 鉢	(11.9)			鉄釉 12本のくし目 口縁下部に稜つく 堅緻 平底 素地ねずみ色	美濃系
36 89 カラ-③	陶 器 擂 鉢	(30.8) (12.6) 12.6			鉄釉 口唇外にかえる 9本のあらいく し目 外面ロクロ成型痕あり 内面肩に 段あり 平底 素地ねずみ色と赤茶	美濃系
36 90 カラ-③	陶 器 擂 鉢	29.0 12.2 13.0			鉄釉茶褐色 16本のくし目 口唇(玉ブ チ)使いこんである 内側肩で段あり 目のつけ方は粗い 素地灰白色で軽い	美濃系
37 91 カラ-③	磁 器 坏	(4.3) (3.1) 3.0		1/3	小型の直線に広がるもの 白磁 素地乳白色	美濃系
37 92 カラ-③	磁 器 坏	(7.7) (2.9) 2.8		1/4	口縁で強く開く 内面わずかに染付あり 素地乳白色	美濃系
37 93 カラ-③	磁 器 坏	(6.6)		1/5	草の葉状の交叉する染付文 内面見込み にわずかに段あり 素地乳白色	美濃系
37 94 カラ-③	磁 器 坏	(7.0) (2.3) 3.5		1/6	口縁内面巾広 外面にも同様の染付 腰に三角状の染付連続文 素地乳白色	美濃系
37 95 カラ-③	磁 器 坏	(6.8) 3.0 3.4		1/2	波に鳳凰の印刷文 磁器も良い 素地乳白色	美濃系
37 96 カラ-③	磁 器 坏	(9.5) 2.8 3.3		1/3	木の葉と枝を薄墨で書き葉脈を金色で書 く 赤い実か花もある大型の浅い盃 素地乳白色	美濃系
37 97 茶 碗	磁 器 茶 碗	(7.2) (3.3) 5.0		1/3	外面 縁と高台に計4本の染付の線が入 る 内外貫入 素地白灰色	美濃系
37 98 茶 碗	磁 器 茶 碗	7.0 (3.2) (4.8)			染付 草と水の文様か 内面口唇に二本 の線がめぐる 素地乳白色	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 8

図番号 遺物番号 図版番号	種類 器種	寸法 口径 底径 器高	残存度	文様・施釉: 色調・素地等	備考
37 99 茶碗	磁器	(7.4) (3.4) (5.0)	½	外面にロクロ引き上げあとあり 口唇に茶釉 他は白磁 素地白灰色	美濃系か
37 100 カラ-④ 茶碗	磁器	7.2 2.2 4.8	¾	山葵文染付 白磁 素地乳白色	瀬戸系
37 101 カラ-④ 茶碗	磁器	7.3 3.4 5.3	½	草の染付文 白磁 素地乳白色	瀬戸系
37 102 茶碗	磁器	(8.1) (4.0) 5.3	½	染付、外面に笠見込に二条の線を中心 文様があるらしい 色はアイボリー 素地灰白色	美濃系
37 103 カラ-④ 茶碗	磁器	(7.0) 3.1 5.3		白磁 染付 丸にヒシ形と四つの点 内面にも文様あり 素地乳白色	(瀬戸系)
37 104 カラ-④ 茶碗	磁器	6.8 4.5 4.8	ほぼ完形	竹文染付 内面口唇に2条あり やや濁って白い点が見える 素地乳白色	瀬戸系
37 105 茶碗	磁器	(7.4) 3.4 6.2	½	舟に葦の染付 やや濁る 素地乳白色	瀬戸系
37 106 茶碗	磁器	(8.4) (2.7) (5.2)	½	くらわんか茶碗に類似している 縦に花弁状の染付 色はやや黒ずむ 内 に三条の線 素地乳白色	瀬戸系
37 107 カラ-④ 茶碗	磁器	(6.8) (3.3) 4.4	½	松に富士 "道八" だろうか道の字あり 素地乳白色	瀬戸系
37 108 茶碗	磁器	(6.7) 3.3 4.3	½	松に雲の染付 高台内に"道八"の字あり 107と対と思われる 素地乳白色	瀬戸系
37 109 茶碗	磁器	(7.2) 3.3 5.2	½	口縁、高台に線 高台内に"大明成"の字 素地乳白色	瀬戸系
38 110 カラ-④ 飯茶碗	磁器	(11.2) 4.4 5.8	¾	つると葵葉の染付 内面に"寿"の字と線 浅めの碗で腰のはった形 素地乳白色	美濃系
38 111 カラ-④ 飯茶碗	磁器	(11.3) 4.7 5.5	½	つる草文染付、染付色濃い 内面に"寿"の字があるらしい 素地乳白色	美濃系
38 112 飯茶碗	磁器	11.5 4.7 7.0	¾	大白茶碗風、腰がなく高台に続く 外面に草文らしきもの、内面に漢字があ るらしい、素地乳白色	美濃系

土座敷出土遺物観察表

No. 9

38 113 カラ一④	磁 器 飯 茶 碗	(12.0) 4.5 7.2	%	大きめの碗 イガ状の全面染付 貫入あり 内面に“寿”らしき字 素地乳白色	美濃系
38 114 カラ一④	磁 器 盒 子	(4.6) (下が最大径) 0.8	%	染付 秋草(写実的)小穴多し盒子のフタ か 素地灰白色	美濃系
38 115	磁 器 紅 盆	(4.8)	%	白釉 内面に釉 素地灰白色	美濃系
38 116 紅 盆	磁 器	(4.7) (1.7) 1.3	%	高台小さく スジは浅い 内面に釉 白釉 素地灰白色	美濃系
38 117 紅 盆	磁 器	(5.3) (2.3) 1.4	%	口唇部巾広い 内面に釉 白釉 素地灰白色	美濃系
38 118 紅 盆	磁 器	(4.8) 1.4 1.4	%	高台浅い 内面に釉 白釉 素地灰白色	美濃系
38 119 紅 盆	磁 器	(5.9) (2.1) 1.8		巾広いスジでやや深く 青味を帯びる 白釉 内面に釉 素地灰白色	美濃系
38 120 紅 盆	磁 器	(5.5) (1.4) 1.6		口唇染付 穂筒高台 白釉 内外面釉あり 素地灰白色	美濃系
38 121 仏 飯 器	磁 器			皿部分 白磁(青っぽい) 素地乳白色	美濃系
38 122 仏 飯 器	磁 器			染付文あり 皿部分 白磁(青っぽい) 素地乳白色	美濃系
38 123 仏 飯 器	磁 器			染付文あり 皿部分 白磁(青っぽい) 素地灰白色	美濃系
38 124 仏 飯 器	磁 器	4.2		トキン高台(低目) 白磁(白) 素地乳白色	美濃系
38 125 カラ一④	磁 器 仏 飯 器	(4.3)	脚 % 上部欠損	白磁貫入 素地乳白色	美濃系
38 126 カラ一④	磁 器 神 酒 器		脚部 %	染付 うめ鉢と笠 白磁 素地乳白色	瀬戸系
38 127 神 酒 器	磁 器			染付 笠(?)文 やや青味おびる 白い小斑点多し 素地乳白色	瀬戸系

土座敷出土遺物観察表

No. 10

38 128	磁 器 神 酒 器		胴部	うめ鉢染付 白磁(青っぽい) 素地乳白色	瀬戸系
38 129	磁 器 神 酒 器	2.9	胴下部 $\frac{1}{2}$	染付うめ鉢 底部中央が上る 内部は渦文状 白磁 やや青味がある 素地乳白色	瀬戸系
38 130	磁 器 神 酒 器	3.0	下部 $\frac{1}{3}$	高台内削りとり 白磁 素地乳白色	瀬戸系
38 131	磁 器 神 酒 器	3.0		高台内口クロでとる 白磁 素地乳白色	瀬戸系
38 132	磁 器 仏 器	(3.9)		染付 くすんだ青 花瓶の底部 内面しづらこみかヒビが入る 素地乳白色	瀬戸系
38 133	磁 器 仏 器	(4.2)		染付くすんだ青 花瓶の底部 内面しづらこみかヒビ入る 素地乳白色	瀬戸系か
39 134 カラ一④	磁 器 皿	(14.1)	$\frac{1}{15}$	草文染付 外つる草 青っぽい白磁 くらわんか碗風 素地乳白色	波佐見系か
39 135 カラ一④	磁 器 皿	(15.0) (8.9) 4.0	$\frac{1}{6}$	草文染付 染付色くすんでいる 外線のみ青っぽい 同系片多し くらわんか碗風 素地乳白色	波佐見系か
39 136	磁 器 皿	(12.3) (6.2) 4.5		染付 質がよく新しいと思われる 口唇茶色の釉 素地白色	瀬戸系 ?
39 137	磁 器 神 酒 器	5.4		白磁無地 細かい貫入 底部角面取 内面底部トキン状 薄手 素地白色	瀬戸系 ?
39 138	磁 器 皿		$\frac{1}{3}$	型押し魚文 白磁 素地乳白色	美濃系
39 139	磁 器 皿	8.5 8.3 2.8		型押し角皿 同型3点あり 中央に四葉の葉文 四周に三葉 素地乳白色	美濃系
39 140	磁 器 皿	(9.0) (5.3) 2.7	$\frac{2}{3}$	角皿 さや文 青っぽい白磁 中央菱花葉文 外ワク沙綾文様 素地乳白色	美濃系
39 141	土師質土器 香 爐	9.6 6.6 4.1	$\frac{9}{10}$	素焼 赤茶色 底部口クロ整形 三足 足は粘土塊をつけたもの	産地不明
39 142	陶 器 把 手			把手のみ 無釉 黄味がかった白茶色 素地緻密 基部に“亀千”の刻印	産地不明

第9表 土座敷出土遺物観察表（石器・石製品）

図番号 遺物番号 図版番号	種類	寸法	長さ 巾 厚さ	重量
42			1.8	
20	石 錛		1.6	0.58g
50			0.3	
42			2.2	
21	石 錛		(1.7)	0.61g
50			0.3	
40				
1	硯		4.4	37.05g
50			1.0	
40				
2	硯		6.3	15.23g
50			0.8	
40				
3	硯(片)			41.4 g
50			1.2	
40				
4	硯(片)			17.6 g
50			0.6	
40				
5	砥 石		10.4	
50			2.9	172.75g
40				
6	砥 石		3.4	88.27g
50			3.9	
40				
7	砥 石		4.0	61.25g
50			1.1	
40				
8	砥 石		8.2	
50			2.9	147.5 g
40				
9	丸 石		10.3	
50			7.7	720 g
			7.1	

図番号 遺物番号 図版番号	種類	寸法	長さ 巾 厚さ	重量
40			10.8	
10	丸 石		7.7	683 g
50			6.6	
40			6.4	
11	丸 石		6.2	195.7 g
50			3.7	
40			9.8	
12	丸 石		7.9	693 g
50			7.4	
41			7.7	
13	丸 石		6.8	315 g
50			6.5	
41			7.9	
14	丸 石		7.5	321 g
50			4.2	
41			7.2	
15	丸 石		4.7	182.3 g
50			4.5	
41			8.8	
16	丸 石		6.8	460 g
50			6.6	
41			7.9	
17	丸 石		6.5	326 g
50			4.6	
41			4.5	
18	丸 石		4.5	90.7 g
50				
41			6.2	
19	丸 石		5.8	157.1 g
50			3.6	
41			16.8	
20	凹 石		15.5	3585 g
50			10.7	

第 10 表 土座敷出土遺物観察表（金属製品）

図番号 遺物番号 図版番号	種類	寸法	タテ ヨコ 厚さ	重量
42 1 50	釘	6.1 0.7		3.55g
42 2 50	釘	3.5 0.6		1.64g
42 3 50	釘	3.7 0.5		1.23g
42 4 50	釘	2.7 0.4		0.8 g
42 5 50	釘	4.6 0.6		2.69g
42 6 50	釘	4.8 0.7		5.24g
42 7 50	釘	3.0 0.3		0.92g
42 8 50	釘	2.1 0.7		1.65g
42 9 50	釘	3.1 0.8		4.34g
42 10 50	不 明	2.8 0.9		3.58g

図番号 遺物番号 図版番号	種類	寸法	タテ ヨコ 厚さ	重量
42 11 50	不 明	4.0 0.8		3.17g
42 12 50	不 明	2.6 1.4 0.9		3.78g
42 13 50	不 明	1.8 2.9 0.9		6.62g
42 14 50	不 明	4.0 1.4		3.33g
42 15 50	不 明	6.0 1.8		14.35g
42 16 50	キセル	1.1 4.2		3.38g
42 17 50	キセル	1.1 4.3		4.8 g
42 18 50	キセル	0.8 4.0		2.55g
42 19 50	簪	0.6 4.6		8.6 g

第3節 推定墓址

この墓址群は、調査地区内東側に位置するB-1地区に、78墓址、B-1地区の南西側一段高い位置にB-2地区があり3墓址出土している。また、B-2地区の西側、C地区からも1墓址出土している。これらの内B-2地区内出土のものは、重機による排土を行なった当初から骨片の出土があり、平面形もわりあいはっきりしていたので、墓址として確認された。しかし、上部については、すでに削平されていて底部のみ出土したにすぎない。B-1地区は、排土当初から、かなり広い範囲にわたって、骨片（焼骨）の出土が見られ、墓址群であることが確認されたが検出面全体が大小の礫面であり、墓址上面の構成部分は、明瞭な形では確認できなかった。このため、1. 大きな石があり、まわりを中、小の石で、囲むような構成を思わせるもの。2. 大きな石はないが中、小の石がまとまっているような構成を思わせるもの。3. 石は少ないが上面に焼骨や炭化物が顕著に散布するもの。4. その他上面の石が何らかのまとまりを思わせるもの。以上4つから個々の墓址を推定したので、推定墓址とし、全体を推定墓址群と呼称した。また、上面の石間や推定墓址内から多量の骨片が出土した。これらの骨は、底部付近から埋葬状態を想像させるように出土した焼けていない骨、一生骨一と、内外に散布している焼けている骨、一焼骨一とに区別した。焼骨については、火葬された骨と思われるが、いくつもの墓址が切合い、相当攪乱されていて現在では、ほとんどが埋葬当時の状態を保っていない。このため、火葬骨は、埋葬状態にあるものについてのみ使用し、その他を焼骨として区別した。また、この項の以下の図中は、焼骨の散布範囲を表わし、は、炭化物の散布範囲を表わす。○は、焼骨片、●は古銭、△は陶器片、▲は、鉄器、□は炭化物を表わした。人骨については、第4節にて詳述する所以以下、推定墓址の遺構と出土遺物について述べてみたい。

■ 第1号推定墓址

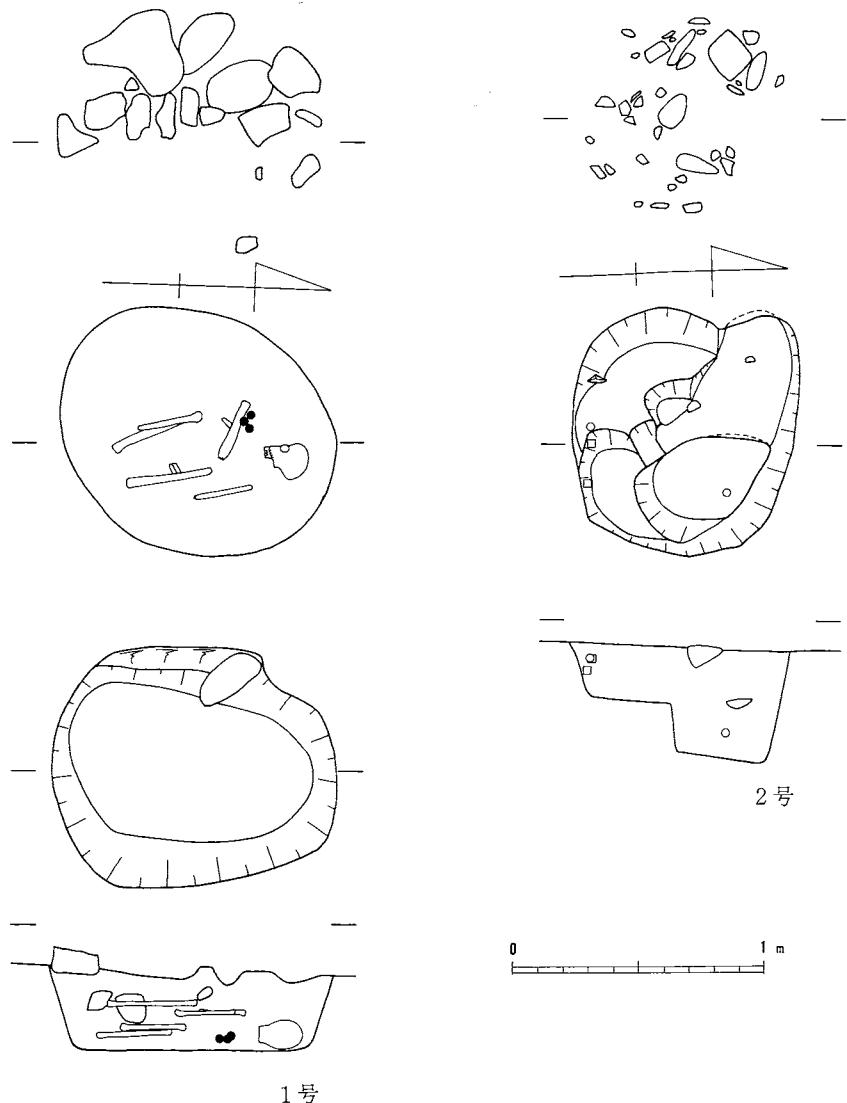
遺構（第43図）

M-4、M-5に位置し、上面は30~50cm大の石を中心に30cmくらいの石がまとまっている。石の間に焼骨が散布している。

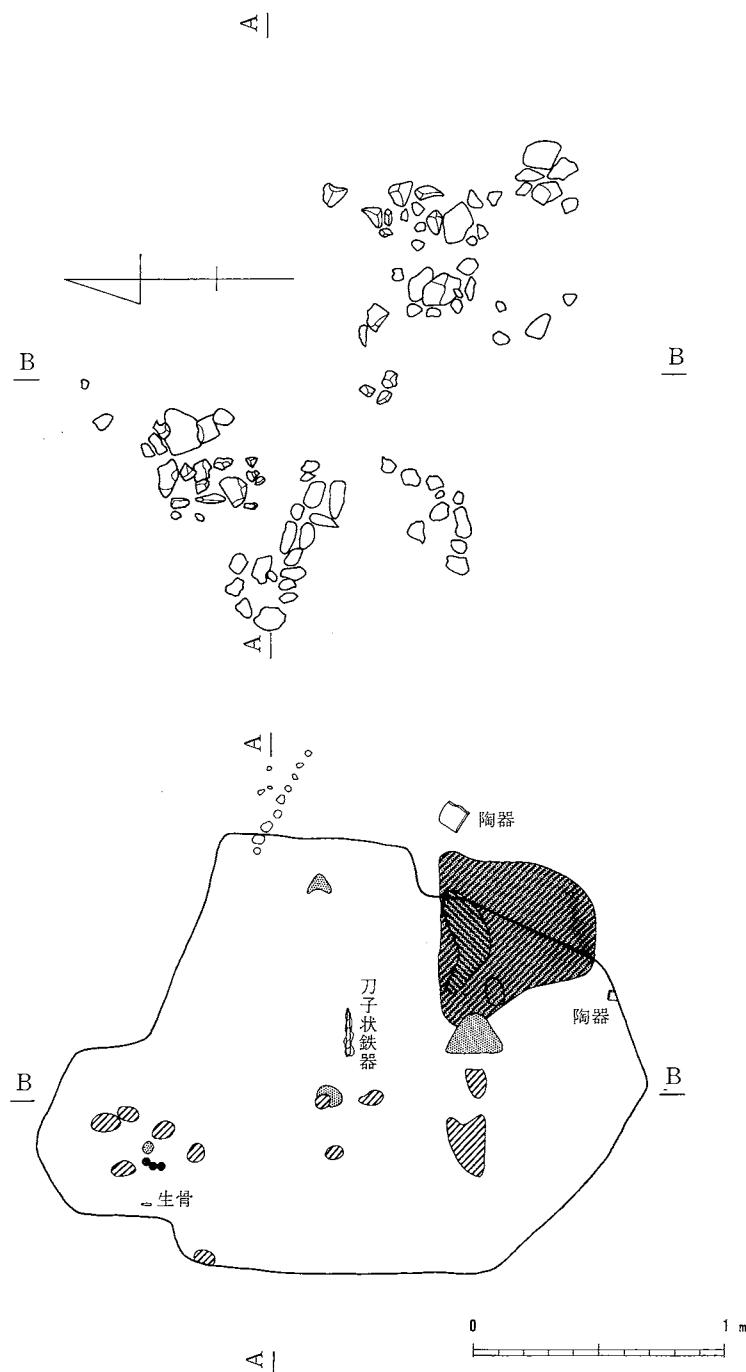
遺物（第62図1~4）

生骨の間から寛永通寶が4枚出土した。保存状態は割合よいが少し青錆がある。

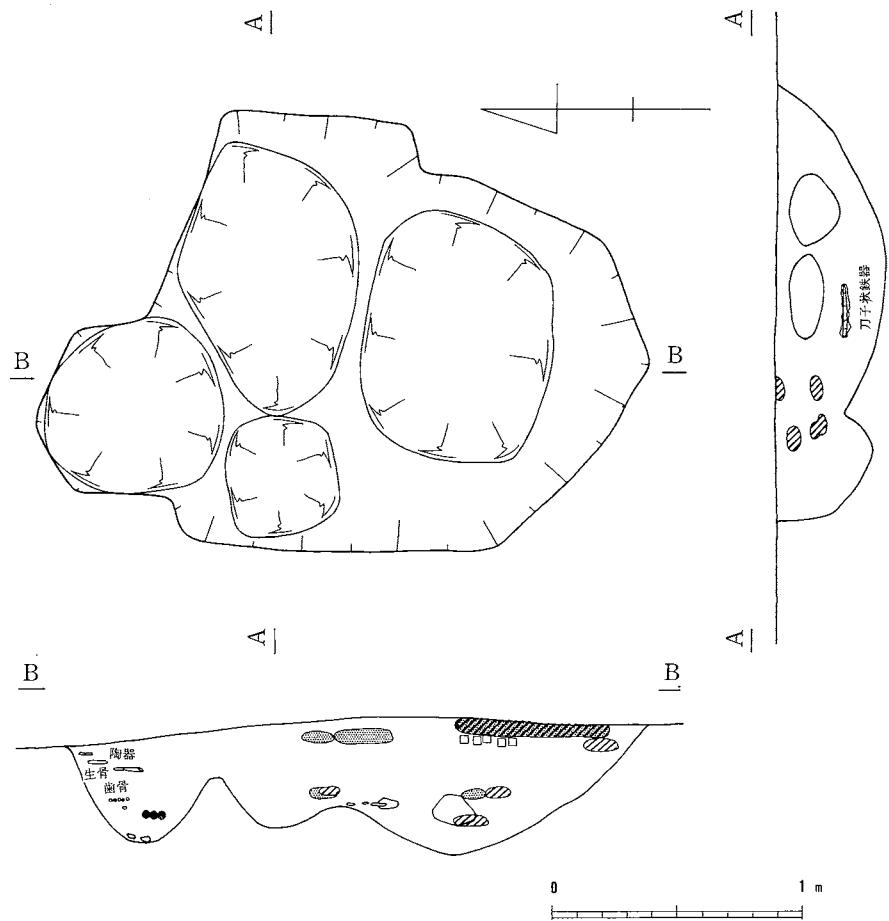
人骨：B-1地区の墓址中で最もよい状態で出土した。生骨で、頭骨は北壁近くに位置し一番深いところから出土した。土圧のため変形している。



第43図 第1号(左)第2号(右)推定墓址実測図



第44図 第3号推定墓址実測図(1)



第45図 第3号推定墓址実測図(2)

■ 第2号推定墓址

遺構（第43図）

L-4に位置し、上面は10~20cm大の石がまとまっている。全面に焼骨と炭化物が散布している。中心になる大きな石はない。

遺物

出土遺物はない。

人骨：焼骨、炭化物が少量散布している。

■ 第3号推定墓址

遺構（第44・45図）

L-3、M-3に位置する。上面は中心になるような石ではなく、10~20cm大の石がまとまっている。焼骨と炭化物の散布が多く見られた。掘り上げてみると、墓址の平面形は当初の推定とはかなり異ったものとなった。内は4つの墓坑となり切り合い関係は不明である。

遺物（第62図5~7、65図1、64図1）

底部付近より3枚の古銭が出土している。

嘉祐元寶（第62図5）以外は青銅がはげしく、重なっていて判読不可能である。第65図1は刀子状の鉄器で保存状態が悪いため錆びていて5分している。内部は腐蝕して空洞化している。第64図1は、墓址内南側墓坑上部より出土した頸部付近の破片である。常滑の大甕で器面は長石の吹き出しが見られ茶褐色の器膚に黄緑色の自然釉がかかっている。

人骨：墓址内全体に焼骨が散布しているが、特に墓址内南側の墓坑からは、かなりの量の焼骨と炭化物が焼土とともに出土した。厚さは約15cmである。北側の墓坑からは生骨が出土した。

■ 第4号推定墓址

遺構（第46図）

L-6に位置する。上面は、50cm大の石を中心に、10~30cm大の石がまとまっている。内部には、10~30cm大の石が入っている。

遺物

出土遺物はない。

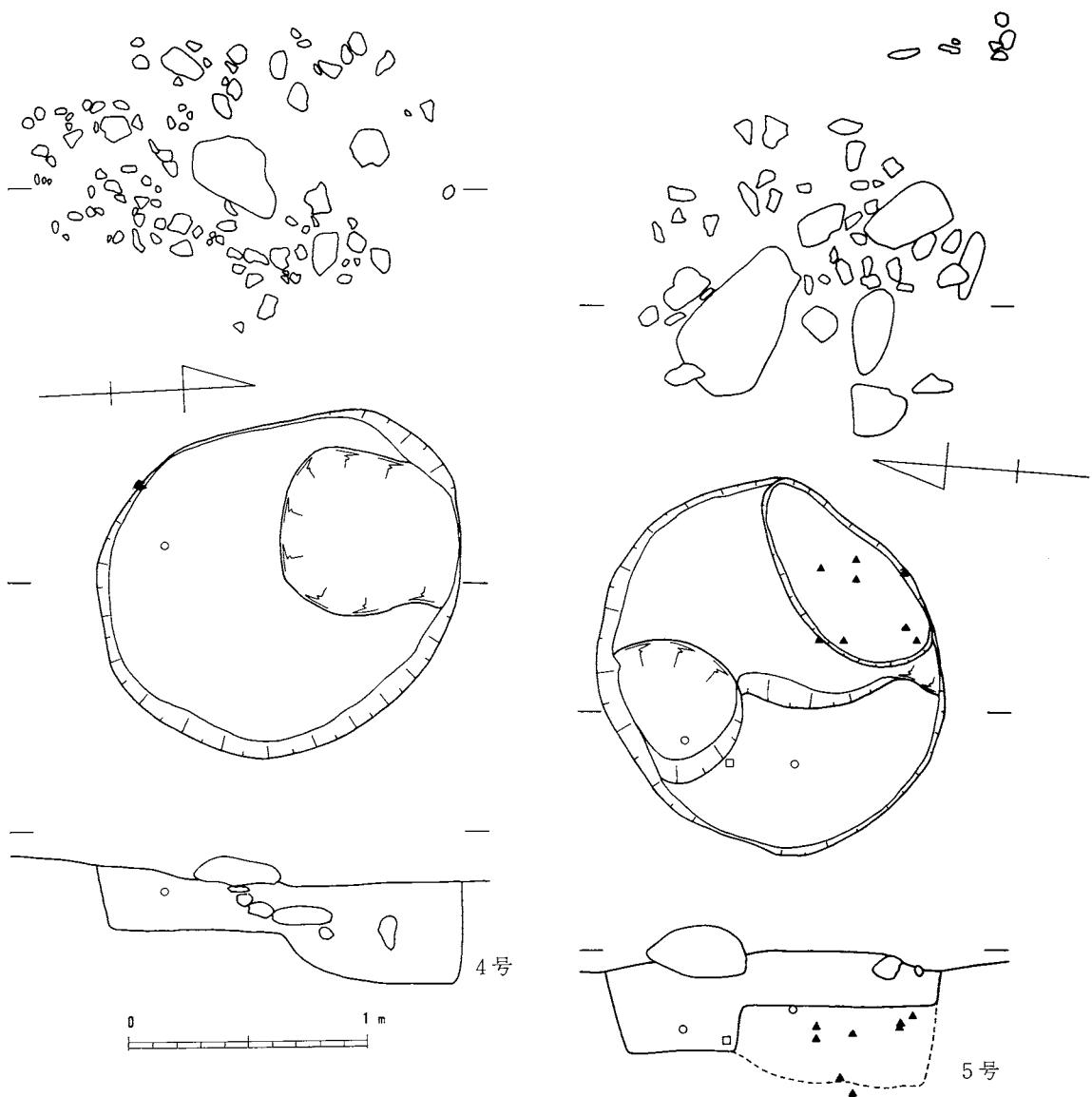
人骨：墓址内に少量の焼骨が散布するのみである。

■ 第5号推定墓址

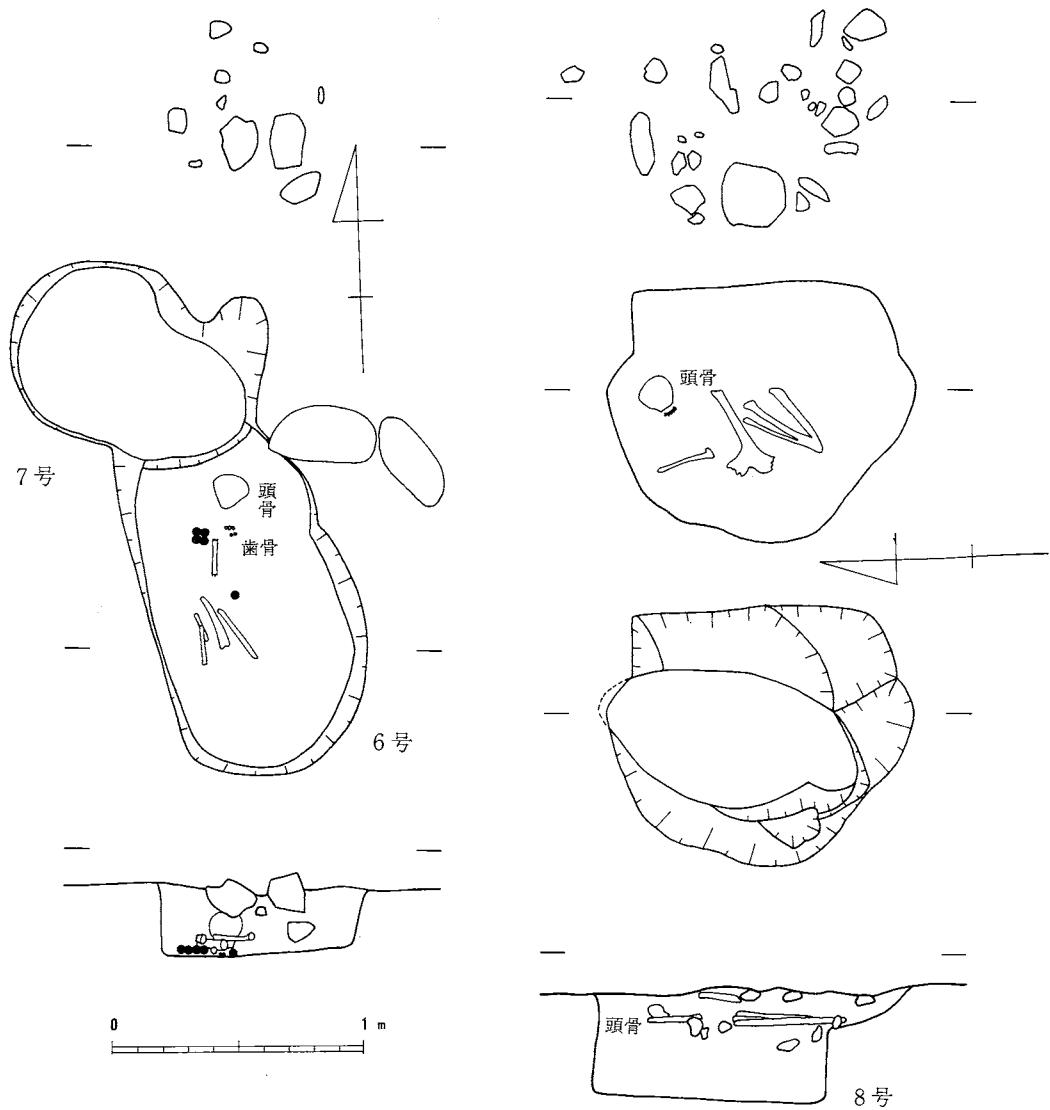
遺構（第46図）

M-5、M-6、N-5、N-6に位置する。上面は、50cm大の石と10~40cm大の石がまとまっている。焼骨の散布はわずかである。

墓址内は一様ではなく、鉄器の出土状態もかたよっているので、墓址が重複しているかもしれない。



第46図 第4号(左)第5号(右)推定墓址実測図



第47図 第6号，7号（左）第8号（右）推定墓址実測図

遺物（第65図2～8）

墓址内南側より鉄器が出土した。2～6は釘、7は留金具、8は部分のみで形状、用途ともに不明である。保存状態は悪い。

人骨：わずかな焼骨と炭化物が散布しているのみである。

■ 第6号推定墓址

遺構（第47図）

M—4、M—5に位置する。上面は、石が少なく、20cm大の石が2個中心にある。

遺物（第62図8～12）

人骨の間より古銭が5枚出土した。8～11は寛永通寶で、9は裏面に「文」の字があり10は一部欠損している。保存状態はわりあいよく、表面に少し青錆と一部に腐蝕と磨滅がある。12は、天聖元寶である。表面に青錆、裏面が磨滅し一部腐蝕により小穴がある。

人骨：生骨である。頭骨は7号墓址の隣接付近から出土し、土圧によりかなり変形している。

■ 第7号推定墓址

遺構（第47図）

M—5、N—5に位置する。上面は、40cm大の石が中心にある。中心の石付近にかなりの焼骨が散布している。この墓址は、6号墓址と切り合っていて、結果的にはつながってしまった。

遺物（第65図9）

9の釘が出土したのみである。

人骨：上面に焼骨の散布がみられる他、人骨の出土はない。

■ 第8号推定墓址

遺構（第47図）

M—4、N—4に位置する。上面は、30cm大の石を中心に、他の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

人骨：生骨で、1号と同様割合よい状態で出土した。頭骨は、墓址内の北壁近くにある。

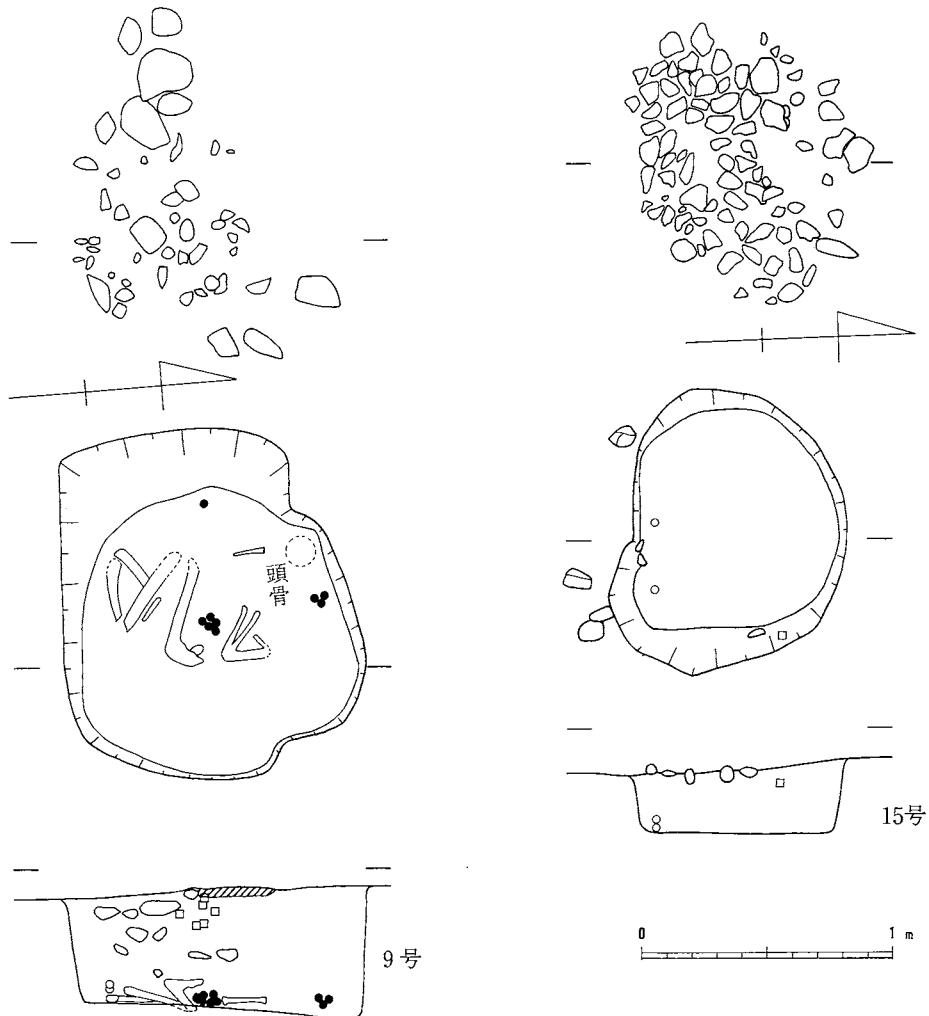
■ 第9号推定墓址

遺構（第48図）

M—3、M—4、N—3、N—4に位置する。上面は、10～20cm大の石がまとまっている、焼骨と炭化物の散布がみられる。墓址内は、上部に10～20cm大の石が少し入っている。

遺物（第62図13～21、65図10）

人骨の間より古銭9枚が出土した。第62図13～18は寛永通寶、同19は祥符元寶、同20は元祐通寶、21は、青錆がはげしく不明である。



第48図 第9号(左)第15号(右)推定墓址実測図

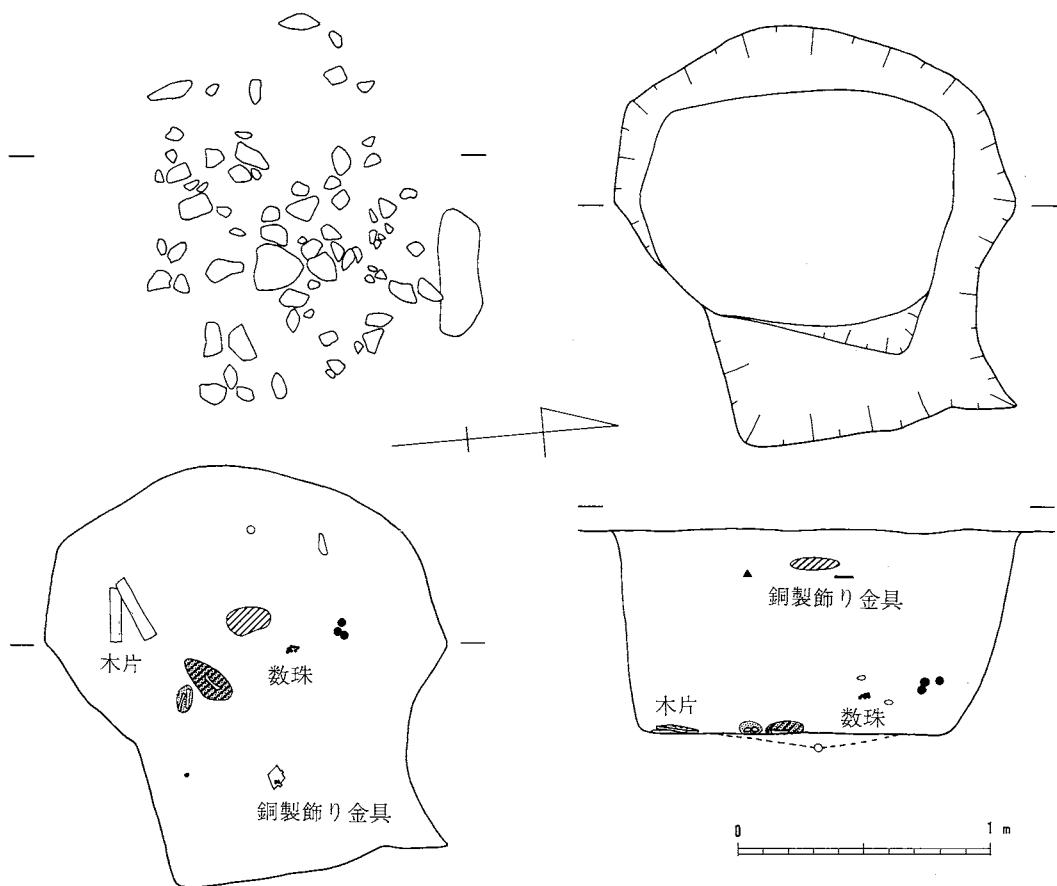
保存状態は、腐蝕により14は一部欠損、18は3分の1程欠損している。他は、青銘と一部磨滅、腐蝕している。第65図10は、釘である。保存状態が悪いため鋸びて3分している。

人骨：墓址内上部に焼骨と炭化物がかたまっている。底部より生骨が出土。頭骨は、北西隅の壁際より出土したが保存状態が悪いため細片化がはげしく範囲でしか図示できなかった。

■ 第10号推定墓址

遺構（第49図）

M—3に位置する。上面は、10~20cm大の石がまとまっており、石間に焼骨が散布している。当墓址は、今回の墓址群中最も深いものであり、約1mを測った。

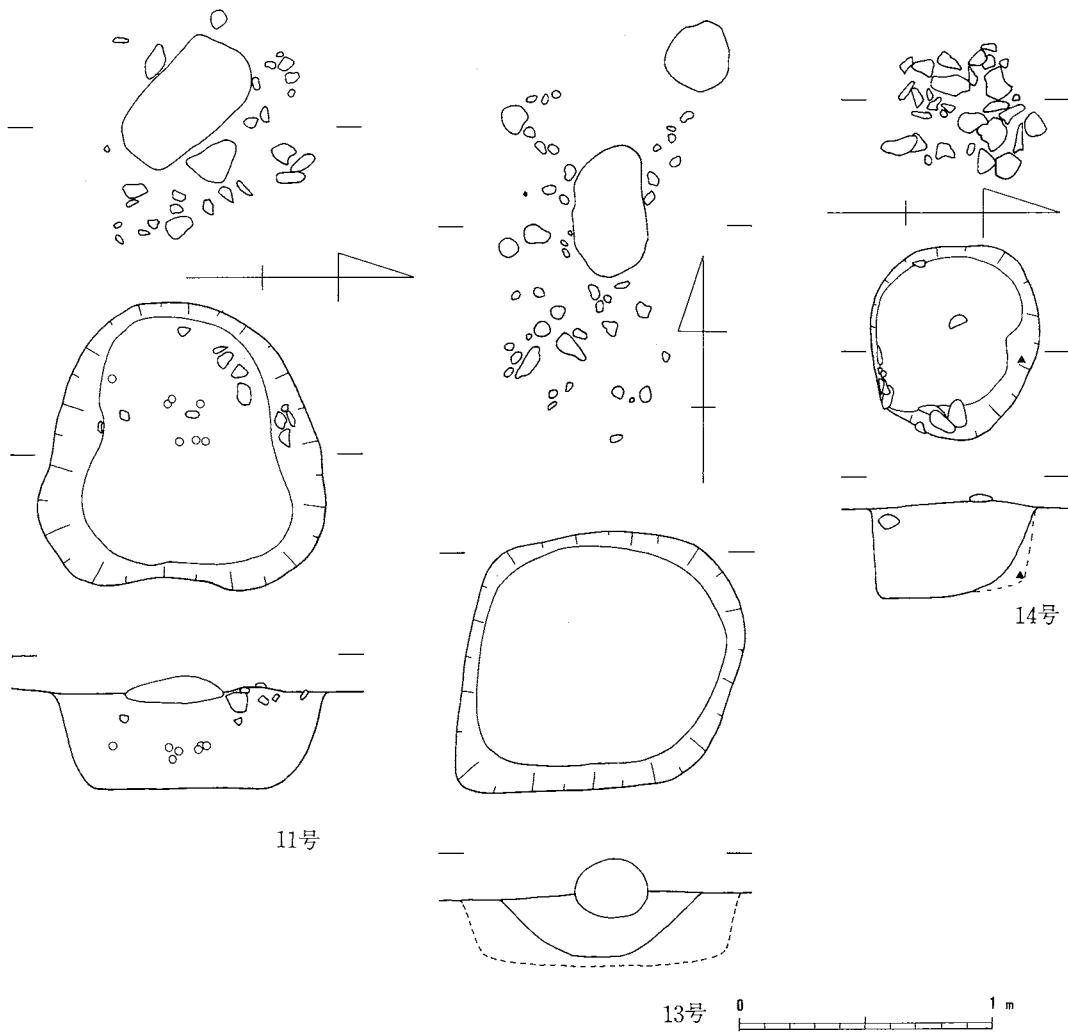


第49図 第10号推定墓址実測図

遺物 (第62図22~24, 65図11・12, 66図34)

第62図22, 23は、寛永通寶であり、22は青銅が少しある。23は、24と青銅により重なっており、このため24は不明古錢である。第65図11は頭が直角に曲っている釘である。12は、墓址上部付近より出土した帶留と思われる銅製飾り金具である。大きさは長さ9 cm, 厚さ1 mm, を測る。裏側に2ヶ所並んで紐を通す金具があり、現在でも通した紐が少し残っている。第66図34は、底部付近より出土した数珠玉7個である。木製であるがくわしい材質は不明で、保存の状態はあまりよくない。また底部より長さ25cm, 幅5 cm, 厚さ2 cmの木片が2個重なって出土した。

人骨：墓址内上部に焼骨が散布し、底部付近と底部から生骨が出土した。



第50図 第11号(左)第13号(中)第14号(右)推定墓址実測図

■ 第11号推定墓址

遺構（第50図）

M—2, N—2に位置する。上面は、50cm大の石がある。

遺物

出土遺物はない。

人骨：墓址内全体に焼骨の散布が認められる。

■ 第13号推定墓址

遺構（第50図）

M—1, M—2, N—1, N—2に位置する。上面は、50cm大の石がある。この墓址は、調査区域外にかかるため一部分しか調査することができなかった。

遺物

出土遺物はない。

人骨：散布等は認められない。

■ 第14号推定墓址

遺構（第50図）

N—6に位置する。上面は、10～30cm大の石がまとまっている。

遺物（第65図13, 66図14・15）

13, 14は、上下が欠けているが釘と思われる。15は、環状の指貫と思われる鉄製品である。かなり鋸びていて細部は不明であるが、面が湾曲で一方の幅が狭くなっている。

人骨：散布等は認められない。

■ 第15号推定墓址

遺構（第48図）

N—5, N—6に位置する。上面は、中心になるような大きな石ではなく、10～20cm大の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

人骨：底部付近に焼骨、炭化物の散布がわずかに認められる。

■ 第16号推定墓址

遺構（第51図）

N—5に位置する。上面は、中心になるような大きな石ではなく、10～30cm大の石がまとまっている。石間に焼骨、炭化物の散布が見られる。内部には10～20cm大の石が入っている。

遺物（第66図16～25）

10本の釘が出土した。保存状態はよいとはいはず、かなり鋸びてている。19は、ほぼ完形と思われるが他は上下とも欠けている。

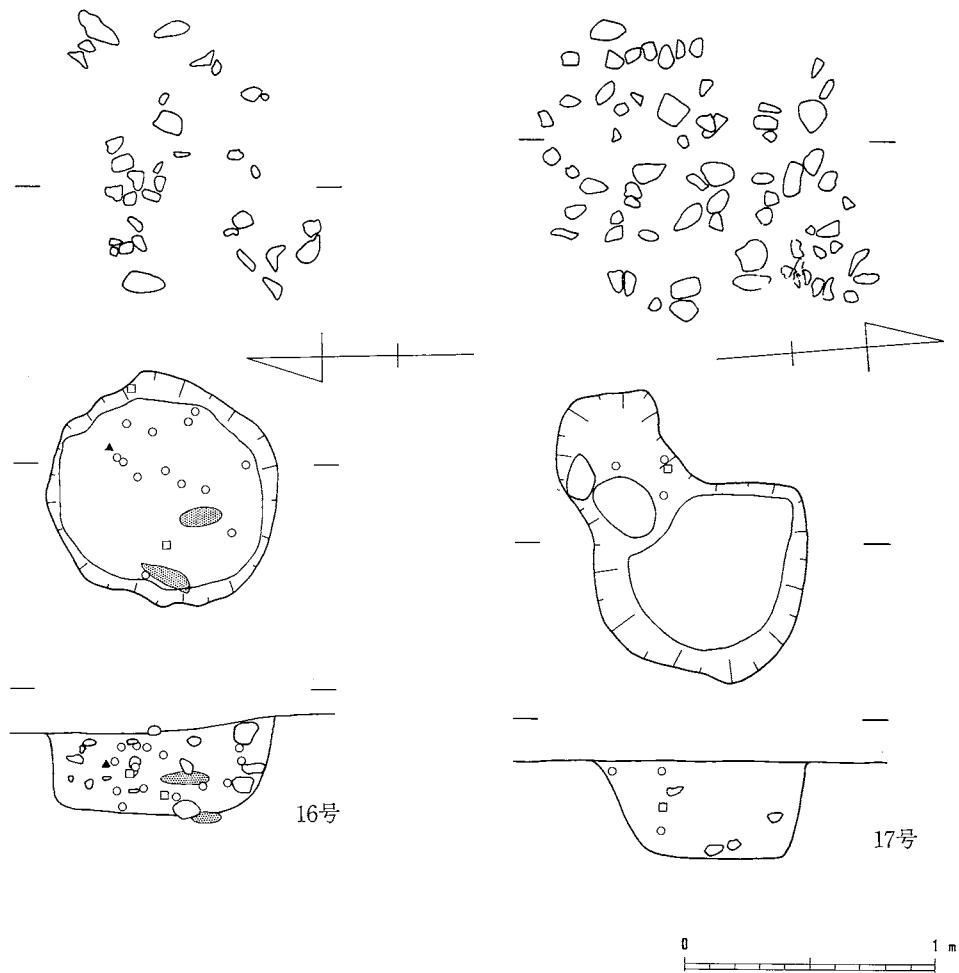
人骨：墓址内全体に焼骨、炭化物の散布が見られる。

■ 第17号推定墓址

遺構（第51図）

N—3, N—4に位置する。上面は、中心になる大きな石がなく、10～30cm大の石がまとまっている。焼骨がわずかに散布する。

遺物



第51図 第16号(左)第17号(右)推定墓址実測図

出土遺物はない。

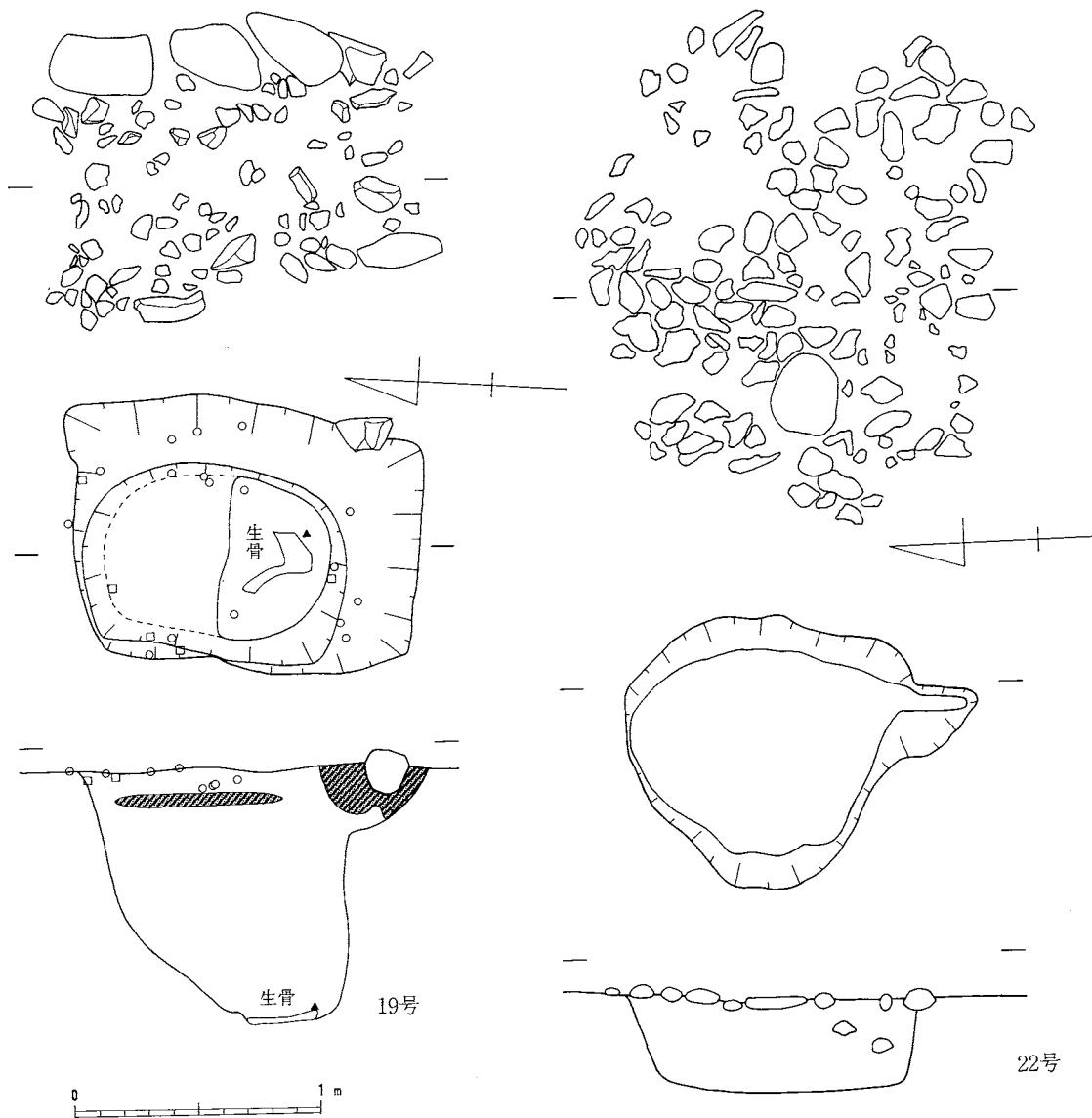
人骨：墓址内、南西部付近に焼骨、炭化物の散布が見られる。

■第19号推定墓址

遺構（第52図）

N—3, O—3に位置する。上面には、50cm大の石が3個南北に並んでおり、方形に囲った東辺を思わせる。内側は、10~30cm大の石がまとまっており、石間に焼骨が散布している。この墓址は、第10号とともに墓址群中最も深く、深さ約1mを測る。

遺物（第64図9, 66図26・27）



第52図 第19号(左)第22号(右)推定墓址実測図

上面東側、50cm大の石の間より天目茶碗の口縁部が出土した。(第64図9)濃い鉄釉がかけられ、胎土は灰白色をなし緻密である。第64図26、27は釘である。2本ともかなり鋸びており、26は下半分、27は上が欠けている。

人骨：墓址内上部に焼骨や炭化物が多量に散布している。底部には、生骨が一部出土した。

■第22号推定墓址

遺構（第52図）

N—2に位置する。上面は、20~40cm大の石がまとまっている。少量の焼骨が散布している。内部には、20cm大の石が少し入っている。

遺物

出土遺物はない

人骨：散布等は認められない。

■第26号推定墓址

遺構（第53図）

N—4、N—5、O—4、O—5に位置する。上面は、10~30cm大の石がまとまって環状になり、内側は石がまばらで空白になっている。内側には焼骨の散布が見られる。この墓址は、墓址群中最大の形状が推定され長径は約3.6mを測る。墓址内部には20cm大の石が入っている。

遺物

釘の一部と思われるものが出土したが少片のため図示できなかった。

人骨：底部辺に多量の焼骨のかたまりがあり、厚さは約10cmである。

■第30号推定墓址

遺構（第53図）

O—4に位置する。上面は、10~30cm大の石がまとまっており、中心になるような石が見あたらぬが、内部に50cm大の石があり中心になる石と思われる。

遺物（第62図25~27）

底部付近より古銭3枚が出土した。25、26は、寛永通寶である。青銹、磨滅、一部は腐蝕している。27は、元豊通寶で、保存状態は青銹と磨滅が見られる。

人骨：出土の人骨は生骨である。東と北西の壁際より10本の歯骨、他には小片の骨が出土した。

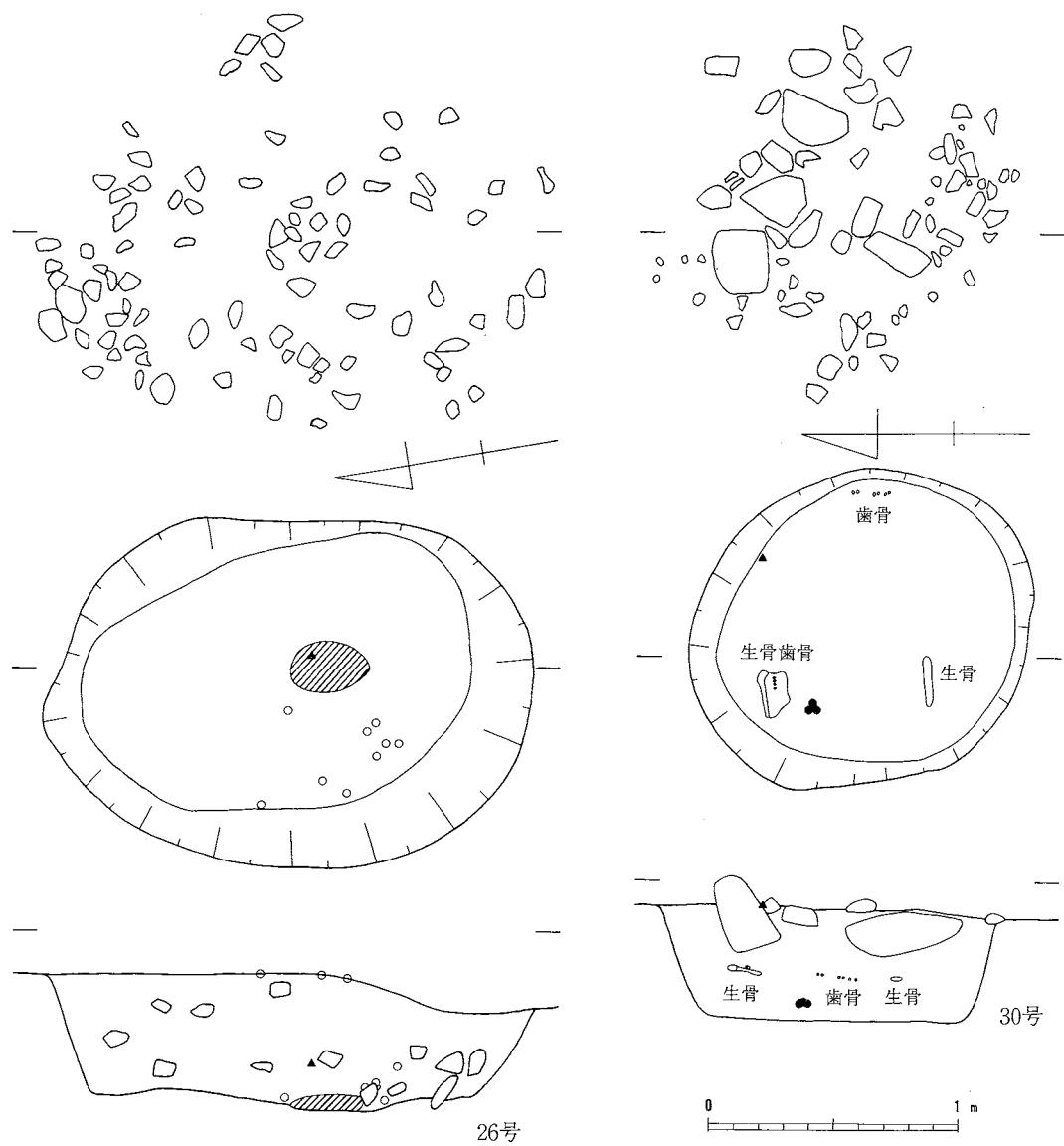
■第34号推定墓址

遺構（第54図）

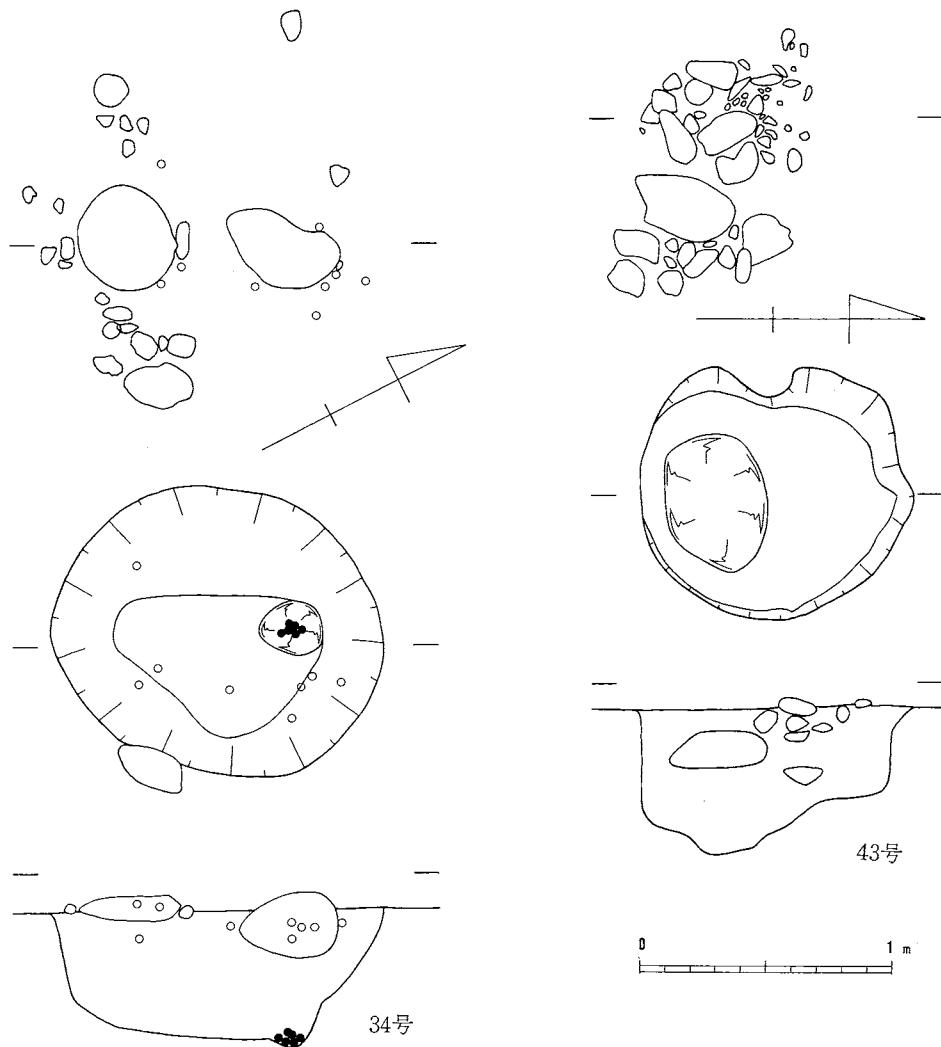
O—3、O—4に位置する。上面は、50cm大の石が中心にあり、かなりの量の焼骨が散布している。

遺物（第62・63図28~33、66図28）

底部の北隅より古銭6枚がまとまって出土した。第62図28は、洪武通寶で青銹のため同29と重っ



第53図 第26号(左)第30号(右)推定墓址実測図



第54図 第34号(左)第43号(右)推定墓址実測図

ており29は不明古銭である。同30は元祐通寶で青鏽、磨滅、腐蝕があり一部にひび割れが入っている。31, 32は元豊通寶である。青鏽、磨滅、腐蝕があり特に32は青鏽がはげしく同33と重なっている。33は不明古銭である。第66図28は、釘である。鏽がはげしいため4分しているが、長さ約8cm、頭が直角に曲る。

人骨：墓址内全体に焼骨が散布している。

■第43号推定墓址

遺構（第54図）

O—1に位置する。上面は、40cm大の石が中心に10～30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布している。内部は40cm大の石と20cm大ぐらいの石が入っている。

遺物（第64図14）

14は、常滑の壺の頸部破片と思われる。胎土は灰白色で、少し砂粒を含む。器面には長石の吹き出しが見られ、茶褐色の器膚に黄緑色の自然釉がかけられている。

人骨：生骨や焼骨の散布は認められない。

■第45号推定墓址

遺構（第55図）

P—1、P—2に位置する。30cm大の石が2個中心にある。多量の焼骨が散布している。

遺物（49図版34・35）

青銹と腐蝕がかなり進んでおり、重なっているため両方とも不明古錢である。このため拓影では、掲示できず図版のみである。

人骨：墓址内全体に焼骨の散布がみられ、底部付近には、相当量の焼骨のかたまりが出土した。

■第46号推定墓址

遺構（第55図）

P—1、P—2に位置する。上面は石が少ないが、焼骨の散布が著しい。

遺物（第64図3～5）

3は、うすい茶灰色の胎土で、内外面ともにうすい緑色の釉がかかっている。瀬戸系の灰釉平碗底部付近の破片である。4、5は、須恵器壺の底部と口縁部である。4は、付高台で底部の内側に糸切り痕が残りまわりはヘラナデで調整されている。5は、口径13cm、推定器高は、約4cmを測る。色調は青灰色を呈し、胎土は緻密、焼成は良好である。

人骨：墓址内西壁際にかなり多量の焼骨のかたまりが出土した。

第47号推定墓址

遺構（第56図）

R—1、R—2に位置し、上面は40cm大の石が中心にある。焼骨の散布が見られる。

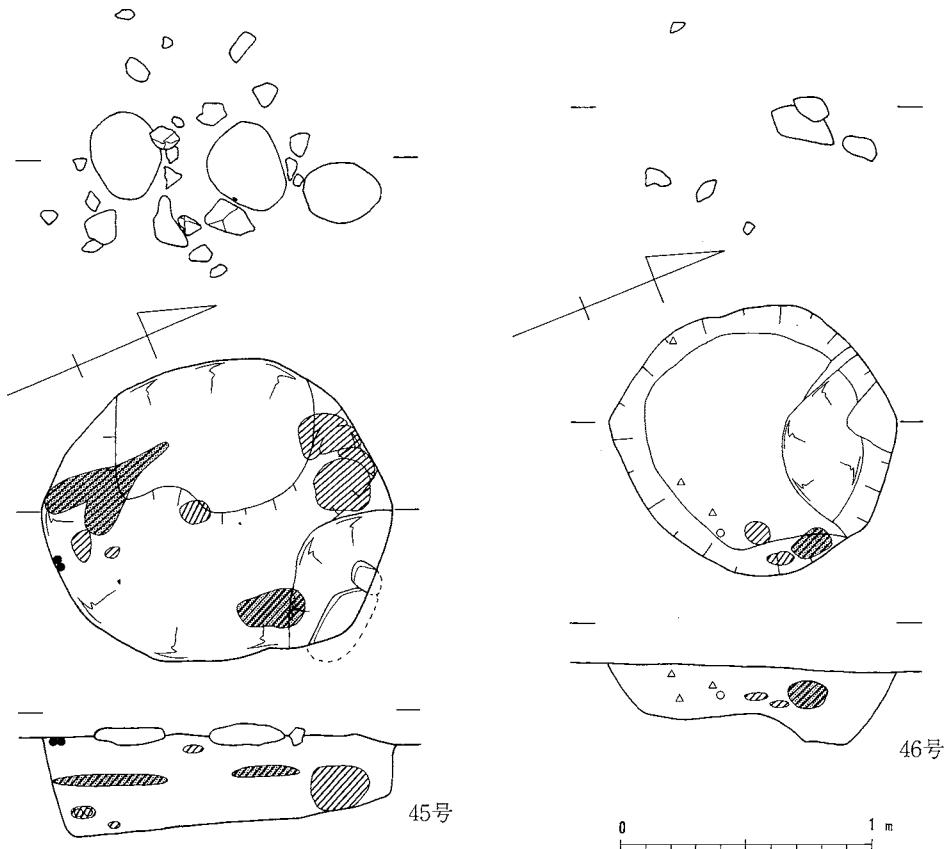
遺物

出土遺物はない。

人骨：墓址内上部に焼骨が散布する。

■第48号推定墓址

遺構（第56図）



第55図 第45号(左)第46号(右)推定墓址実測図

S-2に位置する。上面は、40cm大の石がある。

遺物

出土遺物はない。

人骨：生骨や焼骨の散布は認められない。

■第49号推定墓址

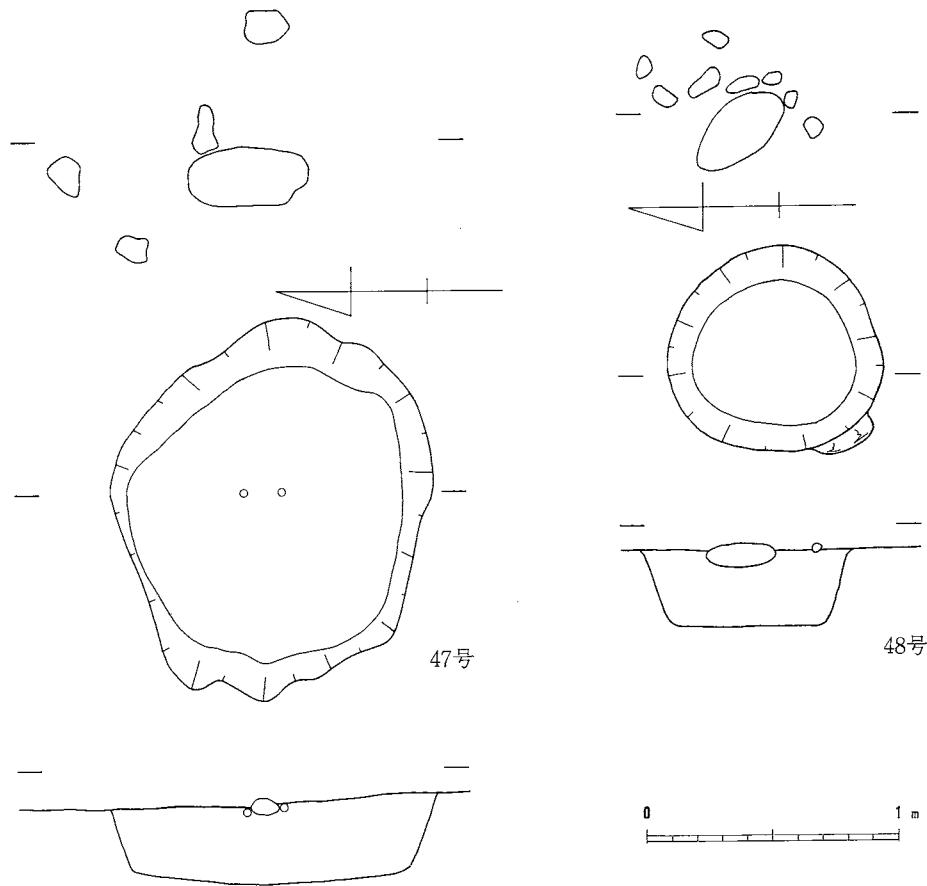
遺構（第57図）

S-1, S-2に位置する。上面は、40cm大の石があり、10~30cm大の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

人骨：墓址内に少量の焼骨が散布する。



第56図 第47号(左)第48号(右)推定墓址実測図

■第54号推定墓址

遺構（第57図）

T—1, U—1に位置する。上面は中心になるような大きい石ではなく10~20cm大の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

人骨：生骨や焼骨の散布は認められない。

■第56号推定墓址

遺構（第58図）

U—1に位置し、上面は、10~20cm大の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

人骨：少量の焼骨が散布している。

■第59号推定墓址

遺構（第58図）

V—1に位置する。上面は中心になるような大きな石はなく、20~30cm大の石がまとまっている。石間に焼骨と鉄器の散布が見られる。

遺物（第64図6・7、66図30）

墓址内の上部より出土した。第64図6は、瀬戸系瓶子胴部下半の破片である。淡緑色の釉が全面に薄く施されているのがむらがある。胎土は、灰白色で、緻密な良土である。7は碗の底部と思われ、6と同じに淡緑色の釉が施されている。胎土は灰白色で緻密な良土である。第66図30の釘は、上部が曲っていて頭部を欠く。鎧のため4分している。なお、上面出土の鉄器は、細片のため図示できなかった。

■第61号推定墓址

遺構（第59図）

M—7、M—8、N—7、N—8に位置する。上面は、中心になる大きな石はなく、10~20cm大の石がまとまっている。石間に焼骨が散布している。

遺物

出土遺物はない。

人骨：墓址内上部にわずかな焼骨の散布がある。

■第63号推定墓址

遺構（第59図）

O—8に位置する。上面は、40cm大の石と10~20cm大の石がまとまっている。

遺物

出土遺物はない。

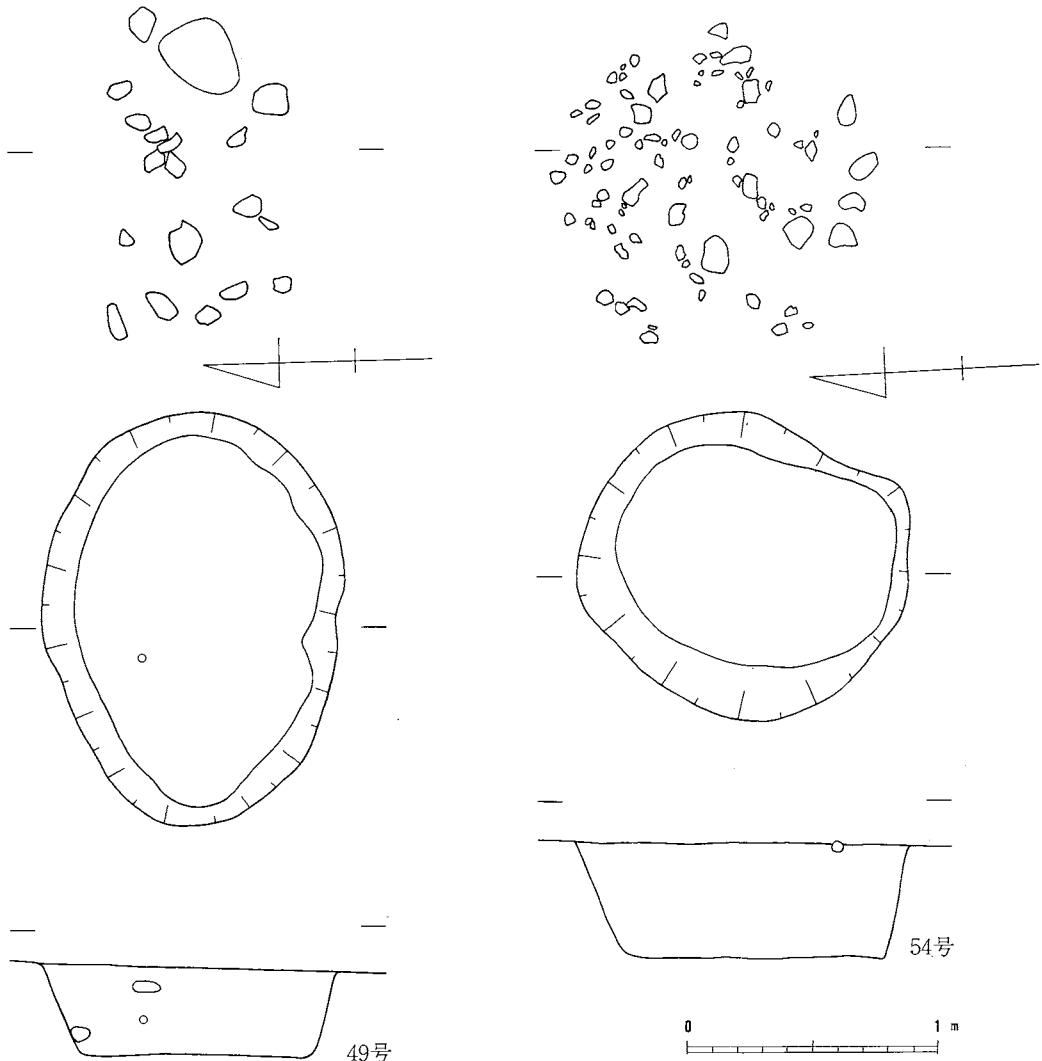
人骨：生骨や焼骨の散布は認められないが少量の炭化物の散布がある。

■第79号墓址

遺構（第60図）

B—14、C—14に位置する。上面は、30cm大の石が数個あつまっている。この墓址は、検出当初より墓址であることが確認されており、形状は径140cmの円形で残存の深さは約20cmである。

遺物（第63図36~41）



第57図 第49号(左)第54号(右)推定墓址実測図

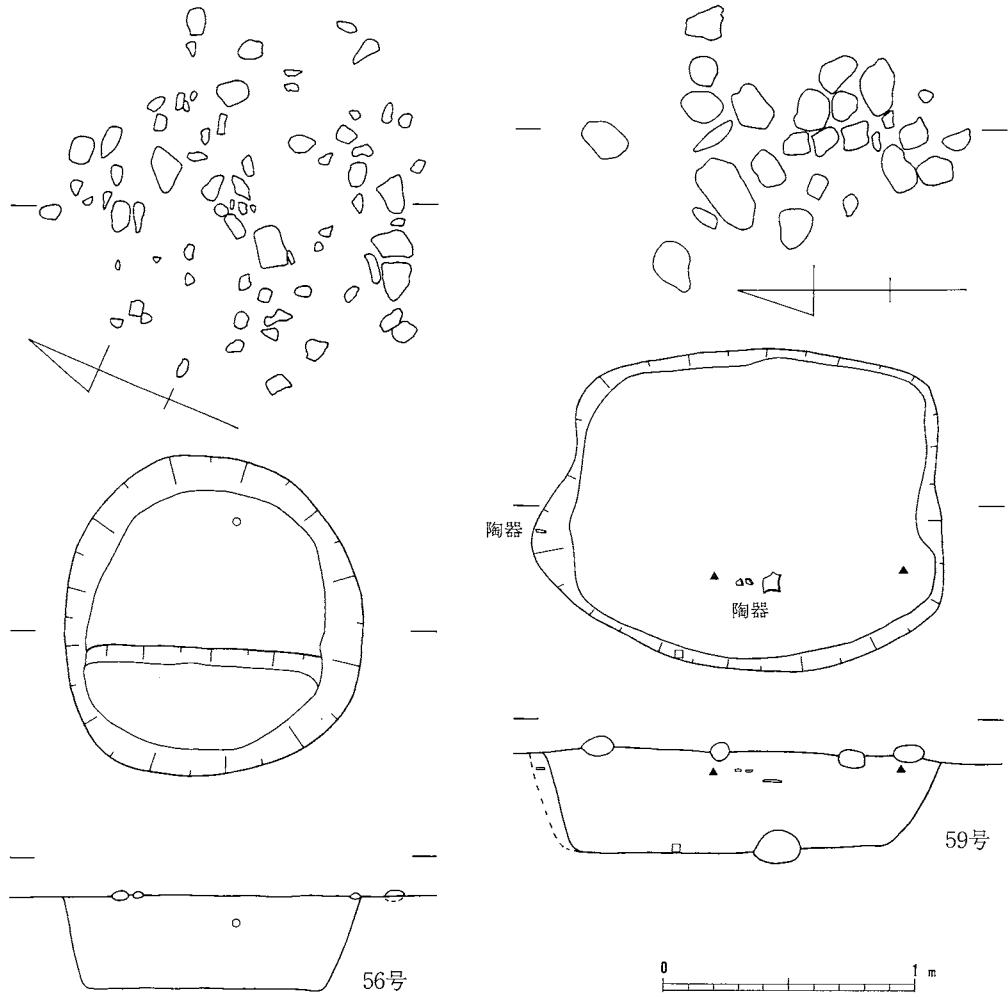
墓址内のはば中央から6枚の古銭が出土した。全て寛永通寶であり、保存の状態は少し青錆のある他は、割合よい状態である。

人骨：上部に焼骨、炭化物がかたまっている。

■第80号墓址

遺構（第60図）

E-14に位置する。上面には石がなく長径280cm、短径80cmの楕円形で、この墓址も79号と同じく当初より確認されていた墓址である。



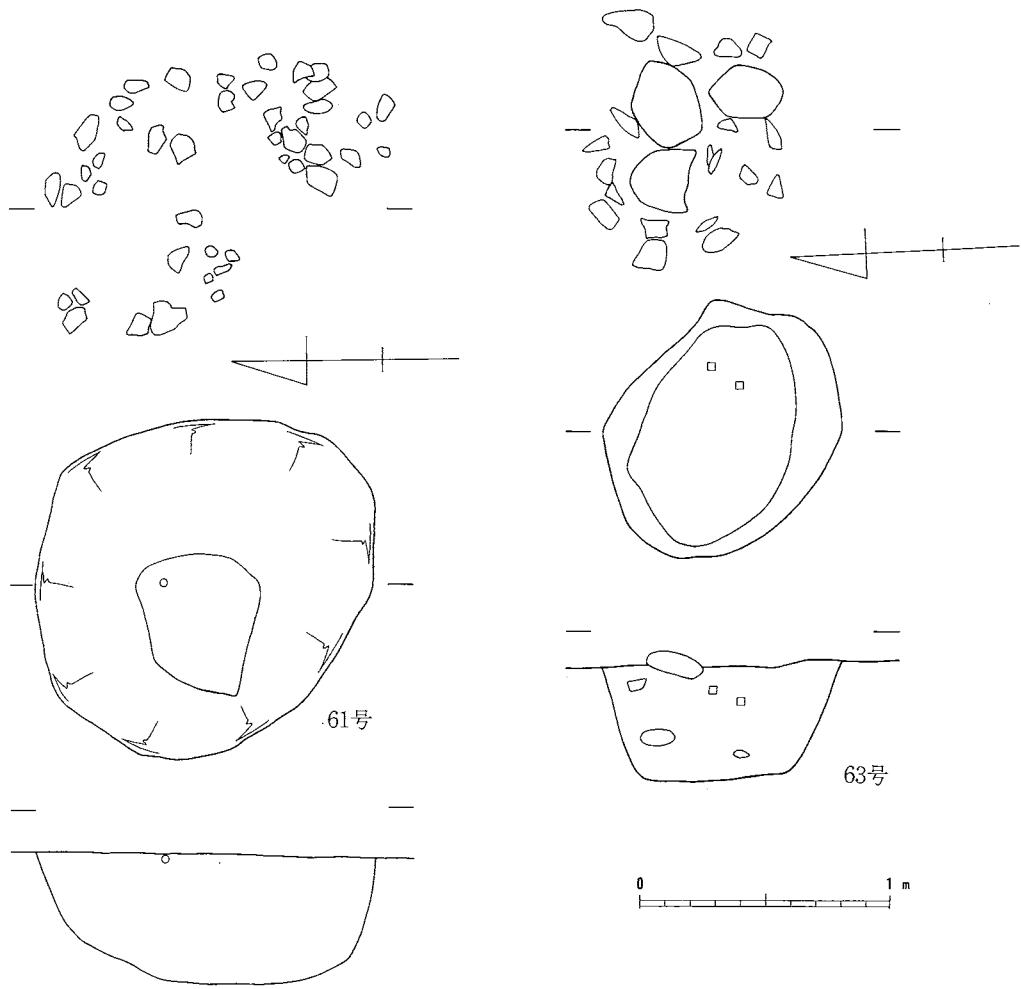
第58図 第56号(左)第59号(右)推定墓址実測図

遺物 (第63図42~47, 64図8)

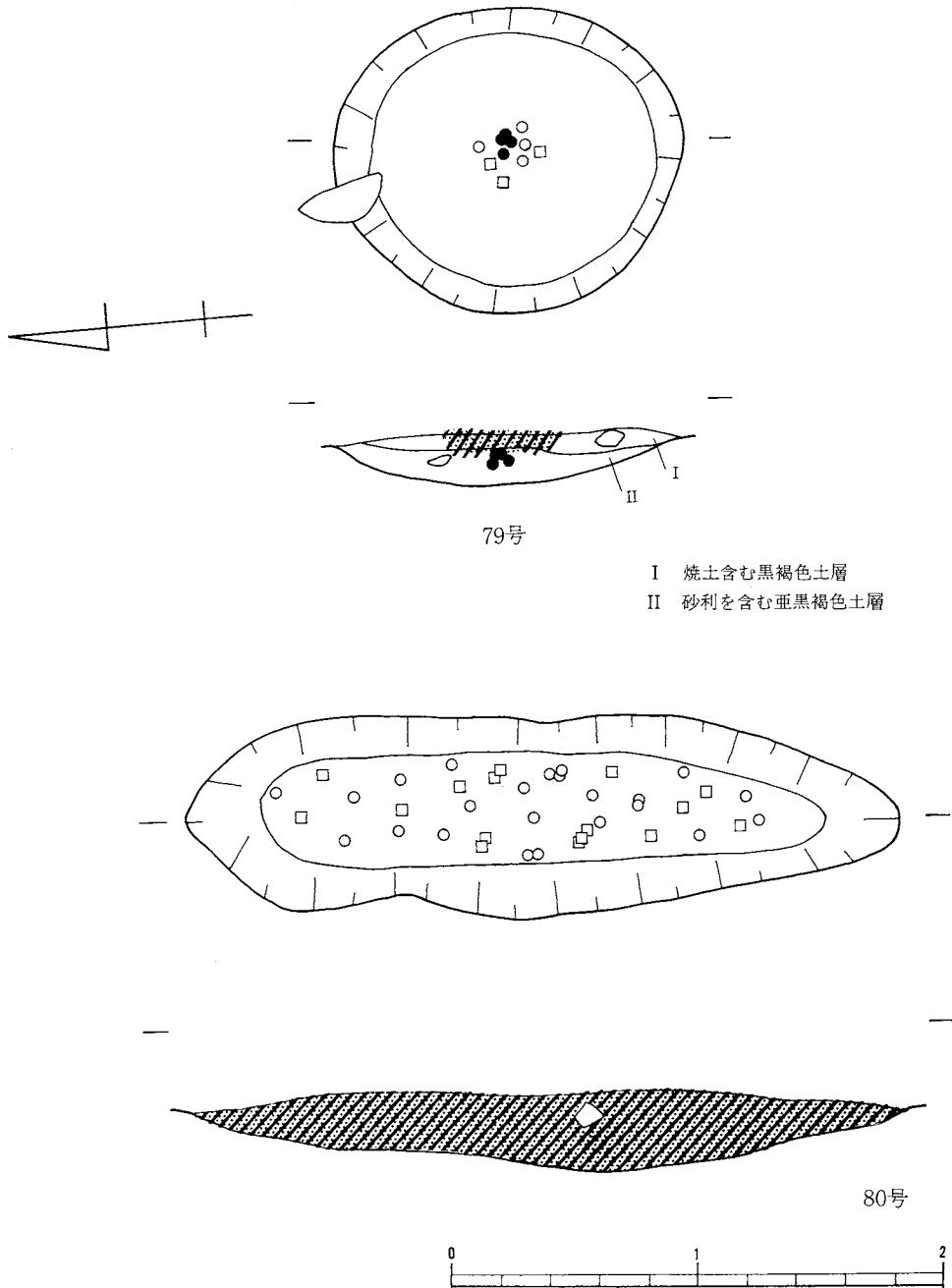
墓址内、北西隅より6枚の古銭が出土した。第63図42~47は、全て寛永通寶であり、内4枚は、鉄銭である。保存状態は、赤鏽、青鏽、一部に磨滅のある他は、割合よい状態である。

第64図8は上面より出土した片口の破片である。器厚は2~4 mm、推定口径は17.4cmを測る。外面、内面ともに濃い茶褐色の鉄釉がかかっている。美濃系の片口である。

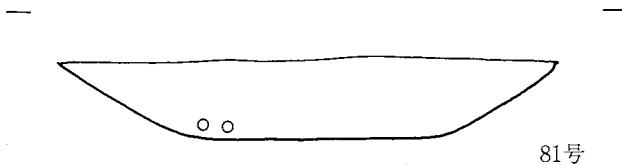
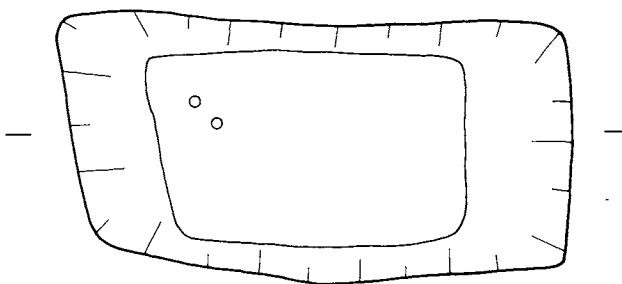
人骨：墓址内全体に、約25cmぐらいの厚さで炭化物があり、この間よりまとまって焼骨が出土した。



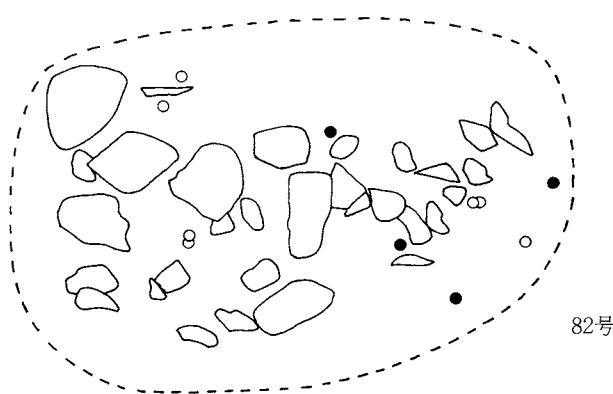
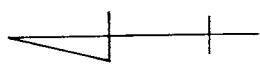
第59図 第61号(左)第63号(右)推定墓址実測図



第60図 第79号(上)第80号(下)墓址実測図



81号



82号



第61図 第81号(上)第82号(下)推定墓址実測図

■第81号推定墓址

遺構（第61図）

F—13, G—13に位置する。上面は石がなく検出時に約2m×1mの方形の落込みを確認した。

遺物

出土遺物はない。

人骨：墓址内に2, 3点の焼骨片が見られたのみである。

■第82号推定墓址

遺構（第61図）

C地区, 2号墳の石室内にある。石室と重なっているため, 平面での検出は不明で, 石室内の掘り下げにともなって発見された。古墳の石室に使用したと思われる30cm大ぐらいの石が内部にある。

遺物（49図版48～51）（第63図52）

49図版48～51は, 底部より出土した古銭である。保存状態は悪く, 赤錆が著しいので全て不明古銭である。第63図52は, 昭和20年代に同古墳が調査された際出土した古銭で, 寛永通寶である。

人骨：底部の石間に焼骨の散布が見られる。

上面出土の遺物（第63図53～74, 64図2・10～13, 66図31～33）

第63図53～63は, B—1地区より, 64～73は, B—2地区, 74は, D地区出土の古銭である。古銭の名称は, 寛永通寶が最も多く, 53～55, 57, 63, 65, 66, 68～71の11枚で, 次は, 56, 60, 67, 74の4枚で, 熙寧元寶である。他は, 53の元豊通寶, 58の政和通寶, 59の元祐通寶, 64の永樂通寶, 72の嘉祐通寶である。また, 赤錆や欠損のため不明の古銭は, 61, 62, 73の3枚である。第64図2, 10～13は, B—1地区出土の陶器片である。2は, 美濃系織部と思われる碗の底部である。黄白色の胎土で緻密であり, 全体に淡黄色の釉がかかっている。織部の特徴である緑釉, 茶釉がみられる。10は, 濱戸系の瓶子と思われる。破片であるため器形の細部については不明であるが, 頸部は, 細く, 肩部は円みをもつ。内面は, 指頭によるおさえ痕があり, 接目痕も明瞭に残る。胎土は, 灰白色で緻密であり, 外面には, 光沢のある淡緑色の灰釉がかかっている。11は, 小破片であるため器形は不明である。胎土は, 灰白色で緻密であり, 外面, 淡茶褐色の器膚に淡緑色の灰釉がうすくかかっているが, 肩部から流れてきた釉が厚くなっている。12も小破片のため器形は不明である。胎土や釉は11と同じであるが釉のかかりにむらがある。13は, 壺か甕の胴部かと思われるが小破片であるため不明である。胎土は灰白色で, 砂粒, 長石粒を含む。釉は, 光沢のある緑黄色である。第66図31, 33は釘。32は刀子状の鉄器である。31は上部を欠き, 33は頭部が直角に曲る大形の釘である。32は, 錆のため6分しており, 腐蝕して内部が空洞化している。

掘り上げ結果の所見（付図2・第67図）

この墓址群は, 前記のように, 推定墓址として記述した。掘り上げた結果, 人骨の出土状態など

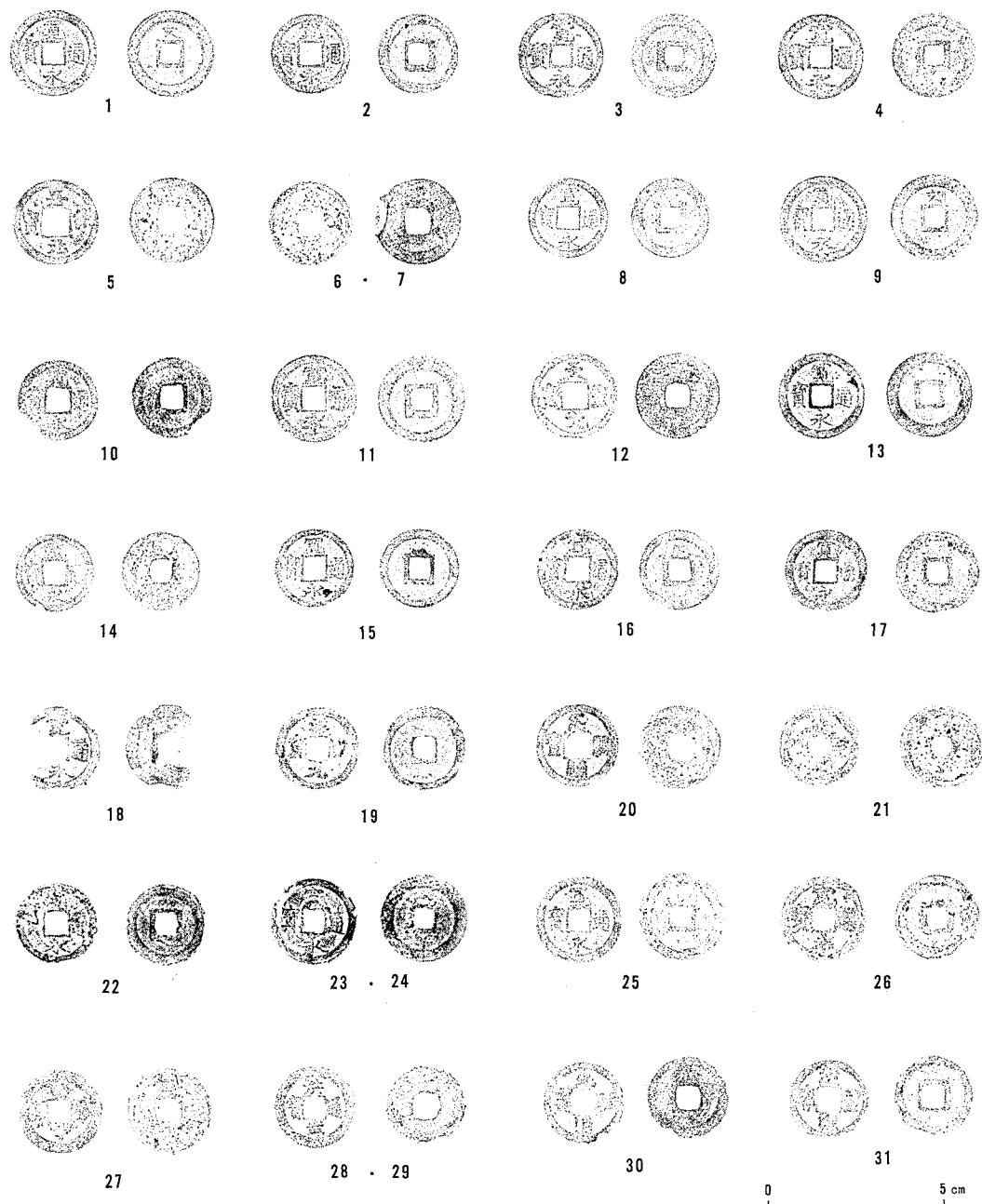
から墓址をまとめたいと思う。

墓址群中、生骨を出土した墓址は、第1，3，6，8，9，10，19，30号の8墓址である。この内、第1，6，8号は、頭骨がはっきりした形で、墓址内北側から出土した。攪乱されていて埋葬状態など明確ではないが、北向に葬られたと思われるものもある。第9号は、頭骨が細片化している。第3，10，19，30号は、頭骨が出土しなかった。次に上面の焼骨散布状況は、ほとんどの墓址周辺に散布していた。特にB—1地区南東の墓址上面には、散布が顕著である。内部より焼骨が出土した墓址は、第2，3，4，5，11，15，16，17，19，26，34，45，46，47，49，56，61，79，80，81，82号の21墓址である。この内第3，26，45，46，80号については、火葬したと思われる状態で、焼骨がまとまって出土した。出土した遺物は、全体的に見て、量は少なかった。また古銭を除けば、破片ばかりであった。古銭を出土した墓址は、第1，3，6，9，10，30，34，45，79，80，82号の11墓址である。この内、第34，79，80号には6枚、第9号は9枚、第6，82号は5枚であった。また上面からは、B—1地区では11枚、B—2地区では10枚が出土した。鉄器の出土は、第3，5，7，9，10，14，16，19，34，42，59号の11墓址である。鉄器はほとんどが釘で、保存状態が悪いため錆びて、おもに細片であった。陶器片が出土した墓址は、第3，43，46，59，80号の5墓址である。

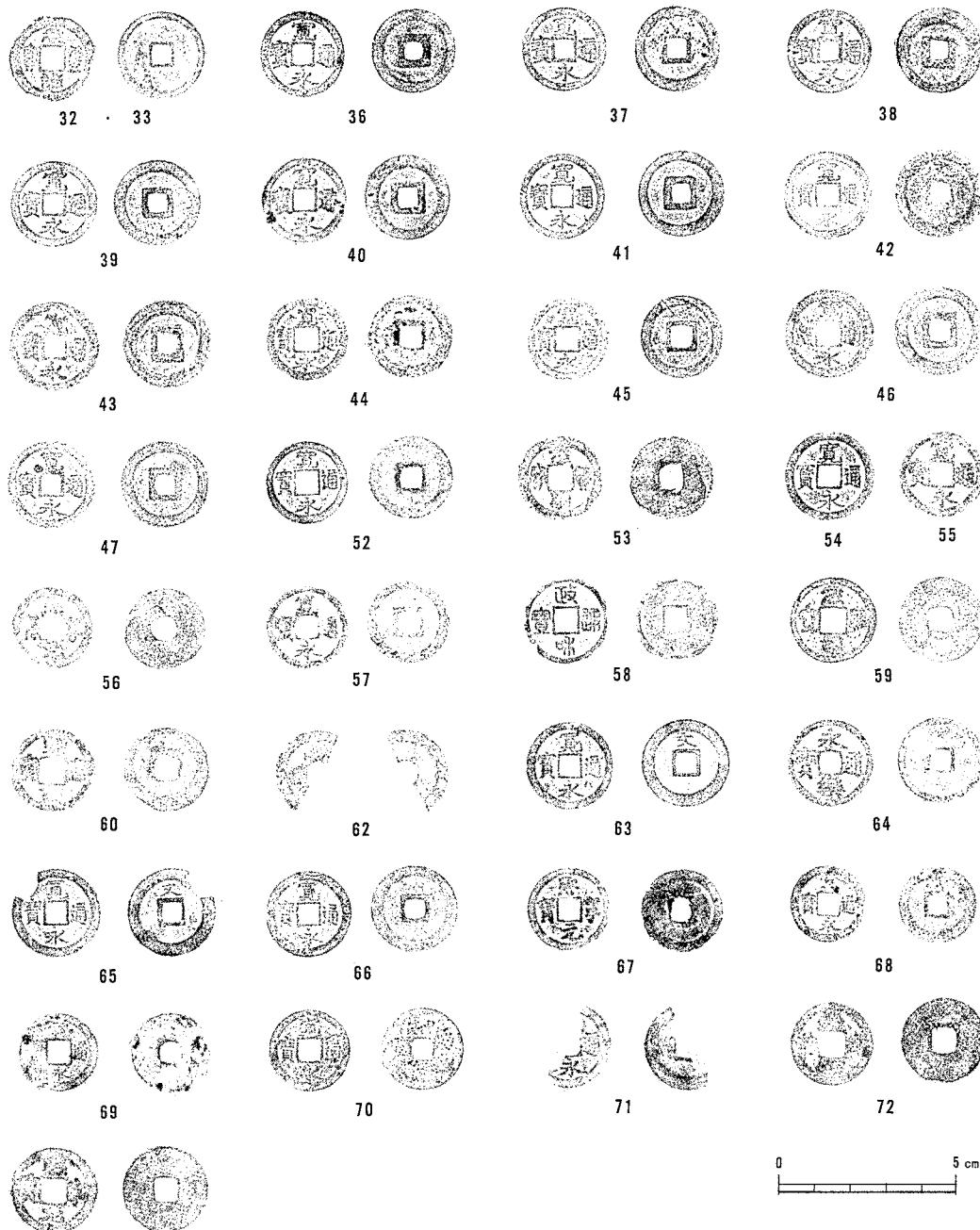
破片ばかりであるが、壺、甕が多い。第46号から須恵器片2点出土しているが、周辺に古墳があるので洪水等の理由で流れ込んだものと思われる。第80号の片口も上面からの出土のため、隣接する、土座敷の遺物の混入かと思われる。他の遺物は、第10号から銅製飾り金具(帶留)、第14号から環状鉄製品(指貫)が出土した。

以上のことから墓址を考えてみると、当初から確認されていた第79，80号を除き、生骨の出土した8墓址の内第1，6，8，9号、生骨は少ないが、他の遺物の出土が多い第10号、頭骨はないがかなり大きな生骨の出土した第19号、それに焼骨がまとまった状態で出土した第3，26，45，46号は、確実に墓址とみてよいと思う。他は、この地区が墓地として使用された期間が長いため、切合いかひどく、攪乱していて墓址としての決定的な確証が得られなかった。このため推定墓址の域を出ない。

(熊谷康治)

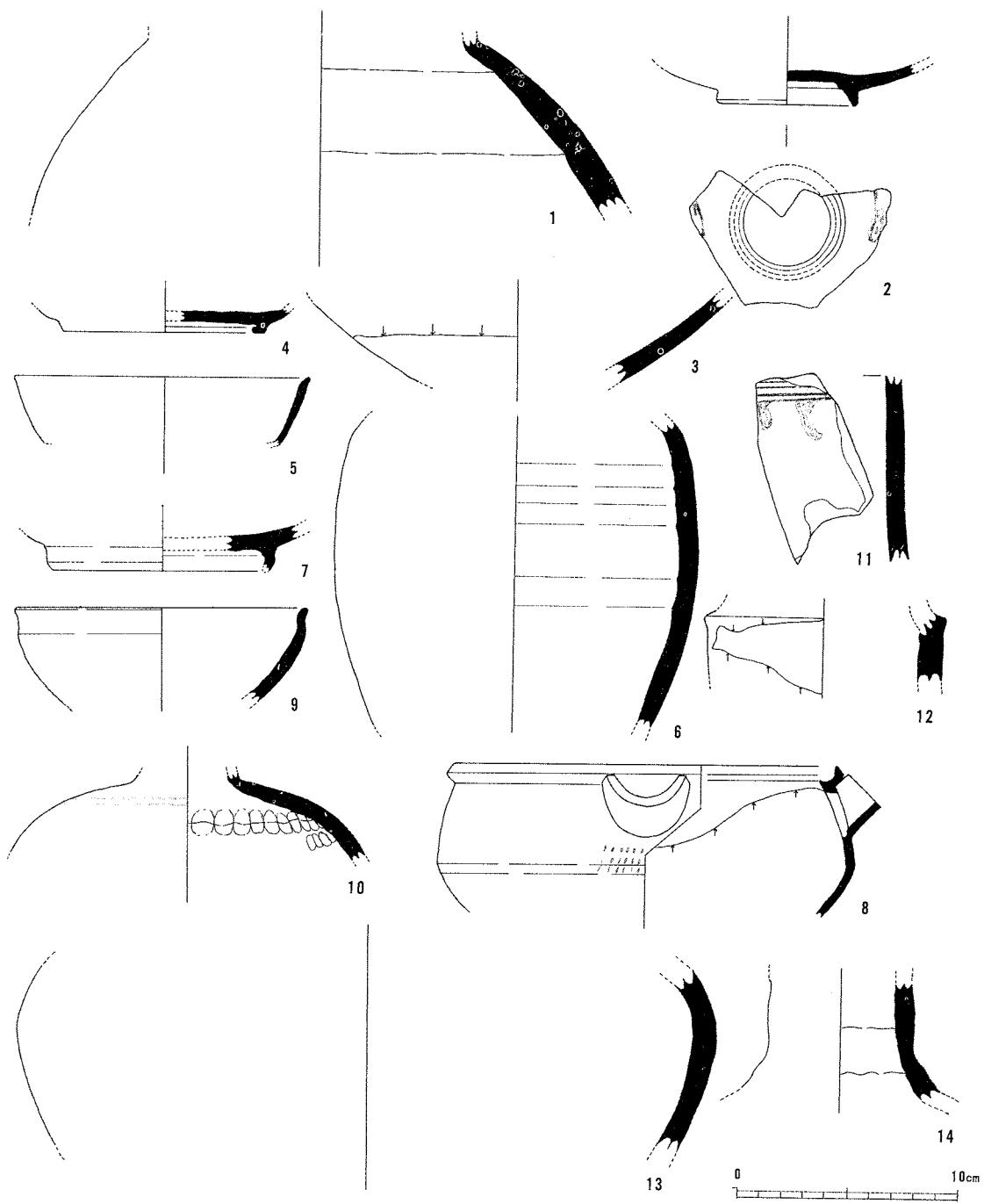


第62図 推定墓址出土古銭(1)

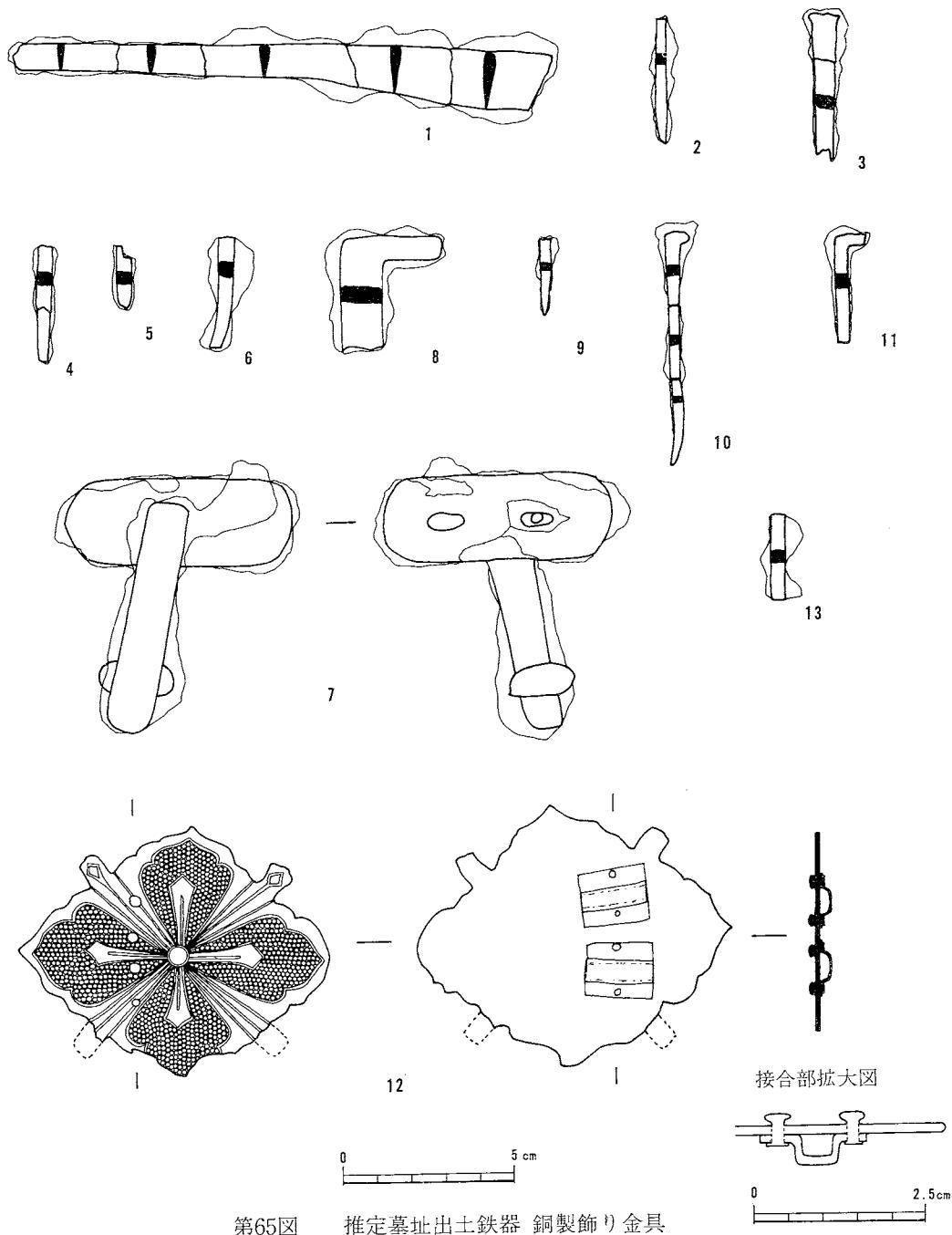


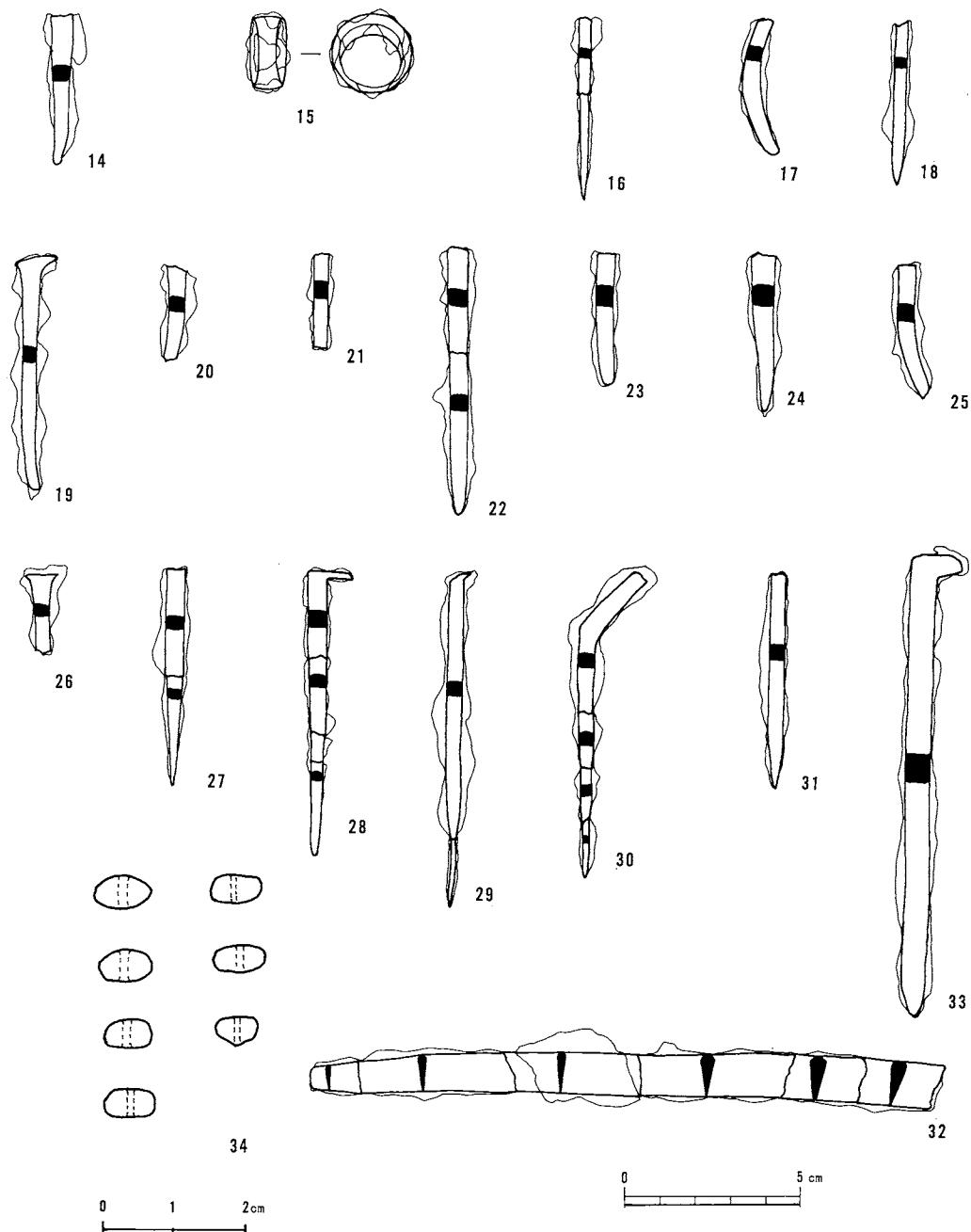
74

第63図 推定墓址出土古銭(2)



第64図 推定墓址出土陶器





第66図 推定墓址出土鉄器・木製品

第 11 表 推定墓址一覧表

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上 げの 有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
43 1 15	M-4 M-5	有	30~50cm大の石が中心にある。焼骨・炭化物が散布	寛永通寶(62図1~4)	生骨
43 2 16	L-4	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		焼骨, 炭化物散布
44.45 3 16	L-3 M-3	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布	嘉祐元寶(62図5)古銭(62図6.7)刀子(65図1) 陶器片(64図1)	焼骨, 炭化物散布, 生骨 まとまりのある焼骨 焼土
46 4 17	L-6	有	50cm大の石が中心にある		焼骨, 敷布
46 5 17	M-5 M-6 N-5 N-6	有	50cm大の石と10~40cmの石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布	釘(65図2~6)留金具(65図7)不明鉄器(65図8)	焼骨, 敷布
47 6 18	M-4 M-5	有	20cm大の石が中心にある	寛永通寶(62図8~11) 天聖元寶(62図12)	生骨
47 7 18.22	M-5 N-5	有	40cm大の石が中心にある 焼骨が散布	釘(65図9)	
47 8 19	M-4 N-4	有	30cm大の石が中心にある		生骨
48 9 20	M-3 M-4 N-3 N-4	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布	寛永通寶(62図13~18)祥符元寶(62図19)元祐通寶(62図20)古銭(62図21)釘(65図10)	生骨 頭骨は細片化
49 10 21	M-3	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布	銅製飾り金具(帶留)(65図12)寛永通寶(62図22.23)古銭(62図24)数珠(66図34)釘(65図11)	生骨
50 11 22	M-2 N-2	有	50cm大の石が中心にある		焼骨 敷布
12 24	M-2 N-2	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
50 13 23	M-1 M-2 N-1 N-2	有	50cm大の石がまとまっている。		
50 14 23	N-6	有	10~30cm大の石がまとまっている。	釘(65図13.66図14)環状 鉄製品(指貫)(66図15)	

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上げの有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
48	N-5		10~20cm大の石がまとまっている。焼骨と炭化物が散布		焼骨・炭化物散布
15	N-6	有			
25					
51	N-5	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布	釘(66図16~25)	焼骨・炭化物散布
16					
24					
51	N-4	有	10~30cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		焼骨・炭化物散布
17					
26					
18	N-3 N-4	無	50cm大の石が中心にある 焼骨・炭化物が散布		
52	N-3		50cm大の石が3個方形に配置。内は、10~30cm大の石がまとまっている。 焼骨が散布	上面に陶器片(64図9) 釘(66図26.27)	上部に焼骨・炭化物散布 底部に生骨
19	O-3	有			
25					
20	N-2 N-3	無	40cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
27					
21	N-2	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
52	N-2		20~40cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
22					
26					
23	N-1	無	40~50cm大の石が中心にある。焼骨が散布		
29					
24	N-5	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
25	N-5	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
53	N-4		10~30cm大の石がまとまっている円形に配列。焼骨が散布(掘り上げは一部)		底部付近に焼骨のかたまり
26	N-5	有			
27	O-4 O-5 P-5	無	40cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
28	O-4 O-5	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上げの有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
29	O-4 O-5 P-4 P-5	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
53 30 28	O-4	有	10~30cm大の石がまとまっている。	寛永通寶(62図25.26) 元豊通寶(62図27)	生骨(歯骨)
31	O-4 P-4	無	10~20cm大の石がまとまっている。炭火物が散布		
32	P-4	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
33	O-3 O-4	無	20~30cm大の石がまとまっている。		
54 34 29	O-3 O-4	有	50cm大の石が中心にある 焼骨が散布	洪武通寶(62図28)古銭(62図29)元 祐通寶(62図30)元豊通寶(62図31. 63図32)古銭(63図33)釘(66図28)	墓址内全体に焼骨が散布
35	O-3	無	10~30cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		
36 30	N-3 O-3	無	50cm大の石が中心にある 焼骨・炭化物が散布		
37	O-2	無	50cm大の石が中心にあり 10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
38	O-2	無	50cm大の石が中心にあり 10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
39	N-1 N-2	無	20~30cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		
40	O-1 O-2	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		
41 32	N-1 O-1	無	50cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
42 30	N-1 O-1	無	50cm大の石が中心にある 焼骨・炭化物が散布	上面に釘(66図29)	

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上げの有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
54					
43	O-1	有	40cm大の石が中心10~30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布	陶器片(64図14)	
30					
44	O-2	無	40cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
55	P-1				
45	P-2	有	30cm大の石が並んでいる 焼骨が散布	古銭(49図版34.35)	焼骨のかたまり
31					
55	P-1				
46	P-2	有	石は少なく焼骨が散布	陶器片(64図3) 須恵器片(64図4.5)	焼骨のかたまり
31.32					
56	R-1				
47	R-2	有	40cm大の石が中心にある 焼骨が散布		上部に焼骨
33					
56	S-2				
48	S-2	有	40cm大の石が中心にある		
33・34					
57	S-1				
49	S-2	有	40cm大の石があり、10~30cm大の石がまとまっている。		焼骨散布
34					
50	T-3 U-3	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
51	T-2 U-2	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
52	T-1 T-2	無	10~30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
53	T-1 U-1	無	10~30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
57	T-1				
54	U-1	有	10~20cm大ぐらいの石がまとまっている。		
36					
55	U-1	無	石は少なく焼骨が散布		
58					
56	U-1	有	10~20cm大の石がまとまっている。		焼骨散布
36・37					

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上げの有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
57 35	U-1	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
58 35	U-1 V-1	無	50cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
58 59 35	V-1	有	20~30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布	陶器片(64図6.7) 釘(66図30)	
60 38	T-2 U-2	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
59 61 37	M-7 M-8 N-7 N-8	有	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		焼骨 散布
62	N-9 N-10	無	30cm大の石が中心にある 焼骨が散布		
59 63 38	O-8	有	40cm大の石と10~20cm大の石がまとまっている。		炭化物散布
64 39	O-8	無	50cm大の石と、10~30cm大の石がまとまっている		
65	O-8 O-9	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
66	O-9	無	10~40cm大の石がまとまって円形に配列		
67	O-9 O-10	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
68	P-7	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
69	P-7 Q-7	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
70	Q-8	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		

図番号 墓址番号 図版番号	位置	掘上げの有無	上面の状態	出土遺物	人骨等
71	S-7 S-8	無	10~30cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
72	S-8 S-9	無	30cm大の石が中心にあり 10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
73	S-9	無	30cm大の石が中心にあり 10~20cm大の石がまとまっている。		
74	U-7 U-8	無	10~30cm大の石がまとまっている。		
75	Q-9	無	40cm大の石が中心にある		
76	Q-7 Q-8	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨・炭化物が散布		
77	P-7 P-8	無	10~20cm大の石がまとまっている。		
78	N-7	無	10~20cm大の石がまとまっている。焼骨が散布		
60 79 39	B-14 C-14	有	30cm大の石が数個あつまっている。径140cmの円形 焼骨・炭化物散布	寛永通寶（63図36~41）	上部に焼骨、炭化物
60 80 40	E-14	有	石ではなく平面が楕円形 長径280cm短径80cm 焼骨・炭化物	寛永通寶（63図42~47） 陶器片（64図8）	焼骨のかたまり。多量の 炭化物
61 81	F-13 G-13	有	石ではなく平面が方形 2m×1m		焼骨片
61 82	C地区 2号墳内	有		古銭（49図版48~51） 寛永通寶（63図52）	焼骨散布

第 12 表 推定墓址出土古錢一覽表

図 番 号	遺 物 番 号	図 版 番 号	名 称	出土地点	製作年代	製作場所	保存状態	備 考
62 1	49	49	寛永通寶	第1号墓址	寛文8年 1668年	亀戸	青銅	裏面に文
62 2	49	49	寛永通寶	第1号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	青銅	
62 3	49	49	寛永通寶	第1号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銅, 少し磨滅	
62 4	49	49	寛永通寶	第1号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	裏面に少し青銅, 少し磨滅, 小穴	
62 5	49	嘉祐元寶		第3号墓址	1056年	北宋	青銅, 磨滅	
62 6	49	不 明		第3号墓址	不 明	不 明	青銅, 7と重なる	
62 7	49	不 明		第3号墓址	不 明	不 明	青銅, 6と重なる	
62 8	49	寛永通寶		第6号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銅	
62 9	49	寛永通寶		第6号墓址	寛文8年 1668年	亀戸	表面に青銅, 一部腐蝕	裏面に文
62 10	49	寛永通寶		第6号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銅, 磨滅, 一部欠損	
62 11	49	寛永通寶		第6号墓址	明暦2年 1656年	江戸浅草	青銅, 磨滅, 一部腐蝕	
62 12	49	天聖元寶		第6号墓址	1023年	北宋	青銅, 裏面特に磨滅 一部腐蝕, 小穴	
62 13	49	寛永通寶		第9号墓址	寛文8年 1668年	亀戸	青銅	
62 14	49	寛永通寶		第9号墓址	不 明	不 明	青銅, 磨滅, 一部腐蝕 欠損	
62 15	49	寛永通寶		第9号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銅	
62 16	49	寛永通寶		第9号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銅, 少し磨滅	
62 17	49	寛永通寶		第9号墓址	元文元年 1736年	京都鳥羽	青銅, 一部腐蝕, 小穴 磨滅	
62 18	49	寛永通寶		第9号墓址	不 明	不 明	腐蝕により 1/3 欠損	
62 19	49	祥符元寶		第9号墓址	1008年	北宋	青銅, 一部腐蝕	
62 20	49	元祐通寶		第9号墓址	1086年	北宋	裏面青銅, 磨滅	
62 21	49	不 明		第9号墓址	不 明	不 明	青銅, 一部腐蝕	

図 番 号	遺 物 番 号	図 版 番 号	名 称	出土地点	製作年代	製作場所	保 存 状 態	備 考
62	22	49	寛永通寶	第10号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	青銘	
62	23	49	寛永通寶	第10号墓址	享保11年 1726年	京都七条	青銘, 一部腐蝕 24と重なる	
62	24	49	不 明	第10号墓址	不 明	不 明	青銘, 23と重なる	
62	25	49	寛永通寶	第30号墓址	寛文8年 1668年	亀戸	青銘	
62	26	49	寛永通寶	第30号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	青銘, 磨滅, 一部腐蝕	
62	27	49	元豊通寶	第30号墓址	1078年	北宋	青銘磨滅	
62	28	49	洪武通寶	第34号墓址	1368年	明	一部腐蝕, 29と重なる	
62	29	49	不 明	第34号墓址	不 明	不 明	一部腐蝕, 28と重なる	
62	30	49	元祐通寶	第34号墓址	1086年	北宋	青銘, 磨滅, 一部腐蝕 一部ひび割れ	
62	31	49	元豊通寶	第34号墓址	1078年	北宋	青銘, 磨滅, 一部腐蝕	
63	32	49	元豊通寶	第34号墓址	1078年	北宋	青銘, 磨滅, 一部腐蝕 33と重なる	
63	33	49	不 明	第34号墓址	不 明	不 明	青銘, 32と重なる	
	34	49	不 明	第45号墓址	不 明	不 明	青銘, 腐蝕 35と重なる	
	35	49	不 明	第45号墓址	不 明	不 明	青銘, 腐蝕 34と重なる	
63	36	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	良, 裏面に少し青銘	
63	37	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	良, 表面に少し青銘	
63	38	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	良, 裏面に少し青銘	
63	39	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	少し磨滅 裏面に少し青銘	
63	40	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	磨滅, 一部腐蝕	
63	41	49	寛永通寶	第79号墓址	寛永13年 1636年	江戸芝	良	
63	42	49	寛永通寶	第80号墓址	寛文8年 1668年	亀戸	表面青銘, 曲っている	裏面に文

図 番 号	遺 物 番 号	図 版 番 号	名 称	出土地点	製作年代	製作場所	保 存 状 態	備 考
63	43	49	寛永通寶	第80号墓址	寛永14年 1637年	大分竹田	青銹, 赤銹, 曲っている。	
63	44	49	寛永通寶	第80号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	表面に青銹	
63	45	49	寛永通寶	第80号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	赤銹, 裏面に少し青銹	
63	46	49	寛永通寶	第80号墓址	明和2年 1765年	亀戸	赤銹, 磨滅	鉄錢
63	47	49	寛永通寶	第80号墓址	寛永13年 1636年	亀戸	青銹	
	48	49	不 明	第82号墓址	不 明	不 明	赤銹	鉄錢
	49	49	不 明	第82号墓址	不 明	不 明	赤銹	鉄錢
	50	49	不 明	第82号墓址	不 明	不 明	赤銹	鉄錢
	51	49	不 明	第82号墓址	不 明	不 明	赤銹	鉄錢
63	52	49	寛永通寶	第82号墓址	宝永5年 1708年	亀戸	一部腐蝕	日本民俗資料館藏
63	53	49	元豊通寶	B-1上面	1078年	北宋	腐蝕, 磨滅, 青銹	
63	54	49	寛永通寶	B-1上面	正徳4年 1714年	亀戸	良, 55と重なる	
63	55	49	寛永通寶	B-1上面	寛永13年 1636年	江戸芝	良, 54と重なる	
63	56	49	熙寧元寶	B-1上面	1068年	北宋	磨滅, 腐蝕	
63	57	49	寛永通寶	B-1上面	寛永13年 1636年	江戸芝	磨滅	
63	58	49	政和通寶	B-1上面	1111年	北宋	腐蝕	
63	59	49	元祐通寶	B-1上面	1086年	北宋	磨滅	
63	60	49	熙寧元寶	B-1上面	1068年	北宋	磨滅	
	61	49	不 明	B-1上面	不 明	不 明	赤銹	鉄錢
63	62	49	不 明	B-1上面	不 明	不 明	磨滅, 赤銹, 半分欠損	
63	63	49	寛永通寶	B-1上面	寛文8年 1668年	亀戸	良	裏面に文

図 番 号	遺 物 番 号	図版 番 号	名 称	出土地点	製作年代	製作場所	保 存 状 態	備 考
63	64	49	永樂通寶	B-2上面	1408年	明	赤鑄	
63	65	49	寛永通寶	B-2上面	寛文8年 1668年	亀戸	一部欠損、小穴	裏面に文
63	66	49	寛永通寶	B-2上面	宝永5年 1708年	亀戸	良	
63	67	49	熙寧元寶	B-2上面	1068年	北宋	磨滅、一部腐蝕 一部ひび割	
63	68	49	寛永通寶	B-2上面	寛保元年 1741年	大阪高津	赤鑄	裏面に文
63	69	49	寛永通寶	B-2上面	寛保元年 1741年	大阪高津	赤鑄、磨滅	裏面に文
63	70	49	寛永通寶	B-2上面	宝永5年 1708年	亀戸	磨滅、青鑄といっしょに 砂も付着	
63	71	49	寛永通寶	B-2上面	不明	不明	半分欠損	
63	72	49	嘉祐通寶	B-2上面	1056年	北宋	磨滅、赤鑄	
	73	49	不明	B-2上面	不明	不明	赤鑄	鉄錢
63	74	49	熙寧元寶	D地区上面	1068年	北宋	磨滅、腐蝕	

第4節 出土人骨について

秋葉原遺跡の発掘調査の結果、第1号古墳の石室内や、B地区の多数の墓址内、またその周辺にかけて骨類の散布、出土が顕著であった。これらの骨はすべて人骨と見なされ、その形状から生骨と焼骨の混在が認められた。これは遺骸をそのまま木棺に納め土壌に埋納した土葬と、一旦、荼毘にふしたのちその骨灰を葬った火葬との異なった埋葬様式の共存を示している。

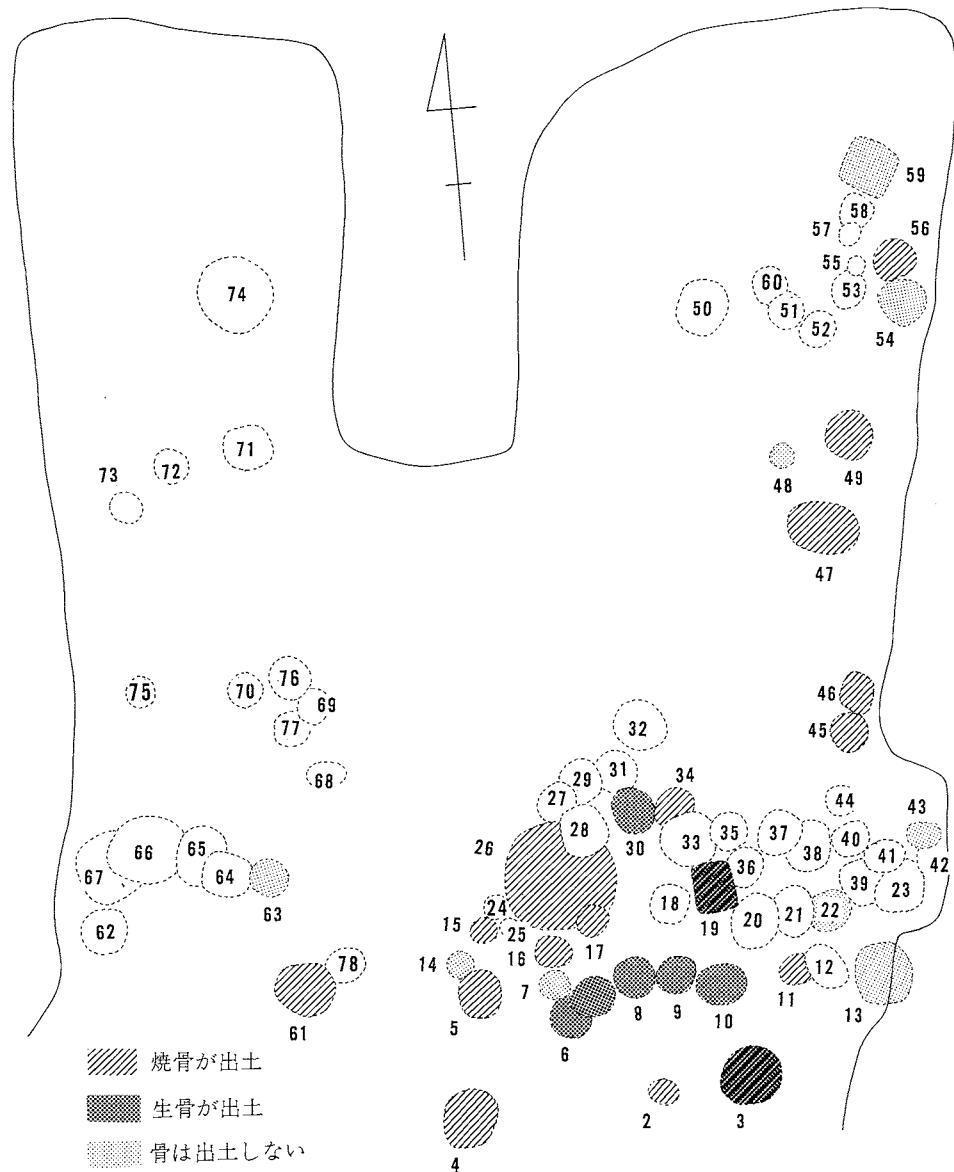
ここで、多くの発掘に際して、葬法にも関わり、しばしば問題となる生骨（土中に埋葬され自然に晒骨化されたもの）と火葬骨の外見上の相異について略記する。

一般的に骨の組成は有機質成分と無機質成分が重量比で1:2の割合から成っている。遺骸をそのまま土中に埋葬した場合、軟部組織の腐蝕を経て最終的に残存する骨は、土壌成分である腐蝕酸により、その無機質成分（主にリン酸カルシウムなどから成り、骨に堅さを与えていた）が溶解され、有機質成分（オセインなどのタンパク質や、骨髄中の脂肪からなり骨の弾力性、強靭性を保っている）のみが残り柔軟な形で保持される結果となる。このような状態で湿った土中などにあった場合、骨は形態こそ残すが、同時に作用する土壌微生物による分解などでその機質は脆弱化するとともに、有機質成分もかなり酸化により失われ、一旦、地表に露出して乾燥すると、たちまち脆く崩壊してしまう。遺跡出土の人骨は、多くの場合、綿密な発掘により、その形態こそ止めているが、これは骨管腔内や周囲に充填した土壌により各部位が辛じて支持されている状態で、採取時のわずかな加圧で細片化する例が多い。色調は概ねうすい黄褐色を呈するが、包埋土壌よりなる環境によっても異なるてくる。

これに対して焼骨の場合は、火熱による酸化作用から有機質成分は短時間のうちに失なわれ、無機質である鉱物成分のみが残存してその形をとどめ、色調は白色にちかく、感触は金属的となるが、多孔質で軽度となる。また加力により破壊されると忽ち微細な骨粉状と化してしまう。

また焼骨は加えられた火力によってその性状を異にする。池田^(注)は太安萬侶墓から出土した人骨の鑑定に際して、焼骨の各種の性状について考察を加えたが、それによると被った火力の程度によってさまざまな変化が生ずるという。完全焼骨（臨界温度、700～800℃以上）の場合は銀ねず色や青味灰色を帯び、亀裂や捩れを伴なうのを特徴とし、不完全焼骨（同温度以下）では燃焼が不完全なため、全体に炭素の付着により黒色を呈するとする。また各骨の部位によっても破壊の程度や内容が相違するという。

本遺跡出土の人骨の場合も、生骨での保存状態はきわめて劣悪で、発掘時ではその形態を認識できたものでも以後の崩壊は著しく、形質的な観察はほとんど不可能であった。また焼骨も同様にすべてが細片となり、特に多くは一括して埋葬されたものとみられ、個体的な判断も困難であった。



第67図 B-1 地区推定墓址群人骨出土状況

以下、遺存骨の主なものについての所見の結果を記載する。

I 第1号古墳出土人骨

石室内から出土した人骨は、その残存位置や包埋層位がやや隔離した状態で、2個体の遺骸の埋葬が推察される。

1：奥壁より約180cm、石室のほぼ中央部で、右側石積みに接して径50×40cm、厚さ20cm程の範囲に集積されていたもので、その下部は最終的に掘り下げられた床面より約10cm上位に位置している。骨の一部は石積みの間隙にも狭在、または散布域の広がる部分もあったが、各骨の連結性などは全く認められず、火焼により破壊された骨の断片を、一括、集中的にこの位置へ埋葬したものと考えられる。

骨はすべて白色ないし灰白色を呈し、一部長骨片の内面などでは青味、灰色がかかったもの、黒色に焼け焦げた部分などもみられる。もっとも大きく残存したものでは長さ9～10cm程度の長骨片であり、他は悉く細片状のものであるが、総計約630gの重量となった。

頭蓋骨 頬骨突起（右、左）、側頭骨錐体（右、左）、乳様突起の下端部分（右、左）、下顎骨の左半骨体で、前方は犬歯歯槽近心縁より後方は下顎枝を欠く。残存歯槽のうち、第1、第2小臼歯、第2大臼歯は脱落による歯槽閉鎖、犬歯、第1大臼歯の歯槽は開放するが、唇側への吸収が著しく傾斜して残る。顎舌骨筋線は残るが、発達の程度は不明。オトガイ棘が棘状に鋭く突出する。大臼歯の歯冠の半裁が一個残るが、咬耗の程度は不明である。

脊椎骨 上下関節面を残す椎体が12個識別できる。特に頸椎は環椎・軸椎を除く他のすべてが残存する。胸・腰椎の椎体の縁辺に、いわゆる骨棘が顯著に発現している。

肩甲骨 烏喙突起と関節部分のみ。

肋骨 10片程の破片。

上腕骨 右骨体下部が最長5cmほどと下関節部分も残る。他に骨体の破片は多数認められる。

尺骨 骨体の一部とみられるもの。

橈骨 右左の頭部と下関節部分。

大腿骨 骨体中央部の後面、最長6.5cm、粗線の発達は強度でないが明瞭に形成されている。

脛骨 骨稜を残す骨体部分の細片のみ。その他に距骨と中足骨が各1個識別できる。

以上、各骨の個数や左右の対象性、また加齢により生ずる形質的変化の徵候などから、本人骨は1個体のものであり、かなりの熟年齢のものと推考されるが、性別は判定できない。

2：石室内の掘り下げで、最終的に表出された床面直上の中央部に径約50cmやや長方形の範囲で細片ながら明瞭な遺存が認められた。黄褐色味を帯びた極度に脆弱な骨であり、長骨片の緻密質部が薄く板状に残る程度で、10数片を算えた。以後、わずかな乾燥により、多くは骨粉状に崩壊した

が、その形状から生骨と見なされた。部位の判定は全く不可能であったが、これを1個体の遺存骨とすると、本古墳において主体となった被葬者とみることもできよう。

II B地点墓址出土人骨

発掘当初、B地区の北部からは全面的に骨類の散在がみられ、それらのすべてが火焼を受けた人骨と確認された。骨は広範囲に分布する大小の礫の間隙や、小ピット状のおち込み、集石状の小礫の上部などに散乱状態で遺存されていた。骨の部位では頭蓋骨や大型の長骨の破片などが目立つが、他のほとんどは焼骨特有の堅い金属質の細小片として残ったものである。

以下は発掘された墓址のなかで、骨の残存した主な例についてのみ記載する。なお、出土人骨は各墓址により生骨と焼骨に区別される。生骨の場合、発掘時にはやや原型を保ち、葬位の推定の可能な例もあったが、保存は悪く形質的な特徴はほとんど残っていない。焼骨は墓址内よりそれぞれ一括されて出土したものであるが、各個体とも少量であった。

第1号墓址——生骨。各墓址中でもっとも原型を保つ。しかし採取後の乾燥に伴ない大部分が崩壊された。頭部を北隅の壁に接し、頭頂北向、顔面を右方へ向け、これに連結した位置で右肩部から上腕骨、肘関節から離れて尺骨、橈骨が痕跡的に残存し、この場所に古銭が置かれていた。下方には左大腿骨（土中では約40cm残存）と下端関節からやや外れて脛骨、腓骨がV字状に屈曲された形で認められた。全体的にみて北向き右側位の屈葬が推定される。

頭蓋骨は土圧により著しく扁平化するが、歯列は比較的保存されていた。切歯の切縁が遠心側へ傾斜する摩耗痕がみえるが、他の臼歯などは歯冠のみが残る程度で、咬耗度は明確でない。大腿骨の粗線の発達は弱度である。

第8号墓址——生骨。頭部を北隅の壁に接し、右側面を上方に向ける。墓址内中央やや西側寄りに骨盤部分とみられる骨が残り、これを中心に上方へ大腿骨、脛骨、腓骨がほぼ並列して置かれる。屈葬は第1号と同様であるが側臥位は逆向であろうか。

頭蓋骨は比較的原型を保つ。しかし脳頭蓋はすべて細片となる。左眼窓上隆起の部分が残り、冠状縫合が分離している。下顎骨の骨体が圧平されて残る。左半の歯が中切歯より第1大臼歯までと、これに対応する上顎歯も残るが、歯槽部は崩壊し各個の摘出は不可能である。左側頭骨は完存する。乳様突起は下向き円型で短かい。大腿骨の粗線は幅広く明瞭であるが、隆起は弱度である。大腿骨頭が嵌入した状態での寛骨臼部も識別できる。

第9号墓址——生骨。北西隅に頭頂を上向き、顔面部をやや右傾した頭部がある。その直下、または左方へ伸展した形で上肢骨が連結性なく散在し、下方では下肢骨も東西位に並列して残存する。推測では坐位によるものの、遊離した各骨が土圧により圧縮されたものとされる。

頭蓋骨は細片化が著しい。頭頂骨の骨壁ははなはだ薄い。乳様突起は小型。切歯の切縁に咬耗痕

がある。大腿骨頭が寛骨臼へ嵌入して残る。その他、寛骨耳状面、上腕骨、脛骨の骨体がわずかに形をなして残る。

第10号墓址——生骨。埋葬位は不明。白色に黄褐色混り、一部断面に青色が残る。頭蓋骨は数片のみで、鋸歯状の縫合が分離する部分がある。歯槽縁がわずかに残る。歯が総計22本残存する。ほとんどが歯頸部より歯根を欠き、歯冠もエナメル質のみを残すものが多い。咬耗は臼歯部において弱度の陥凹ないし平坦状に進行し、一部で象牙質の点状に露出するものもある(Brocaの1~2度に比定)。歯石は軽度の沈着をみるがう蝕はまったく認められない。他にわずかな四肢骨片が残る。

第26号墓址——焼骨。火葬骨はブロック状にかたまり、その範囲は30×20cm、厚さ10cmほどである。白色の骨は火熱による歪曲、変形が著しく、すべて細片となっている。

第30号墓址——歯の残存のみであるが、これは土葬の生骨に伴なう結果とみられる。墓址の西北隅に2本の歯が20cm間隔で、また東壁寄りの隅にも臼歯列が残る。切歯1、大・小白歯各2、不明1本である。いずれも歯頸部から歯根を欠失し、歯冠のエナメル質のみが残る。臼歯の咬合面は陥凹ないし平坦化している(Brocaの1~2度に比定)。歯石の沈着、う蝕ともにない。

第45・46・47号墓址——焼骨。各墓址ともに骨の遺存程度は共通している。長骨の表面や管腔内に褐色の焼土が附着、骨の内面には火熱の温度差により炭化した色調の変化がみられる。頭蓋骨は外板の破片のみで、その他に肋骨、脊椎骨、橈骨、大腿骨や指骨などが識別できる。特に第45号墓址では全身各部の骨の残存が察知される。

第80号墓址——焼骨。指骨(中手骨、中節骨)が約10本、他に上腕骨の破片が数片残存するのみである。(本墓址からは多量の木炭が出土している)

その他の墓址——第15号、第19号墓址からは、極少の細片がわずかに出土している。

まとめ 以上、秋葉原遺跡出土人骨の概略について記載した。

第1号古墳出土人骨は、出土位置や骨の性状から2個体のものとみられる。床面に附着した状態の生骨は、その分布から横臥した被葬者の存在を窺わせるものである。他の1体は、やや上層の石組際に集塊状となった焼骨でほぼ全身部分の骨が残存した。わずかながら残された骨の形質的特徴から、かなり熟年齢の遺骸と推考される。

多数の墓址中、人骨の出土例は本稿に記載した主なもので12墓址が算えられた。うち土葬によって生骨が残存し、葬位などが推定されたものは5墓址であったが、骨の保存は悪く、多くはその形態を止めない。他の墓址のものはすべて火葬骨で、それぞれ一括埋納されたものと考えられる。

(西沢寿晃)

注 池田次郎：出土火葬骨について、奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四十三冊「太安萬侖墓」 1981。

第4章 調査のまとめ

第1節 古 墳

1. 1号墳の復元

問題の所在 1号墳は、横穴式石室とその開口部両側の石積み、開口部前面を中心とする弧状の溝及び溝の西端の浅い土塹、という形で検出された。その当初からの疑問は1号墳構築時の地表面の高さをどの位に求めるか、ということであった。言い替えると、1号墳は構築時の地表面から盛り上げられているか、掘り込んで石室を造っているかという疑問になる。この問題を検討すると共に、構築時の1号墳の全形を考えてみたい。

石室の構築 古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳の通例として、地表から封土を盛り上げて築き、石室の底面も相対的に地表と同程度の高さとなっているものが多い。ところが本古墳の場合、これに従うと調査結果と矛盾する点がいくつか出てくる。

その1は石室開口部正面を中心とする弧状の溝についてである。この溝は開口部正面で南限が不明確であったが、溝の殆どすべての底面にごく僅かな砂層の堆積が認められ、それを追求する形で、西端の土塹と共に掘り上げたものである。遺物出土の最深レベルや平面分布もほぼ一致し、第7図で示した溝の実線範囲は正しいと考えている。この溝の底面と石室床面の標高の差異が問題となる。溝底面の標高は、最深の石室開口部正面で海拔618.69m、西へ行く程浅くなり土塹付近で海拔619.00m、土塹底面で618.80mであるのに対し、石室床面はかなり平坦で平均618.58mである。溝のどの部分より石室床面の方が低いことになる。

その2は石室際から外方へ向け放射状に入れたトレンチによる土層観察の結果である（第8図）。それによれば、下方からの墳丘の存在を示す変化は認め得なかった。土層については溶脱と沈澱の繰り返しにより判別が困難なものだった為、変化を見落したのではないかとの指摘も可能だろうが、一方、観察結果が示す通り実際に変化がなかったという結論も当然捨てきれない。更に、見落しか、実際変化がなかったかのいづれにせよ、その土層が石室際から1.5m位の間に至ると変化を生じていることも確かである。

その3は同じトレンチ調査の結果として石室各壁の裏詰め的なものが見当らないことである。前述のように、各トレンチで差はあるが、石室間際から1.5m位の間で土層に人為的と思える変化が生じていることも確かで、これは両側壁の手前寄りから入れたトレンチ（トレンチ1・2）に顕著である

が、奥壁部から入れたトレーナー（トレーナー3・4）では奥壁際まで殆ど変化のない土層が続いている。勿論前者の様なトレーナーでも、直接の側壁材以外は、径2cm程の小礫がまばらにあるくらいである。最終的には石室の各壁はすべて取りはずされたが、石材等を用いた裏詰め要素は全く見出せなかつた。

以上3点の矛盾・疑問の解決は、結局のところ、1号墳の石室は当時の地表面を掘り下げる構築されていたとの判断に求めなければならないと考える。この判断については、本遺跡2号墳、安塚8号墳からも有利な類例が得られる。即ち、本遺跡2号墳の周溝状部分の東端にある土塙はその最深部でも、30~40cm石室床面より浅く、安塚8号墳でも石室開口部を中心に半円状に検出された溝の最浅部は石室床面より浅かったという。

今後の類例の増加、より精緻な発掘及び遺構の検討により、今ここでの判断が覆えることは充分考えられるが、1号墳の石室は当時の地表面を掘り込んで構築していた、との判断の側に立ち、以後の記述を続けたい。

1号墳の復元

石室 石室の本来の高さは、石室内へ崩落した状態で出土した、壁材と思われる石の数からみて、調査時に確認された最上の段より少くとも2段以上はあったと思われる。それにしても1.2~1.3m程で、もしそれ以上の高さになるとすると、本古墳の様な石の積み方では崩れ易くなってしまうのではないかと考えている。その上に天井石が架けられていた訳だが、やはり石室内へ崩落したと思われる形で実際に出土した天井石は1m内外のものが多い。調査時の高さくらいではあまりはっきり認められなかつたが、側壁上部は少々持送り状になっていたのであろう。開口部両側の石積みは2~4段しか検出されなかつたが、構築時にはもう少しあつたかもしれない。開口部（入口部）両側の側壁はそれぞれ1・2段しか残存していないので形態は定かではないが、横から見通した場合、墳丘の傾斜なりになっていたか、或いは開口部外面一帯の墳丘は垂直に切り立てる様になっていたかが考えられる。

墳丘 墳丘は石室部分と溝を掘った際の土で盛り上げたものと推定しているが、それだけの土量では石室の上部を覆うのが精一杯だったと思われる。そして、他からの土をそこへ足したとしても、それほど高い墳丘があったとは考えられない。従って墳丘の高さを推定すると、墳頂は石室の床面あたりから測って1.5~3m、当時の地表面からならせいぜい1~2m位の高さとみるのがほぼ適當であろう。全形としては、直径12~15m位の緩かな小丘が地表面から1~2mほど頭を出していたという姿を想起しているが、いかがなものであろうか。葺石・埴輪は考えていない。

溝 溝については、先述の様に、底面の微砂を追って掘り上げた形では全周していなかった。しかし、トレーナー3・4の北端近くに微妙な礫がみられ（第8図）、或いはここにも溝が存在した可能

性も感じている。この礫の部分は、幅30~50cm、標高は619.7~619.9mで西端の土塙底部と同じ位の深さとなっている。ここに溝の存在を認めると、調査時に掘り上げた弧状の溝とつなげて、円形に石室を取り巻く形が想定できる。だが、トレンチ2・5にはその痕跡は発見できなかったことも見落せない事実である。結論としては、1号墳構築当初に溝が全周していた可能性はあるが、そうだとしても、石室開口部付近以外は、深さのあまり一定しない浅く狭いものだったのではないかとみている。

閉塞 両側の側壁中央部最下段に、玄室と羨道の境界を示すと思われる立石が1対埋め込まれているが、この部分や、開口部の閉塞、区画等のための施設は見出せなかった。しかしこの点については、調査時に石室内に崩落していた壁材として取り除いた内に、実はこれらの施設に関連するものがあったかもしれない。

(直井雅尚)

2. 小形横穴式石室状の石組みについて

今回調査した5基（正確には4基）の古墳のうち、3号墳及び5号墳は一応古墳と呼称したが、はたして古墳という語が持つ概念で捉えられるか疑問である。若干の検討を図ってみたい。

形状 扁平な河原石を選び、短辺の一方を欠く長方形に積み、もう一方の短辺は長辺の様に平らに重ねて積むのではなく同様の石の平らな面が石組みの内面を向くように立てる。3号墳は1枚、5号墳は横に2枚並び立てて短辺をつくっている。この短辺を奥壁に見立てるに、まさに無袖の横穴式石室の平面形そのものになる。ただし規模が小さい。高さについても、短辺部（奥壁）の立った扁平河原石の高さが、長辺部（側壁）の石積みの2段目位までしかなく、さほどあったとは考えられない。天井石・墳丘・周溝（はたしてこの様な語を用いてよいか疑問だが）等は、確認できる状態ではなかった。特に天井石はその存在を仮定したとしても、推定できる石室の高さが著しく低く、横穴式石室としての機能の一面（開口部から遺骸を入れる）は期待できないだろう。石組（石室）内部底面は平らで、小石等を敷いた痕跡は全くなかった。

以上の形状については、それのみの検討では本址（秋葉原3・5号墳）の性格（用途）は解明できない。3号墳開口部から出土した須恵器の年代（形態等から8~9世紀と考えられる）を手懸りに、類例により考えてみたい。

類例① 松本市新村安塚1~3号墳₍₁₎

安塚1・2号墳は、調査時には既出で、地元の方のメモを元に報告文・図類を作成しているので今一つはっきりしないが、規模等からみて、小形の横穴式石室状石組みだったと思われる。ただし石積みは4段あったということで、秋葉原3・5号墳よりやや高い。いづれも内部から焼骨片が出土し、1・2号墳からは須恵器も得られ、調査者はなんの疑いもなく古墳として扱っている。

類例② 岡谷市大久保B, SH1, SH2

長野県埋蔵文化財センターの調査による発表資料₍₂₎に従うと、「小形の横穴式石室構造」をもつ石

組み遺構で、火葬人骨を伴っている（SHIにはごくわずか）。2基発見され、「火葬墳墓」という名称を用いている。SH1は全長180（測り方によつては、140）cm、奥幅50cm、前幅60cm、高さ50cm、3ヶの天井石が載つてゐる。SH2は全長190（140）cm、奥幅60cm、前幅80cm、高さ50cm、天井石は不明だが、閉塞石とみられるものがある。いずれも床面に角礫を敷いてゐる。遺物はSH2のみから得られ、それは、製作年代が天平期以降と考えられる八花鏡である。マウンドについては、調査者は削平されたものとみており、更に、SH1の天井石についても、骨を入れてからのせた可能性を指摘している。

類例③

宮坂光昭氏が「終熄期古墳」⁽³⁾と呼称したものも時期・形態から見て、一応の類例として捉えられる。宮坂氏は「墳（盛）土はあるが、石室の消滅した時期の墳墓から、火葬墳墓出現までの墳墓」をもってこの終熄期古墳としており、更にそれを「I 配石のあるものは、石室の名残りとして棺周囲を一列に石でめぐって、その上に盛土をしたもの。標式的な例は岡谷花岡靈湊山古墳の、直刀・須恵器の発見で、周囲に一列の配石がみられた。」

「II 無石櫛土墳で、棺周囲に何の目印になる石もない木棺直葬の盛土をしたもの。」の2形式に分けて、Iが古くIIは後出と考えている。第13表は宮坂氏の作製した諏訪盆地周辺の終熄期古墳一覧である。

性格 大久保B例の「小形の横穴式石室構造」については、その様な形の石組み（石積み）が地形や用材等の制約によりなされたのではなく、それ以上に、意図的につくられたものと考えられ、本例もこれに通ずるところがあるとみたま。また、宮坂氏の「終熄期古墳 I」に類似するという見方も可能である。形態の点では、8世紀代のある種の墳墓に共通してゐるのである。一方、本例の内部からは墳墓であることを積極的に立証するもの（人骨・棺・蔵骨器等）は何も得られなかつた。しかし、生骨や木棺等は腐朽してしまうことも多く、しかも、本例（秋葉原3・5号墳）は工事中の発見という極めて恵まれない状態だったことも考慮せねばならない。本例に近接する安塚例では火葬人骨の出土が報告されていることも忘れられない。結論として、本例では人骨等の確認はなかったが、形態の類似から、類例と同種の墳墓址と考えたい。木棺での埋葬のため遺骸等が全く残らなかつたか、安塚例・大久保B例の様に火葬骨があつたが工事等の攪乱で失われたかは決めかねる。

（直井雅尚）

第13表 諏訪盆地周辺の終戦期古墳一覧 (宮坂光昭 1973)

	地名	名称	立地	形状	出土品	形式
1	岡谷市花岡	靈渓山の ・古墳	湖岸丘上	石塊を一列に並べる、 墳土有	列石に並行し直刀・ 土師	I
2	岡谷市今井	地獄沢古墳	山麓	配石あり、小土墳	直刀	I
3	下諏訪下ノ原	天白東下	平地畠	配石、小土墳伝承	直刀	I
4	茅野市宮川	四ツ塚C墳	長峰丘陵端	小土墳、地下120cm	金環7	II
5	同	四ツ塚D墳	同	小土墳、地下120cm	直刀・鍔・玉類	II
6	同	金鍔塚古墳	同	小土墳	直刀・金銅製飾馬具	II
7	茅野市横内	塚之腰古墳	台地下	土墳	須恵器	II
8	茅野市矢ヶ崎	鬼場下	山麓	土墳	蛮刀	II
9	茅野市宮川	金堀塚			直刀・馬具	II
10	諏訪市湖南	北大安寺	台地	畠	蕨手刀	?
11	諏訪市有賀	平林	山麓	土墳、伝承	直刀	II
12	諏訪市清水	オンベ平	山麓	畠	直刀	II?
13	岡谷市小坂	大林	山麓	小土墳	蕨手刀	II
14	岡谷市小坂	日影	山麓	畠	直刀	II
15	岡谷市小尾口	海戸	平地	畠	直刀	II
16	原村八ツ手	鹿垣外	山麓土手中	小墳土	蕨手刀	II
17	諏訪市唐沢	唐沢寺下	畠	長方形石蓋二枚、 小土墳	直刀	?

引用・参考文献

- (1)『松本市新村安塚古墳群 緊急発掘調査報告書』長野県中信土地改良事務所・松本市教委1979.3
- (2)長野県埋文センター「大久保B遺跡」,『第1回諏訪地区遺跡調査研究発表会資料』諏訪考古学研究所 昭和58年
- (3)宮坂光昭「地方における古墳時代末期墓制の展開」,『信濃』III-25-4 昭和48年

第2節 古墳出土の土器について

1. 形態・手法の特徴

(1) 土師器

量が少く、しかも壺と高壺のみである。

壺（第14図36、第21図29）

いづれも無台、直線的に外開する体部は、その下部で明瞭な稜をつくらず底部へ移行する。底部は上げ底気味になっている。器面の荒れが激しく、不明瞭だが僅かにロクロ目らしきものが観察され、成形はマキアゲ・ミズビキ法と考える。36は内面がヘラミガキされた痕を残すが、29はロクロ目とみられる凹凸をそのまま残す。形態、手法とも前代の土師器壺の系譜を引くものではなく、同期の須恵器無台壺に類似している。ただし少々器高が高い。

高壺 3ヶ出土している。壺部の形態から2種類に分けられる。

A：第24図1、壺部が丸く内湾しながら立ち上がり端部に至るもの。手法の特徴として、壺部内面に黒色処理が施しており、壺部内外面・脚部外面がヘラミガキされる。脚部内面はヘラケズリである。壺部と脚部の接合は、壺部底面に凸部をつくり脚部に挿入する方法をとっていると考える。

B：第14図40、第21図31、壺部が中位から外反気味に傾きを転じるもので、A類ほど丸味を持たない。40の脚端部は面取りがされ、形態上、同期の須恵器高壺に似る。手法上ではいづれも壺部内面を黒色処理されるが、31が壺部内面全体と外面の稜状部分をヘラミガキされるのに対し、40は全くヘラミガキされない。また本類は、ロクロを用いている可能性が高いと考えられ、40はマキアゲ・ミズビキ法により壺部と脚部が別々につくられた後接合される方法をとっているらしい。

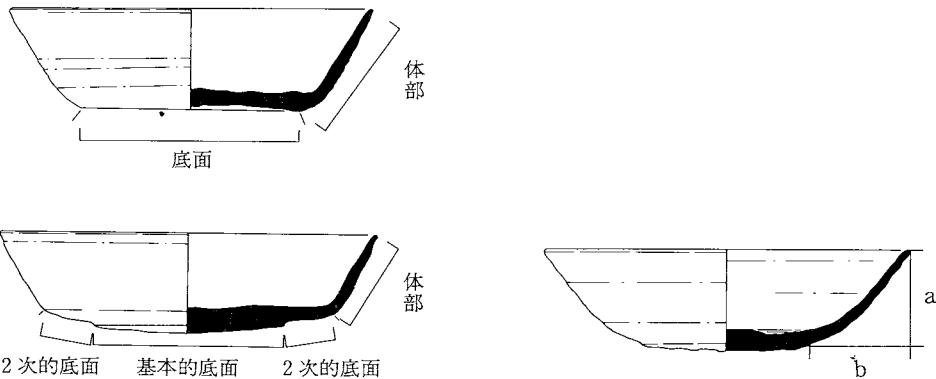
(2) 須恵器

壺37個体、蓋31個体、長頸壺5個体、耳付短頸壺2個体、高壺3個体、甕2個体、それに短頸壺、平瓶、小壺各1個体が図化提示できた。壺・蓋・長頸壺には図化できないものもいくつかあったが、殆どは図化できたものの形態・手法に類似する。

壺 まず無台壺、有台壺に分類される。さらに寸法・形態・手法により細別が可能である。寸法はI：口径10cm以下のもの、II：口径10.1～15.0cmのもの、III：口径15cm以上のもの、の3つに分けられ、器高による差異は指摘し得ない。

無台壺II：第14図33～35（1号墳）、第20図23～28（2号墳）、寸法分類I及びIIIは出土していない。形態上では体部の外開度合いと2次的底面の有無により、手法上では底部調整により細分が可能である。

体部の外開度合いについては、殆どのものが体部と底部の境界があまり明瞭でないがおおよその



第68図 2次の底面を持たない(上)持つ(下)無台坏

第69図 無台坏の外開度合の例

第 14 表 無台坏IIの二次的底面と外開度合

	外開度合 0.6未満	外開度合 0.6以上
二次的底部面を 明瞭にもつ	2号墳23・25~27	
" 中間的		1号墳34・35
" もたない		1号墳33, 2号墳24

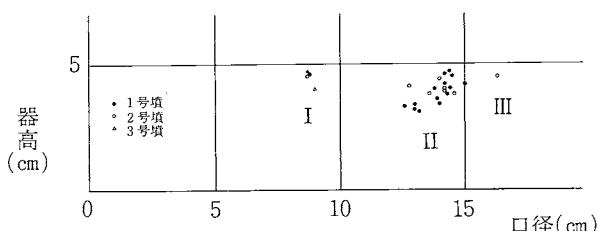
ところで境界を設けて第69図に例示した $a \div b$ の数値による。

2次の底面については第68図に示した如く、実際にロクロから切り離された底面(基本的底面)と、上方へ立ち上がる体部の間に、基本的底面と僅かに段差をもって存在する平らの面のことと、これを明瞭に持つ個体、持たない個体、その中間的なもの、の3者で捉えられる。外開度合いと2次の底面についてまとめると第14表の様になる。この2つの分類の要素には、関連性がありそうに感じるが、本例は個体数の絶対量が少いので何とも言えない。

底部調整については、切り離し痕が確認できるものとナデ調整されているものの2種類で、切り

第 15 表 有台杯IIの底面調整

	1号墳出土品	2号墳出土品
回転ヘラ切り + 回転ヘラケズリ	19 (一寸疑義あり)	17 (一寸疑義あり)
回転糸切り + 回転ヘラケズリ	23, 24, 29, 31	21
? + 回転ヘラケズリ	18, 20, 22, 25, 26, 27, 28, 30, 32, 21 (さらにナデ)	15, 16, 20 2 (土塙)
? + 手持ちヘラケズリ		18



第70図 有台杯の器高・口径の相関(グラフ)

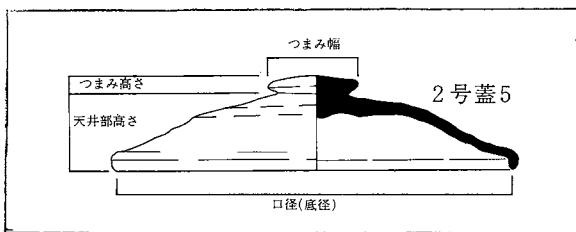
離しは回転ヘラ切りによっている。

有台杯 I : 第14図37 (1号墳), 第21図30 (2号墳), 第26図1・2 (3号墳), いづれも口径8.7~9cm, 器高4~4.7cmの寸法をもつ。形態では, 体部の立ち上がりや高台の形態に, それぞれかなり違いがある。手法では, ロクロ成

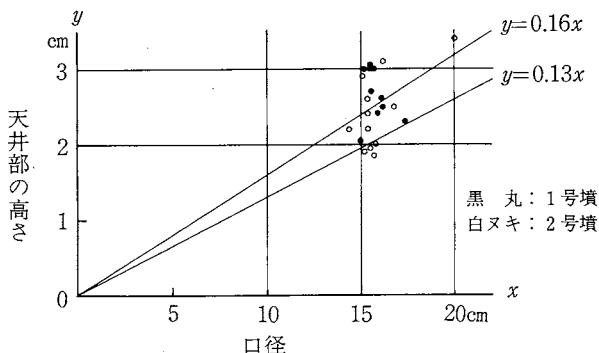
形されている点は同じだが, 底部調整が1号墳はナデ, 2号墳は残存部に回転ヘラケズリを残し, 3号墳1は中央部に回転糸切り痕, その周囲を回転ヘラケズリ, 同2は全面回転ヘラケズリとなっている。

有台杯II : 第13, 14図18~36 (1号墳), 第20図15~28 (2号墳), 第24図2 (2号墳土塙), 有台杯の大部分が含まれる。形態上では, 体部下端に稜をなさず高台際に至るものと, 稜をつくるものの違いが顕著である。前者に属するものは1号墳18~22と少く, 他はすべて後者である。手法上では底面調整で相違がみられる。切り離し方法のわかるものには, 回転ヘラ切りと回転糸切りがあり,

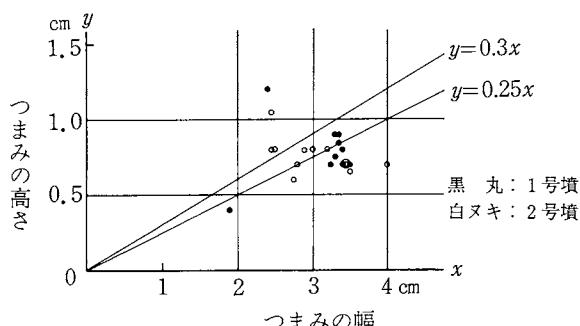
さらに調整で回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリが観察できる。ただし、切り離し痕は、調整でけずられて中央部にごく僅か残っている例が全てである。底部調整についてまとめると第15表の様になる。



第71図 蓋の計測部位



第72図 口径と天井部の高さ (グラフ)



第73図 つまみの幅と高さ (グラフ)

のがみられる。つまみ部及び天井部の資料の基本的な測定値は第16表の通りである。

端部の形態としては、下方向の屈折のし方と、断面形で捉えてみた。下方向への屈折のし方は、真直ぐ下へ屈折するもの、内側へ大きく屈折するもの、外側へ開き加減に屈折するものの3者があ

る。

無台坏III：第20図22(2号墳)，1例のみである。II類と手法上の著しい差異があるとは思えず形態上、口径の大きいものと理解して良い。

蓋 まず寸法により、口径（底径）20cm未満のもの(I), 20cm以上のもの(II)に分かれる。さらに、口径に対する天井部の高さ・つまみの大きさ・端部の形態に各種の特徴がある。

天井部の高さは、器高よりつまみの高さを差引いた数値を用いた。口径に対する天井部の高さについては、まとめると第72図の様になる。この図に、係数0.16及び0.13の正比例一次関数を加えて区切り、一応、比率の大・中・小を定めてみると、総じて1号墳出土品の方が天井部が高くみえる。

つまみの大きさは、つまみ部の天井部への接合面から頂部までを高さとし、最大幅との組みで捉えた。両者の相関関係は第73図の如くである。相対的にみて高さが中位から低いものと、それに比して幅が狭く高さの高いものの2種に、おおよそ捉えられる。後者が所謂擬宝珠形に近いものとなる。前者のうち、高さの低いものに頂部がつまみ端部よりへこむも

第 16 表 蓋の各部計測値

(単位: cm)

	つまみ部		天井部			つまみ部		天井部	
	高さ	幅	口径	高さ		高さ	幅	口径	高さ
1号墳 1	0.75	3.3	15.5	3.05	1号墳 17			15.7	
" 2	0.8	3.4	15.6	2.7	2号墳 1	0.8	2.45	15.4	2.4
" 3	0.7	3.25	15.2	3.0	" 2	0.8	2.5	15.2	1.9
" 4	0.9	3.3	15.7	3.0	" 3	1.05	2.45	15.5	1.95
" 5	0.9	3.35	16.2	2.5	" 4	0.8	2.9	15.4	2.6
" 6	0.7	3.5	17.4	2.3	" 5	0.8	3.2	16.2	3.1
" 7	0.85	3.35	15.0	2.05	" 6	0.7	3.45	15.1	2.9
" 8	0.7	※ 3.4	16.1	2.6	" 7	0.65	3.5	15.7	1.85
" 9					" 8	0.6	2.75	14.4	2.2
" 10	1.2	2.4	15.9	2.4	" 9	0.8	3.0	15.4	2.2
" 11	0.4	※ 1.9	15.5	3.0	" 10	0.7	3.45	16.8	2.5
" 12			14.9		" 11	0.7	2.8	15.8	2.0
" 13			14.9		" 12			13.7	
" 14			14.4		" 13			16.3	
" 15			14.0		" 14	0.7	4.0	20.0	3.4
" 16			13.2		※は頂部が端部よりへこむもの				

第 17 表 蓋端部の形態分類一覧表 (上段 1号墳)

	外側へ屈折	中間的	真下へ屈折	中間的	内側へ屈折
三角に尖る	6		13, 16		
			1, 2, 3		
嘴 状	1, 2, 3, 7, 9, 11		4, 10, 14		
	8, 9		4	13	5, 7
中 間 的					
太く丸い		15, 17	5, 8, 12		
			6		12

り、断面形では、2等辺三角形の頂部鋭角の如く端部先が尖るもの、内外面とも丸くふくらみ太いもの、内面や外面に抉る様に反する部分を持つ嘴状のもの3者がある。嘴状のものには、太めのものと細めのものがある。端部の形態をまとめると第17表の様になる。

長頸壺 図化できたものは5個体である(第15図45・46: 1号墳、第22図34~36: 2号墳)。図上復元によらず全形を知り得たものは1点にすぎない。そのため頸部と胴部の比率等の数値は求められない。

形態上の特徴的な差は、口縁端部と肩部にある。口縁端部は、頸部から外反しながら器厚を減じつつそのまま端部へおさまるものと、端部が肥厚して立ち上がるものの2類、肩部については、角ばって稜をもつものと、稜をもたず丸味をもって胴部へ続くものの2類がある。

手法上の特徴についてはどの個体も類似するが、2点挙げられる。その1は、肩部周辺を残すものには皆、いわゆる「三段成形」の痕跡があるということである(図版48)。これは胴部と口頸部が別々に成形され接合された証拠となろう。3段成形については、胴部の成形後、天井部に残った穴を円板状にした粘土を貼りつけてふさぎ、そこに穿孔して口頸部を接合した場合と、その円板状の粘土に口頸部を接合する工程の方が先である場合が考えられる。ここでは口頸部と円板との接合部の方が、円板と胴部の接合部より密着し、痕跡をより不明瞭にしていることを理由に、後者の場合を想定したいがどうであろうか。手法上の特徴のその2は、胴部下半が例外なく回転ヘラケズリを施されていることである。この回転ヘラケズリは、すべて器体の回転方向が左回りであり、従来の

須恵器等の成形・調整にあたってはロクロは右回りに用いられているという観察に反するものとなつた。原因としては、胴部を肩下部まで成形した後倒立させて右回りロクロで回転ヘラケズリを施しているか、壺類等大形品のヘラケズリには、小形品とは異なるロクロの回し方があったか、そのいづれかであろう。これはヘラケズリを施す工程（段階）に係る重要な問題であるが、ここでは今後の課題としたい。

耳付短頸壺 1号墳と2号墳から1ヶづつ出土している（第15図41：1号墳、第21図33：2号墳）。基本的な器形、把手（耳）、タタキ目等、きわめて類似している。相違点は、1号墳からのものが、高台が厚く高めで内側へ屈曲気味に外開するのに対し、2号墳からのものはより短く外反し、底部が高台より下へとび出している。

成形・調整等についても、2ヶとも同じと考えている。釉（自然釉と考える）の殆どない1号墳からのものでみると、タタキ目は高台と口縁部を除く胴部外面すべてに施され、底面も例外ではない。口縁部及び高台部はヨコナデによりタタキ目が消されていて、把手附着部も同様であることから、これらの成形・接合はタタキを施された後ということがわかる。このタタキが底面にまで及んでいる点から、各部のタタキ成形の方法・順序や連続性について疑問が残る。

高坏 3ヶ出土したが全形を知り得るのは1ヶである（第14図38・39：1号墳、第21図32：2号墳）。坏部の形態は、知り得る1ヶをみると、かなり直線的に大きく外開している。他の2ヶの坏部は、もう少し内湾の度合いが強かったかもしれない。脚部は下方へラッパ状に外反して開くが、端部が面取りされた様に急に屈曲しているのが共通の特徴である。坏部・脚部とも別々に成形され接合されたものと考えられる。

短頸壺 1ヶのみ出土した（第15図42：1号墳）。珍らしい器形で、正式には長胴短頸壺とでも言うべきであろうか。口縁直下、肩部直下に1本、胴部2/3と1/3のところに2本づつ沈線が廻っている。基本的な成形はマキアゲ・ミズビキ成形により、底部、胴下部1/3、同2/3、肩部、頸部までと、5～6段階でつくられているようだ。底面はナデ調整されているが大きな凹凸があり、三叉状の圧痕ないし擦痕がみられる。胴外面下部1/4程は回転ヘラケズリを施されているが、そのロクロの回転方向は左回りで、先に述べた長頸壺の場合と同様の問題が生じる。

平瓶 1ヶのみの出土で、しかも肩部破片である（第15図43：1号墳）。小形で薄手であり、ロクロ成形されたものであろう。天井部を円板状粘土のフタの貼りつけによりつくった跡（図版48）が明瞭に残っていて、口頸部はその後穿孔して接合したものとみられる。

甕 2個体ある（第23図37：2号墳、第24図3：2号墳土塙）。全形を知り得るのは2号墳からのものである。口頸部は大きくラッパ状に外反し、端部は肥厚して短く立ち上がる。胴部はかなり肩が張り、下半はやや間伸びして底部に至るが、底部との明瞭な境界はない。底部は丸底気味ですわりが悪い。

両者ともタタキ成形されていることが観察できる。2号墳土塙からのものは、内面に青海波文を呈す當て具痕を残しているのに対し、2号墳からのものは内面をナデ調整されているらしく、かなり平滑になっている。外面のタタキ目は、2号墳からのものは平行条線、土塙からのものは格子目状を呈すが擬格子であろう。

2. 須恵器の色調と施釉

出土した須恵器の色調は、大きく3系統に分けられる。その1は、青灰～灰褐色系、その2は赤～赤褐色系、最後が灰～灰白色系である。青灰～灰褐色系の須恵器の中には、外器面の一部や胎土が赤～赤褐色系となっていることがある。これに対して赤～赤褐色系は、個体数自体が少いのであるが、外器面以外の胎土が青灰～灰褐色系になっているものはない。この現象は、焼成時の差異であろう。即ち、環元焰焼成が不完全なものが赤～赤褐色系、何らかの理由により同一回の焼成が酸化焰焼成から環元焰焼成へと二段階を経て、しかも後者が不完全な場合のものが青灰～灰褐色系で胎土のみ赤いものと考えるのである。また、赤～赤褐色系は、よく「生焼け」と表現されるが、ここではそう呼ぶのがはばかられる程堅緻に焼き上がっている。一方、灰～灰白色系は、個体によりやや暗い色が混じることもあるが、外器面の色調とほぼ同様に胎土があがっている。

これら色調の系統に、釉（主に自然釉と考えている）の濃淡が実によく対応する。出土品のうち、蓋・長頸壺・耳付短頸壺の中には、灰釉陶器と見誤る程に濃緑光沢の釉がかかっているものがあり、それらは1つの例外があるものの、他はみな灰～灰白色系のものである。青灰～灰褐色系の中にも自然釉のかかっているものが2～3例認められるが、いづれも黄灰の斑状でザラついていて光沢などまるでない。明らかにその外觀は異なっている。赤～赤褐色系には釉は全くみられない。

ところで先述した、濃緑光沢の釉のかかった唯一の例外は、第15図45（1号墳）の長頸壺で、胎土は灰褐色に近く、その点から青灰～灰褐色系に含めた。この長頸壺の特徴的なことは、上向き面部部分（肩部・口頸部上半内面）には濃緑光沢の厚い釉（自然釉と考えている）がかかるが、垂直乃至下向き面部部分（口頸部外面）は、金粉或は銅粉を吹き付けた様に光り輝いている点である（カラー①）。焼成中、窯内に飛散した金属成分が附着した、いわゆる「窯変」の一一種と考えているが定かではない。原因、類例とともに御教示を頂きたい。

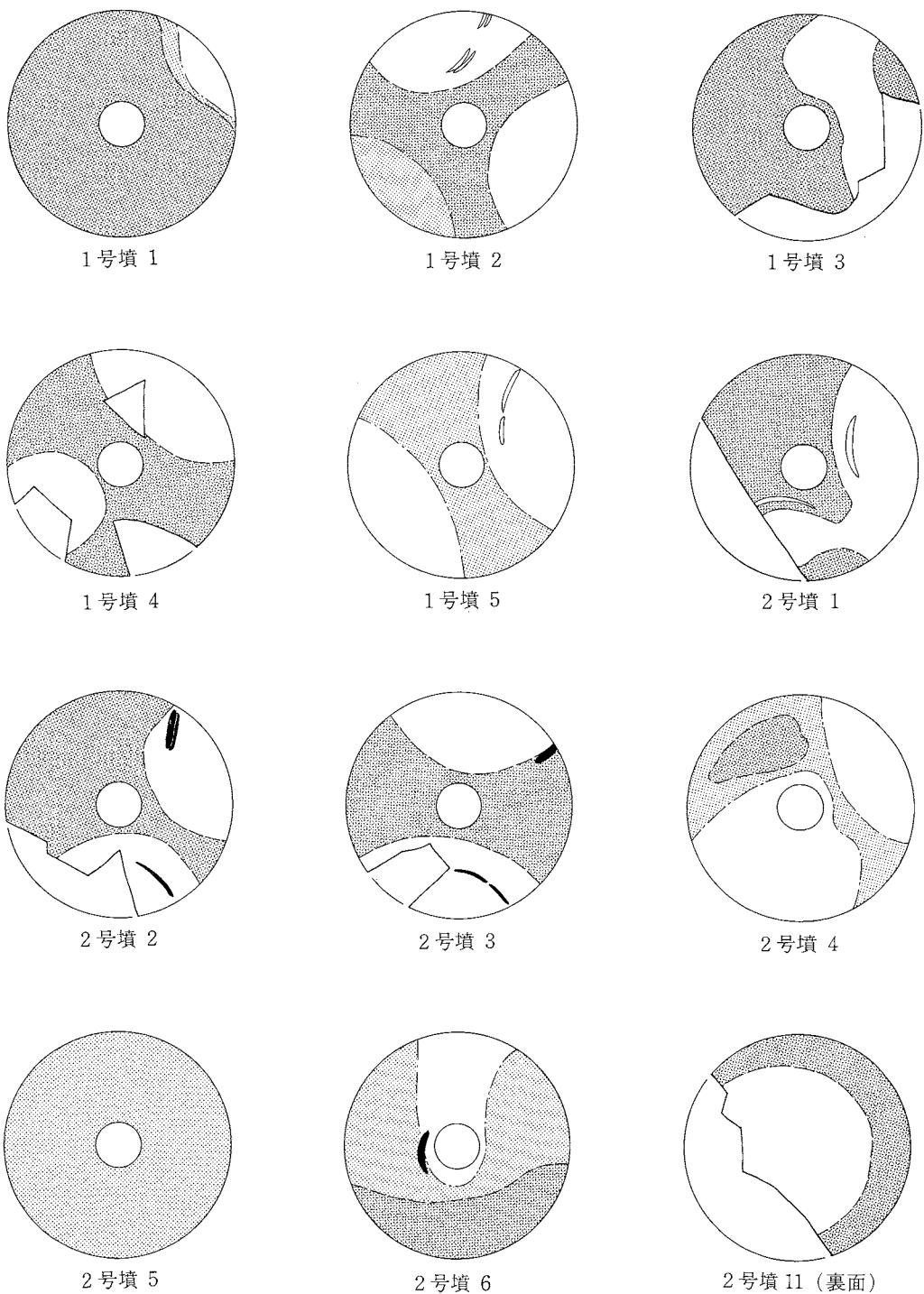
3. 焼成時の痕跡

須恵器蓋の中には、外面に著しい釉をもつものがあり、また焼成時に他の器体の一部が附着してしまった痕跡を持つものもみられる。第74図は、それらの釉の範囲と附着物の位置についての模式図である。

2号墳1～3は、形態や寸法が類似し、他に比して附着物が多い。釉の発色や器体の歪み方も共通しており、同一窯の操業を同じくするものかもしれない。釉（自然釉とみている）の範囲と附着物・溝状の傷の位置から、外面を上向きにして、蓋同志が半分づつ位重なる様に置かれて窯詰めさ

第 18 表 出土須恵器の器種別・色調系統

	蓋		壺		高 壺		長 頸 壺		耳付短頸壺・平瓶・甕	
	1 号 墳	2 号 墳	1 号 墳	2 号 墳	1号墳	2号墳	1号墳	2号墳	1号墳	2号墳
青灰～灰褐色系	7, 8, 11, 14, 15, 16,	7, 8, 12	22, 26, 27, 29, 30, 32, 37,	20, 24, 2(土)	39		45		41, 42	37
胎土のみ赤	9, 13	9	23, 28, 31,	21	38	32				
赤～赤褐色系	10		24, 25,							
灰～灰白色系	1, 2, 3, 4, 5, 6, 12, 17,	1, 2, 3, 4, 5, 6, 10, 11, 13, 14,	18, 19, 20, 21, 33, 34, 35,	15, 16, 17, 18, 23, 25, 26, 27, 28,			46	34, 35, 36	43, 44	33, 3(土)



凡例

濃い釉 溝状の傷

淡い釉 附着物

第74図 須恵器蓋の釉と附着物等の模式図

れていたのではないかと考えている。この他にも、似た痕跡や、扁った釉のものは、類似する焼成形態の想定が可能と考えている。

従来、須恵器の有台坏と蓋は、蓋を裏がえしにして、坏身と交互に重ねられる焼成形態を考えられてきたが、この焼成形態の痕跡を残すものは、2号墳11の1点である。これには蓋内面の周辺部のみに釉がかかっていて、その様な釉の降り方の原因が、先に述べた様な焼成形態に求められると考えるからである。

4. 須恵器のヘラ記号

須恵器の中に、ヘラ記号等をもつものが僅かながらある。

第12図1～3（1号墳）の内面には、非常によく似たヘラ記号が刻まれている（図版47）。内面中央ややはずれより下方へ、右に張る弧を描く様に、ヘラ状工具を用いて刻まれており、最大幅0.15～0.25、長さ3.8～4.3cmを測る。この1号墳1～3の蓋は、寸法、形態、釉の発色もよく似ており、さらに前述の様に相似のヘラ記号を持つことから、生産段階にまで遡る一括性を想定したい。

第13図20（1号墳）の有台坏にも、底面にヘラ記号が認められる（図版47）。半分程欠損して全形を知り得ないが、底部中央を横切る様に、最大幅0.3cmの太い直線と、それに切られる細く短い直線が刻まれている。また第26図1（3号墳）の小坏の体部外側面にも同様のものがある（図版47）。

明瞭にヘラ記号とわかるのは以上の5点である。この他に、第19図14（2号墳）の蓋は、内面中心に、 $0.5 \times 0.85\text{cm}$ の直角の記号が刻まれているが（図版47）、幅が全体に0.1cmと均一で、端部が角ばっている。さらにその記号の下敷きにされた様に同じ記号が重なっていて、この直角の記号は刻印によるものではないかとの感じをうける。

（直井雅尚）

引用・参考文献

奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』II 昭和1962

岐阜市教育委員会『老洞古窯跡発掘調査報告書』 昭和56年

助大阪文化財センター『陶邑』I 昭和51年

田辺昭三『須恵器大成』角川書店 昭和56年

檜崎彰一他『日本の陶磁 古代中世篇1 土師器 須恵器』中央公論社 昭和51年

第3節 土座敷址

土座敷の年代をきめる確実な遺物がなく、また裏付ける史料が地元の新村地区に見当らない以上は、当地方に散在する史料によるほかないので、以下はこれによる。

寛永19年（1642）9月23日、「岡田組之内水汲村家数人数牛馬之帳」によると、この村の総建物数34棟で、この中板屋が5棟で残り29棟は萱葺屋である。

板屋5棟のうち3棟は、庄屋を勤める弥三左衛門（金井氏）で、持高29石余り、村高の4分の1を持つ上層農家である。

板屋の大きさは虫喰のため判らないが、本屋の外にこれも大きさ不明の板屋の離れ座敷と板屋根の2間に○間（○内虫食いのため判読不能箇所。以下同）の蔵をもっている。この蔵は村中の年貢穀などを入れる郷蔵として併用されている。残る板屋2棟をもつ権三郎（伊藤氏）は、子の庄右衛門の代には同村の庄屋を勤める家で持高は18石7斗8升9合で門屋（家来）2軒を持つ家である。

板屋の大きさは○間に五間ある。権三郎は、このほか○間に3間の親の隠居屋と○間に2間萱葺のけこや（納屋）をもっている。

この権三郎持のけごや（土間）を除いた29棟の大きさの内訳は○間×2間の棟数19棟、○間×3間が5棟で残る4棟は、その身分的（門屋）と萱葺であるところから、前記○間×2間及び○間×3間の範囲に入るものと推定する。以上のことから、昔から現在に至るまで、家の最も小さい家屋を表現するのに9尺（1間半）×2間として蔑視されて来たのであるが、これに相当する家屋が28軒中19軒あったことになり、また○間×3間は2間×3間の家のことで、2間・3間の小屋の様な家というに相当する。これらの家は総べて土座敷様式であったものと考えられることは、次ぎに示す史料の如くであったものと考えられる。

次に隣町の波田町下波田の正保2年（1645）3月25日、鳴立組之内下波多村屋帳付覚によれば、上記水汲村と同じくらいの萱葺屋根で2間×1間の家1棟、2間×2間の家3棟、2間×3間又は2間×3間の家8棟、3間×3間の家1棟、3間×4間の家10棟、4間×4間が1棟とて合せて24棟となり、これより大きい萱葺の家や板葺の家をくるめて53棟あり、そのうち半分に近い小型の家があったのである。またこの反面庄屋3人のうちの1人である久兵衛（百瀬氏）は持高26石6斗2升2勺で庄屋夫婦の外下男・下女各1人を抱え、馬2疋を持ちながら萱葺の3間×4間の家に住んでいる。

また1人の庄屋兵三郎（塩原氏）は、若い夫婦の外下男・下女各2人を抱え、馬2疋をもち、持高16石6斗9升9合である。

いま1人の庄屋久右衛門（倉沢氏）は持高13石8斗9升で熟年の夫婦と青年の男子1人、少女の

女子1人と壯年の下女1人、馬2疋をもち家は5間×7間の板屋に住んでいる。

上述したように4間四方の家以下の小型屋は、次の史料によつて、これは土座敷の家ではなかつたかと推定する。

次に正徳4年（1714）7月、御本陣并御家中様御宿明科村・塔之原村・潮村家改帳によると、このうち潮村の場合は家数22軒のうち9軒が板鋪、13軒が土座となつてゐる。土座（敷）13軒の大きさを見ると4間×3間の家が2軒、5間×3間の家が3軒、6間×3間の家が4軒、7間×3間の家が3軒、7間×4間の家1軒となつていて、最大の28坪の家まで総て土座となつてゐる。また明科村の場合は、家数28軒のうち13軒板鋪、15軒土座となつてゐる。

その一例を示すと

一、長七間三尺・横三間式尺 武八

土座敷壱間三尺ニ壹間三尺

とある。以下土座敷につき図表する。同村内で高持百姓である弥惣右衛門（青木氏）の場合は

一、長九間、横六間 弥惣右衛門

上八畳敷 てんじょう、畳有

中拾畳敷 てんじょう畳有

下拾畳敷 てんじょう畳無

湯殿 セッchin（上便所）有り

と見え、上層の村役人層と水呑層との間に段差が見られるところである。（第19表）

次に最近（昭和50年）まで残っていた市内岡田下岡田の大沢頼吉氏宅の場合は、先祖の名が元禄頃から史料や過去帳に見られる家で、その土座敷が発見されたのは、昭和40年に筆者が発見して、松本市岡田公民館報に調査の概要が載せてある。

この大沢家の土座敷は土台石をえ、その上に柱を立て小屋組した萱葺の軒の低い家であった。小屋組が出来ると四圍に土壁を付け、この家の中にある地面の上に拳大前後の川原石を30cmくらい入れ、その上に石と石との間隔を埋めるために、それより小さい川原石を持って平均化した後、その上にたたきより石灰分を多くした粘土で凡そ5cmの厚さに敷つめ、その上を木槌でたたき固めて表面を平にして床面としたものであった。炬燄（こだつ）は、その床面下に40cm角で深さ30cm掘込んでいる「掘込こだつ」であった。土座敷は、台所や勝手より25cm位高い。台所や勝手は、秋葉原の土座敷と同じように地面の上を5～6cmのたたきで固めている。

勝手の隅には土座敷や床面に使われた同質の粘土をもって竈が築かれていて、炉（いろり）は勝手の中央より壁際に片寄つて約1m角に深さは15cm掘込まれて使用されていたのである。恐らくこのいろりやくどの廻りにはねこ「寝ござ」を敷いてあつたものと考えられ、土座敷は居間2間（時には座敷）として利用されたもので、土座敷床面の上に稻藁を1把並べに敷つめ、その上に寝ござ

第 19 表 正徳四年明科・塔原・潮・三村家改帳

塔原村

	戸主	規模	座敷			土座敷	湯殿	雪隠	備考
			畳数	天井	畠				
1	善次郎	10k × 3k	上8 下8	x	○			x	x
2	安右衛門	9k × 8k		x	x			x	元庄屋 渡辺氏
3	助七	11k × 3k3'	上8 下8	x	○			x	長百姓
4	源四郎	9k × 3k3'		x	x			x	長百姓
5	孫兵衛	11k × 4k3'	上8 下10	○	○			○	庄屋 望月氏
6	藤八	11k × 4k3'		x	○			○	
7	三七	10k × 4k	14	x	x			x	
8	次右衛門	11k × 3k3'						x	
9	伝右衛門	10k × 3k3'				14畳, 畠ナシ		x	
10	里右衛門	9k × 3k3'						x	組頭

家数×10軒 内7軒板舗 3軒土座

潮村

	戸主	規模	座敷			土座敷	湯殿	雪隠	備考
			畳数	天井	畠				
1	清之丞	10k × 4k3'	15		x			x	
2	徳左衛門	9k × 4k		上6 下10	x x			x	
3	源三郎	10k × 4k3'	上8 下10	x x	x x				
4	伝七	8k × 3k3'		14				x	
5	文七	7k × 4k	12		x			x	
6	忠次郎	8k × 3k3'		上8 下10	x x			x	
7	嘉兵衛	11k × 4k3'	上8 下10	○ ○	○ ○			○	庄屋 関氏
8	伝之丞	7k × 3k							
9	長忠	6k × 3k				土	同		
10	九兵衛	4k × 3k							
11	左平	4k × 3k							
12	角平	5k × 3k							
13	庄平	5k × 3k							
14	庄介	6k × 3k							
15	藤七	7k × 3k							
16	伊兵衛	6k × 3k							
17	源次郎	7k × 3k							
18	新七	6k × 3k							
19	庄七	7k × 4k							
20	庄七郎	5k × 3k							

家数×21軒 (?) 内 9 軒板舗, 13 軒土座

明科村

	戸主	規模	座敷			土座敷	湯殿	雪隠	備考
			畳数	天井	疊有無				
1	関七野右衛門	(本陣) 8k3'×4k'	上6	×	○				組手代
2	作右衛門		下10	×	○				
3	又之丞	3k'×2k3'	ナシ						
4	半次郎	10k3'×4k'	上8	×	×		×	×	
			下10	×	×				
5	武八	7k3'×3k3'				1k3'×1k3'			
6	与惣右衛門	9k'×6k'	上8	○	○		○	○	青木氏
			中10	×	○				
			下10	×	×				
7	新之丞	6k'×3k'				1k3'×1k3'			
8	武七	9k'×3k3'	上6	×	×		×	×	
			下10	×	×				
9	久介	8k'×3k'				2k3'×2k'			
10	弥七	4k'×3k'				1k3'×1k3'			
11	曾右衛門	11k'×5k'	上8	×	○		○	○	岩渕氏
			下10	×	○				
12	儀八	10k'×5k'	上6	×	○		○	○	庄屋 関氏分家
			下10	×	○				
13	市兵衛	7k'×3k3'				3k3'×3k			
14	太兵衛	6k3'×3k				3k3'×2k			
15	善次郎	7k'×2k3'				2k'×2k			
16	伝助	12k'×4k'	上8	×	×		×	×	
			入側	○					
			下12	×	×				
17	甚右衛門	7k'×3k'				3k'×2k			
18	与七郎	10k'×4k'				4k'×2k3'			
19	長平	4k'×4k'				2k'×1k3'			
20	弥市	7k'×3k'				2k'×3k			
21	安兵衛	11k3'×4k3'	上8	×	×		×	×	
			下10	×	×				
22	文四郎	7k'×3k'				3k'×2k			
23	半七	7k'×3k'				2k'×3k			
24	地蔵堂守	5k'×3k3'		○	○				
25	可捕	4k'×2k			○				
26	龍門寺	8k'×7k	12	○	○				
			18	○	○				
			12	○	○				
			18	○	○				
			12	○	○				
27	同寺くり	9k3'×3k(ろうか)	上8	×	○				
			下18	×	○				
28	同寺	5k'×3k	12	×	○				

家数28軒 内13軒板鋪 15軒土座

Kは間、'は尺

を敷いて江戸時代は生活していたものであろう。調査時点では床面の上に新聞紙を敷き、その上に畳が敷かれていた。

この家の使用された最終年代は、周辺から発見された墳墓群から、石塔のみ専称寺境内へ移した宝暦2年（1752）前後と諸般の状態から考察すると、この土座敷家は、塩尻市上西条の朝の宮遺跡から多数発掘された中世土壙群の中から発見された墓所守の庵と同じく、秋葉原の場合も90基以上発見された墓壙群中にあるところから、墓所守の庵ではないかと考えられる。

以上の理由により土座敷としては、明科町の例や、市内岡田下岡田の建築年代より古く江戸時代初期に建てられたものではないかと推定される。

尚この土座敷家は東向で、入口は東南隅（東側）であったと見られ、家の外側東南には、家に入る木戸道と考えられる小石敷固めの幅2.8m、長さ3.6mの道路敷が見つかっている。

（倉科明正）

第4節 陶 磁 器

土座敷出土の近世・近代の陶磁器について

(1) 近世・近代における陶磁器の扱いについては、遺跡から出土しても、ほとんどが数行ほどの報文で片付けられており、ましてや広範囲にわたる発掘調査では、ブルドーザーなどによる表土除去のため、土と共に押しやられているのが大方の実情であり、その報告例も少ない。（第20表）

今回調査の秋葉原遺跡においては遺構自体が近世ということもあり、近世を中心とした陶磁器資料多数を得ることが出来た。しかし遺物の大部分は遺構に直接的な関わりがなく、多分にゴミ溜あるいは遺棄されたものようでもあり、その廃棄の時期が確定できない不満はあるが、出土遺物としてのまとめを類例を中心に記してみたい。もとより筆者は当該時期については知識がなく、今回の調査によりはじめて陶磁器にふれたものであり、又、補助事業における緊急発掘調査ということで、報告書作成に充分な時間が与えられていないなど、悪材料ばかりであるが、今後、近世、近代の陶磁器を取り上げる報告書の増えることを願って、不備をかえりみず記述する。

(2) 陶器 出土遺物が図示できない小破片が多いので正確ではないが、一応の傾向として図示したもの131点をまとめると第21表のようになり、灯明皿、灯芯立、仏飯器、神酒器、花瓶、香炉、仏具で1/3を占めることは一般家庭の例から推して多いので、この地が宗教的な関わりが深いものであることを伺わせる。

陶器は一部瀬戸系のほか地元の窯かとも思われるものを除くと、ほとんどが美濃系のものである。第31図20の仏飯器は宮田村熊野寺本堂跡出土⁽¹⁾のものと類似しており、灯芯立（第31図24～29）については釉は異なるが、同型のものが伊賀良焼の発掘品に見られる。花瓶（第31図37、38）は小型で岐

阜県の駄知窯のものと類似している⁽³⁾。第31図42の香炉は釉調が塩尻市信斎窯出土のものと似ており、第32図50の土瓶の蓋は東筑摩郡本城村小仁熊窯出土のものと、つまみ部分の大小の差こそあるが、松皮状の文様のつけ方、表面に釉がなく、裏側に釉のつく状態、またやや緑がかかった茶色の釉の発色などよく似ている⁽⁴⁾。同図54の糸目土瓶は駄知窯のものとそっくりである⁽⁵⁾。

人形徳利（第34図77）は備前焼に多くみられるものであるが、岐阜県瑞浪陶磁資料館のもの⁽⁶⁾と、塩尻市入道焼にも同様の貼りつけの徳利がつくられている。同図78の徳利は鉄釉にワラ灰釉が青白くかかっているが、その釉調は松本市の浅間焼、入道焼に似、池田町の相道寺焼には成形、釉調ともに似ているが、浅間焼の素地は赤っぽいのに対し、78は灰白色である⁽⁷⁾。擂鉢（第35・36図86～90）は目が細かく、その櫛目も9本、12本、16本、27本である。口縁部も完形のものがないので不明ではあるが、片口状になっている破片は見当らなかった。これらをみると、確かに美濃系のものと思われるが、その一方、近世末から近代にかけて県内各地で作られた窯のうち、美濃、瀬戸などの陶工を招いたり、あるいは陶土を取り寄せたりして作っていることもあるというので、美濃、瀬戸などと似ていながら地元の窯のものということもあるかと思われる。

(3) 磁器 美濃系、瀬戸系それぞれ半々位の割合であるが、一部伊万里系と思われるものもある。第37図95の壺は波と鳳凰の印刷文であり、同図96の金色で葉脈を描出しているものと共に明治以降の作と思われる。第37図107、108の茶碗は高台内に“道八”的字がある。道八は京都で活躍した仁阿弥道八が有名であるが、彼自身の作品と比べると雲泥の差があるので同一人物ではないだろう。第38図115～119の紅皿は型押しによるもので、飯田市の風越窯跡からも、同様のものの出土例がある⁽⁸⁾。神酒器（第38図、126～131）の文様も当時の流行であったのか、笠の葉状と梅鉢文が描かれているが、岐阜県桜ヶ根窯の御深井小瓶とよく似ている⁽⁹⁾。皿（第39図134、135）は同類破片が数個体分ありながら接合のできなかったものであるが、長崎県の波佐見焼のくらわんか茶碗と酷似している⁽¹⁰⁾。見込みの五弁花状の文様は他に宮崎県の小峰焼にも見え⁽¹¹⁾、松本市寿、小赤遺跡出土磁器片も見込みの文様は全く同じである。しかしこれも文様の一致のみをみてのことであって必ずしも九州のものかはにわかに断定できない。その好例は須坂焼の深皿で、伊万里焼の皿の文様を写して描かれているものがあるからである⁽¹²⁾。

(4) 近世、近代の県内窯址の研究はもとより、愛知、岐阜県内を中心とした窯業生産地との技術の交流、製品の流入経路等調査研究すべき事項は多いが、これを端緒に今後も究明を続けて行きたいので大方のご指導をお願いするものである。

（神沢昌二郎）

第 20 表 県内における近世近代陶磁器出土遺跡一覧表 (窯址ははぶく)

遺 跡 名	所 在 地	出 土 遺 物
戸隠十二坊廃寺跡	戸隠村奥社	陶器・土師質土器
木曾殿アブキ洞穴遺跡	鬼無里村日影西山国有林	陶器
城之内遺跡	更埴市屋代城之内	陶器
新地蔵峠遺跡	真田町傍陽入軽井沢沼入	陶器
三分遺跡	東部町田中三分	陶器
原遺跡	上田市岡原	陶器
上前沖遺跡	上田市浦野上前沖	陶器
発地横地遺跡	軽井沢町広戸発地	土師質土器
福王寺跡	佐久市岩村田福王寺	陶器
借馬遺跡	大町市	陶器(施釉近世か)
宮の前遺跡	池田町中鵜飼山	陶器・磁器(灯明皿 茶碗 皿 染付茶碗)
剣宮遺跡	塩尻市	陶磁器(黄瀬戸、美濃)
松本城二ノ丸書院跡	松本市二ノ丸	陶器・磁器(播鉢 茶碗 カブト鉢 燃壺壺)
惣社宮北遺跡	松本市惣社	陶器・磁器
地獄久保遺跡	下諏訪町	陶磁器
御所平北遺跡	富士見町神戸	陶器
葛窪遺跡	富士見町葛窪	陶器・磁器
田端遺跡	富士見町田端	陶器
入の日影遺跡	茅野市宮川字坂室	陶器
馬捨場遺跡	岡谷市小坂馬捨場	陶器
御頭屋敷遺跡	岡谷市小坂山ノ神	陶器(皿 茶碗 仏花器 泥面子)
橋原遺跡	岡谷市	陶器(瀬戸系 伊万里系)
大石遺跡	原村払沢大石	磁器(仏飯器) 陶器(灯明皿 埴鉢 薫皿)
在家屋敷遺跡	諏訪市四賀神戸	陶器
荒神山遺跡	諏訪市湖南大熊	陶器
権祝屋敷遺跡	諏訪市中州神宮寺	陶器
大祝屋敷遺跡	諏訪市中州神宮寺	陶器
女軒垣外遺跡	諏訪市豊田有賀町屋	陶器(灯明皿 摺り鉢)
山本田代遺跡	伊那市西春近山本	陶器 磁器(紅皿)
柏木北垣外遺跡	飯島町	陶磁器(瀬戸)
神田裏遺跡	高森町山吹新田	陶器(骨蔵器)
無縁堂遺跡	高森町市田牛牧	陶器(骨蔵器)
赤城遺跡	上郷町上黒田	陶器
橋場遺跡	阿智村小野川	陶磁器

遺 跡 名	所 在 地	出 土 遺 物
赤坂 遺跡	阿智村小野川	青磁陶器(天目)
黒田 遺跡	浪合村黒田	陶器
イナバ 遺跡	阿南町大下条東条中谷	陶器
阿島五反田 遺跡	喬木村阿島五反田	陶器
おくまんの 遺跡	喬木村阿島	陶器
北平 遺跡	豊丘村河野堀越	陶器(天目)
城 遺跡	豊丘村神稻田村	陶器
田村原丸山 遺跡	豊丘村神稻田村	陶器
伴野本田 遺跡	豊丘村神稻伴野	磁器(染付)
新屋敷 遺跡	飯田市座光寺高岡	陶器
阿弥陀垣外 遺跡	飯田市座光寺恒川	陶磁器
小平 遺跡	飯田市下久堅大原	陶器
原平 遺跡	飯田市上久堅原平下	陶器
古屋垣外 遺跡	飯田市上飯田丸山	陶器
大東 遺跡	飯田市	陶器
田代 遺跡	塩尻市宗賀日出塙	陶器
宮下 遺跡	塩尻市宗賀日出塙	陶器
丸山 遺跡	塩尻市宗賀日出塙	陶器
向山 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
吉田 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
下水戸 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
配水池東 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
北原 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
中下洞 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
遠原 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
西屋敷 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
上野 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
上ノ山 遺跡	塩尻市宗賀本山	陶器
小怒田南 遺跡	塩尻市洗馬梨ノ木	陶器
上竹A 遺跡	塩尻市洗馬梨ノ木	陶器
上竹B 遺跡	塩尻市洗馬梨ノ木	陶器
云光 遺跡	塩尻市洗馬梨ノ木	陶器

第 21 表 秋葉原遺跡陶磁器器種別一覧 (図示したもののみ)

器種	陶 器			磁 器			土 器	計
	鉄 程	御深井釉	その他の	白 磁	染 付	型 押		
灯 明 皿	4	3	1					8
灯 芯 立	8							8
仏 飯 器		2	4	3	2			11
神 酒 器			1	6				7
花 瓶	2				2			4
香 爐	4	2	2				1	9
盒 子					1			1
紅 皿				5	1			6
坏		1		1	5			7
仏 具	1							1
徳 利	8			1				9
土 瓶	4	1	4					9
茶 碗	2	7	5		13			27
飯 茶 碗					4			4
大 型 碗			2					2
皿	1	4			4	2		11
小 鉢		1						1
片 口	1							1
擂 鉢	5							5
計	40	21	19	16	32	2	1	131

引用・参考文献

- (1) 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書上伊那郡宮田村その2 長野県教育委員会 昭和49
 - (2) 安藤裕「しなのの陶磁器」信濃毎日新聞社 昭和57・6
- 遮那真周, 遮那藤麻呂「朝臣洞窯跡」下伊那歴史考古学研究所 1980

(3)桃井勝「江戸時代の美濃窯」『日本やきもの集成3 瀬戸、美濃、飛驒』平凡社 1980

(4)本田卓司氏のご好意により採集品の実見および教示を得た。

(5)(3)と同じ

(6)「瑞浪陶磁資料館」展示目録 美濃古窯跡群保存協議会小委員会 昭和55年

(7)木村鈴一氏の教示による。

(8)遮那真周、遮那藤麻呂「飯田風越窯址」下伊那歴史考古学研究所 1979

(9)「美濃の古陶」美濃古窯研究会 昭和51

(10)「日本やきもの集成11 九州I」平凡社 1980

(11)「日本やきもの集成12 九州II、沖縄」平凡社 1980

(12)安藤裕「しなのの陶磁器」信濃毎日新聞社 昭和57.6

○遺跡一覧表は『長野県史』考古資料編遺跡地名表より抽出したものに今回調べたものを加えた。参考文献の主なるものは『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』『Fukien Journal』No.7 1981などである。

第5節 墓址群についての考察

1. 年代的考察

この度び発見され、発掘調査された埋葬施設すなわち墓壙は、遺構などから推定して、その数90余基を数えることが出来る。確実なる個数が判明し難いのは、一部に数回も追葬のため掘り返されている同族墓があるためである。この地に古墓があったことは、誰れ一人として知る人もなく、またその伝承がなかったことは、古く廃止されたか、または他に移動されたあと、荒蕪地となつて放置された後水田として開拓されたものと推定したのである。この墓地の移転の時期及び移転の理由については、次に示す史料によって知ることが出来る。それまで隣接の北新村にあった浄土宗三明山宝号院専称寺が、南新の現在地に移転の願書の中に見られる。

この専称寺の沿革については、元禄9年(1696)11月、浄土宗の總本山京都の知恩院及び松本藩へ書上げた「元禄九丙子年十一月御改、信州松本領并御領所浄土宗寺院開山記」には
一、本山末寺 信州筑摩郡鳴立郷新村三明山専称寺起立、永禄元戌午年建
一、開山甚蓮社幸誉還同上人

生国姓氏剃髪附法之師・行年共ニ不知、天正三亥年五月廿八日遷化

とある。また同年書上げの異本である「松本御領、附御領所共浄土宗起立」の書上げには
一、本山末 三明山宝号院専称寺 鳴立組新村
一、開山 甚蓮社幸誉還同上人大和尚

產國不分明

起立者 人王百七代正親町院ノ御宇永祿元戌年三月十五日草創成就，今年迄凡百三十九年，往古ハ聖德太子御建立ノ弥陀堂ノ由，因茲聖德太子御作本尊弥陀仏

御丈三尺二寸

中比（頃）無住ニテ重宝紛失

開山檀林附法師不分明

天正三乙亥年五月廿八日遷化，今年迄百二十二年

とあって、この寺は永祿1年（1558）3月15日、筑摩郡神林郷水代（松本市神林）の川西（水代）の野尻で草創され、寺址は耕地化されたが、仏餉場（ぶっしょうば）として昭和21年の農地開放まで年々年貢米が旧寺址より専称寺へ届けられて来たのである。専称寺は、その後何時の時代か判らないが、北新の地（松電上高地線北新駅より南150mで現在墓地）に移転したのである。「専称寺寺地引替え覚」によるとその後寛保1年（1741）10月移転建立が企てられ、惣旦那奉賀金（寄附金）金93両を3年掛けで集めることにきまり、同年11月寺を北新の地から南新の安塚原へ移転建立の願書が新村5箇村より鳴立組大庄屋北栗林村松田勘之丞を経て松本藩郡奉行へ提出され、然し一方許可の下りない10月から松本藩の堀米渡場から材木を求めはじめ、上波田村松山から、また藩有林の波田御林（東筑摩郡波田町）より大量の材木を求めるのに着手している。

寛保3年（1743）3月12日に本堂の絵図が宮木の伝左衛門によって出来上り、同年8月木曾宮越宿（木曾郡日義村宮の越）の大工棟梁長治郎と伝左衛門が入札し、金41両2分にて長治郎が落札する。木挽（製材）は上新村杢之丞と木曾藪原の平治郎が引請けている。

寛保4年（1744）2月、再度寺地移転を願い専称寺と北新村役人より願い出される。

奉願上口上之覚

一、当寺境内事之外地詰只今者墓所一切無御座、御田地之畔葬、又は御田地ニ而祭礼等致し候事迷惑至極奉存候、殊ニ御田地之中ニ而田暖ニ障、其上踏散致、通路之儀村方難義之趣數年申候得共、可致様無御座候、四方家近ニ御座候ハハ、第一火之用心悪敷殊更呑水之義、御田地用水坊之下ニ而殊之外穢濁流參候、此水ヲ本尊江供候事至極難義仕候、

此度建立之序ニ御座候ハハ、当寺所持仕候八千塚松林中江寺地引替申度奉存候、

此段被仰上御許容被成候様奉願上候、以上

北新村

寛保四子年

組頭半四郎㊞

二月

庄屋弥兵衛㊞

専称寺㊞

松田勘之丞殿

とある。この文書によると移転の理由は次の通りである。

第1に寺地が狭く、寺附属の墓地が一切ないこと、第2に周囲が民家で火災の心配があること、第3に呑水や本尊に上げる「あかの水」が、用水均であるため汚染して不潔であること、第4に南新村の墓地が各所に散在しており、その墓地も田の畦畔などにあるため踏にじられたり、また葬式や法事などは田の中でやらなければならず、大変困っていることなどの理由をもって願出している。

これに対し松本藩から、延享1年（1744）3月・改め役人樋口茂右衛門が同心2人をつれて到着し、東42間、西60間、南39間、北36間の広さとくる。

この際改め役人の問は、この林は前から寺所有地か、入会原であったところを寺のものとしたか、とすれば野手糀（租税）はどうなっているかというものであった。

これに対し南新村の七之丞の返答は、この原は南新村の入会地であったが、当地氏神小野神社の御社が田地の中にあって場所がよくないので、この原へ移転しようと考えて一度はきめたが事情があって移転はとり止めとなったので、その跡地は寺へ附けた方がよいというので専称寺の所有地としたこと、野手糀は寺では出さず、入会村で納めていると返事したのである。これによって直に移転認可となる。許可が出ると本堂と庫裏の地業が行われる。また本堂や庫裏などの土台石は新5箇村で集める。（延享2年3月）

つづいて同年4月15日に古寺の庫裏を解体し、5月に新寺地へ移建し、7月10日に住職らは新寺へ移る。同月13日より18日まで1日入足として40人づつ新村5箇村などから出動し、本堂は同年10月25日から建て始め、11月14日まで1日入足として50人づつ、と大工7人と木挽が出て素建が終り、11月15日棟上げが行われている。

寺の移転建築が終ったあと、かねて移転願にある墓地移転のため本堂南に墓地を設定し南新の各所にあった墓地を寺の境内に移すことに着手する。（宝暦2年～1752）

一、宝暦二申ノ三月南新らんとふ場見立普請致、石とう引

とある。この時の墓地移転は、地上にある石塔（墓碑）だけの移転にとどまった様子で、この度の発掘により地下の埋葬遺構については、移転された形跡は認められなかったのである。なおこの一斎移転に際して、なお留った一軒があり、寺所有の墓地として残り明治38年まで埋葬されている。

2. 墓地配置上の考察

墓地群を大別して、小野神社側にあり、一段と低い所にある第1墓地群と土座敷の東側及び南側に拡がる墓地群を第2墓地群とする。第2墓地群は第1墓地群より60cm位高い所にある。

第1墓地群はその真中に巾3m、長さ13mの中央墓道（本墓道）があり、この墓道から東側に4本、西側に3～4本の支墓道（枝墓道）巾約1m、長さ約8mのが出ている。この支墓道と支墓道との間に墓塚がある。この一区画分は専称寺墓地などと比べて恐らく一族（同姓・まき）づつに配

分されたものと推定する。

第1墓地群のうちを次の如く区分する。まず中央墓から東側を第1区とし、西側を第2区とする。東側第1区を南側から東1・2・3・4の各小区とする。西側を西5・6・7の各小区とする。東1小区は、このうちで最も墓塚数が多く、出土遺物も多くて、中には剣花菱の定紋を打出した金メッキの帶留金具（推定）の高級品や六道銭などの遺物をはじめ、火葬骨や土葬遺骨の出土も他とかけ離れて多い、この1小区は同姓数も多く、本家を中心とした同姓集団であると認められ、この1小区の同姓集団は、早くから南新村に定着し、田畠を開き、同姓を殖していった一族の墳墓ではないかと考えられる。

2小区は1小区に次ぐ墓塚数を持ち出土の人骨や遺物の数からして、1小区につづく古さをもつ一族の墓地と見られ、これに続き3小区、4小区と墓塚数や人骨、遺物量が漸減しているところから、これに續いて西側の5・6・7小区の順序に従って造られて行ったものかと見られる。

第2墓地群の配置の状態は、第1墓地群ほど明確ではないが東側に墓道がある、これから西側に2～3条の支墓道がかすかに見られる。土座敷址南側にある墓塚群出土の人骨は総べて火葬骨であって、伴出の六道銭も6枚そろって出土することがなく1～2枚程度であり、小区画内の墓塚数が少ないとから短期間埋葬されただけと考えられる。

これとは反対に土座敷址の東側の墓塚群は土葬と推定される深い塚が多く集中しているところから、南側より年代が長く埋葬されたものと思われる。

3. 墓址群の埋没について

この墓地は、宝暦2年に専称寺境内に新に設定された墓地へ地上部の石塔のみ移転されたあとは、地下部の墓塚のみ残存したのである。その後はここに埋葬される人もなく、南新村と東新の草木採集の入会原であるところから、草木の生ゆるままに放置されて何時とはなく誰れからも忘れ去られてしまったのである。その後田畠の肥として草や若葉を刈取って入れる農業から、江戸時代後期に美濃国（岐阜県）から松本藩によって蓮華（れんげ）草の種が輸入され、これを松本城附近の3組（岡田・山家・庄内組=現松本市）に配布奨励されて、漸次他方面に伝わって行ったもので鳩立組に属した新村地域も当然この恩恵を受けるに至ったものである。

「慶安五壬辰正月十八日、波多山原御年貢仕分ヶ書上帳」によると、波田町の唐沢と下原へ苅敷山手（入山料）を出して刈っている。

下波多分内山

一、糀六俵弐斗五升

唐 沢

内式俵三斗六升 南新村より苅敷山手下波多分内山

一、糀六俵壹斗五升

下原草場

内壹俵四斗 南新村より下波多村へ取

とあって、遠く3里もある唐沢まで入っている。また平地林として安塚原は寛永12年（1635）開発が始められて行くなかで、苅敷原は減少して行ったが、れんげ草の普及によって、明治初年に至って、専称寺原（後に秋葉原）が開発されるに至っている。

為取替申証文之事

字専称寺原其外芝地木立入会之分不残今般両村申合いたし、南新村よ里金式百両出金いたし東新村江相渡入会地不残南新村江引渡可申義引合約定候所相違無御座候、然上者両村至急御役所江罷出、御許容拝請候上金子引渡可申候、仮令如何様之儀出来候共、右約定之通少も違変申間敷候、仍而両村役人惣代立会連印いたし為取替申所証文如件

但当月十七日より両村役人御役所江罷出奉願候所、御時節之義御許容手間取候ニ付、差向立木之分壳払可申義談示相定候事

秋葉林之義、両村ニ而元法伝寺江談判いたし、南新村ニ而拾両也、東新村ニ而五両也、出金いたし差遣し可申、猶又地所之分願之通御許容ニ相成候節者同様之場ヲ以取計可申相定申候事
山王宮境内之義者此度立会相定候通違変無御座候事

山神社地ニ有之立木者東新村ニ而伐取、宮之義者同村江引取、跡敷地之分者両村役人ニ而申合南新村江壳渡し可申相定候事

馬捨場之義者是迄之形ヲ以て以来双方故障無之事

筑摩郡南新村

名主上条四郎五郎印

組頭波多腰 五郎印

同 上条 佐十郎印

村惣代手塚 滝次郎印

同 小林 八十平印

同 興 八十之印

東新村

名主田中 吉門印

組頭田中 太門印

村惣代小野 清作印

同 小野 庄次印

同 篠野井 市郎印

とあり、この協定によって、この原の中にあった秋葉林・山王宮・山神社・馬捨場などと入会権を解消するため南新より東新へ金200両を出して田畠の開発が始まっている。この耕地化によって墓址は地中に没し、110年後の今日発見されたのである。

(倉科明正)

第5章 結語

この度の発掘調査により古墳時代終末期と推定される横穴式の石槨を持つ古墳5基が発見されたことである。古墳の構成は石槨の長さ7m前後のもの2基（第1，2号墳）と石槨の長さ3m前後的小形古墳3基（第3，4，5号墳）とに分けられる。各古墳間は100m以上離れて存在しているところから、終末期の古墳群として見るにはいささか無理かと考えられる。然し第1号から第5号墳までのうち第3号墳が若干東にそれている外はほとんど南北1直線に並んでいるところから、古墳列として、新村の開発の歴史と考え併せて見た方が適當ではないかと思う。

それは、この古墳列第1号墳より東150mには、南新・東新両集落（もと一つの村）産土神小野神社が鎮座している。この小野神社あるところの北方には北新・上新・下新の三集落（もとは一つの村）の産土神岩崎神社が鎮座している。また南方には和田地区のうち蘇我・衣外・境・殿・中村・和田町・下和田7集落（もとは北和田村という1つの村であった）の産土神北和田（和田里）神社が鎮座し、その延長線上には南和田集落の産土神南和田神社が鎮座している。この岩崎・小野・北和田・南和田の各神社を結ぶ線は、和田沢が波田町三溝と新村地区との境近くで数本の沢に分岐して、新村・和田・神林方面へ扇状に開く扇頂部を基として、その扇端部に若干弧を描きながらもほぼ南北に一直線上にあるという事は、この線をもって新村・和田両地区の開発が始ったことを意味するものではないであろうか。

前記古墳列が150mの西側に併列していることは、古代における大井郷開拓の歴史を知る上で重要な鍵を握っているものと見る。これにより神社より上流または高いところにある集落は、神社より下流または低いところにある集落より新しく、恐らく中世になってから新しく開発が始った集落であろう。

和田地区のうち蘇我は、明治5年まで荒井という村落であった。荒井とは新井のことと新しい村落を意味し、新村地区においても上新村・下新村は延宝2年（1674）に北新村から分離独立しており、南新の安塚は寛永12年以後の開発であり、山王地区や秋葉原は明治4年以後の開発であることによって証する事が出来る。

また島立地区のうち南北栗林の両集落を除く荒井・堀米・大庭・三之宮・中村・永田・鳴立町・小柴の8集落の総鎮守沙田神社が梓川右岸扇状地の先端部三之宮にあることは、既述したように波田町鶴沢の磐座に鎮座していたこの神を、大井郷の開拓に随って順次下流へ下流へと神が迎えられ、開拓のほとんど終る中世室町時代長禄元年に現在地に安定鎮座したものであろうと推定する。島立の荒井集落が扇状地の先端にあって、ほかの7箇集落より新しく開かれたことを立証している。

古墳は先年安塚古墳群（9基、と未調査1基）と秋葉原古墳群（列か）5基の発見によって耳新

しいことではないが、今後の発掘では新しい江戸時代初期頃の民家土座敷と略同時代の墓地群の発見であろう。

土座敷址は当地方において発掘例がないところから、松本市内外の史料や土座敷などを通じて、その解明につとめた。この発掘調査によって近世初頭の農民の中でも下層に属する民家の様子を立証することが出来たのであった。

江戸時代初期から中期宝暦2年に専称寺境内に移転するまで長く埋葬され続けた旧墓地90余基が廃されてから230年後の今日発見された事は全く予期せぬことであった。

この墓地の発掘によって、近世墓地のありかた村落形成の様子など歴史的な面と土塙の掘り方、埋葬に際して、近親者による石の投げ込み方、手首に念珠を掛けること、六道銭は6枚入れるものと思っていたのに、1~6枚と必ずしも一定していなかったこと、全国的にも元禄期頃まで相当火葬が行われ、現場に火葬の跡が見つかり、また火葬骨が多量に各所から出るなど埋葬の方法に時代的差異があることなど民俗的な面から見ても重要であった。

第1号墳の石槨部の構築についても、左右両側壁及び奥壁、蓋石、枕石など合計370余箇であった。この古墳に使用された石全部は梓川の川原石であり、石の種類は花崗岩と硬砂岩で、その割合は花崗岩3に対し硬砂岩1の割合である。この古墳に使用された確実な数は、既に破壊されており判らないが前記の数量とあまり差はなかったものと推察した。

この古墳は、発掘調査後に北方松電上高地線脇の残地へ移転復元したことによって確信を得たのである。

これら古墳の築造年代については、第1号墳・第2号墳ともに8世紀の奈良時代に築造され、追葬に火葬骨を入れた四耳壺は平安時代初めに入るものであるところから、同時代まで使用されたものと見られる。また、江戸時代の墓地群から出土した人骨は、信州大学医学部解剖学教室西沢寿晃氏のもとにおいて調査研究の後に、総べて復元された第1号墳西側の空地に、他の無縁墓地関係とともに手厚く埋葬され慰靈したのである。

なおこの遺跡から出土した遺物は人骨を除く総べては松本市教育委員会において保管されている。

炎天下のなか1ヶ月半に及ぶ調査にあたり公私とも多忙の中を参加して頂いた調査員、調査補助員を始め、調査中何かと御協力を頂いた工事関係者、発掘作業に直接参加して協力して頂いた地元新村地区の関係者の皆様やあがたの森考古学研究会の瀬川・吉沢・三沢のお三方には全面的な御協力を頂き厚く御礼を申し上げます。

なお専称寺の歴史や寺の移転再建、墓地移転などの文書史料を提供して頂いた専称寺住職瀬川円淳師、松本古文書研究会の浅田周一・横内直子・瀬川長広氏らに、これまた深く感謝を申し上げます。

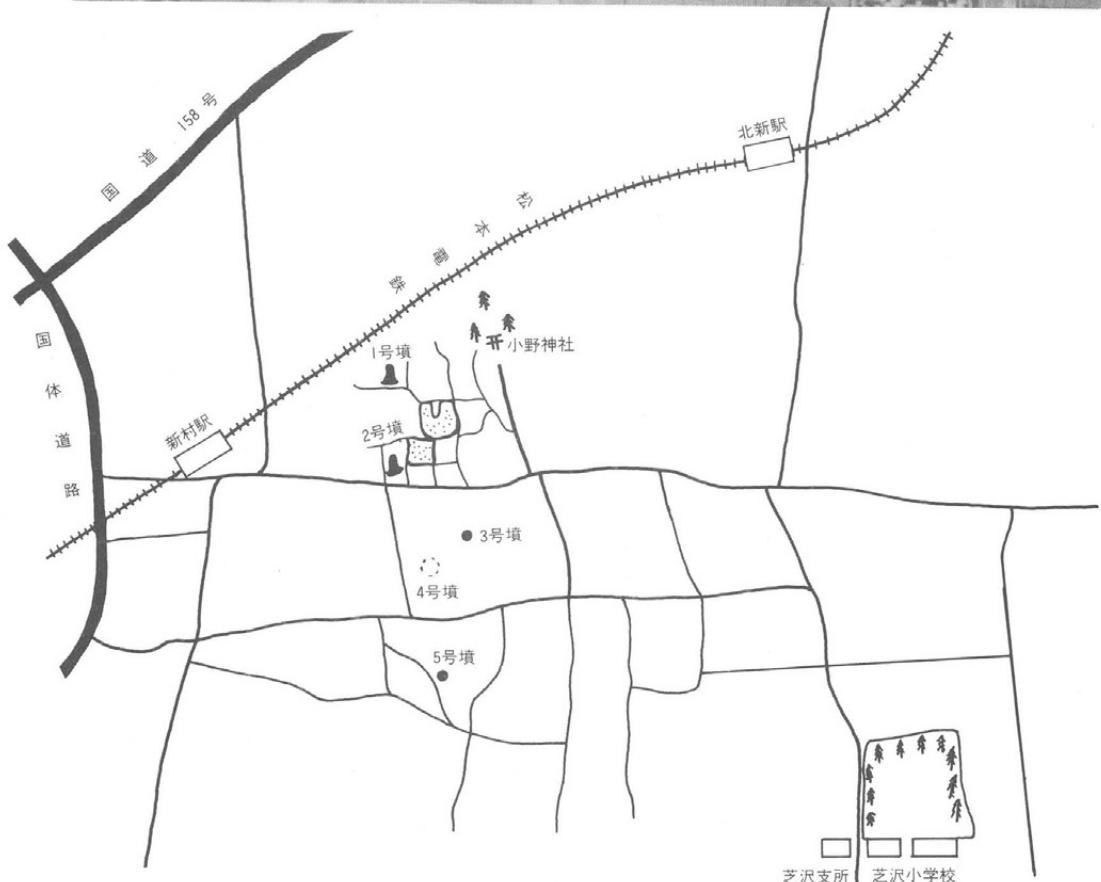
(倉科明正)

参考文献

1. 古墳辞典 東京堂 昭和57
2. 古墳の視点 学生社 昭和55
3. 終末期古墳
4. 新版考古学講座五 雄山閣
5. 日本佛教考古学講座第1巻～第7巻 雄山閣 昭和50～52
6. 古代国家の謎を追う 德間書店 昭和57
7. 百濟王敬福 総芸舎 昭和40
8. 掘り出された江戸時代 雄山閣 昭和50
9. 東筑摩郡 松本市誌第一巻自然 昭和32
10. 東筑摩郡 松本市・塩尻市誌第二巻歴史上 昭和48
11. 松本市新村安塚古墳群緊急発掘調査報告書 昭和54
12. 元禄九丙子年十一月御改 信州松本領并御領所淨土宗開山記 松本市、河辺義正氏文書
13. 元禄九年 松本御領附御領所淨立宗走立 南安曇郡三郷村野沢瑠璃光寺所蔵
14. 寛永十九年九月廿三日 岡田組之内水汲村家人数牛馬之帳 松本市浅間温泉 金井岸子氏文書
15. 元文六年より 専称寺寺地引替之覚 松本市南浅間 横内直子氏文書
16. 寛永廿年酉ノ三月廿五日 嶋立組之内下波多村屋帳付覚 東筑摩郡波田町下波田 百瀬大仁氏文書
17. 正徳四年午ノ七月 御本陣并御家中様御宿 明科村・塔之原村・潮村家改帳 明科町 関 昭氏文書
18. 廉安五年辰正月十八日 波多山原御年貢仕分ヶ帳 波田町中波田 波多腰俊夫氏文書
19. 享保九甲辰年六月十八日 庄内組寺社并縁記古跡改帳 松本市白坂 折井豊氏文書
20. 地形図に歴史を読む第1～5集 大明堂 昭和44～48
21. 葬送墓制研究集成第1～第5巻 名著出版 昭和54
22. 日本の葬式 井之口章次著 筑摩叢書 昭和52
23. 葬制の起源 大林 太良著 角川選書 昭和52
24. 日本史小百科 墓 墓 斎藤 忠著 近藤出版社 昭和53

図 版

第1図版 秋葉原遺跡周辺地域航空写真





B地区からA地区を望む



B地区



B地区からD地区を望む



B 地区



D 地区東トレーニチ



D 地区南トレーニチ



検出状況



全景



掘り上げ



開口部東側



開口部西側



北から



西壁



東壁



奥壁



西壁立石(7の石)



東壁立石(186の石)



石積み状態



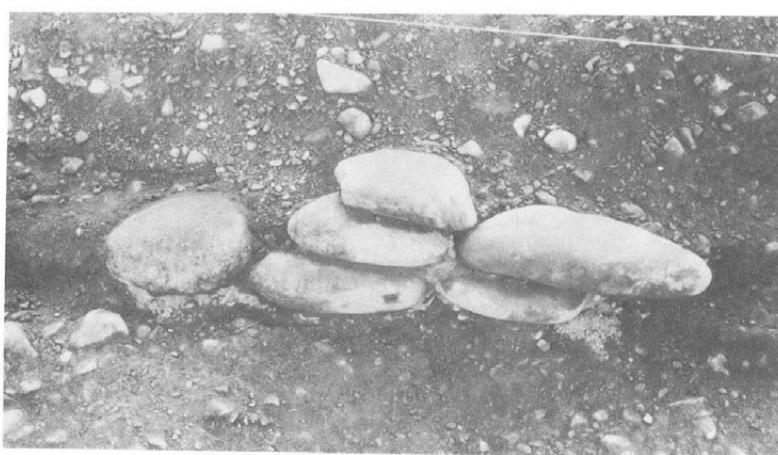
石積み状態



掘り上げ



全景



残存していた側壁石積み



坏(21)



長頸壺(34)



高坏(31)



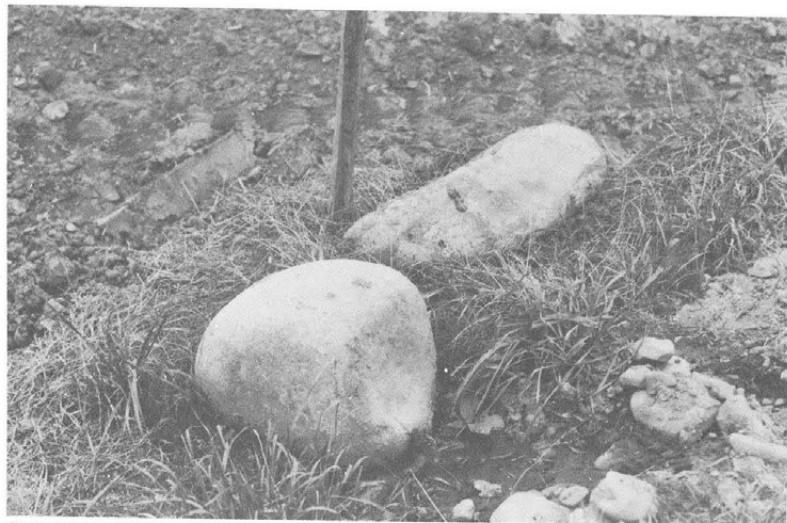
西壁



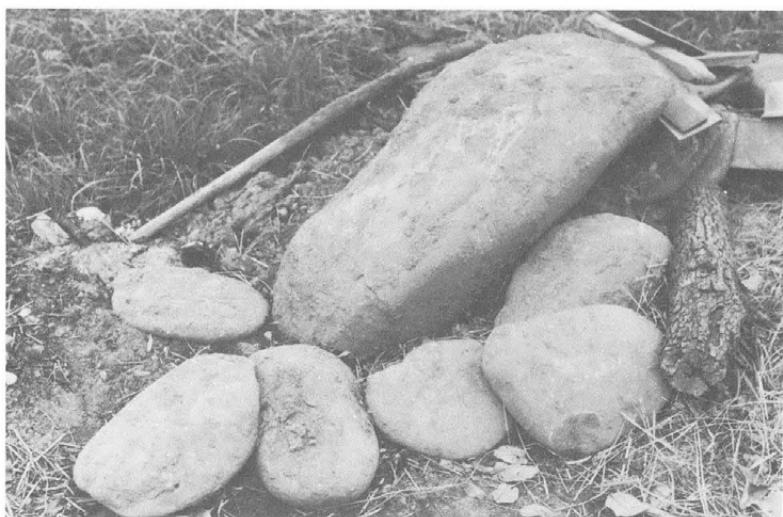
東壁



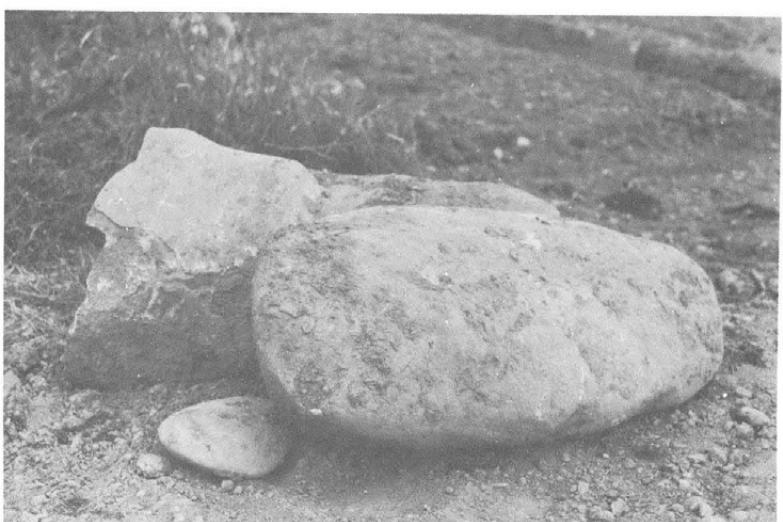
奥壁



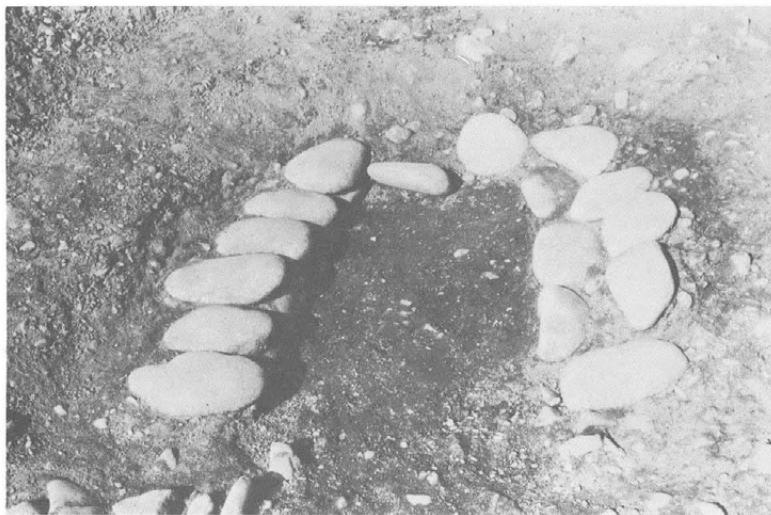
長径30cmの石



長径100cmの石



長径170cmの石



全景



東壁



西壁



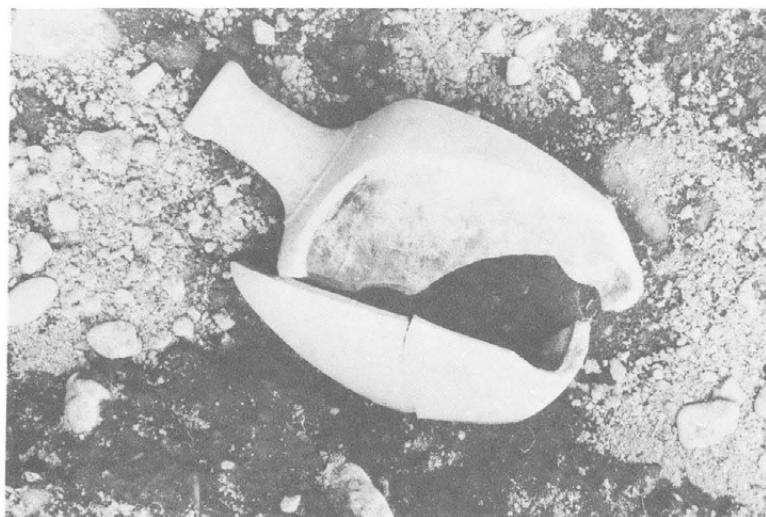
全景南から



全景西から



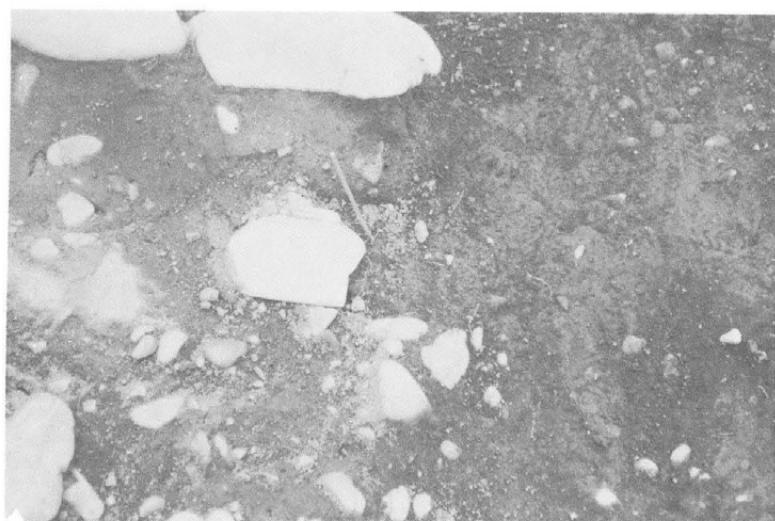
炉址



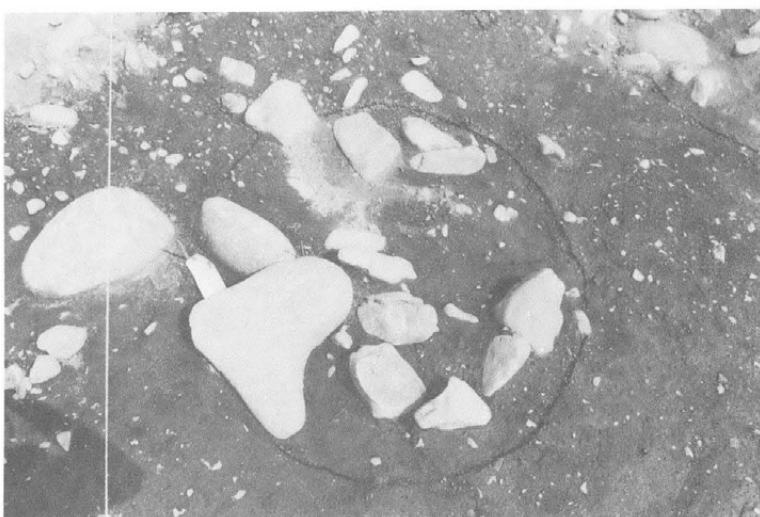
人形徳利



徳利底部



茶碗



I号 上面



I号 骨出土



I号 掘り上げ



2号 掘り上げ



3号 掘り上げ



3号(部分)



4号（上面）



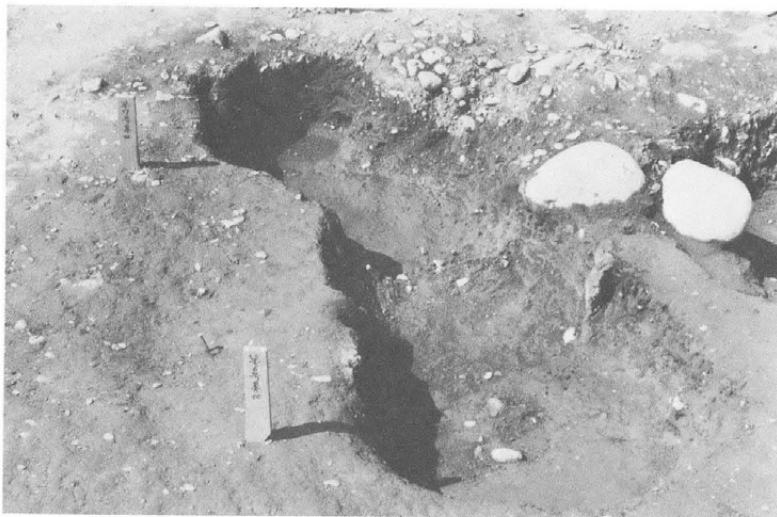
5号（上面）



5号 掘り上げ



6号（上面）



6・7号 掘り上げ



6号 人骨出土



8号（上面）



8号 人骨出土



8号 掘り上げ



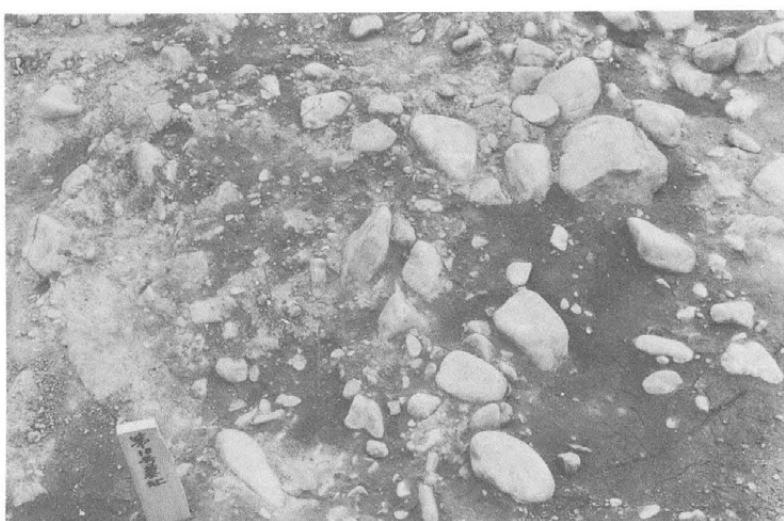
9号 上面



9号 出土古銭



9号 人骨出土



10号 上面



10号 剣花菱出土



10号 掘り上げ



7号 上面



11号 上面



11号 挖り上げ



13号 上面



14号 上面



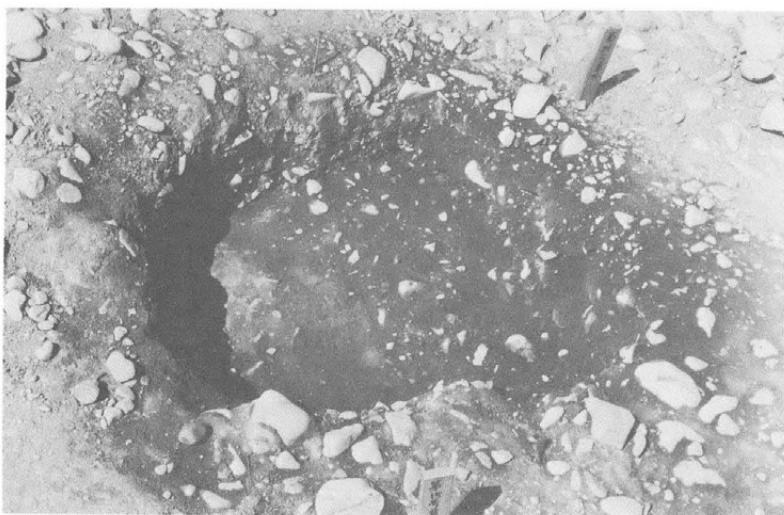
14号 掘り上げ



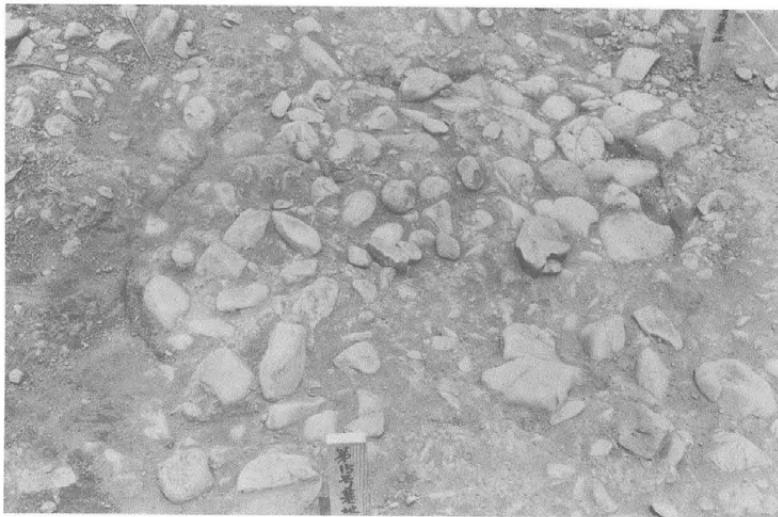
12号 上面



16号 上面



16号 掘り上げ



15号 上面



19号 上面



19号 骨出土



17号 上面



22号 上面



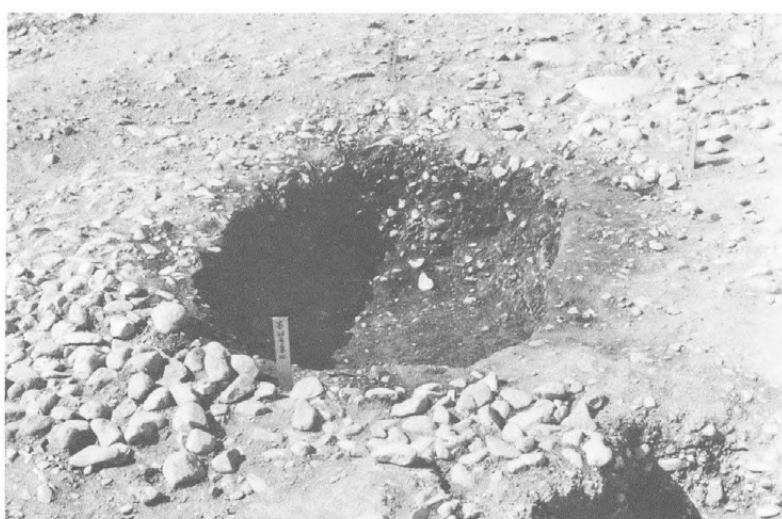
22号 掘り上げ



20号 上面



26号 上面



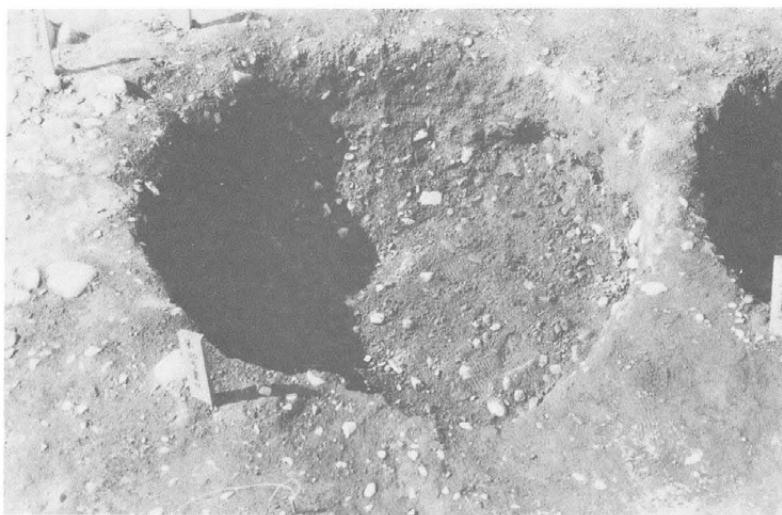
26号 掘り上げ



30号 上面



30号 内部大石



30号 掘り上げ

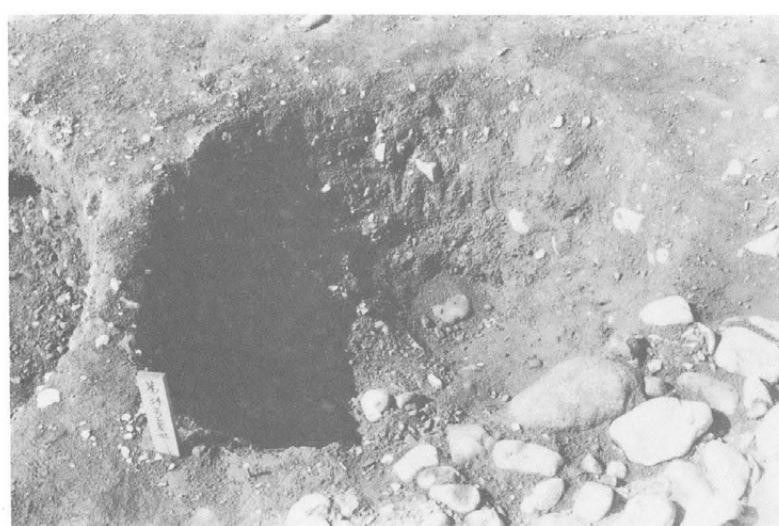
第29図版 第23・34号推定墓址



23号 上面



34号 上面



34号 掘り上げ



36号 上面



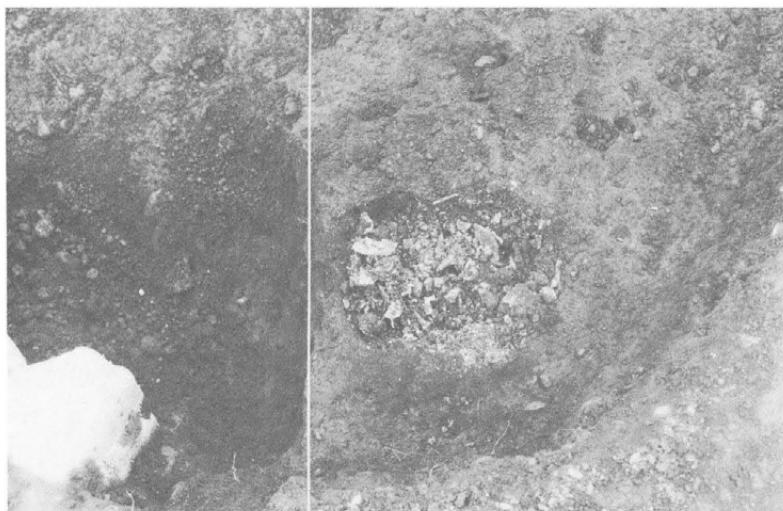
42・43号 上面



43号 掘り上げ



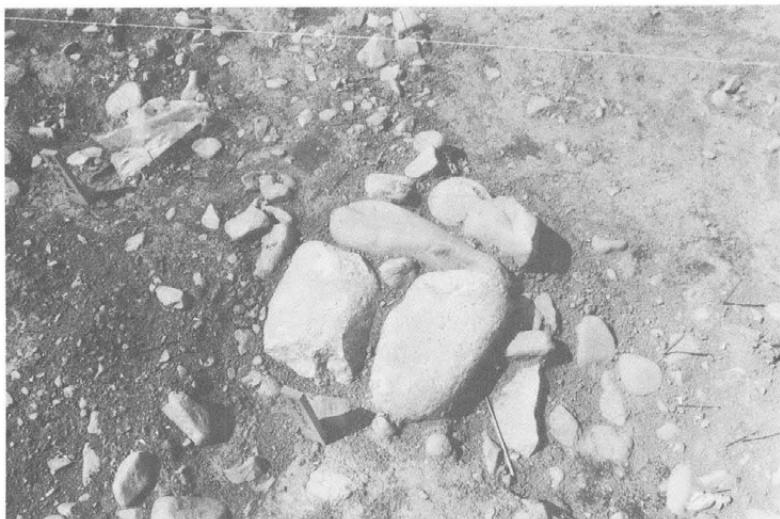
45・46号 上面



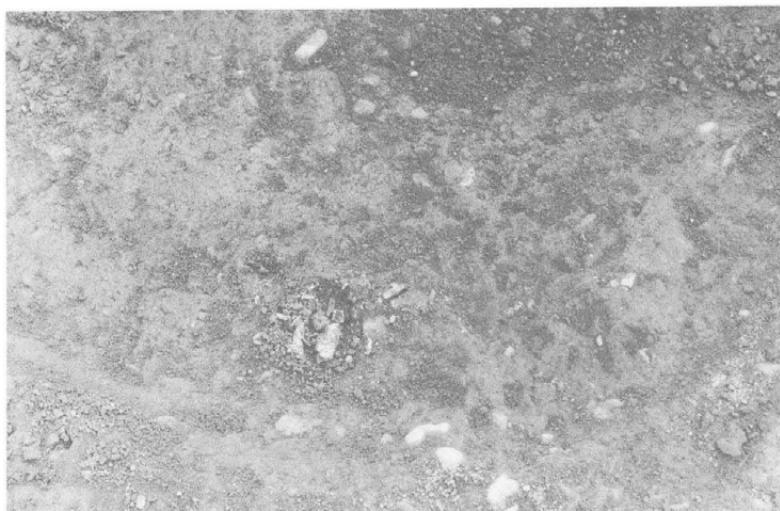
45号 焼骨出土



45号 掘り上げ



41号 上面



46号 骨出土



46号 掘り上げ



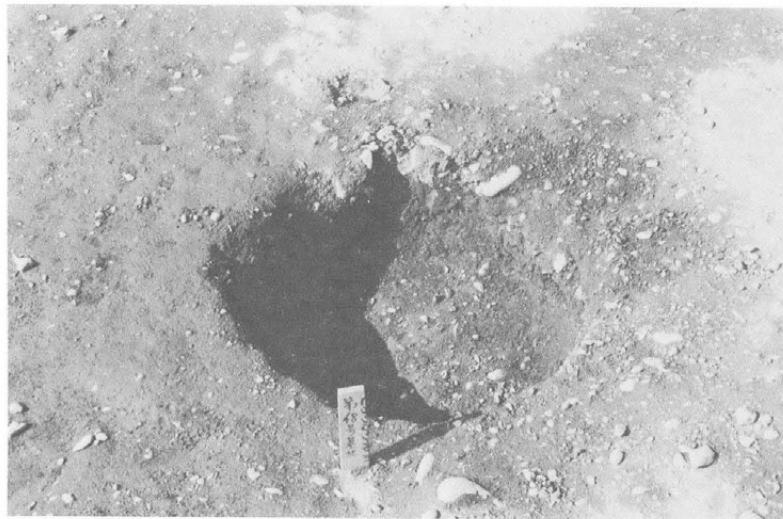
47号 上面



47号 掘り上げ途中



48号 上面



48号 挖り上げ



49号 上面



49号 挖り上げ



57・58号 上面



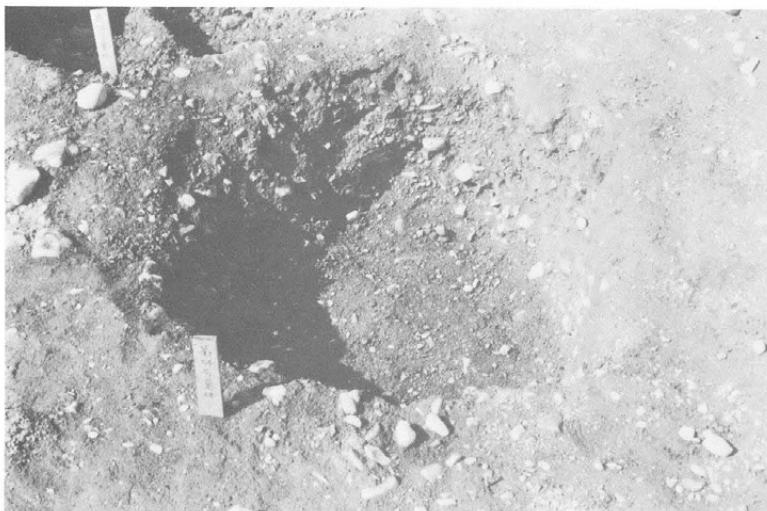
59号 上面



59号 掘り上げ



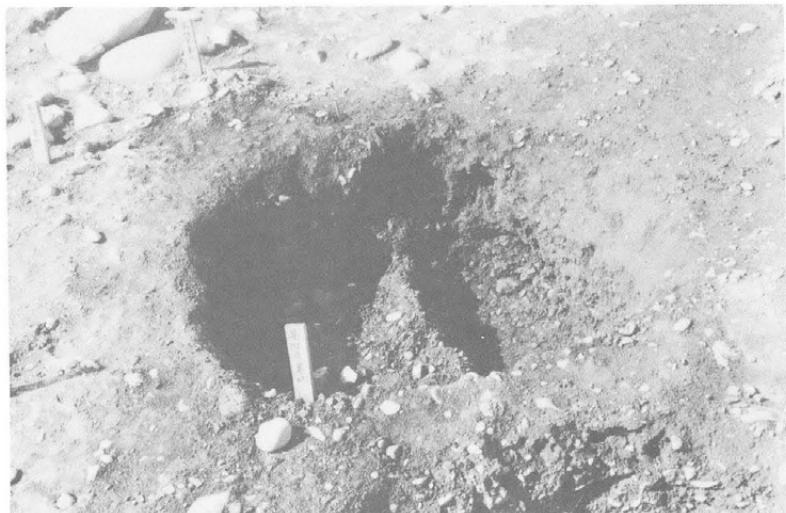
54号 上面



54号 掘り上げ



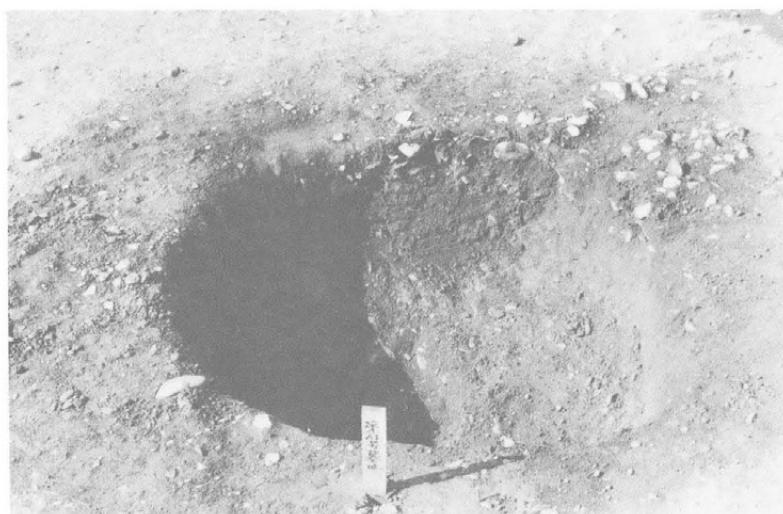
56号 上面



56号 掘り上げ



61号 上面



61 掘り上げ



60号 上面



63号 上面



63号 挖り上げ



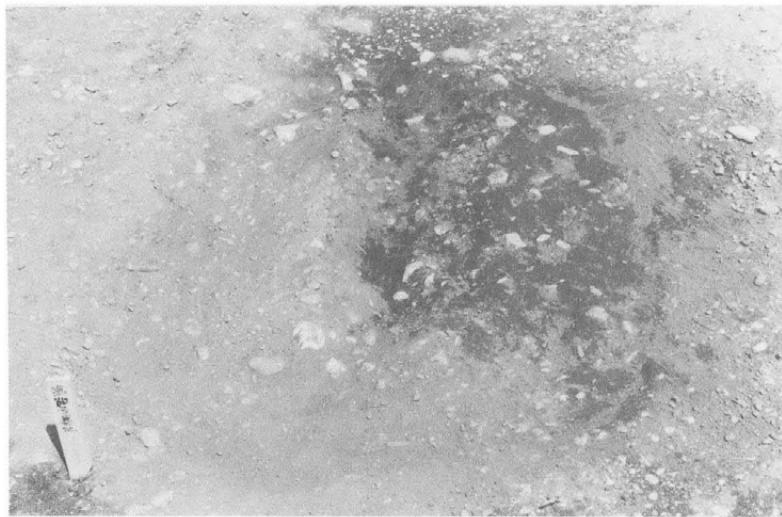
64号 上面



79号 上面



79号 古錢出土



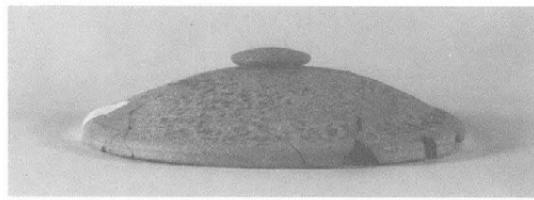
80号 上面



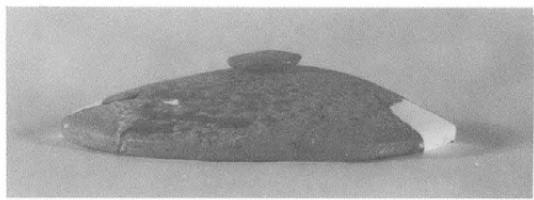
墓址全景



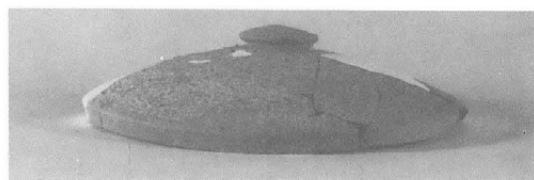
墓址全景



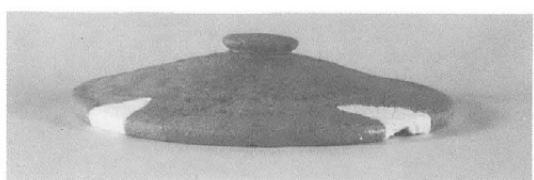
1



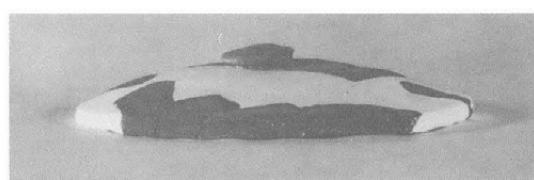
3



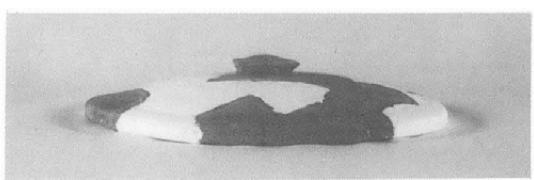
4



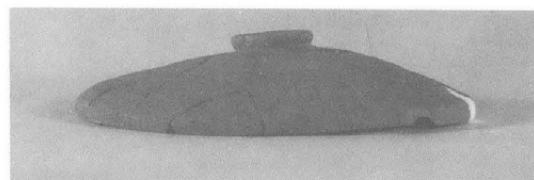
5



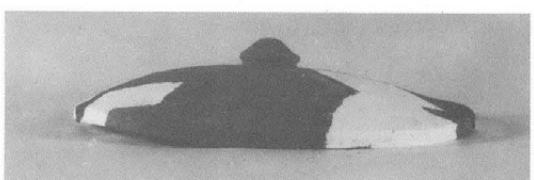
6



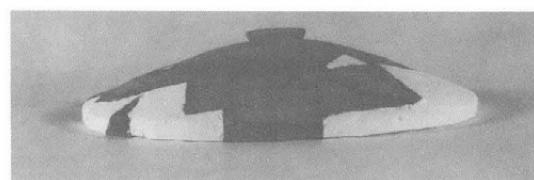
7



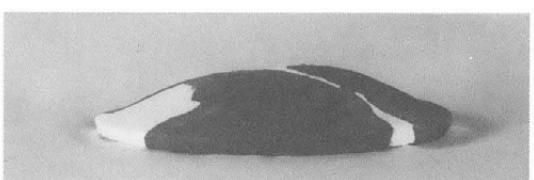
8



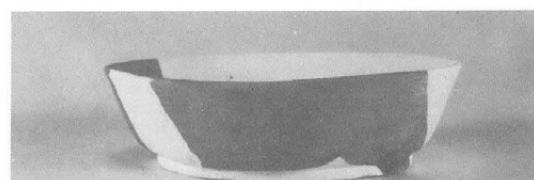
10



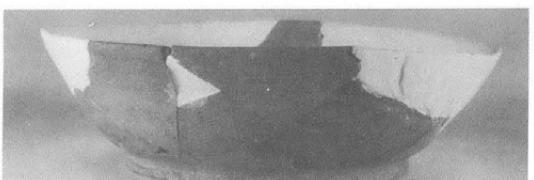
11



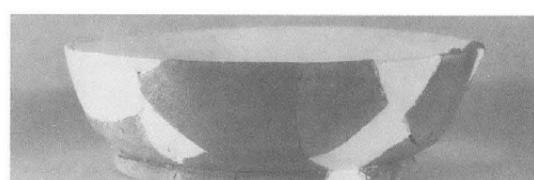
12



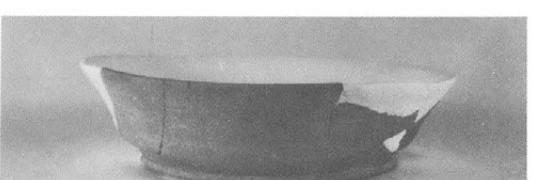
18



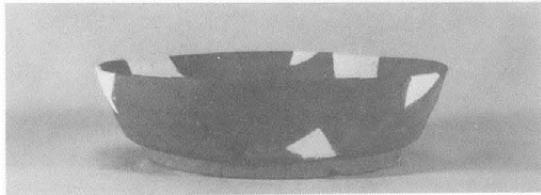
19



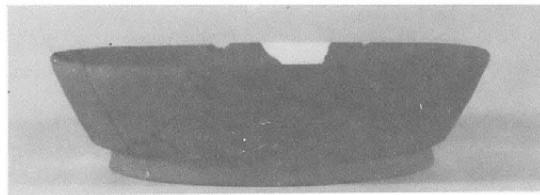
20



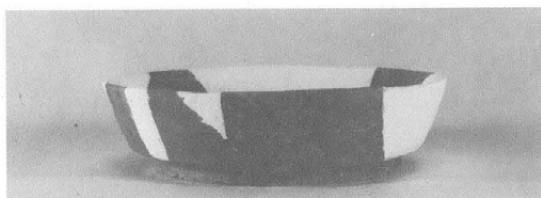
21



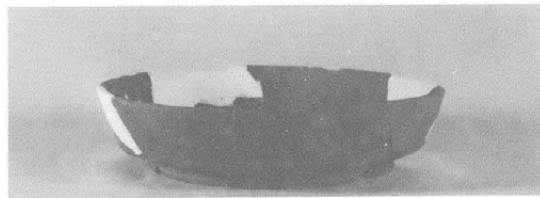
24



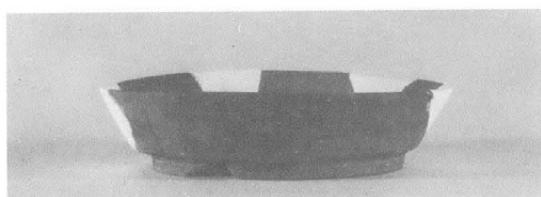
25



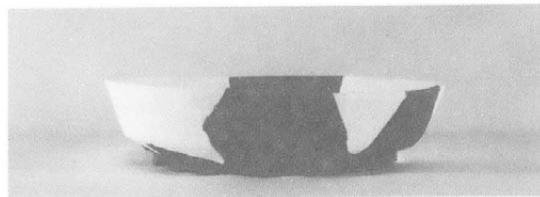
27



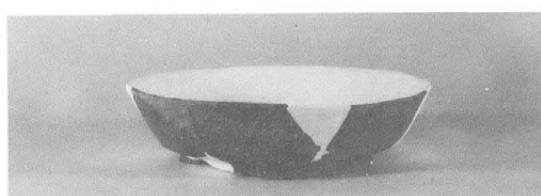
28



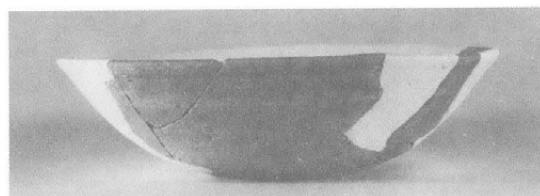
29



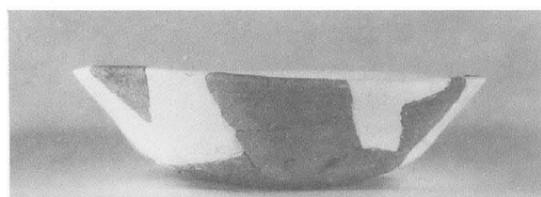
30



31



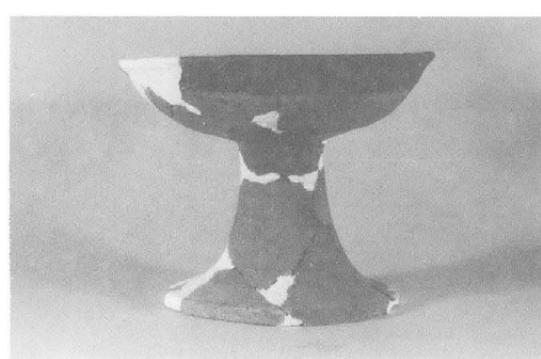
32



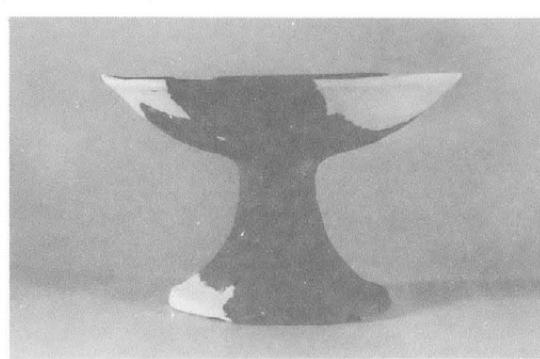
35



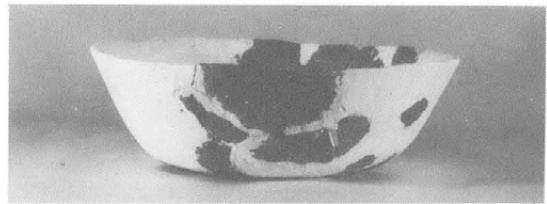
37



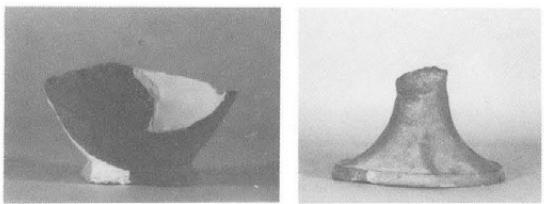
38



40



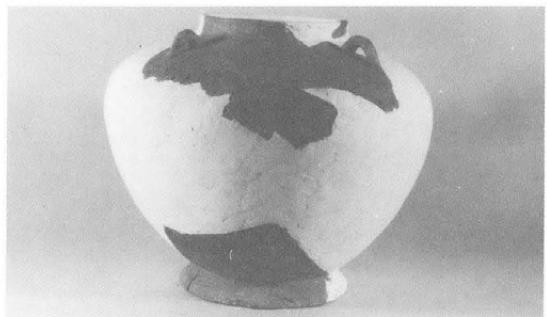
1号墳 壺36



1号墳 壺44 胴下半分



1号墳 高壺39 脚部



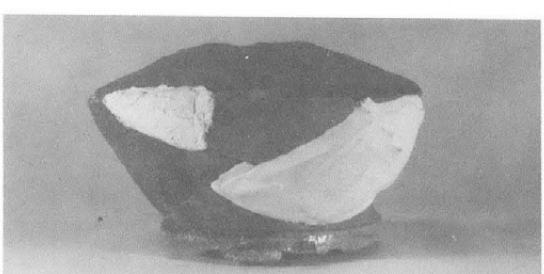
1号墳 耳付短頸壺41



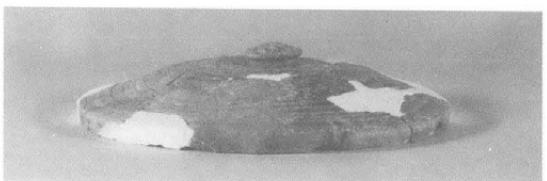
1号墳 短頸壺42



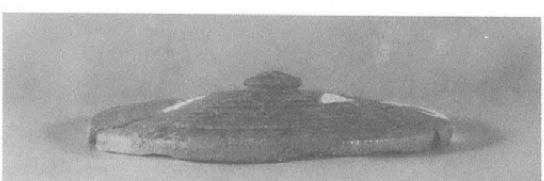
1号墳 長頸壺45 口頸部



1号墳 長頸壺46 胴部



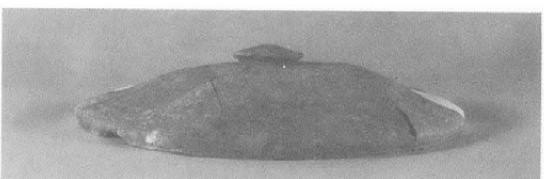
2号墳 蓋



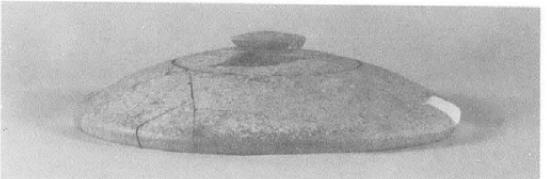
2号墳 蓋



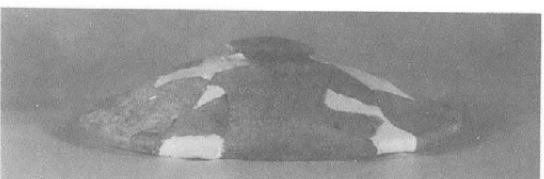
2号墳 蓋



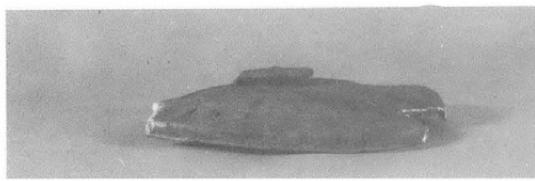
2号墳 蓋



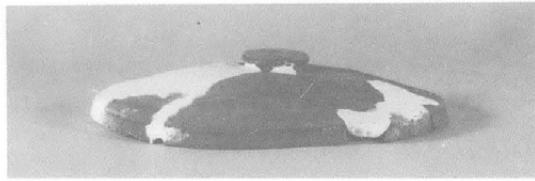
2号墳 蓋



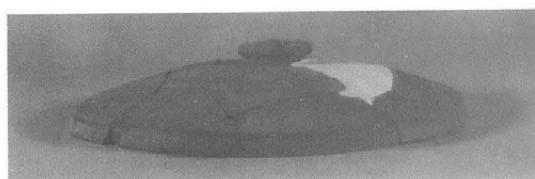
2号墳 蓋



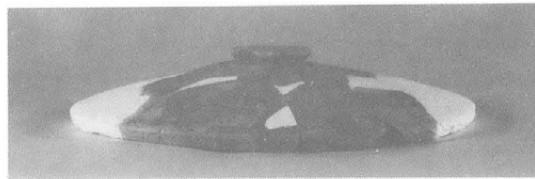
7



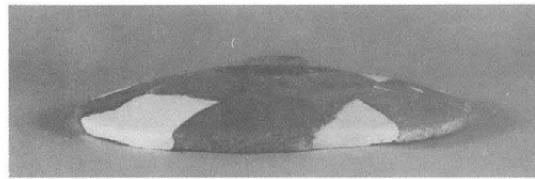
8



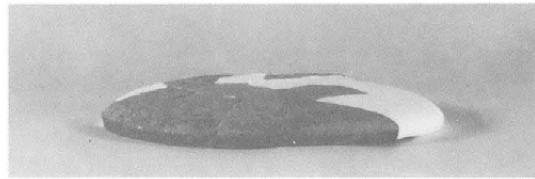
9



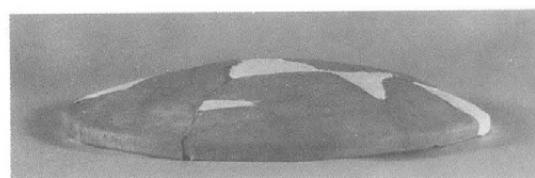
10



11



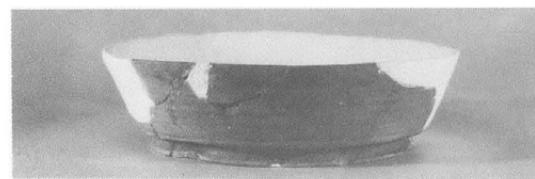
12



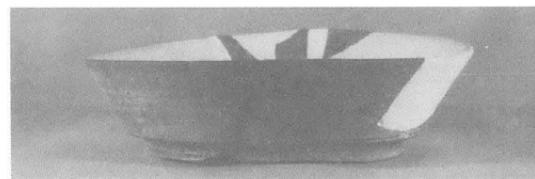
13



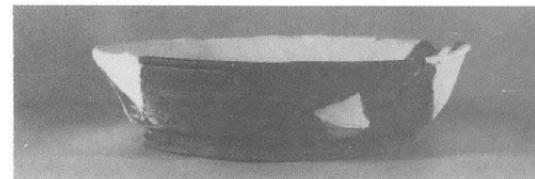
14



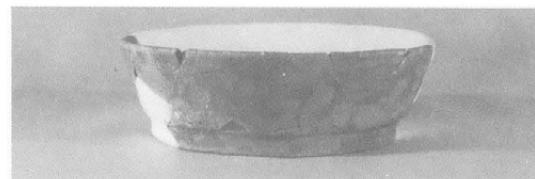
15



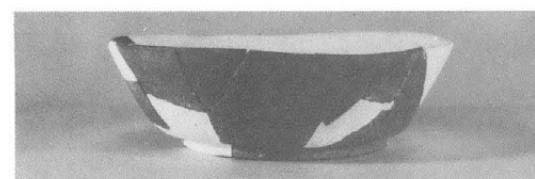
16



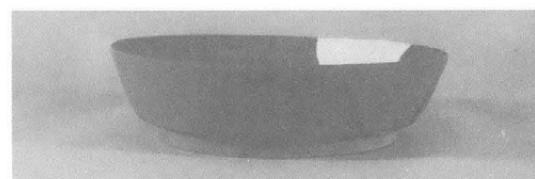
17



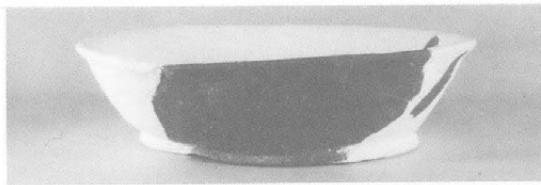
18



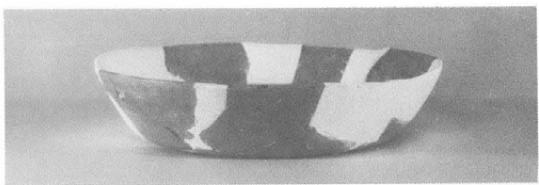
20



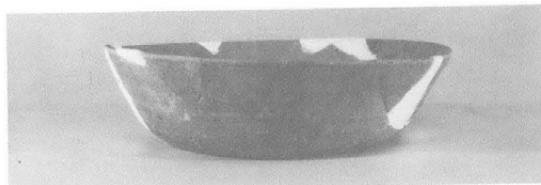
21



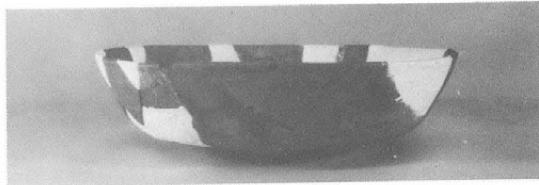
22



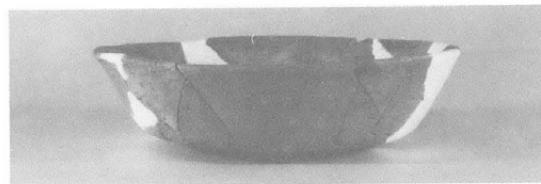
23



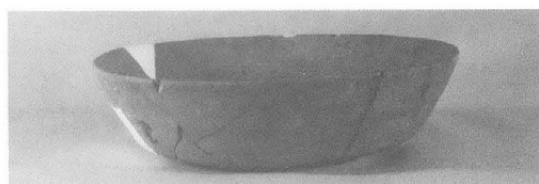
24



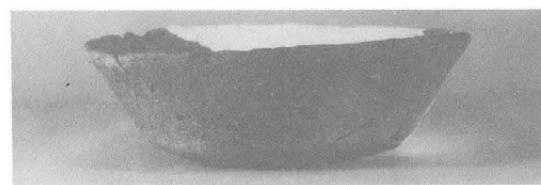
25



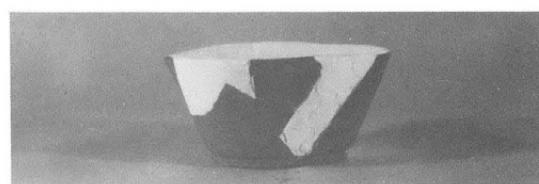
26



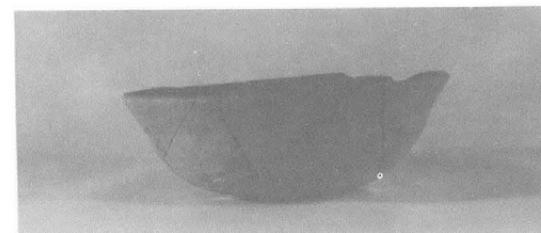
27



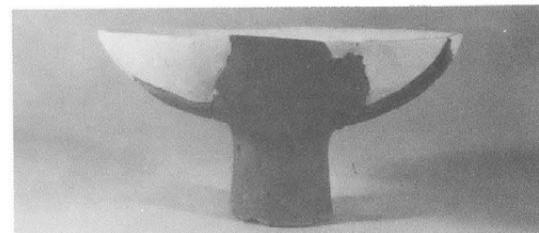
29



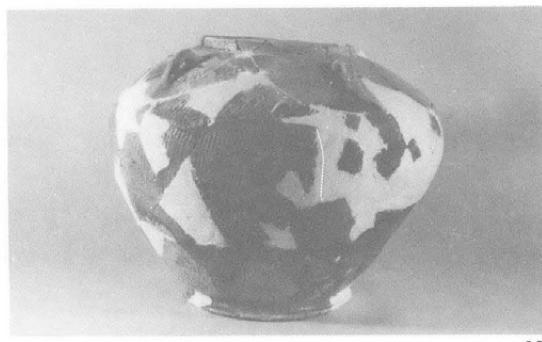
30



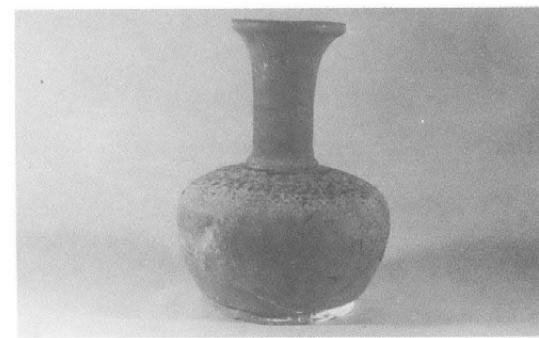
高坏3I（脚部欠損）



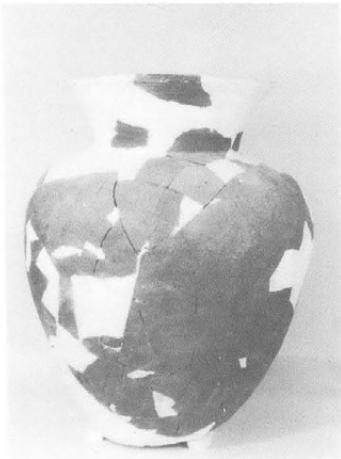
2号墳 土塙 高坏 I（脚部欠損）



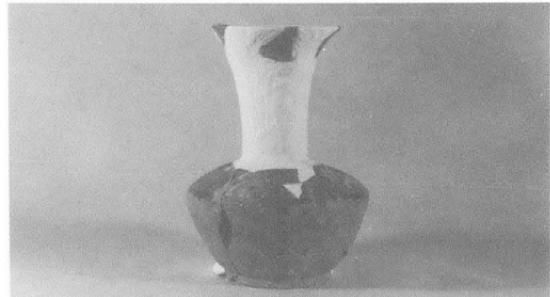
33



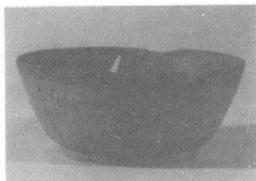
34



2号墳甕37



2号墳 長頸壺35

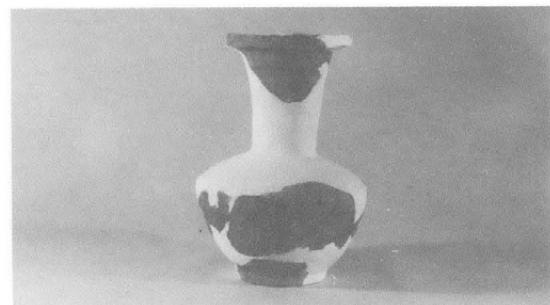


3号墳

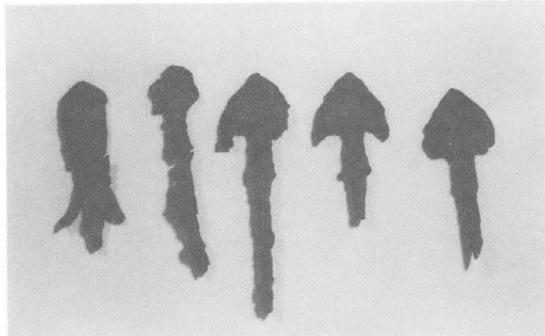


3号墳

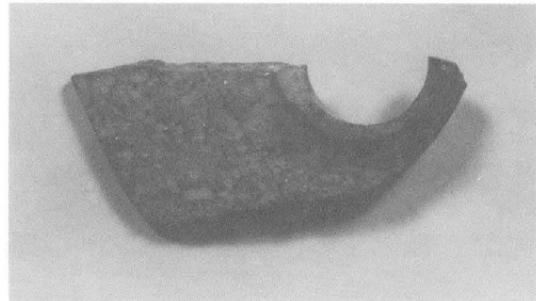
2



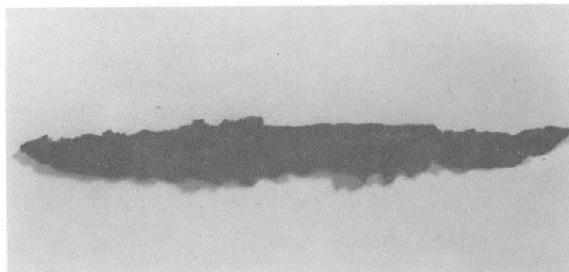
2号墳 長頸壺36



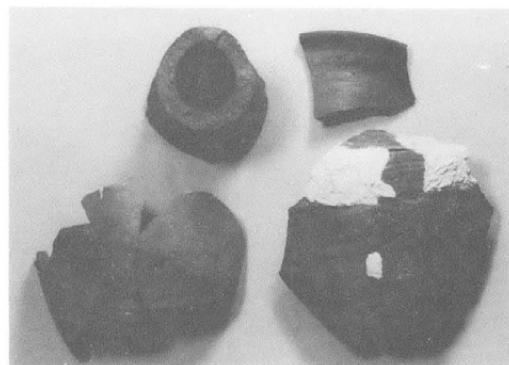
2号墳 鉄簇



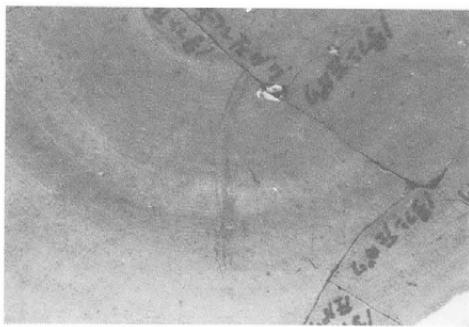
1号墳 平瓶43表面



1号墳



1号墳 壺類破片



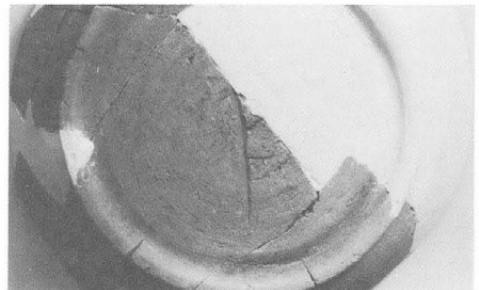
1号墳 蓋3 裏面 ヘラ記号



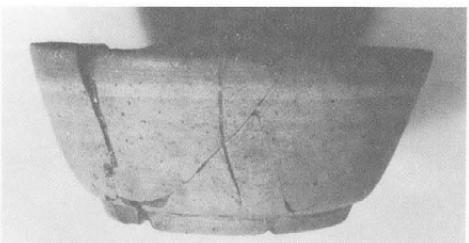
1号墳 蓋1 裏面 ヘラ記号



1号墳 蓋2 裏面 ヘラ記号



1号墳 坯20 裏面 ヘラ記号



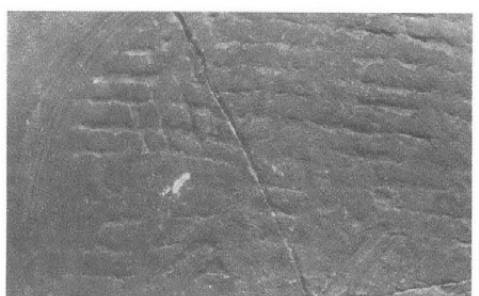
3号墳 小坯 ヘラ記号



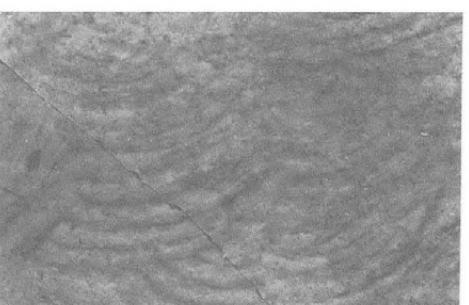
2号墳 蓋14 裏面 刻印？



1号墳 耳付短頸壺41 外面たたき目



1号墳 耳付短頸壺41 底部 たたき目



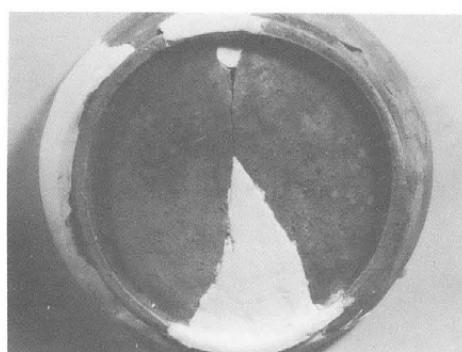
2号墳 土塙甌 内面 当て具痕



2号墳 耳付短頸壺 外面 たたき目



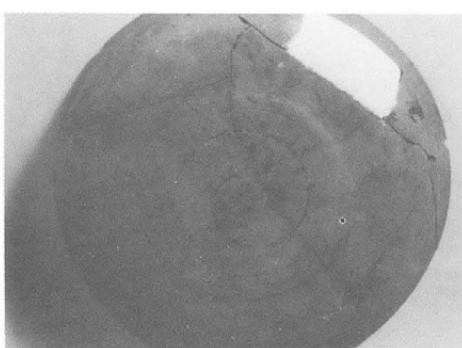
1号墳 坯24底部 中央に回転糸切りを残し
回転ヘラ削り



2号墳 坯18底部 静止ヘラ削り



2号墳 坯28底部 回転ヘラ切り



2号墳 坯27底部 2次的底面と回転ヘラ切り



2号墳 長頸壺34 頸部接合状態



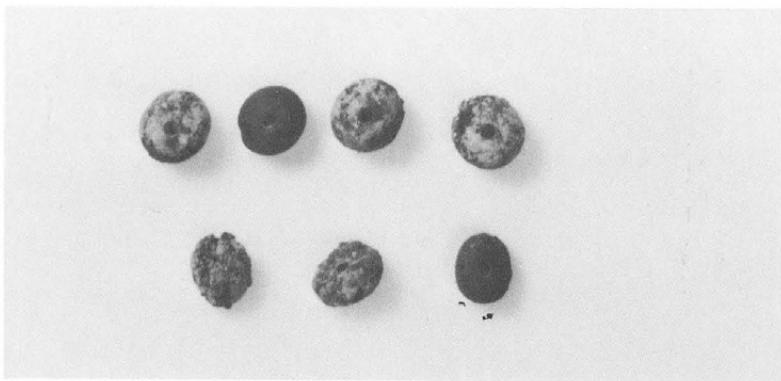
2号墳 土塚 坯2底部 回転ヘラ削り



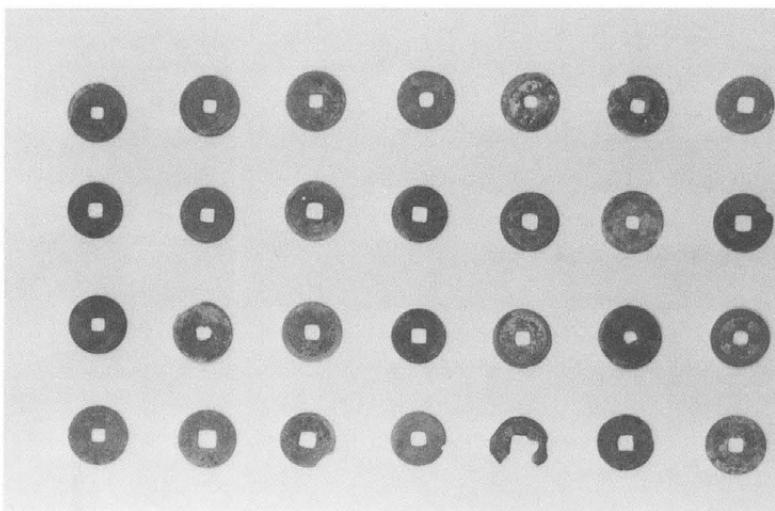
3号墳 長頸壺 裏面天井部接合状態



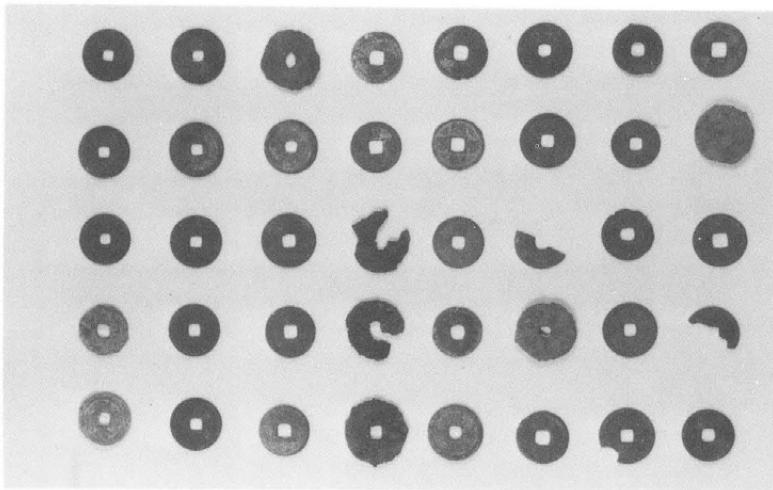
1号墳 平瓶43 裏面 頸部接合状態



第10号墓址 数珠



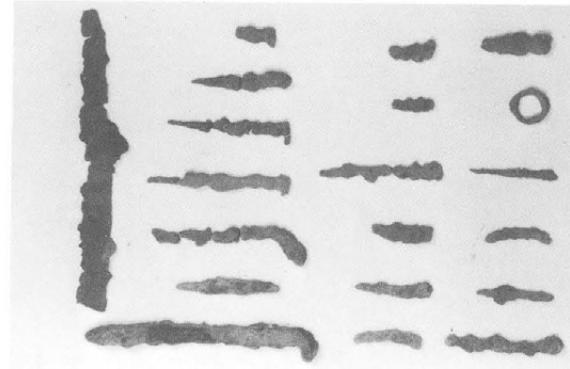
墓址 古錢



墓址 古錢



墓址 金属製品



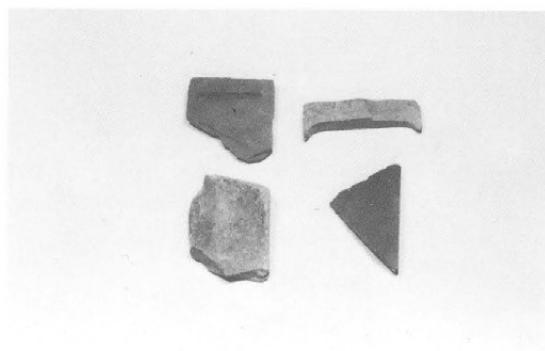
墓址 金属製品



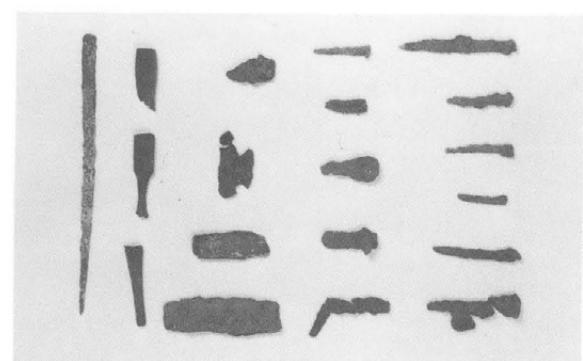
土座敷 凹石



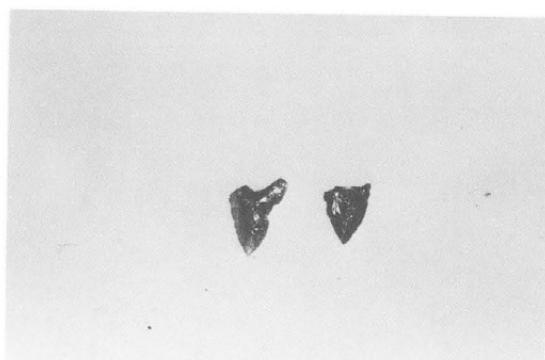
土座敷 玉石



土座敷 研



土座敷 金属製品



土座敷 石鎌



土座敷 砥石



I号墳 移転風景



墓址 実測風景



記念撮影



1号墳 移転風景



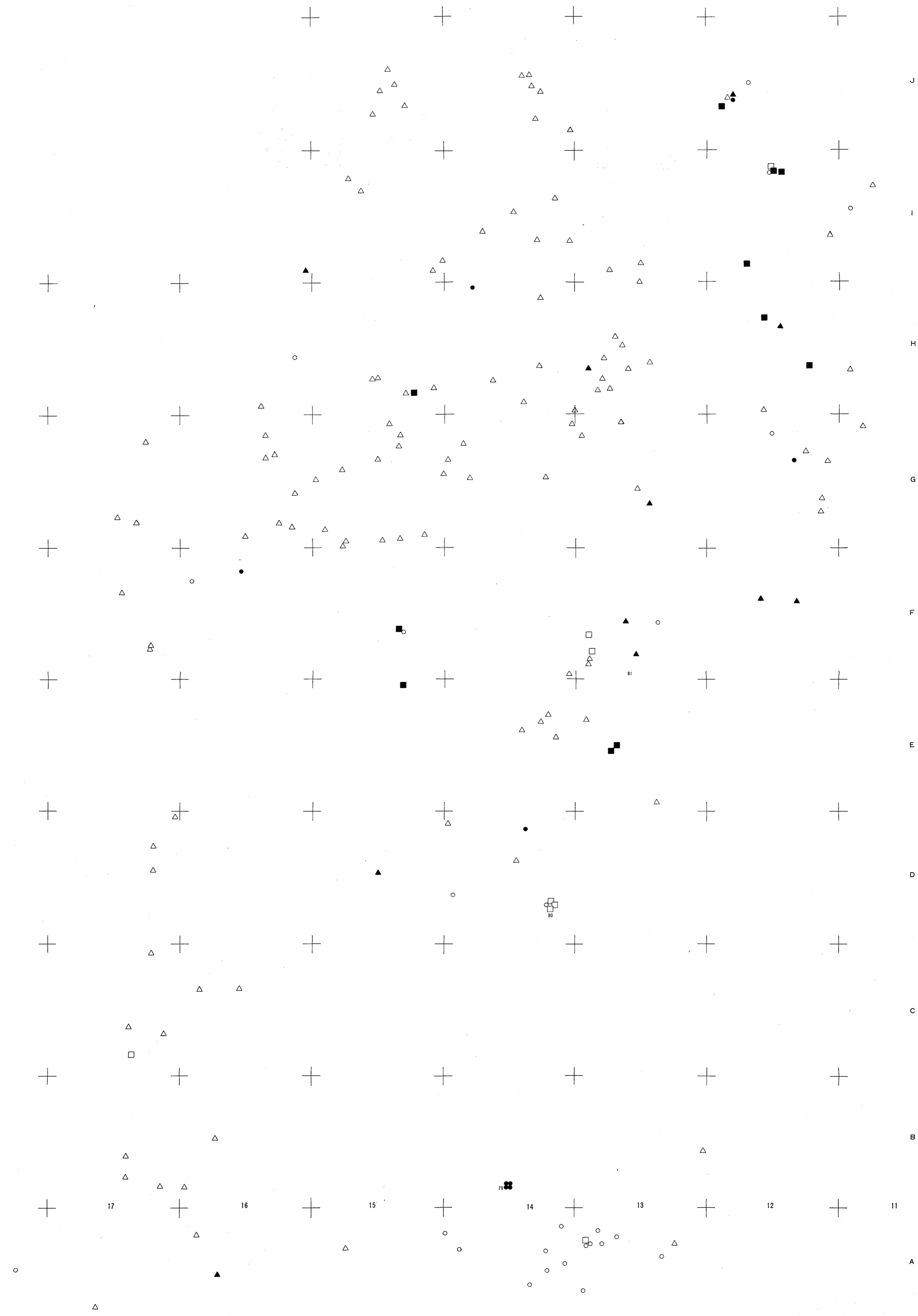
1号墳 移転風景



1号墳 移転風景



付図1 B-2地区、土座敷址墓址全体図(1/160)
(この図は上が磁北)



付図1-2

○ 烧骨 ● 古钱 △ 陶磁器 ▲ 金属製品 □ 炭化物 ■ 石器・石製品